

# 影とのレスリング

## 自伝小説



エマニュエル・パストリッチ



## 著作権 2021

## 影との格闘

概要 7 ページ

はじめに 17 ページ

第1章 33 ページ

第2章 85 ページ

第3章 133 ページ

第4章 173 ページ

第5章 201 ページ

第6章 225 ページ

第7章 267 ページ

結論 287 ページ

付録 295 ページ

イリノイ大学の提案

## 概要

2000年4月、イリノイ大学の助教授に任命されたばかりのエマニュエル・パストリッチは、研究や執筆の機会を探していた。パストリッチは、遠隔学習がアジアの学問的同僚との協力の機会を与えてくれることに深い感銘を受け、ブレインストーミングを始めた。数週間も経たないうちに、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校と東アジアの主要研究機関との間で、オンライン・コースの共有、共同研究、その他の機関間協力に関する提案書を作成した：東京大学、ソウル大学、北京大学である。通常、アジアのこれらの大学はイリノイ大学をパートナーとは見なさないだろうが、このアイデアは非常に斬新で、イリノイ大学の技術も非常

に進んでいたため、パストリーヒはこのプロジェクトに身を投じることにした。

パストリッチは中国語、日本語、韓国語に堪能で、日本、韓国、中国の名門大学のトップと個人的なコネクションを持っていた。

2000年6月までに、パストリーヒは各大学のニーズと関心事に合わせてカスタマイズした複雑な提案書を3カ国語すべてで完成させた。彼は、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の工学部、法学部、農学部、経営学部など、さまざまな学部にもたがる幅広い支援者を開拓した。これらの学部は、彼がアジアを訪れてこの提案について話し合い、その秋から始まる一連のオンライン・セミナーを通じてこの計画を推進するための十分すぎるほどの資金を提供してくれた。

しかし、このプロジェクトはひどくうまくいかなかった。パストリーヒが所属していた東アジア言語文化学部の学部長と教養学部長が、それまで大賛成者だったにもかかわらず、突然アジアへの旅費を出すことを拒否し、6月以降は提案について話し合うことさえ拒否したのだ。この反対はまったく意味がなかった。

それでもパストリッチは、7月に韓国、中国、そして日本を訪れるために必要な資金を何とか確保した。ソウル大学の熱意が最も大きく、北京大学、東京大学がそれに続いた。

パストリッチはその後、イリノイ大学に戻り、自分の成功に対する英雄的歓迎を受け、この遠隔学習プロジェクトの次のステップについて話し

合うことを期待していた。ところが、パストリッチは、この旅についての学内新聞のインタビューに対し、所属する学部の部長が柄にもなく批判的な反応を示していることを知った。しかも部長は、パストリーヒが海外から戻った後、このプロジェクトについて話し合うために会うことさえ拒否した。

東アジア研究学科が、イリノイ大学の全キャンパスとアジアの3大大学で支持されている提案に反対するのは筋が通らない。何かが起こっていたのだ。

パストリッチは、もしかしたら学部長が、このプロジェクトで大きな役割を果たせるはずの工学部の権力を妬んでいたのかもしれない、あるいは後輩の教授がこれほど注目されるのを許したくなかったのかもしれない、と考えた。しかし、そのようなシナリオはありえないし、説得力もない。

真実は、パストリーヒが自分の階級をはるかに超えた戦いにつまずいたということだった。彼の部長からの反対は、FBI/CIA チームによって行われた機密かつ違法な作戦によって義務づけられたものであり、彼個人とは何の関係もなかった。

この作戦は、この提案を破棄し、必要であればパストリーヒのキャリアを潰し、彼のアイデアやアメリカとアジアの協力の呼びかけが日の目を見ることがないようにするために、特別な状況下で開始された。



パストリーヒの提案には、インターネット学習の提案だけでなく、朝鮮半島の統一やアメリカの対中関係など、地政学的な問題に対する包括的な解決策も含まれており、これらの国の多くの政策立案者の共感を得た。中国語版、日本語版、韓国語版は3カ国で広く配布された。

クリントン大統領が北朝鮮との関係を正常化しようとしていたまさにその時、)北朝鮮を敵として認識させ、中国を信頼できるパートナーにはなり得ない潜在的な敵として認識させるためには、どこまで行っても限度がないと判断していた米国の特定の政治家や軍事計画家にとって、これらの提案は深い脅威となった。

このキャンペーンは、アジアにおけるアメリカの軍事的プレゼンスを維持し、アメリカと東アジアの同盟国との不平等な関係を支えるために必要だと判断された。数千億ドルがかかっていた。

CIA (そしておそらく NSA) の意見を取り入れた FBI の極秘チームがパストリーヒのもとに配属され、4月からプロジェクトを微妙に弱体化させた。

軍産複合体の強力な勢力(現役の軍ではなく、同情的だった)は、このプロジェクトが生み出す勢いを止めることができなかった。というのも、この提案は刺激的で、儲かる可能性があり(遠隔学習は最終的に数十億の産業になるだろう)、実施に向けた最初の一步は、韓国、日本、中国のグループによって踏み出され、米国の作業員はほとんどコントロールできなかったからだ。

しかし、時間の経過とともに、チームはこの提案をつぶすことができた。

2000年8月以降、パストリッチに近づかないよう、教員や管理職はチームから直接、あるいは暗黙のうちに明確に指示された。彼の学部長は、彼を同僚から孤立させるための一連の措置をとるよう命じられた。国防総省内での戦い（北朝鮮との融和構想への賛否）が過熱するにつれ、パストリーヒは当時、本人も知らないうちにワシントン D.C.で注目されるようになった。

2000年12月、壊滅的な選挙の余波で軍の右派派閥が権力を掌握したことで、事態は收拾に向かった。この行動は、パストリッチの努力にも関係していた。パストリッチに対する行動は新たな段階に進んだ。

大学ではほとんど誰も彼と会おうとしなかったし、話もしなかった。

ブッシュ政権が過激派を軍や情報機関の要職に任命したとき、彼らは政府や学界の他の不穏分子への警告として、パストリーヒに対して思い切った措置をとる用意があった。

彼らはタイミングを待った。

その瞬間は、2001年2月24日、パストリーヒが書いた北東アジアの新しい平和体制を提唱する記事が中国の新聞に掲載されたときだった。米中のパートナーシップに支えられた共同体というこのビジョンは、「中国の脅威」ロビーにとって最後の一撃となった。パストリーヒは直ちに「自殺」するようにとの命令が下った。ジョージ・W・ブッシュがこの命

令を出したとされているが、ブッシュはパストリーヒに個人的な恨みはなかった。彼は軍産複合体の派閥からの要求に応えるしかなかったのだ。

コリン・パウエルらの主張がなければ、パストリーヒはおそらく殺されていただろう。結局、パストリーヒを抹殺しようとする人々は、他の人々への警告として、彼を4年間、絶え間ない殺害予告と低レベルの嫌がらせに晒すことで満足せざるを得なかった（そして、生涯にわたって彼のキャリア機会を制限することになった）。

パストリーヒの父親は2月、精神疾患を患っていると聞かされていた息子を訪ねてきた。父親は、息子が話していたすべての問題は、数年前に摘出した脳腫瘍の結果、妄想的な行動がもたらしたものだと思い込まされた。友人や家族のために、手の込んだおとぎ話がでっち上げられた。

パストリーヒは父親が到着すると病院に引きずり込まれ、そこで一度も医学的検査を受けることなく精神病と認定された。医学的な評価を受けることもなく、抗精神病薬を投与されるなど、不必要な治療を強いられた。

彼の治療を担当することになった病院の神経科医との面談で、おかしなことが起こった。医師は彼の健康にまったく関心を示さなかった。それどころか、アメリカの安全保障の将来について意見を求め、彼の考えを記した論文を見せてほしいとまで言った。

神経学者たちとの会合は、地政学に関するブリーフィングとなり、やがてブッシュ政権の全体主義的支配にどう対応すべきかを議論する場へと

広がっていった。2001年4月までに、パストリーヒは米国における法の支配を回復する方法についての提言を発表し、多くの点でブッシュ政権に対する組織的な反対運動が結晶化した人物となった。このグループは、徐々に政権を取り戻すのに貢献し、2001年9月11日には次のステップに進む態勢を整えていた。

パストリッチは意見を述べる相手が誰なのか知らなかったが、重要人物と話す機会は時々あった。しかし、ほとんどの場合、彼は大学やアメリカの誰からも根本的に孤立していた。

彼は自宅軟禁され、殺害の脅迫を受けながら、同時にアメリカの国内政策と国際政策における重要人物とみなされるという奇妙な立場に置かれた。

2001年2月から2002年夏まで、パストリーヒは精神病のため休職していた。2002年4月以降、パストリッチには自由が与えられたが、彼と会おうとする人はほとんどいなかった。2003年に再び教壇に立つことが許された（1年半の休職期間を経て）。2004年には終身在職権審査に再挑戦する機会が与えられた。

パストリッチは2003年に講演をする機会があり、2004年には研究のために2カ月間日本に滞在する機会も与えられた。一時はキャリアを回復しつつあるように見えた。

しかし、2004年の違法な選挙停止により、パストリーヒの擁護者の多くは政府から排除された。殺害予告を受けることはなくなったが、パスト

リッチは（強力な資格にもかかわらず）終身在職権を拒否され、2004年12月にイリノイ大学から解雇された。

パストリーヒは何百もの求人に応募した。主要大学での教職、コミュニティ・カレッジでのパートタイムの職、アジアに関わる企業や NGO でのその他の職。しかし、彼は一度も面接を受けることができなかった。ほとんどの場合、彼の応募が認められることはなかった。

ひとつだけ例外があった。彼は CIA の諜報部員としての職を書面で提示されたのだ。

このオファーは本気ではなかったかもしれないが、CIA がブッシュ政権に逆らうことのできる部隊を持つ米国で唯一の組織であったために可能だった。この仕事のオファーは、パストリーヒにとって、イリノイの田舎町よりもチャンスがあるかもしれないと考えたワシントン D.C.への移住を決意するのに十分なものだった。

ワシントン D.C.で2ヶ月間失業し、その仕事のオファーも必然的になくなった。彼は義理の両親の家に住むために家族を韓国に送り、いとこの家の小さな部屋に滞在した。

2005年2月、パストリーヒが予期せず国会議事堂での講演に招かれたとき、彼は韓国大使館の外交官と韓国人記者に声をかけられ、新任の韓国大使に彼を雇うよう説得すると言われた。

パストリーヒは結局、韓国大使館（法的には米国領ではない）で低賃金の職を与えられ、ワシントン D.C.で2年間、何とかそこで働いて生き延びた。

結局、アメリカでは他の仕事が見つからず、2007年に韓国の小さな大学で教職に就くことに同意した。

苦難のスタートを切った後、彼は学者として再スタートを切り、2011年にはより著名な慶熙大学に移った。しかし、終身在職権が与えられることはなかった。彼は大衆向けの本や新聞向けの記事を書くことを好んだ。2014年から2016年までのしばらくの間、彼は韓国でかなりの成功を収めたが、アメリカで認められることはなく、学会に招待されることもなかった。時折、米国での仕事に応募しても完全に無視された。

パストリッチは2018年、慶熙大学での終身在職権が認められないことが明らかになり、韓国の小規模大学に移った。2019年からは家族の希望に応じてワシントン D.C.に戻る計画を立てた。

2019年夏に帰国し、韓国大使館と韓国経済研究院（KEI）との契約仕事を得たが、バージニア州北部の物価の高い環境で生活するには不十分だった。

COVID-19危機が始まったとき、韓国大使館との契約が解除され、彼は再び失業した。

彼は、少なくとも雇用の望みがあるソウルに戻ることを余儀なくされた。彼が再び収入を得るまでには5ヵ月を要した。

その過程で彼は妻子と引き離され、借金を背負わされた。

パストリーヒは 2020 年 2 月、ワシントン D.C.に滞在中、再び極度の政治的迫害を受けることになり、大統領候補として独立することを宣言した。

生き残るためには、このような予期せぬ大きな一歩を踏み出すしかないと思ったのだ。

時間を持て余していた彼は、アメリカの経済・安全保障政策における革命的な転換を描く一連のスピーチを書き、発表した。

このキャンペーンは、（彼の活動のほとんどと同様）アメリカの秘密法と機密勸告によって、アメリカやその他の国々では阻止されたが、パストリーヒは韓国のメディアや、それほどでもなかったがベトナムのメディアで報道されることに成功した。彼の 15 回のスピーチは入念に練られたもので、その原稿は米国の多くの人々に深い印象を与えた。

やがて、これらのスピーチを基にした本が韓国語でソウルで出版された（その後、メキシコ・シティでスペイン語版が出版された）。日本語版、中国語版、ベトナム語版も出版された。

パストリーヒはさらにスピーチを書き、グローバル・リサーチ（彼の著作を掲載する唯一の出版社）に力強い記事を書き、多くのファンを獲得した。

その資金を元手にドイツ語、トルコ語、フランス語、ペルシア語、ポーランド語、ルーマニア語、ロシア語などに翻訳し、手の込んだウェブサイト『pastreichprez.com』を立ち上げてキャンペーンを展開。

また、パストリッチは、ジョー・バイデンの曖昧な当選後、バランスの取れた形でドナルド・トランプを擁護する記事を書き、それがさらに多くの読者を獲得することにつながった。

彼は2021年3月から新たな真剣さで選挙戦に身を投じた。2000年、2001年に行われた、アメリカの指導者としてのビジョンに対するアジア全域の支持基盤を築くための戦いと、この新しい、そして前例のないアメリカ大統領選の世界的なキャンペーンを遂行するための努力とは、奇妙な平行線をたどっていた。しかし秋になると、戦いの規模は圧倒的なものとなり、脅威は厳しさを増していた。パストリーヒは、2021年6月に合衆国臨時政府を樹立し、8月に国際革命党を設立するという次のステップに踏み出した。

いずれにせよ、この20年間、米国でパストリーヒに何が行われたのか、パストリーヒ自身はおろか、調査を要求するために名乗りを上げた人物は一人もいなかった。







## はじめに

21年経った今、私は2000年7月に始まったトラブルを冷静に、そして少し愉快に振り返ることができる。もちろん、私がこれから語ろうとする物語には、2000年にアジアやアメリカの人々と教育の将来について議論していたときに起こった奇妙な偶然や珍事が絡んでいる。私のキャリアにおいて、ある種の対立は避けられなかったと思うようになった。同時に、私に対して行われた行為の重大な違法性、不道徳性、そしてその過程に同僚や友人、家族が恥ずべき形で参加していたことを容易に証明できると感じている。

私は自分のキャリアについて奇妙な見方をしていた。私は、既存の制度に進歩的な修正を加えるのではなく、制度全体を変えることに興味があったし、プロセスが好きで、官僚や管理者とすぐに友達になれる人間としてそうしてきた。また、自分のキャリアや給料にもそれほど興

味はなかった。大きなミッションが成功すれば、自分の面倒は見てもらえると思っていた。

私の根底にあったメッセージは、急進的な変化であり、同時に周囲の人々の仕事を尊重した変化だった。そのアプローチは、私が狂信者や夢想家として簡単に排除されないことを意味し、同時に、真の組織改革を切望する多くの人々にとって興味深く刺激的なものだった。言い換えれば、私はイリノイ大学のような閉鎖的で眠った組織を実際に変えることができる立場にあったのだ。

2000年当時の私のキャリアへの取り組み方は、根本的に何かが間違っていた。何か違うことをしたかったのだ。特定のキャリアゴールを目指そうとか、特別に高いポジションを目指そうという気持ちはなかった。イリノイ大学で最も権力のある人たちの中に入りたいたとも思わなかった。その代わりに、平凡だがかなり力のある大学でユニークなものを作りたいという夢があった。このアプローチだけでも、私を重大な脅威とするには十分だった。何が起こったのかを理解するのに半年はかかったが。

2000年のある朝、私はイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の東アジア言語文化学部のデスクに座り、インターネットの時代における大学の未来についての企画書を書き始めた。世界は私の頭の中で可能性に満ちた潮だまりとなった。私は自分の専門であるアジア研究から始め、わが国の教育システムを修復するための長期計画を立てた。私はその一環として、新しいルール、新しい文化的基準、さらには国際関係への新しいアプローチを提案した。大学の将来についての私のコン

セプトは広範だったが、遠隔教育の可能性についての説明には説得力があり、それを他の人に簡単に伝えることができた。

その提案に対してお金と信用が私にもたらされることはなかったが、私が所有権を要求しなかったからこそ、無限の可能性があることがわかった。1999年に読んだデビッド・マッカローのハリー・トルーマンの伝記に、ハリー・トルーマン大統領がよく使ったセリフが引用されていた：「誰の手柄になるかを気にしなければ、成し遂げられることは驚くべきことだ。後に、トルーマンは私が教えられていたよりも聖人ではなかったと知ることになるのだが、この言葉は、2000年夏に私が展開することになる戦略の根底を支える最初のインスピレーションとなった。

残念なことに、これはアメリカで野心的な若者として取るべき行動ではなかった。あなたは、既成の組織の中で確立された人物になるという自分の目標を追求することになっていた。私の専門分野では、それはハーバードの教授や学部長に

なることを意味し、政治家コースに進めば上院議員にもなれたかもしれない。一般的な意味での政策に身を投じることは、自分にとって直ちに有益なことがない限り、論理的ではなかった。このようなアプローチは、イリノイ大学において、そしてアメリカにおいて、私が政策と計画の中で広い空間を占めていることを意味した。私は、インターネットの飛躍的な進歩に、あらゆるレベルで適用される漸進的な政策を通じて、前向きかつ倫理的に対応しようとしていた。

イリノイ大学やアメリカの) 学長のような人がこの仕事をするはずだったのですが、彼らは自分の目標を達成するために関係を築き、引

退後に裕福であることを保証することに重点を置いていました。私は、日本文学の助教授として、誰もが想像していたよりもはるかに大きな影響力を持つことができると、研究が進むにつれて理解し始めた。

私はより大きな利益のために自分の時間を投資し、やがてはそれが大きな形で報われると確信していた。戦略的プランニングに携わる個人もいたが、彼らの全体的な目標は常に金と拡大だった。私は当初、アカデミックな政治に特別長けていたわけではなかったが、この経験により、最後にはかなりの能力を身につけることになる。私の成果と失敗の判断は読者に委ねたい。ただひとつ言わせていただきたいのは、私は自分のアイデアが変革をもたらすものであり、（私の手柄があろうとなかろうと）目上の人たちに取り上げられ、実行に移されると信じていたということだ。私自身が注目の的になると同時に、会話のタブーになるとは思いもしなかった。

## 自信

ホーテンス・コーハンの野心が、私をこの奇妙な軌道へと押しやった最初の要因だった。ホーテンス・コーハン是我的祖母であり、一緒に過ごした時間は少なかったが、私の幼少期における大きな力であった。もちろん、芸術的才能と人間性への深い理解を持つ思慮深い女性であった母や、集中力のある管理者であり、複雑な組織を驚くべき効率で運営した父からも多くを学んだ。

しかし、家族のため、特に子供たちや孫たちのために、信じられないほどの野心を抱き続けていたのは祖母だった。孫たちの中で、祖母は私を未来への鍵としてロックオンしていたと言ってもいいだろう。

祖母はマニー・コーハンの娘として生まれた。彼は第二次世界大戦中に金属メッキ業を営み、小さな財産を築くことに成功した自称・自営業の家長だった。彼は 1950 年代に成功を収めたが、その富の大半はほどなく失われた。洗練された思想家であった祖母の目標は、一家を次のレベルに引き上げることだった。彼女は 3 人の息子を成功に導くために多大な努力を払ったが、とりわけ長男のピーター・パストリッチ（私の父）は、子供の頃からその潜在能力を発揮していた。

ホーテンス・コーハンは、私の父は無敵で、並外れた才能の持ち主だと信じていた。彼女は父に最高の努力をするよう勧め、父もそれに応えた。1955年、16歳でイェール大学とハーバード大学に入学した父は、ブルックリンの野心的なユダヤ人少年の中でも珍しい存在だった。ユダヤ人であり、旧家とのつながりがなかったにもかかわらず、父は既成の WASP の中で有能な人間であることを証明しようとした。そして時折、文化的、政治的な意味で中心的な人物となった。彼はセントルイス

交響楽団のエグゼクティブ・ディレクターとして出発し、後にサンフランシスコ交響楽団の CEO として、交響楽団経営の中心人物としての地位を確立した。彼はまた、幅広い読書家であり、優れた作家であり、効果的な演説家であった。子供の頃の私を威嚇したのは、彼の厳しい言葉のせいというよりも（彼はそのような表現が可能であったが）、私が彼のような能力を達成することはできないと思ったからである。

長男の長男として、私は祖母の注目の的であった。私は父とある重要な性格的特徴を共有しており、特に自分のキャリア、人間関係の構築、制度の構築について体系的に計画を立てる習慣があった。それが事実であろうとなかろうと、祖母は私を特別な存在として認識していた。祖母は真剣な眼差しで私に語りかけ、私が成し遂げるかもしれないことを期待しながら言葉を伝えた。まるで私が使命を帯びていて、祖母がそのリーダーであるかのようだった。祖母は私に、幅広く本を読み、仕事に深く取り組み、世界の中心人物になることを期待していた。彼女が私を信頼してくれていることが分かっていたので、頻繁に会えなくても問題にはならなかった。

私にそのような影響を与えたのは祖母だけではない。母の姉であるジャンヌ・ルーフは、早くから私に野心を持ち、努力し、さらに上を目指すよう励ましてくれた。ジャンヌ・ルーフは、保守的な社会で無数



の障害との長い戦いの末に、ルクセンブルク初の女性弁護士、裁判官、最高裁判所判事になった。彼女はまた、私を将来、彼女と同じようなことを成し遂げられる同世代の子どもとして見ており、はっきりとそう言った。ジャンヌ叔母さんは、政治や経済について真剣な質問を私に投げかけ、まるで裁判官か教授のように私の返答を注意深く聞く習慣があった。彼女は、私には真剣に話を聞いてもらう権利があり、仕事には真面目に取り組む義務があると感じてほしかったのだと思う。長年にわたり、ジャンヌ叔母さんのキャリアは私にとって、真の成功とはどうあるべきかの模範だった。

この2人の女性は、私自身の成長をどのように計画すべきかについて、具体的なヒントを与えてくれた。イエール大学への入学は、家族や友人の助けはほとんど借りず、すべて自分自身の計画に従って行った。国際社会が東洋に傾いていく中で、米国で重要な役割を果たすために中国語を学び、次に日本語と韓国語を学ぶという戦略も同様だった。法律事務所で良いポジションを見つけることやお金を稼ぐことは、私にとって重要ではなかった。私の関心は自分のポジションにあった。若い大学生でありながら、私は世界がどのような方向に進むべきかを考え、政治家や外交官が時間を費やすようなこと以上に、アメリカ合衆国のための計画を立てていた。

祖母が私に対して抱いていた全幅の信頼、そして幼い頃の両親が私に対して抱いていた全幅の信頼は、簡単には揺るがない自信を生み出した。私は後に、アメリカの将来がどうあるべきかについて自分なりの考えを持つようになり、自分の判断に自信があったため、長期にわたって、補強や社会的承認なしにその目標を追求した。私を孤立させ、脅迫しようとする努力は効果がなかった。

## 死亡率

この話をする過程で、私は多くの決断を自分で下さなければならなかった。私のキャリアにとっても、安全にとっても危険なことだった。私や私の家族に対する殺害予告が本気だったのか、単なる嫌がらせだったのかは今日に至るまでわからないが、当時、これらの脅迫はかなり現実的なものに思えた。私は何年も、長くは生きられないかもしれないという恐怖とともに生きてきた。しかし、何度も死の脅しを受けても、私の足取りが鈍ることはなかった。家族や友人から切り離されようが、脅迫キャンペーンを受けようが、私の計画を止めるものは何もなかった。

今にして思えば、あのトラウマ的な経験が私をよりタフにし、より創造的にしてくれたのだと感謝している。しかし、当時の私の行動にはかなり奇妙なところもあった。脅威レベルが急上昇する中、同僚や家

族が私を見捨てるのを見ていた。しかし、私は動じなかった。豊かで安定したアメリカで育った周囲の人たちを恐怖に陥れるようなリスクに、私は特に怯えることはなかった。

2000年当時のアメリカ社会で、高学歴のアップパー・ミドル・クラスのプロフェッショナルたちとは何かが違っていた。それは自分の死に対する深い認識だったと思う。私は小学生の頃、少し病的だった。死や破壊に関する陰鬱な本を読むのが好きだったし、死についてくよくよ考えていた。それがホロコーストであれ、スターリングラードにおけるドイツの作戦であれ、私はそれらの本に埋没した。

自分の死は私を魅了するテーマだった。それには理由があった。歳のある日、両親は何の説明もなく私を病院に連れて行った。その時のことは今でも鮮明に覚えている。最終的な手術に

至るまでには、母が私のお腹の膨らみを感じた後、専門家と何度も打ち合わせをした。痛みを伴う脊髄穿刺を含む一連の検査を受けた。この診察は一泊することになり、手術の準備に入った。私は説明を受けることはなかった。歳の私にとって、この経験は異質なものであり、手術という考え方も異質なものだった。

背骨に肥大した神経節があったが

、がんではないことがわかった。両親は、良性の腫瘍よりも癌の確率の方が高いと聞いていた。

病院での5日間の休暇はぼんやりとしたものだったが、何かは深刻に間

違っていることは自覚していた。手術の技術的なことは曖昧だったが、何か重大なことが起こったのだと感じた。今日に至るまで、この経験は私の世界の捉え方を変えたと思っている。

背骨のガングリオンが す べ て で は な い

ことを、当時は誰も知らなかった。私の脳の右前頭葉にも腫瘍があった。それがいつできたのかはわからないが、おそらく同じ時期にできたのだろう。

脳腫瘍は何十年もの間、何の症状も出ず、私はその存在に気づかなかった。奇妙な体験をするようになったのは、1995年、31歳で韓国に留学していたときだった。午後に眠りにつくと、鮮明な夢を見るのだ。夢は短いものだったが、その多くは、すっかり忘れていた子供時代の遠い記憶のようだった。夢を見た後、私は奇妙な吐き気を感じた。

こうした夢のエピソードは時間とともに増えていった。父は私に夢を専門とする心理学者を紹介し、彼女は魅力的な解釈を与えてくれた。しかし、私の体験に神経学的な原因があるかもしれないという示唆はなかった。

イリノイ大学で教鞭をとって2年目の

1999年春、私は定期検診のために医師の診察を受けた。診察の最

後に、何か他に相談したいことはないかと聞かれた。私は時折見る奇妙な夢について話したところ、翌日脳波検査を受けるよう勧められた。その結果、不整脈が見つかり、MRIの検査が命じられた。

神経科医はスキャン終了後、MRIを私のためにディスプレイに映し出し、「右の側頭葉に脳腫瘍があります」と淡々と宣言した。その言葉を聞いたとき、私は少し頭がくらくらし、座らざるを得なかった。抗痙攣薬を服用して日本で1学期を過ごした後、1999年8月にUCSF病院で脳の手術を受けた。執刀医は韓国系アメリカ人の若い医師で、有名なミッチェル・バーガー氏の下で働いていた。結局、

手術は成功したのだが、死ぬか不具になる可能性があったことは事前に十分承知していた。手術はスムーズに終わったので、医師は翌日退院することを決めた。睡眠障害もあったが、翌年9月からイリノイ大学で教鞭をとるには問題ない状態だった。人生はあっという間に元通りになったようだった。

この死という体験が私を変えるとは思ってもみなかったが、根本的なところで変わった。私の目的と目標が変わり始めたのだ。野心を捨てたわけではないが、お金や地位ははるかに重要ではなくなった。それよりも、現代社会における知識人の役割に関心が向いた。

脳腫瘍は完全に摘出することができなかったため（協調に重要な運動路に接していた）、小さな破片が残され、それは私に自分の死を思い起こさせる役割を果たした。

何年もの間、睡眠パターンが乱れ、時折、全身に奇妙な感覚を覚えた。まるで新しい、そしてむしろ馴染みのない方法で世界を知覚しているかのように感じた。さらに、スタミナもなくなった。運動するときの持久力が落ちた。

2011年以降、私は右足に時折しびれを感じ、その後、協調性が徐々に低下していった。医師からは、手術の瘢痕組織が硬化し、私の協調性に影響を及ぼし始めたと言われた。その後も協調性の緩やかな低下は続いた。

この物語に描かれている危険な権力に立ち向かう決心をしたのは、

私の健康状態が影響している。自分が罵倒され、疎外され、辱めを受け、あるいは殺されても構わないと覚悟を決めたからだ。ブッシュ政権が発足した当時、国際関係に携わっていた学者や一般個人のなかでも、リスクを冒すことを厭わなかった私は稀有な存在だったと思う。

ここに記した 私の軍や情報機関との

交流は、その分野に入りたいという特別な願望から生まれたものではない。むしろ、教育を受けたアッパー・ミドル・クラスのアメリカ人全体が、透明性のあるガバナンスのために最低限のリスクさえ取ろうとしなかった、グロテスクな失敗の結果だったのだ。今日に至るまで、なぜ私が同僚たちと違っていたのか、その理由は定かではないが、私自身の病気体験と深い死生観が一因ではないかと考えてきた。

また、部分複雑発作そのものが、インターネットを利用した教育計画の立案やその実施に用いた、通常とは異なる推論を助長した

可能性があることも重要である。部分複雑発作は、普段は相互作用しない脳の各部分の相互作用を促し、予期せぬ結論や推論をもたらすことがある。さらに、このような発作は、人を鼓舞したり説得したりするような神秘的な目的意識やビジョンを持つように導くことがある。発作が私のプロジェクトに与えた影響を強調しすぎたくはないが、その影響は十分にあっただろう。

## 日中韓の古典文学研究

アジア言語、ましてや2つ以上の言語に堪能なアメリカ人はほとんどいない。私自身はネイティブにはほど遠いと思っているが、2000年春に インターネット指導の

企画書を書き始めた時点で、中国語、日本語、韓国語の能力はかなりのものだった。第二に、私は18<sup>th</sup>世紀の文学を比較研究していたため、中国、日本、韓国の重要な研究者と親しい関係にあった。私の提案を紹介し始めると、主要大学の研究者たちに電子メールを送ることができた。その中で、私はこのプロジェクトとその意義について、これら3つの言語で説明した。それらのメールには、文化や現代政治についての複雑な議論も含まれていた。言語を操る私だからこそできたメッセージのカスタマイズは、私のプロジェクトの推進に大きな役割を果たした。

中国語、日本語、韓国語を流暢に話す人と言われると、ムツとすることが多かった。言語を学ぶことは決して私の目的ではなく、アジアを内側から、そして総合的に理解しようとする

私のアプローチの結果に過ぎないと感じていた。アジアの言語を高い能力で学ぶことは、最初から私の戦略の重要な要素だったのだ。

1979年は私の人生にとって重要な年だった。父と暮らすためにサンフランシスコに引っ越す決断をしたからだ。サンフランシスコなら教育の機会も多く、特に父の経済的な安定度は高かったからだ。つまり、より良い大学に進学できる可能性があったのだ。新しい家に落ち着くと、ローウェル高校で勉強を始めた。この公立校は非常に競争が激しく、アイビーリーグの大学への進学実績も高かった。父に感謝したい。ローウェルでアジア言語を学ぶという選択肢もあったが、私はまだそれほど興味がなかった。しかし、私の高校は70%がアジア系アメリカ人だったため、アジア文化に詳しい親しい友人がたくさんいた。アジア文化は、私の家族にとっては異質なものでしたが、社会化を通じて、私にとってはかなり身近なものになりました。このような経験は、私が単にエキゾチックなものへの憧れを後天的に得たのではないということを意味している。

1983年にイェール大学に入学した最初の学期、私はフランス文学のクラスに登録した。両親ともにフランス文学を

専攻しており、私は高校でフランス語のアドバンスト・プレースメントを履修していた。このイェール大学の授業は、奇妙なことに私にとってかなり難しいものだった。読書量が多かっただけでなく、やる気がなかったからだ。もしそのコースにこだわっていたら、きっと最終的に



は自分のペースに達していたと思います。何か違うことをしたかったのですが、何をすればいいのかわかりませんでした。

私はそのコースをやめることに決め、夕食後、コースカタログに掲載されているすべてのコースに目を通した。説明に目を通し、興味をそそられる講座のリストを作った後、最終的に最も魅力的な講座は「翻訳中国古典文学」だと決めた。このコースは、プリンストン大学で博士号を取得したばかりの非常に熱心な若手教授、孫康一が教えていた。ハーバード大学に移ったばかりのステイブン・オーウェン（後に私の指導教官となる）がかつて務めていたポジションで、彼女は最初の学期を教えた。孫教授は私を指導し、このコースを取ることに中国語を勉強することを勧めてくれた。彼女はまた、様々な古代中国の詩を読み、中国哲学の詳細について議論する時間を割いてくれた。

中国語を学ぶことは、私に与えられた使命であるかのように、完全に正しいことだと感じた。イエール大学は、私がやろうとしていることに対してユニークな環境だった。中国文学専攻の学生は少なく、教授陣も私たちに時間を割いてくれた。自分が次世代のアジア専門家になるかのような使命感を感じ始め、頻繁にオフィスに立ち寄っては教授たちに会い、中国語について学んだ。

中国語プログラムの責任者は、ヴィヴィアン・ルーという名の著名な女性で、彼女もまた、私が漢字と中国語を学ぶのに何時間も何時間もかけてくれた。1950年代に渡米した高学歴の中国人の家庭に生まれた彼女は、すぐに私を潜在的な中国語の学者として見抜き、手放そうとし

なかった。私はすぐに、暇さえあれば中国語をどんどん独学しようとした。

私の使命感に転機が訪れたのは、1587年というタイトルの本を読んだときだった：レイ・ファン著『1587年：意義のない一年』を読んだときだ。この本の著者は、明の時代の重要な知識人を選び、彼らが肥大化した明の官僚機構を改革しようと果敢に取り組んだが、挫折し、結局は失敗に終わったことを示した。

その後何年もの間、私の頭にこびりついていたのは、その本に書かれていた1587年という日付だった。ホワンは、全権を誇った明王朝にとって重大な転機となったのは、体制が崩壊し始めた1587年という取るに足らない年であったと主張した。そして私は1987年にイエール大学を卒業しようとしていた。私はどういうわけか、物事の水面下で、明王朝にも匹敵する規模の深刻な問題が米国で起きていることを感じていた。この本を読んでから、水面下で起こっている変化が見え始めた。

しかし私はまた、自分たちの文化や制度に自信を持っていた中国人が、1840年代のアヘン戦争で大帝国に大きな屈辱を与えるまでの数年間、西洋の台頭を無視していたことにも感銘を受けた。私は、今度は逆に西洋人が中国人の供給するアヘンに溺れ、西洋の知識人がアジアについて真剣に学ぶ努力をしなくなるのではないかと考えた。私の世代のアメリカ人は、中国語を流暢に操り、中国語の内と外を知ることが不可欠だと感じた。

数年間、私は暇さえあれば中国語を学ぶことに夢中になった。中国文学の教授との交換留学で台湾大学へ行き、日夜独学で中国語を勉強した。私は最初から挫折した。当初は中国語があまり得意ではなかったが、アメリカ人を避け、中国語一辺倒の生活を余儀なくされた。辞書を隅から隅まで読み、できるだけ多くの本や記事を読んだ。その年の終わりには、私は高いレベルの流暢さに達し、中国語でいくつかのエッセイを書いた。

中国語を学ぶことは私にとって趣味ではなかった。これは私の人生における使命であり、倫理的な要請であると感じた。私はアジア文学の教授になるのですが、最終的なゴールは国に貢献することだと考えていました。

台湾からイエール大学に4年生として戻ってから、私は日本語の勉強を始めた。当時、日本は経済的に飛躍しており、私の役割は中国の専門家になることだけでなく、むしろアジアの専門家になることだと自分に言い聞かせていた。日本語は中国語とはかなり違っていて、日本語の授業は私にとって非常に難しいものだった。台湾で語学の習得法を学んだ私は、日本語を早くマスターしようと自分を追い込んだ。

私は1987年、東アジア言語文学専攻のわずか4人の学生の一人としてイエール大学を卒業した。夏休みにミドルベリー・カレッジに行き、そこで日本語科の3年生に編入することができた。私は無理をして、アメリカの主要大学が共同で運営する日本語専攻のための1年間の語学プログラム、インター・ユニバーシティ・センターに入学した。

私は日本に残って言葉と文化を習得したいと思い、平川弘祐教授の紹介で東京大学文学部比較文学科の研究生になった。ここでも日本語しか話さず、日本語しか読まず、日本人のそばで過ごすことを強いられ、1年半かけてかなり上達した。結局、1年以上かけて修士課程に入学し、日本語で書かれた修士論文を含め、修士課程と博士課程の1年目を修了した。

ハーバード大学では、日本文学も履修しましたが、ほとんどの授業は中国文学でした。その過程で、韓国学分野で活躍する多くの優秀な学生に出会い、韓国語も学ぶ努力をすべきだと思った。私の指導教官であったスティーブン・オーウェンは私の考えに賛同し、韓国で1年間勉強するための奨学金を得る手助けをしてくれた。ハーバード大学で1学期韓国語を学んだ後、私は韓国に向かい、ソウル大学で1年間勉強した。

私の学位論文の最終的なテーマは、日本と韓国における中国の方言語りの受容についてであり、私は3つの言語すべてで多くの資料を使用した。私は、これらの言語を学ぶこと、そしてしっかりと学ぶことが不可欠だと感じていた。問題は文学の研究ではなく、アメリカにとってアジアが絶対的に重要になる次の時代の地政学に備えることだった。

しかし、1998年にイリノイ大学で教鞭を執り始めてすぐに、アジア諸語を話す機会の少なさに衝撃を受けた。実際、私は資金不足の人文科学プログラムにおけるもう一人の地域専門家として扱われていた。アジアが世界経済にとってどれほど重要な存在になっているかを考えると、

アジアの言語が主要な大学で周縁的な存在として扱われるのは大きな間違いだと思った。

## その結果

私の生い立ちによって植え付けられた自信、祖母と両親の私に対する信頼が、自分の死に対する感覚と相まって、私の運命を形作ることになる独特の使命感と勇気を与えてくれた。東アジアの言語に焦点を当てるといふ決断は、アメリカ人ならほとんどできないようなビジョンを広く明確に示す立場に私を置いた。

同様に重要なのは、私は自分の学問的キャリア全体、そしてハーバード大学への昇進の可能性を賭けて、研究における国際協力だけでなく、グローバル・ガバナンスのための複雑な多国間の提案をすることを恐れなかったことだ。テニユア（終身在職権）のことを心配すべきだという周囲の先輩たちの主張は、私の行動にほとんど影響を与えなかった。これまでの経験から、私は自分の直感に従う自信があった。物理的な脅威に直面しても、その努力を続けようとさえ思った。



## 第1章

### 通信教育の計画と私が払った代償

私が勤めていたイリノイ大学の外国語棟で、遠隔授業のデモンストレーションの一部を偶然目にしたのは、2000年3月のことだった。私は2年前にイリノイ大学に着任した日本文学の助教授で、大学の仕組みを理解し始めたばかりだった。私はそのプレゼンテーションに驚いた。遠く離れたイリノイ州の片田舎で学生がイリノイ大学の授業を受け、ビデオ会議を通じて先生に生き生きと効果的な質問をしている光景を目の当たりにしたのだ。

私はその授業をほんの数分見ただけだったが、何日も心に残った。考えれば考えるほど、この新しいテクノロジーは真剣に活用されていないように思えた。結局のところ、ディケーターにいる生徒をオンラインで教えるのと、東京にいる生徒をオンラインで教えるのとでは、技術的に大差はないだろう。

私が遠隔教育の可能性について何時間も考えたのは、アジアが恋しかったからでもある。私は大学で日本文学を教えていたが、私が愛してやまなかったアジアからは遠く離れていたし、伝統的な韓国や、私が関心を抱いていた現代の韓国に関する問題に関心を持つ人は、私の周りにはほとんどいなかった。

私の学部にはアジアに詳しい友人が何人かいたが、彼らの専門は私の分野ではなく、私の18<sup>th</sup>世紀の知的歴史や現代のアジア政治に関する研究にもほとんど興味を示さなかった。アジアで多くの時間を過ごした後、私がしたかったのは中国語、日本語、韓国語を読むことと、それらの言語で自分の仕事について他の人と話すことだった。

ビデオ会議を利用して、教師と生徒、あるいは教師同士を遠距離から結びつけることは、非常に大きなチャンスでした。私は、イリノイ大学が技術面で持っている素晴らしい利点を利用して、アジアの友人とつなが

り、アジアの言語でセミナーや授業を行い、**研究と教育へのまったく独創的でエキサイティングなアプローチを生み出すことができる**と考えた。

このようなオンライン教育へのアプローチの意味するところは、私の仕事**に対する考え方を一変**させた。私がイリノイ大学に来たのは1998年のことで、ハーバード大学で希望していた職に就けなかったのは、官僚的な意見の相違が原因だった。ハーバード大学では、東アジア研究学科と比較文学科の間で優先順位が異なっていたため、ジョイントアポイントメントが取れなかったのだ。私が育った中西部に戻るの**は興味深かったが、イリノイ大学に対する思いはどちらか**というとアンビバレントだった。アジア研究プログラムが強いとは思えなかったし、もっといい学校にすぐに移るつもりだった。しかし、問題はもっと深かった。自分が教授になりたいのかどうか、まったく疑問だったのだ。古典文学の**学術的研究にそれほど興奮し**なかったし、教えることに刺激を感じることもあったが、仕事の多くはむしろ退屈だった。

韓国でも日本でも、友人たちは私が中国語、日本語、韓国語に堪能なアメリカ人であることを高く評価してくれた。しかしイリノイ大学では、私はイリノイ大学の中でも最も貧しく、最も管理が行き届いていない地域の一**文学部教授に過ぎ**なかった。私は、父のようにビジネスや政府、あるいは他の仕事に就き、**国際的なシンクタンクのトップ**に立てば、自分の能力が認められ、それを活かせるのではないかと考えた。

しかし2000年4月、オンライン指導の可能性が私の頭の中で完全にまとまったとき、私は自分が**数十億ドル規模の教育革命の最前線**にいることを悟った。突然、私はイリノイ大学以外のどこにも行きたくなくなった。それだけでなく、夜遅くまでこの計画に取り組み、イリノイを世界的なプレーヤーにするためにビデオ会議やインターネットを使った教育を**駆使して戦う覚悟**もできていた。それは、私を金持ちにし、有名にし、私の人生をより面白くするかもしれない、一生に一度のチャンスだった。

研究・教育のためのビデオ会議やその他の電子通信を使えば、中国、日本、韓国の優秀な人たちと一緒に仕事ができるかもしれない。イリノイ大学は、遠隔教育（当時はイリノイ州内のみ）とコンピュータ・サイエ



ンスとエンジニアリングの両分野で、明らかにリーダー的存在だった。もし私がビデオ会議を使って教育分野で革新的な仕事をし、おそらくその過程で管理者になることができれば（当時はその方が私の性格に合っているかもしれないと考えていた）、イリノイ大学のキャリアの可能性はハーバード大学よりも、あるいは学問以外の分野よりも大きくなるだろう。私は自分が携わっていることの可能性を確信していたので、研究に専念して終身在職権を得るべきだという上級教授陣の主張にはまったく興味がなかった。もっと単刀直入に言えば、イリノイ大学は私にとって非常に価値のある大学であったが、それはこのプロジェクトが私にそのような可能性を与えてくれる限りにおいてのみであった。もしこのプロジェクトを追求できなければ、私はイリノイ大学にいたくなかったし、教授にさえなりたくなかった。

このような視点は、私の周りの学者や他の人々には理解しがたいものだった。その理由のひとつは、遠隔教育の潜在的価値を理解している人がほとんどいなかったことである。しかし、それ以上に重要なのは、私が学者であり、学者が共有する前提にコミットしていると思込んでいたことである。イリノイ大学の内外を問わず、私を思いとどまらせようとした人々は、私の終身在職権を脅し、学部長や学科長の機嫌を損ねることを示唆すれば、このプロジェクトを断念させるには十分だろうと考えていた。しかし、私が偶然に遭遇した高等教育におけるこの巨大な波の先頭に立つためには、文字通りどこまで行っても限界はなかった。

学生にコンテンツを提供するだけでなく、研究者同士が協力し合い、チームティーチングを行い、セミナーを開催し、プログラムを開発するための手段として、私はグローバルに遠隔ラーニングを採用するための提案書を作成し始めた。また、研究センターや研究室をリンクさせ、タスクを分解し、後で再び統合できるような高度なシステムも想像した。

この提案を書けば書くほど、そして提案した内容について考えれば考えるほど、誰も理解していなかった概念に出くわしたという思いが強くなった。こうした流れは、同じく私の関心を引いた東アジアの他の動きと重なり、私を古典文学から国際関係論へと引き寄せた。中国の世界貿易機関（WTO）加盟や、2000年の春から夏にかけての北朝鮮との広範な関わりは、この地域が大きく変化する可能性を示唆しており、私のイン

ターネットを使った提案は、その過程でも役割を果たせるのではないかと思った。

私は自分のプロジェクトに完全にコミットし、何時間もかけて企画書を起草しては練り直し、あらゆる分野の同僚教員にどんどん見せていった。部長や学科長が私のやっていることをどう思うかは参考にはなったが、重要ではなかった。

私は、インターネットを利用した**研究・教育の可能性を完全に実現**するために、**遠隔教育**や**オンライン・セミナー**、その他の試みで協力する**コンソーシアム**を設立するのが**最善の方法**だと考えた。このような取り組みが、**教育にポジティブな影響を与え**、**アジアの国々**を結びつけることになると思ったからです。テクノロジーの**ポジティブな影響**については、私は**楽観的すぎ**、テクノロジーが**社会**にもたらす**ネガティブな結果**に**気づいていなかった**と思う。しかし、もしインターネット・コミュニケーションが**教育者**、**NGO**、**学生たち**によって**推進**されていたなら、私が提案した**アイデア**が**企業の利益**のためだけに**採用**されたために**達成**されなかった多くのことができただろうと思う。

私は、イリノイ大学は世界で最も有名な大学ではないが、**遠隔教育**においても**コンピューター・サイエンス**においても、**東アジアの優秀な大学**と協力する提案を**正当化**するに**足る十分な利点**があると結論づけた。このような提案によって生まれる**3国間**の**重力**は、**アジアの主要大学**の一部の**学者**に**関係なく**、**イリノイ大学**を引き**込む**のに**十分**だろうと、私は**正しく推測**した。考えた末、私は**飛び込み**で、私が**修士号**を取得した**東京大学**、**親しい友人**が何人か**教えている****北京大学**、そして**1年間留学**したことのある**ソウル大学**に**焦点**を**当てる**ことにした。

その頃、私には**工学部**に何人かの**親しい友人**がいたことを記しておきたい。その**5ヵ月ほど前**、私は**教養学部**の**野心**のなさと**息苦しい官僚主義**への**不満**から、**全米**で**5本の指**に入る**工学部**の**教授**たちに**声**をかけようと**決心**した。**工学部**は**大学予算**の**大半**を占め、**有名な教授陣**のほとんどを**擁**していた。

私は**工学部**の**全学科**の**ホームページ**に目を通し、**私と一緒に仕事**することに**興味**がありそうな人たちに**短い紹介メール**を書いた。同じような

関心を持つ約40人の教員と連絡を取り合い、アジアに特定の関心を持つ数人とは直接会った。最終的には、私のプロジェクトに興味を持ってくれそうなもっと多くの教員に手紙を送り、多くの教員から熱心な返事をもたらした。

このような交流の中で、私はグローバルな遠隔学習プロジェクトの提案の詳細を練り始めた。工学部で出会った教授たちは、私が提案したコンセプトの探求にはるかに熱心で、彼らの洞察力によって、遠隔学習への体系的なアプローチの潜在的な価値を見出すことができた。

イリノイ大学の工学部、法学部、経営学部、その他の学部との交流が進んだ分、リベラルアーツ&サイエンス学部との協力関係はますます苛立たしくなった。学部長をはじめとする上級教員たちは、私が提案したことにまったく関心がないようだった。初期の段階では、最近優秀な教授陣を何人か失った東アジア言語文化学部の士気の低迷が問題になった。また、リベラルアーツに対する工学部の影響力の増大を恐れた学部長からの圧力もあった。

学部長、副学部長、学科長とは良好な関係を保っていたが、学科長が私に恩返しをせず、彼の授業をいくつか担当させようとしたときなど、些細なことで緊張することはあった。

しかし、FBI/CIAのチームが私の事件を担当することになったとき、彼らの最初の仕事は、そのような些細な緊張をすべて探し出し、私の信用を失墜させるために大げさに吹聴することだった。

私の擦れ違いが原因ですべてが崩壊したかのように見せかけたのだ。その時は、私が投げかけていたアイデアが、あのような規模の対立をもたらすことになるとは思ってもみなかった。

2000年はクリントン大統領の最後の年であり、北朝鮮の核開発計画に関して何らかの合意に達するための努力が急がれていた。クリントン政権の何人かの高官たちは、レーガンが対ソ連で残した遺産に匹敵するような何らかの突破口が開かれる可能性に前向きだった。この努力は、2000年10月のマデリン・オルブライトの平壤訪問と、クリントンによる任期末の平壤訪問についての真剣な議論に結実する。

軍と諜報機関の最高レベルにおける深刻な反発はすでに始まっており、それはその後の選挙にも波及することになる。東アジアの緊張が解消されれば、武器の市場もアメリカのプレゼンスに対する需要もなくなる。進展が行き過ぎることは許されなかった。このようなグループは、その数は決して少なくなかったが、東アジアの緊張の解消を避けるためなら、文字通り何でもするとすでに決めていた。北朝鮮問題を解決すれば、軍事費削減を要求され、ミサイル防衛や高価なスパイ衛星システムといった最も儲かるプロジェクトが終了することを彼らは恐れていた。彼らは、この地域における米国の他の役割を考え出す想像力も意志も欠いていた。

実際、すでに一連の機密指令があり、FBI、CIA、その他の機関は、そのような突破口につながる可能性のある行動を積極的に阻止する措置をとることができた。

考えたこともなかったが、私は早くからインテリジェンスにタグ付けされていた。もちろん、タグ付けにはポジティブな意味とネガティブな意味の両方があった。私は中国語、日本語、韓国語に堪能で、アジアに広範なネットワークを持つ、ほんの一握りのアメリカ人の一人だった。過去にはソウルや東京の大使とも良好な関係を築いていたし、1年前にはイエール大学の同級生だったウー・チャン・リーと国務省で私のポジションがあるかもしれないと話したこともあった。もちろん、私が興味を持っていたキャリアはそれだけではなかった。しかし、私をもっと注意深く見るようにとの命令が下ったとき、すでにかんりのファイルが存在していた。幸いなことに、私は最初から敵対分子として認識されていたわけではなく、少なくとも指揮系統の下の方では、可能性を秘めた人物として認識されていた。

それまでは、私は注視されていなかった。しかし、2000年4月にイリノイ大学のキャンパス中の教授たちと話し合ったことが、それを変えた。

工学部、農学部、法学部、経営学部、教育学部、音楽学部などを擁するイリノイ大学は、あらゆるレベルで全米とつながっていた。コンピューター・サイエンスの教授たちと話すとき、私はアメリカ議会で演説しているようなものだった。私が推進したアイデアは、アジアへの旅費を捻

出するのに十分な熱狂を呼び起こした。しかし、これらのアイデアは、私が接触した興味をそそられた教授たちによって、さらに多くの人々と共有された。私は東アジア研究センターの諮問委員会のメンバーであり、キャンパス全体からメンバーが集まっていたため、イリノイ大学がアジアに関して何をすべきかを主張するユニークな立場にあった。

軍部関係者がまず懸念したのは、東アジアにおける遠隔学習と平和についての私の考えが、東アジアにおけるアメリカの安全保障上の立場や軍事費に与える可能性のある影響だった。後になって、もし彼らが私に私の考えを広めることを望んでいないのであれば、なぜそのことを単に伝えないのか、あるいは単に何か別のことを私に提案しなかったのかと、私はしばしば自問した。実際

官僚主義的な理由で、私の担当の CIA 職員は私に接触することが許されず（最終的には接触してくるのだが）、理屈をこねるのではなく、思いとどまらせるようなシステムになっていた。

しかし、国と国との間で複雑な双方向の方法で遠隔教育を利用するというコンセプトそのものに対する懸念もあった。その懸念は、国境の崩壊が国家の安全保障にどのような影響を与えるかという心配からくるもので、ある意味では正当なものであった。

利益への懸念もあった。私の活動に関する機密ブリーフィングを見た投資銀行は、テクノロジーとその結果としての遠隔教育システムが教育に与えるであろう潜在的な大きな影響を察知していた。彼らは、そのようなテクノロジーが最大限の利益を保証する形で使われることを確認しなかったのだ。私のプロジェクトは、このようなテクノロジーを使って革新的なことを無報酬で教育界に行うというもので、CEO ではなく教授の指導のもとで教育に革命をもたらす可能性があった。このモデルは投資銀行が深く敵対するものであり、彼らのアナリストが私の仕事について読むと、私の計画はどこにも進まず、まず民間セクターでアイデアを打ち出すべきだと判断した。

2000年5月、私は自分のアイデアを効果的かつ焦点を絞った提案書という形にまとめた。私は自国の最高レベルで何が起きているのかまったく知らなかったが、提案書をもってアプローチする東アジアの3大学を決めていた。そして、その提案書をカスタマイズして、それぞれの大学をいかにして真の国際的な、つまり世界最高の大学にするかを説明した。私は、中国、日本、韓国で説得力があり、現地の懸念やニーズにアピールできるような、カスタマイズした提案書を作成した。

そして、提案書を中国語、日本語、韓国語に翻訳してもらい、何度も何度も見直して、効果的なものであることを確認した。このやり方が成功する最善の方法だと私には思えたが、思いもよらなかったのは、私はこれまでにないことに挑戦しているということだった。私は自分の文章力、語学力、そして個人的なネットワークを駆使して、大学の学長や、それどころかアメリカの上院議員にもできないようなやり方で、プロジェクトを推し進めようとしていたのだ。私は、多くの中国人、日本人、韓国人に、これらの国々が互いに、そして米国とどのように協力すべきかという私のビジョンを提唱してもらうことができた。主要大学に在籍するアメリカ人として、私はどの国でも真似のできないステータスを持っていた。

私は自分の職責をはるかに超えていた。私は少しも違法なことはしていないが、そのレベルの政策をコントロールするはずの政府、金融、法律、コンサルティングの権力者たちにとって、私は指揮系統を壊すという最大の犯罪を犯したことになる。

私のアイデアについて連絡を取った東京、ソウル、北京の教授たちからは、すでに前向きな返事をもたらっていた。イリノイ大学は決して有名な大学ではないが、工学と遠隔教育における優位性は、中国、韓国、日本の一流大学と取引を成立させるのに十分であると私は確信していた。

友人の電気工学科のケビン・キム教授からソウル大学の大学院長を紹介され、いろいろな話題について何度もメールをやりとりして親密な関係を築いた。偶然にも、その大学のナンバー3は、私もよく知っている韓国文学科の教授だった。

ケビン・キムはまた、金大中大統領が首脳会談のために北朝鮮を訪問した際に上級顧問を務めたことのある成均館大学の金泰東（キム・テドン）教授に連絡を取るよう私に勧めた。金泰東とも友好的な文通を始め、彼は私の提案に興味深く目を通してくれた。韓国語で詳細に文章を書けるアメリカ人教授がいるということが目新しかったということもあるが、私が韓国の政策や社会の細部についてかなり知っていたからである。

金大中大統領に手紙を書いたとき、私は一線を越えてしまったようだ。2000年6月13日の金大中大統領の北朝鮮訪問を目前に控え、東アジアの統合の勢いが止められなくなる危険性があったため、ワシントンの体制側は心配していた。事態は制御不能になるかもしれない。明晰なアメリカ人学者が東アジアの統合を主張することは、外交問題評議会で承認されていない、より大きなアメリカの政策転換を国内外に示唆することになりかねない。私は彼らに脅威とみなされ、私が持っていたかもしれない善意や法的権利は、その日、窓から消えてしまった。

NSAとCIAが、FBIやその他の組織と連携して、私の活動を弱体化させる低レベルのキャンペーンを行うためのチームを結成した。チームの性格や任務は時間の経過とともに変化していったと思うが、内部文書にアクセスすることはできない。この作戦は当初はまったく見えないもので、私が送ったEメールが受け取られなかったり、私から他の人に、あるいは他の人から私に送られた手紙が紛失したりする程度だった。

そのような努力は、私の進歩や、東アジアの統合に対する好感の高まりを遅らせることはなかった。2000年5月、大学当局の数人に連絡を取り、私の提案にどう対応すべきか指示を出すという異例の措置がとられた。最初に接触した人数は非常に少なく、その指示も簡単ではなかったため、結果は散々だった。最低でも、5月か6月には私の学部長、副学部長、そしておそらく学部長に連絡がいった。他の人たちには、後日、知る必要があるベースで接触があった。

このような楽しい遊びの結果、私は学内の各部署から旅行のための多額の資金援助を受けていたが、自分の部署からは資金援助を受けていないという、かなり異常な事態に陥った。私のプロジェクトを弱体化させるための機密キャンペーンは、誰にも公表されるつもりはなく、私はその

隠された手にまったく気づかなかった。指令は、どんな手段を使っても私を阻止することだった。しかし、軍部には私がやろうとしていることに何の問題もないと考えている人たちが大勢いたため、取られた行動は限られていた。何が許され、何が許されなかったのか、今でも理解できない。相反する指令の干渉パターンだったようだ。

しかし、私の努力はまさに利他的なものであるがゆえに、情報機関やコンサルティング会社ではもはや制御できない連鎖反応を引き起こしかねないというパラノイアは、明らかにたくさんあった。

また、私のファイルの内容が大幅に拡大されたことも特筆すべきことである。非常に優秀な諜報部員が私について何時間も何時間も費やすことになった。愚かなプロジェクトだったが、彼らは私に関する多くの資料に目を通し、私が世界中の多くの人々に多言語で行った複雑な主張を興味深く読むことになった。その結果、私の立場は強化された。このプロジェクトで多様な背景を持つ人々をまとめることに成功したことから、私がある程度の政治的スキルを持っていることは明らかだったし、複雑な政策提案もすべて自分ひとりで書き上げることができた。私が自分の考えを主張する態度は、当時、私のプロフィールを作成するために雇われた心理学者に注目され、そのプロフィールは広く流布した。

FBIの代表が最初に私を阻止しようとしたのは、リベラルアーツ＆サイエンス学部長のジェシー・デリアと副学部長のチャールズ・スチュワートだった。彼らは、なぜこのような融通の利かない態度をとるのか、その理由を明らかにすることは許されず、単に想像力の欠如か、どのような形であれ遠隔教育への移行が工学部に對する自分たちの権力を相対的に低下させることを恐れているのだろうと、大方は考えていた。この2つの要因が存在していたにもかかわらず、彼らの行動は、実際には機密扱いの勧告を使って強制されたものであった。

しかし、私の学科や大学では熱意がなかったにもかかわらず、キャンパス全体では私の提案に對する圧倒的な支持があり、私が交流していた東アジアの大学ではますます支持が高まっていた。その流れは、こんな小さな妨害活動では止められないほど大きなものだった。その流れは、私がソウル、北京、東京を訪れ、現地のトップと提案について話し合うこ



とにつながっていた。提案はもはや私だけのものではなく、大きな突破口に向かっていた。

イリノイ大学のさまざまな支援者と話をした後、私は5月にイリノイ大学のリチャード・ハーマン学長に手紙を提出し、ジェームズ・ストルケル学長にも同様の手紙を送った。ハーマン学長は、私が以前、大学の可能性について書いたメモにすでに前向きな返事をくれていた（あとで知ったことだが、学部長は私が直接学長に連絡することを嫌っていたようだ）。いずれにせよ、プロボストも学長も私の提案に対し、極めて前向きな支持の手紙を寄せてくれた。デリア学部長は時間が経つにつれて否定的になっていった。私の学部長による否定的な反応は、ある程度、縄張りの問題であった。デリア学部長は、より大きな予算を持つ工学部と協力することによる悪影響を恐れていたのだ。その後、私はデリアの懸念が何であったかを理解するようになり、遠隔教育の誤用に幻滅した。

しかし、デリアは常に私をサポートしてくれたし、イリノイ大学に来たときには、彼が私に与える必要のないスタートアップ・パッケージまでくれた。つまり、この提案に対する敵意は、むしろ他の要因の結果であったようだ。デリアは4月の時点で、（おそらくFBIからの）私のプロジェクトに協力することを制限し、指令の出所を明かすことを禁じる勧告を受けた。月までに、多くの教員に私との交流を制限する内部メモが出された。私はこのような完全に違法なメモについて他の人たちから聞いたことがあり、不思議に思っていた。私は誰とでも喜んで仕事をするつもりだったし、このようなメモを出すことはあからさまに違法だったからだ。教員や管理職への通知は私的なものだったが、機密扱いではなかった。

月末には、2000年7月にソウル、北京、東京を訪れ、イリノイ大学のさまざまな部署から支援を受けるという具体的な計画を立てていた。私が提案したのは、大学を世界的な教育機関にするということであり、大学の他の教授陣が話していたこととはまったく異なっていた。大学の可能性についてのこのような理想主義は、アドレー・スティーブンスンの時代のものだった。

ある面では、ソウル大学の親しい友人たちに私の提案を転送したところ、トップたちの熱意はさらに大きなものだった。英語学部の白樂晴（ペク・ナクチョン）教授に手紙を出した。彼は韓国の主要な知識人であり、私が時々文通をしていた思慮深い人物で、私のアイデアに非常に興味を持ってくれた。その後数カ月で親しくなった電気工学科のケビン・キムは、たまたま当時大学院学部長だったウ・ジョンヨン教授に私を推薦してくれた。偶然にも、当時の研究科長は韓国文学科のクォン教授で、私もソウル大学での1年間でよく知った仲だった。

大学院のウー学部長は、私の提案にかなりの関心を示し、韓国に関心のあるアメリカ人学者に会ったことをむしろ面白がっているようだった。彼は科学者であり、韓国語で精巧な電子メールを書き、韓国の文化とその運命についての考えを分かち合おうとするアメリカ人には会ったことがなかったと思う。一週間もしないうちに、私たちは会ったこともないのに親しい文通相手になった。

ディーン・ウーは、私のさまざまな草稿にかなり注意深く目を通し、このようなプロジェクトに参加するチャンスを得たことに興奮していた。私は彼と何百通もの電子メールを交換し、インターネットを使った学習がなぜそれほど重要なのかを論証しようとした。

しかし、このプロジェクトを成功させる最善の方法は、4つの学校がインターネットを使った教育と研究で力を合わせ、アジアをひとつにする緊密な関係を築くことができるという無邪気で刺激的な提案を、各大学の学内新聞に掲載してもらうことだと思いついた。私はソウル大学の教員と最も親しい関係にあったので、そこから始めた。

学校新聞に記事を載せるという構想について、私はトップに打診しなかった。そのような宣伝には慎重すぎるだろうと思ったからだ。テクノロジーを積極的に活用する可能性について、より大きな議論を始める絶好の機会だと思ったのだ。NSA やその他の組織が、私の提案の影響を制限しようとする積極的な取り組みがすでにあっただとは知らなかった。

そこで私は、1970年代から80年代にかけて民主化運動に深く関わった有名なオピニオンリーダーである白樂晴（ペク・ナクチョン）英文学教授に手紙を書いた。私がソウル大学の学生新聞に書いた記事の新バージョンを推薦してもらえないかと頼んだのだ。その記事には、当時金大中が提唱していた協力案を具体化するような、インターネットを利用した北朝鮮との協力の可能性について何度も言及していた。数日後、白教授から返信があり、すでに大学院研究科長の禹鍾川（ウ・ジョンチョン）に送ったメールのコピーが送られてきた。そのメールには、提案された論文を全面的に支持する旨が書かれていた。

この手紙を見たとき、私は歴史的な突破口を開いたと感じた。白教授は韓国で広く尊敬されている知識人であり、ソウル大学がこのような手紙を断るのは難しいだろう。しかも、韓国ではアジアとの統合、北朝鮮との協力というムードが全面に出ていた。私は新たな自信と目的意識を得、新たな熱意を持って残りの仕事をやり遂げる原動力となった。

ソウル大学の英文学博士課程に在籍していた親友のユ・ヒソクが、企画書を韓国語に翻訳するのを手伝ってくれた。私たちは、東アジアにおける韓国の役割、そしてソウル大学に焦点を当てた、刺激的な提案書を作ろうと一緒に頑張った。この提案はかなり効果的だったと思う。

ソウル大学の修正案は、統合された東アジアの可能性について論じ、米国が日本、韓国、中国と協力して、欧州共同体に相当する経済単位を形成し、朝鮮半島の平和的統一のためのプラットフォームとして機能する方法を提案した。この提案ではまた、非武装地帯を越える必要がないことから、遠隔学習が北朝鮮との関わりへの第一歩となる可能性も示唆し、このようなオンライン交流がいかに信頼を築くことができるかを説明した。この提案は、シラキューズ大学マックスウェル・スクールが2001年からスチュアート・J・ソートン教授が主導した平壤の金策技術大学とのプログラムで採用されることになった。

私の仕事の次のステップは、東京大学への提案書の作成だった。私は東京大学で5年間勉強したのだから、東京大学は私の得意分野だろうと勘違いしていた。高田康成教授は、偶然にも私の前カノである小林芳子（東大英文科教授）の指導教官であり、1999年に客員教授として東京大学で研究を行った際、大変お世話になった。彼は、駒場出身の文学者

でもあるポスト構造批評の大家、蓮實重彦東大総長の特別顧問を務めていた。私はこれらすべての人々とつながりがあったので、大学院生の翻訳が終わるとすぐに、日本語版の企画書を高田に送った。高田は興味を示してくれたが、忙しくてこの件に取り組む時間がないとのことだった。私は知り合いの教授たちにもこの提案書を送り、多くの教授たちからかなり前向きな返事もらった。

最後に、北京大学への提案があった。私の仲間の間では、中国はより閉鎖的な社会であるため、北京大学とこのようなプログラムを運営するのは難しいだろうというのが一般的な見方だった。しかし私は、北京大学に中国語で提案書を送る前に、他の3大学で強力なサポートが得られるよう最後まで待った。

幸運なことに、私には杜源成という非常に有能な中国人留学生がリサーチ・アシスタントとしてついてくれていた。彼は翻訳を見事にこなしてくれただけでなく、北京大学へのアプローチ方法についても有益な提案をしてくれた。私はすぐに、遠隔教育や遠隔共同研究の可能性についての私の考えをよく反映させた提案書を書き上げたが、そのような教育改革は、国際社会の一員としての中国の新しい役割とも結びついていた。

私はこの企画書を、当時北京大学の比較文学部長だった嚴少棠教授に送った。嚴教授は中国文学と日本文学の専門家で、私の研究分野とよく似ていたため、私は何年も前から知っていた。彼は真面目な学者であり、政治家ではないので、私の提案に対する彼のコメントは極めて純粋なものだった。私は彼の反応に大いに勇気づけられた。

私はまた別のイリノイ大学から、副学長で北京大学の教育政策教授である閔偉芳（ミン・ウェイファン）を紹介された。彼は非常に英語が堪能で、教育政策の大改革者とみなされていた。閔教授は当時、北京大学の副学長を務めていた。ミン教授は私のメモと、北京に到着したら会いましょうという提案にすぐに返事くれた。彼は私に、遠隔教育部門のチーフである侯建軍に連絡を取るよう勧めた。

私はすぐに侯教授に手紙を書き、最初から意気投合した。実際、侯教授とはその日以降もずっと連絡を取り合い、2005年に再会した。文通を始めた時点では、北京大学でのブレイクスルーは期待してい

なかったが、受け答えはかなり好意的で、前進しようという強い意志が感じられた。結局のところ、私は一度だけビデオ会議ができればいいと思っていた。彼らははるかに**実質的な何か**を準備しているようだった。私は、**実行可能なプロジェクトに発展させやすい提案**であれば、どんな小さな部分からでも始めることに**満足した**。

私自身の行動というより、アジアで**接触した人々の行動**を通じて、話し合いの規模が**拡大**するにつれ、この出張を適切に**処理**しなければ、アメリカ政府との間に誤解が生じる可能性があることに思い至った。そのため、私は当時ワシントンのコリア・デスクの責任者であったデビッド・シアー（後の駐ベトナム大使）に電話をかけ、私の提案の**内容とその意図**を説明した。彼はその詳細にかなりの**関心**を示し、コピーをEメールで送るよう要請してきた。シアーには、この提案について話し合うために私が北朝鮮を訪問することは可能かと尋ねた。金大中が北朝鮮を訪問した後、北朝鮮との交流が始まったことを考えれば、これは非常に大きなチャンスだと思った。シアーは、これはいい考えだと思い、私が帰国した後、この件についてじっくり話し合おうと提案した。彼は、適切な紹介をしてくれると言ってくれた。もう2度と話すことはないだろう。

韓国への**出発日**が近づくにつれ、私は大学新聞『デイリー・イリニ』に私の提案を**掲載**したいと思うようになった。そうすれば、他の大学の新聞もそのような記事を**掲載**するようになるかもしれない、と私は考えた。

私は『デイリー・イリニ』紙に電話をかけ、私たちのプロジェクトとアジア訪問の計画について**説明**した。記者は**23歳**くらいの若者で、私の企画書をそのまま**掲載**するのではなく、企画書と私の仕事についてインタビューすることを提案してくれた。私は、2000年7月に韓国、中国、日本を訪れる直前の週に、そうすることに同意した。

しかし、私の学校では、イリノイ大学を**地図**に載せる絶好のチャンスだと考える者が多かったが、軍産複合体の高いレベルでは警鐘が鳴らされていた。アメリカを中心とし、**中国**と結びついた東アジアの統合という私の夢に向かって**陽気**に奔走していた私は、**環状道路**のいたるところで（私には見えない）つま先を踏んでいた。最も重要なことは、アメリカ国内での私の行動に対する**圧倒的な沈黙**を、**単に関心がないのだ**と勘違

いていたことだ。しかしアメリカでは、2000年8月までに完璧な嵐を巻き起こすことになる、とてつもない政治的対立が勃発していた。孤立主義者や重軍事装備を推進する企業は、アル・ゴアが大統領に選出され、世界的な協力と軍事的現状からの脱却を目指すクリントン政策が継続されることに我慢ならなかった。2000年の夏までには、ゴアを絶対に大統領にさせまいとする軍事派閥のグループがかなりの数にのぼった。

2000年7月に国務省から聞いた話から判断すると、私のアジア歴訪は決行され、実務レベルでは真の支援があった。CIAとFBIのチーム（チームの正確な構成は時とともに変化しているようだ）は、この時点ですでにイリノイ大学に陣取り、私を監視していたが、彼らには実にさまざまな命令が下されていた。何よりも、軍産複合体の中の大きな派閥は、米中が統合に向かっていることに非常に神経質になっていた。北朝鮮との関係正常化は、彼らにとって許しがたい一歩であり、それを阻止するために大砲を呼び出す用意ができていた。

これらの派閥は、東アジアにおける米国の安全保障政策について、古典的なハブ・アンド・スポーク体制を何としても維持しようとした。つまり米国は、（NATOとは対照的に）全体として連動していない韓国や日本との二国間同盟関係を維持することを求められた。また、米国は中国を安全保障問題に関与する信頼できるパートナーとは考えられなかった。このドクトリンは米国の利益にはならなかったが、東アジアにおける最重要課題は、日本と韓国を互いに距離を置きつつ、米国の軌道上に置いておくことだと考えていた戦略思想家たちには不可欠なものだと考えられていた。それは古典的な分割統治戦略であり、アジアの緊張を維持し、もちろん武器販売や軍事配備で金儲けをする手段として、北朝鮮の差し迫った脅威と中国の長期的な脅威を演出することと結びついていた。現実主義者たちはまた、解決に向けた動きがあれば、アジアにおけるアメリカの役割は終わり、国内からは撤退を求める声が上がると示唆した。この部分は正確だった。

投資銀行家やワシントンで実質的な影響力を持つ他の企業関係者の立場からすれば、中国の唯一の役割は世界への工場であり、影響力のある立場から中国を締め出すことが不可欠だった。このような議論はすべて、中国の世界貿易機関（WTO）への加盟申請という状況の中で行われて

いた。私の提案は、かなり洗練された文章で書かれており、読者には真面目な政策提案に思えたが、中国が長期的なパートナーになる可能性を示唆していた。この議論は許されるものではなかった。中国は常に敵対する可能性のある不確実な立場にあるべきであり、そうすることで人々が中国の視点から世界を見ることを思いとどまらせ、交渉における中国の立場を弱めることになる。

しかし、国防総省の誰もがこのような意見に同意していたわけではない。特に専門家の間では、中国は国際社会に参入するために必要なステップをすべてクリアしており、中国はイスラエルやサウジアラビアなどのいわゆる同盟国よりも信頼できるパートナーであると考えられる勢力も大きかった。

その後数年間、私は、中国が米国との有意義な安全保障協力体制の確立に心から関心を持っていること、そしてそれが必要とする多少屈辱的な条件さえも喜んで受け入れていることを示唆する証拠をかなり目にした。

しかし、軍部にはそのような論理を理解する者もいたが、右翼の人種差別主義者グループ（たまたま私の住むイリノイ州ではかなり活発に活動していた）に後押しされたアメリカのタカ派は、そのような考えが日の目を見ることがないようにしようと決意していた。

私を監視するチームに与えられた命令は、私の影響が限定的なものになるようにすることだった。この作戦は非常に違法なもので、誰にも知られることはないと思われていた。しかし、私のプロジェクトが軌道に乗り始め、私が中国語、日本語、韓国語でかなり洗練された操作ができることを示すにつれ、彼らは低レベルの妨害ではこのプロジェクトを止めるには不十分であることに気づいた。この提案を耳にした東アジアの人々は興奮し、イリノイ大学のFBIチームがコントロールできる範囲を超えた措置を取り始めた。私をコントロールするために、より強固な手段を講じる必要があると判断したのだ。

月中旬までに、この提案の基本的なアウトラインは3大学の事務局に送られ、かなり好意的な反応が返ってきた。私が受け取った返事を見る限り、内部での話し合いはすでに行われているようだった。イリノイ大学

では**広範な支持**があり、キャンパス全体から十分すぎるほどの**資金援助**があったにもかかわらず、私の**学部長**と**学科長**は**資金援助**を拒否し、私と直接この**計画**について話し合おうとせず、**探検旅行**を延期するよう求めるだけだったのだ。彼らは、私の**終身在職権**問題についての**心配**ばかりを口にし、私はその言葉を、あからさまな**脅迫**の試みと解釈した。

後に私が目撃したこと、そして事後にさまざまな人が非公式に**発言**したことを**総合**すると、**デリア学部長**は、このプロジェクトに**関連**するすべての活動から私を**積極的に遠ざけ**、このプロジェクトから何も生まれなないようにしなければならないという**不愉快な立場**に置かれたのだと思う。私は**重要な論文**を**発表**しており、その**資格**に疑いの余地はなかったにもかかわらず、彼は、**テニユア**（**終身在職権**）取得を目指す**助教授**として**研究**に**専念**する必要があると繰り返し言わざるを得なかった。その間、彼は**FBI**からこのような行動をとるよう命じられた**機密指令書**を受け取ったことを明かすことは許されなかった。

私は**当時**、**デリア学部長**がこのプロジェクトに**反対**した最大の理由は、キャンパス**内**での**工学部**の**影響力**が増し、貧しく力のない**教養学部**の領地が脅かされることを恐れたからだと考えていた。

彼の側にもそのような懸念があったし、彼の**学部**の**上級教員**の間にもある程度の**利己的な**、さらには**腐敗**した部分があったのは**現実**であったが、それは**深刻な問題**ではなく、このような**外部からの干渉**がなければ、プロジェクトは容易に進めることができただろう。しかし、今にして思えば、私は**大学内**での**オンライン学習**の**潜在的な破壊力**についても**ナイーブ**で、**反対派**を**単なる反動的なもの**と見なしていたように思う。私は、**オンライン学習**や**ビデオ会議**を、その**メディア**を通じて世界中の**専門家**と**会話**を交わし、**多言語**にわたって時代の**重要な問題**について議論を深めることができるという**可能性**という**観点**からしか見ていなかった。このような**インターネット**を利用した**大学教育**の**構想**は十分に可能だったが、**実現**することはなかった。

**教室**に**テクノロジー**を導入することが、どのような大きな意味を持つのか、私は知らなかったのだ。それは、世界中の**教師**が互いに**相談**し、異なる背景を持つ**学生**を集めて**深い議論**をする**授業**を**デザイン**するためではないだろう。むしろ、**遠隔教育**は**教授**の地位を低下させ、**教師**を**プロ**



グラムに置き換えるために使われることになるだろう。国際的なものになったことで、ブランド化された大学を世界中に売り込み、競争する財政的余裕のない地方の大学を弱体化させることになった。もし私が、投資銀行がどのような意図で遠隔教育の問題に取り組もうとしているのかわかっていたら、反対する人たちにもっと同情的だっただろう。

FBIとCIAから私のサイレント・パートナーとして任命された者たちが、既存の緊張関係を探し出し、それを自分たちの行動を隠蔽する手段として利用するのは、研究された手口だった。当時のグループ内の本質的な全員が、このばかげた話を喜んで受け入れ、その後何年も維持したことに驚かされる。マスコミで広く議論された他の多くの若手教員の事件よりもはるかに違法であったにもかかわらず。

当時、前部長のロン・トビーとデリア学部長の親密すぎる関係が、トビーと新部長のジェリー・パッカーが私の提案に融通を利かせなかった大きな理由のように私には思えた。結局、私が求めていたのは、アジアの同僚と連絡を取るために何度かビデオ会議を使わせてもらうことだった。しかし、繰り返しになるが、彼らは不愉快な態度をとれば私を黙らせることができると考えるほど愚かではなかったと思う。むしろ、他の力が彼らに断れない申し出をしたのだ。

当時、私は、この提案は非常に重要であり、学部長の反対は非常に不合理であるため、デリア学部長が嫌がるであろう一歩を踏み出す必要があると考えた。私には選択肢がないと思った。私はリチャード・ハーマン・プロボストとジェームズ・スチューケル学長に、この提案について手紙を書いた。ハーマン・プロボストはその手紙をデリア学院長に転送し、デリア学院長は大いに苛立ったに違いない。

最終的に、国際関係担当のアール・ケロッグ副学長のオフィスで、アジアへの旅について話し合うことになった。妥協が成立したようで、ハーマン学長から私の旅費はLASから支給されるが、今後はLASと直接（おそらく他のユニットとではなく）仕事をするようにとの手紙が渡された。この会合には、数カ月前の就任キャンペーンで私がわざわざ応援したパッカーも出席していた。他にもプロボスト・オフィスのスタッフが数人同席し、メモを取っていた。

ケログは、私の提案について極めて肯定的に語り、"多くの議論の的となっている"と述べた。彼は非常に外交的な態度で、意見を述べることを避けたが、全体的な印象としては、上のレベルの人たちは非常に熱心だった。振り返ってみると、そのとき多くの上層部の人たちは、私の部長、副学部長、学部長が自分たちの行動について機密扱いの勧告を受けたことを知らなかったのだと思う。

いずれにせよ、ケログは私の部長であるパッカードに配慮してくれた。なお、大統領府から電話がかかってきて、私が提案書を書いた手紙に大統領はどう答えてほしいかと聞かれたとき、私は秘書官にはまったく答える必要はないと伝えていた。しかし、ストルケル社長はわざわざ非常に協力的な手紙を書いてくれた。特にデリア学部長は、私が落胆し、威圧され、怯え、学術論文の執筆に戻ることを望んでいた。

続いてジェリー・パッカードが意見を述べた。彼は、終身在職権を持たない教員が、必要な研究以外のプロジェクトに取り組むことを心から心配していると語った。私は彼の発言に軽率さと侮辱を感じた。結局のところ、私の学科の上級教員が私の研究や出版物に関心を持ったのを見たことがなかった。また、このプロジェクトが私の出版を止めることになるとはまったく思わなかった。それどころか、このプロジェクトだけが、私を学問の世界にとどめておく唯一のものなのかもしれないと思った。

私はパッカードにこう答えた。それに対して彼は、"それはどうかな"と答えた。

あのやりとりは大きな誤解だった。私が「終身在職権にこだわらない」と言ったのは、イリノイ大学が私に終身在職権を与えようが与えまいが、私には関係ないという意味だった。私は自分の能力を活かせる、学業以外のキャリアを見つけるつもりだった。しかし、パッカードは私の発言を、助教授としての口先だけの自信の表れだと解釈した。彼は、このコメントが少し強引で、ミーティングにはまったくふさわしくないことを知っていたのだろう。

ケログは事態の收拾に全力を尽くし、広範な支持は得られても完全なコンセンサスは得られていないのだから、大学からの正式なバックアッ

プはなくとも、学部長からの当たり障りのないカバーレターを添えて、可能性を探るために私ひとりでこの旅に出るべきだと提案した。そして、私が戻ったらすぐにまた会おう、と付け加えた。

彼は、リベラルアーツ・カレッジが旅費を少し負担してくれることを告げ、私が自分の所属するユニットからの資金なしで行くという最大の争点を取り除いてくれた。オフィスを出ると、ジェリー・パッカーが近づいてきて、旅に出る前にコーヒーを飲む時間はあるかと聞いてきた。

私は時間がないと彼に言った。私に何ができて、何ができないかについて説教するのはもうたくさんだった。大学は、私がそうでないように明確に設定されているにもかかわらず、部長があたかも私が部長のために働いているかのように振る舞うのにはうんざりしていた。

しかしその後何年もの間、翌日コーヒーを飲んだらパッカーは私に何を言っただろうかと考えていた。彼は単に終身在職権の審査や私の経験不足についての羅列を繰り返しただけだったのだろうか、それとももっと深い政治的危機をほのめかしたのだろうか。私はそれを知ることはなかった。

## アジアへの旅

シカゴからソウルへ出発する数日前、私はひどく焦っていた。思いがけず、学校新聞『デイリー・イリニ』に問い合わせたところ、最後の最後で返事が来た。中国と韓国の大学新聞への掲載依頼に続き、私はまず自分の学校に行ってみようと思っていた。何の返事もなかったなので、この件は諦めた。

しかし、出発の前日に若い男性から電話があり、インタビューを受けた。私は彼にコンセプトの概要を伝えようとしたが、新聞社が私にインタビューするということは、支持の度合いが高まっていることを示唆するポジティブなサインだと受け取った。デイリー・イリニ紙は全体とし

てかなり保守的で、何事にも踏み込もうとしない。インタビューはうまくいき、私はかなりの自信をもってバスで空港に向かった。

ソウル行きの飛行機が発着したのは2000年7月18日だった。金大中（キム・デジュン）の歴史的な平壤訪問と南北交流の目覚ましい開放から1ヵ月後、私はソウル大学のキャンパスに到着した。妻の家族を訪ねたとき（妻はこの旅には一緒ではなかった）、私は高いレベルの興奮と期待を感じた。真の和解と統一への道はそう遠くないと感じる人もいた。私が日本と中国で感じたことを考えると、このことは私にも信じられるように思えた。

朝、仁川空港に着くと、バスでソウル大学に向かい、30分ほど遅れて大学院研究科長のウー教授のオフィスに着いた。彼はまだいなかった。私はスーツケースを脇に抱えて椅子に座り、すぐに眠ってしまった。彼はかなり恥ずかしい瞬間に私を起こした。しかし私はすぐに立ち直り、彼にプロポーズの説明を始めた。実は、私たちは以前にすでに何百通ものメールを交換しており、彼はそのコンセプトと可能性を十分に理解していた。彼は、ソウル大学がこの構想に興奮しており、さらなる行動を検討するための委員会を立ち上げたと説明してくれた。学長にも相談済みで、近い将来、試験的にビデオ会議セミナーを数回行いたいと考えているとのことだった。

その後、私は学務担当のクォン・ドゥファン副学長を訪ねた。クォン・ドゥファン副学長は韓国文学の教授で、私が1995年に韓国へ留学したときに一緒に仕事をしたことがある。彼は、私が送った提案は、経済と文化が統合されつつあるこの時期の韓国にとって非常に適切なものだと言ってくれ、全面的な支援を約束してくれた。あまり長い時間話をしたわけではなかったが、ソウル大学ではこの提案に対するコンセンサスが他のどの学校よりも強いという印象を受けた。

ソウル大学で最後に会った教員は、美術史の教授であるパク・ナッキュだった。私は1995年にソウルで古典文学を研究していた1年間、彼の研究室でほとんどの仕事をこなし、その後もさまざまなプロジェクトと一緒に仕事をした。朴は、当時のビデオ会議の技術的な難しさについて私とじっくり話し合ったが、十分な準備さえすれば、ほとんどのことは克服できるという確信も示してくれた。彼は私に会う前に、明らかに仲

間たちとこのテーマについて十分な時間をかけて話し合っていた。その会話から受けた印象では、ソウル大学はすでにこのコンセプトを採用しており、他の大学ともこのコンセプトをさらに発展させる方法について議論しているようだった。

同い年の親友である韓国文学科のチョン・ビョンソル教授に会うと、彼が聞いたところによると、この提案には最高レベルのコンセンサスがあり、何らかの形で間違いなく実行に移されるとのことだった。義母のアパートで荷物をまとめ、北京に飛ぶ準備をしながら、私はかなりの自信を感じていた。

北京大学の教員寮に小さな部屋を予約し、中国語で書いた企画書を20部ほど用意して、キャンパス内を歩いているときに偶然出会った人に渡した。ソウルでアジアナ航空の座席に座ると、隣の席の中年男性がすぐに熱心に話しかけてきた。彼は清華大学のコンピューターサイエンス学部で教えている教授だと説明してくれた。彼は私がなぜ北京を訪れているのかと尋ねたので、私は説明しようとした。その過程で、私は私の提案について話した。清華大学は北京大学の第一のライバルであり、強力な技術プログラムを持っているので、私は以前から清華大学への提案を考えていた。彼に私の提案を話すと、彼は興奮して顔を輝かせた。そして、翌日喜んでキャンパスを案内し、先輩教授たちに会わせてくれると言ってくれた。

私にとってはちょっと偶然が重なりすぎた。たまたま飛行機で隣に座ったのが、中国を代表する工科大学で、まさにこのプロジェクトで私と密接に協力してくれる技術専門家だったのだ。それが、このプロジェクトが大きな規模になりつつあること、そして私がかなり注意深く見られていることに気づいた瞬間だった。しかし、私はそれをリスクとは思わず、むしろもっと頑張ろうという気持ちになった。

北京大学での実際の面会はまだ少し限られていた。国際学術交流部の管理職数人に会った。彼らは非常に配慮してくれたが、この件に関して何かを決定する立場にないことは明らかだった。遠隔教育プログラムのホウ教授とはより多くの時間を過ごした。彼は、私たちがどのようなアプローチをとるかについて有意義な質問をしてきた。彼は自分の言っていることをよく理解しており、イリノイ大学との協力に興味を持ってい

た。彼はイリノイ大学がハーバード大学でないことはあまり気にしておらず、むしろ私たちの遠隔教育に関する技術に興味を持っているのがわかった。後に東大で遭遇することになる軽蔑は全くなかった。

ミン副社長には会わなかったが、彼はその時点で私のような者に会うのは不適切だと考えていたようだ。あるいは、この訪問が彼にとってすでにそれほど微妙なものになっていたのかもしれない。また、私が最も親密で、当初から最も協力的だった顔少堂教授にも会えなかった。嚴教授は日中文学の比較研究に取り組んできた穏やかな学者で、以前から何度も会っていた。北京にいる間にヤフーで読むことができたのだが、そのメールには、大学がどのような決定を下すかはわからないが、個人的には私の国際協力の提案に賛成であり、応援すると書かれていた。

中国人の教授、特に学部長からのこのようなメモは極めて異例であり、このような早い段階での彼のコミットメントに私は深く感銘を受けた。私はその後、そのメールを記録としてコピーしなかったことを後悔した。しかし、誰にもわからない。私のメールの多くは、後に奇妙なことに消えてしまい、旅行の詳細を再現する手段が限られてしまう。しかし、日本からのほとんどのメールは生き残った。

私が東京に着いたのは、沖縄の名護で開催された G8 サミットの 2 日目、7 月 22 日だった。本当の意味で、すべてが私のもとに集まってきた。アジアにおける経済統合の重要性、そして中国との協力は、先日の南北首脳会談を補完するものとして、メディアの中心的な話題だった。日本の新聞は、G8 サミット後にどのような協力が可能かについての議論で埋め尽くされていた。

アジアが G8 サミットの議論の中心であるにもかかわらず、中国の議長が招待されていなかったことに私は衝撃を受けた。この決定は、私がイリノイ大学で観察してきたヨーロッパ中心主義的な態度と一線を画すものであり、私には大きな間違いだと思えた。私の頭の中には、提案書に添えるカバーレターの内容であるエッセイが出来上がっていた。

私がイリノイ大学で教鞭をとり始めて間もない 1999 年、半年間東京大学に留学したときに部屋を貸してくれた小館さん一家の家に 4 日間滞在した。ちょうど 1 年ぶりだったので、私は彼らの家をととても懐かしく思

い出した。同じ部屋に泊まった。しかし、リラックスする時間はまったくなかった。沖縄で開催された G7 サミットをはじめとするさまざまなニュースで、私はアジアの新しい地政学的未来を描くために、この地域における前例のないレベルの統合をどのように活用したらよいかというアイデアに心を躍らせていた。このプロジェクトは、もはや遠隔教育や大学の**変革**のためだけのものではなく、私たちの活動を通して、この地域に新たな可能性を生み出すことができるのではないかということだった。

このプロジェクトに関する議論は、私が予想していたよりもはるかにうまくいった。大学の役割に関する**画期的な**コンセプトと、新しいテクノロジーによってもたらされるであろうコミュニケーションにおける大きな**変化**の可能性との組み合わせは、多くの人々の想像力をかきたてた。私は地元の印刷屋で何時間もかけて、その店のコンピューターで文章を作り、ある種の傑作を作ろうとした。新聞を**読み**、インターネットで**事実**を確認し、このインターネット**教育**の提案がいかにアジアの次のレベルの統合につながり、日本が新たな指導的役割を果たすことを提案するかについて、複雑な議論を展開した。私は南北首脳会談、中国の WTO 加盟の可能性、テクノロジーが**社会**に与える影響について**説明**した。また、中国を外した G7 を批判し、日本が隣国をもっと**真剣**に受け止める必要があることを示唆した。

この新しいアプローチは、その後私が中国語や韓国語で書いたものにも影響を与えることになる。私は提案書に添えた**教員**や**学生**への手紙の中で、日本が米国との関係を**変え**ながら、韓国や中国とより緊密な関係を築く方法について、私の主張を展開した。つの**国**からなるヨーロッパ共同体のような共同体というビジョンは、とても明白で**説得力**があるように思えたので、手紙やさまざまな電子メールは、文字通り自分で書いたものだった。

インターネットを使った授業に限らず、イリノイ大学とはあまり関係のないことだが、私は日本に来てから、自分の仕事に関して強い使命感を持っていた。これは**歴史的な瞬間**であり、私は**チャンス**を与えられたのだと感じ、このプロジェクトを成功させるために**全力**を**尽く**そうと思った。ある意味、このプロジェクトの成功は、アジアにおける統合を前向

きにとらえ、**歴史的**に大きな意味を持つものだと考えていた。私の考えが大それたものであったかどうかは、**読者の判断**に委ねたい。

コダテ家にはコンピューターがなかった。近くに時間貸しのコンピューターセンターがあったので、そこで何時間も手紙やEメール、その他の作文を書いた。私は、日本には東アジア諸国との**関係**を深める責任があると提案した。当時の私は、東アジアで起きている**国家間**の問題は文化的な誤解の結果であると**単純**に考えていた。米国内に、東アジア諸国間の協力を制限しようと積極的に動いている勢力があるとは思ってもよらなかった。しかし、クリントン政権末期の**当時**、一般的な政策が統合と協力を**賛成**していたのは**事実**だった。

私はイリノイ大学とは**関係**のないところで**強い使命感**を抱いており、このプロジェクトが**関係各国**にとってあらゆるレベルで成功し、人類が**気候変動**や**技術開発**などのより深刻な問題に集中できるよう、**全力**を**尽く**そうと決意していた。

私はコンピューターセンターに行き、提案書に添付するカバーレターを入念に書いた。その中で、このプロジェクトの**歴史的意義**を説明し、日本がいかに東アジアの他の地域との協力を怠ってきたかを嘆いた。もちろん私は、誰もこの努力を**黙殺**するためにあらゆる手段を講じないだろうと甘く考えていた。当時は、このような統合を支援するクリントン政権末期の努力と完全に一致しているように見えた。私は**周囲**で目にしたものに**触発**され、何時間も執筆と推敲を**続**けた。

東京大学駒場キャンパスに到着した私は、まず**学科長**の竹内信雄に**会**いに行った。提案について少し話したが、彼は私をサポートしたいとは思っているものの、**遠隔教育**の詳細についてはまったく興味がないことがわかった。彼は翌年、私を客員教授として迎えるつもりだと言ったが、それは**実現**しなかった。私は、友人で同級生の**徳森誠**とも私のアイデアについて話し、イリノイ大学はおろか、今やアジアでもかなりの支持を得ているこの提案を推進するために**全力**を**尽く**そうと決心した。

パク・ナッキュ教授からもらったソウル大学の**教員名簿**の**コピー**を持っていた。東京大学の比較文学部に渡すために**コピー**をとった。各ユニットの名前も日本語に**訳**し、使いやすいうようにした。両大学の協力をでき



るだけ簡単にしたかったからだ。実際、東京大学では誰もそれほど興味を示さなかった。しかし、徳森教授はお返しに東大の教員名簿をくれた。私は、今回は東大の知り合いに限定しないと決めた。

私は、この提案は非常に独創的であり、私の手紙は非常に力強い（そして、日本が中国との関与を怠るリスクは非常に大きい）と感じたので、私の提案のコピーを全キャンパスの200人ほどの教授に電子メールで送るか、印刷したものを郵送することにした。日本の管理職のなかには、私が勝手なことをするのを嫌がる人もいるかもしれないが、これまで多くの強い支持を得てきたのだから、私にはそうする権利があると思った。東大の教授200人がこのような提案を受ければ、影響力のある政治家や実業家に話をするようになり、より多くの人々が私の考えを知るようになるだろうとも思った。間接的な影響力の大きさを知るのはずっと後になってからだが。

コンピューター・センターに戻り、教授一人一人に宛てた手紙にカスタマイズした。そして手紙と企画書を印刷し、東京大学駒場キャンパスの近くにある喫茶店に持って行き、そこで気に入っていた中国茶を飲みながら、教授たちの名前と住所を手書きした。お茶屋に座って、封筒に手書きで住所を書いた。手紙や企画書を封筒に詰めたら、キャンパス内を回って教授たちの郵便受けに入れたり、本郷キャンパスにオフィスがある教授たちに郵送したりした。

最後には、このテーマに関心を持ちそうな幅広い層をカバーできたと思った。多くの人がこの提案を投げ出してしまおうだろうが、今後重要な役割を果たすであろう相当数の人々の間で、この提案が真の関心を集めることも確信していた。

3日目が終わるころには疲れきっていた。品川駅近くのグランドプリンスホテルに立ち寄った。グランドプリンスホテルは、私がまだ一度も訪れたことのない高層ビルである。電車から見たので、行ってみようと思ったのだ。次の駅で停車し、歩いて行った。そのような行動は、私が東京大学に在籍していた学生時代（1988年～1992年）の東京での生活と似ていないでもなかった。数冊の本と書類を持って出かけ、街を歩き回り、カフェに立ち寄っては2、3時間、時には夜遅くまで本を読んだり書き物をしたりしていた。

当時も今も、高級ホテルを見て歩くのは楽しい。今でこそ、私はそのような空間を無駄で、富のひどい集中を象徴するものとして見る傾向があるが、2000年の私はまだ世界をそのようには見ていなかった。

エレベーターで最上階に上がると、ほとんど誰もいない魅力的なバーがあった。テーブルには、デジタルリストから好きな曲を聴けるサービスがあった。私は備え付けのイヤホンでさまざまな曲を聴いた。なぜかU2の「With or Without You」という曲に衝撃を受けた。ジントニックを飲みながら、その曲を30分ほど聴いていた。その曲は、私の日本に対する複雑な感情をなぜか捉えていた。私は、かつて日本が私の人生の中でいかに中心的な存在であったかを思い出すと同時に（私は自分のキャリアのすべてを日本で過ごそうと思っていた）、どういうわけか、私は日本で成功していないことも自覚していた。私は日本文学の教授であったが、日本の学者とそれほど親密なつながりはもうなかった。私の日本語能力はアメリカ人の専門家よりも高く、日本語で修士論文を書き、日本の研究機関と密接な関係を築いてきたにもかかわらず、なぜか私は日本から遠ざかっていた。

昔の恋人、小林芳子教授と東京大学駒場キャンパスで2分間だけ会ったことも思い出した。企画書のコピーを配っているときに偶然彼女に出会ったのだ。私は彼女に企画書のコピーを渡し、少し言葉を交わした。6年ほど前、親の反対で奇妙な結末を迎えてしまった関係のことが頭に浮かんだ。また、10年前、私たちが一緒にいるところを誰に見られるか心配しながらキャンパスを歩いたことも思い出した。

そのとき私は、この旅行が日本とのより緊密な協力関係の始まりになるかもしれないと想像した。この提案について、さまざまな教員から50通ほどの熱心なメールを受け取り、ごく近い将来にビデオ会議ができるだろうと想像していた。しかし、エキサイティングな議論が何度か行われ、竹内教授から翌年は客員教授として来日するようにとの申し出があったにもかかわらず、沖縄G7会議直後の東京での最終日が、私と日本との親密な関係の終わりとなった。2003年の夏には2ヶ月間滞在したが、もう二度と住むことはないだろう。

私は飛行機に乗り、翌日シカゴに戻った。豪華なディナーに誘われたわけでも、何か賞をもらったわけでもなかったが、私が大きなき影響を与え

たことは明らかで、おそらく日本とアジア諸国との結びつきについて真剣に考え直すきっかけになっただろうと思われた。そして、米国、中国、日本、韓国の大学間で共同指導プログラムを立ち上げることに取り組めば、私のキャリアは大きく前進し、伝統的な成功への道を歩むことができる考えた。最初の部分は真実だったが、報酬に対する期待はまったく間違っていた。私の人生がこれまでと同じになることはないだろうということだけは確かだったが、米国に戻ったときの歓迎は温かくはないだろう。中国と日本がこのプロジェクトで最も困難な部分だろうと思っていたが、誰もが想像していたよりもはるかに困難だったのは自分の国だった。

## イリノイ大学への復帰

私がイリノイ大学に戻ってからの一連の奇妙な出来事は、完全に説明されたことはなく、私の家族、友人、同僚のほとんどは、それについて議論することさえ拒否した。私の肉親の場合、この20年間、2000年8月から2001年8月にかけての出来事について、私とまったく話し合おうとする人は基本的にいなかった。

起こったさまざまな出来事を説明できるふりはしない。私が観察したパターンは矛盾しており、あらゆるレベルでかなりの行き来があったことを示唆している。

たとえば、私に低レベルの嫌がらせ（パソコンが動かない、ATMでトラブルが発生した、車が故障した、所属部署で書類を紛失した）をさせるために配属された諜報部員もいたが、そのような人たちの多くは、彼らが何をしたにせよ、私の立場に同情的で、嫌がらせをする中で役に立とうとするケースもあった。たとえば、嫌がらせの中にはユーモラスなものもあり、スパムメールや郵便受けに投函された奇妙なメモ、見知ら

ぬ人による場違いとも思えるコメントなど、コミカルで舌鋒鋭いやりとりが形成されることもあった。手紙の形で私に**対する死の脅迫**、あるいはペンの側面に印刷されたものでさえ、あるときは非常に恐ろしい手紙であり、またあるときは、私がチームの一員であるかのように感じさせることを意図したユーモラスな**内輪ネタ**であった。

私が "秘密のパートナー "たちとの**経験**の中で**観察**したこの分裂は、連邦政府**内**の深い溝を反映したものであり、その結果、意味不明な矛盾した行動を引き起こした。

私がこのような長期にわたるハラスメントを受けていたという**証拠**は**圧倒的**であり、それは時に**悲惨**なものであった。しかし、物語のすべての展開が**簡単**に**説明**できるわけではない。CIA や FBI の人間が**昼夜**を問わず私を監視しているような**政治的危機**のさなかでも（私の**退屈**な生活を監視されるのは**退屈**に違いないと思い、私は彼らを**楽しませよう**と努めた）、イリノイ大学**内**の**単なる**官僚的な問題にすぎないこともあった。他の**教員**との間には、**性格**の違いに起因する問題もあったが、ほとんどの場合、東京から**戻**った後も、私と他の人々との**関係**は決して**変わ**らなかった。

シャンペーンにあるものはすべて同じに見えたが、私はもはや**単なる**日本文学の助教授ではなかった。私はアジアで、そしてアメリカ人の重要なグループの間で、**考え方**を**変**えた人物だったのだ。私が罰を受けなければならないのは、私が何か**悪**いことをしたからというよりも、**教授**という小人が政策立案の一翼を担うべきでないということを皆に証明するためであり、自分のズボンが大きくなりすぎれば、**厳**しく罰せられる可能性があるということを証明するためであった。私のケースは誰にも記事にされなかったが、**広**く知られていた。

シャンペーンに着くやいなや、私は古いアパートから、キャンパスに近い並木道にある 1920 年代の木造建築のもっと**素敵**なアパートに引っ越し作業に**専**念しなければならなかった。階建てのアパートは、私が育ったワシントン大学**の**向かいにあるパークビューの家を思い出させるような木造の**トリム**が施されていた。

引っ越しの日、私は自分のプログラムから6人の大学院生に頼んで、借りてきたバンに家具を積み込むのを手伝ってもらった。大学院生たちとの関係は良好だったが、奇妙なことに、翌日になっても私のメールや電話には誰も応答してくれなかった（もしかしたら届いていなかったのかもしれない）。すべての家具と本の箱を3階まで運び、トラックに積み込むのは私一人だった。引っ越しの最後の最後に中国人留学生が現れ、とても助けてくれた。引っ越しは疲れしました。

FBI捜査官が大学院生一人ひとりに、私の引っ越しを手伝わないように頼んでいたとは考えにくい。しかし、あまりにも奇妙な出来事だったので、私はかなり困惑し、学生たちが私のメッセージを受け取らないようにするために何らかの措置が取られたのだと、今日まで信じている（その後、何度も同じことが起こった）。

新しいアパートでの生活が落ち着くと、私は自分の提案のフォローアップのため、アジアの大学の友人たちに手紙を書き始めた。何人かの友人から丁寧な返事もらったが、アジアに行く前と比べると、アジアから私に届く手紙の量は激減していた。中国の政治はもっと敏感なのかもしれないと思ったが、日本と韓国は、まるで私のメッセージが伝わっていないのか、私が相手のメッセージを受け取っていないのか、奇妙な感じがした。

他にも、私が受けた低レベルのハラスメントと同じような奇妙な出来事がいくつかあった。

私の電話は問題なかったが、新しいアパートの長距離電話サービスが10日間ほど機能せず、何度電話しても修理の方法がないようだった。何の説明もなく1週間後に復旧した。その時も私はかなり不審に思った。

最初はただ不思議だった。私を悩ませる理由は何もないように思えた。結局のところ、私は国務省のコリア・デスクのデビッド・シアーに私のプロジェクトについて詳しく話した。何か問題があれば、人々は私のところに来て、何をすべきか、何をすべきでないかを教えてくれるようだった。

しかし、そうはいかなかった。ペンタゴンの上層部にいる派閥が、FBI や CIA の人間を私に嫌がらせをするように仕向けたのだ。彼らはこのプロジェクトが失敗するように仕向けたかったし、**独立心旺盛なことをやろうとする者は誰でも苦しむことになる**と、他の者たちにも知らしめたかったからだ。しかし、**実際にキャンパスでこの作戦を実行していたのは、私に腹を立てていた人たちではなかった**。彼らは倫理に反し、違法だと感じるようになった仕事をやっていただけなのだ。

もうひとつの事件は、ザリガニがいなくなったことだ。新しいアパートの玄関のテーブルに、**韓国**の有名な陶芸家が作った器を置いた。1997年の結婚式の引き出物としてもらったものだった。魚屋で**青い熱帯ザリガニ**を買ってきて、その鉢に入れた。ザリガニは鉢の中でとても印象的に見え、私は最高に満足していた。その2日後、ザリガニは突然姿を消した。それから1年後、大掃除をして引っ越したときでさえ、ザリガニは家のどこにもいなかった。しかも、つるつるした磁器の器から這い出てくるなんて、文字通りありえないことだった。この事件にはほとんど困惑させられたが、これも無口なパートナーとの**楽しい遊びの一環**だったのだと思うようになった。

何人かの日本の教授たちと、この提案についてかなり激しい議論を交わしたが、そのうちの何人かは非常に興味を示してくれた。また、東京大学で私のアイデアの是非について議論が交わされていることも知った。2週間ほどすると、日本からのメールは途絶え、それ以来、日本から大量のメールを受け取ることはなかった。今でも、私が知り合いに送ったメールが返ってこないことは多い。しかし、2000年の8月までは、日本の**学者たち**といろいろな話題について**活発**な議論をしていた。

それから、イリノイ大学の友人**数人**に私の旅について手紙を書き始めた。返事の**数**は少なかったが、私は皆夏休み中だったからだと考えていた。後になって、夏休みがこの奇妙な事態を**説明**しているのか疑問に思った。しかし、何人かはこの提案に興味を持ち**続**けてくれた。

アール・ケロッグ副学長に旅の成功を報告したところ、とても前向きな返事が返ってきた。ケロッグ副学長からは、次のステップについて話し合うために、全員が**戻**った8月末に**学内**でミーティングを開くよう提案

された。もう一人の強力なサポーター、ブルース・ヴォジャック工学部副学部長ともやりとりを重ね、翌週のミーティングを設定した。

アジア滞在中の2000年7月5日付の『デイリー・イリニ』紙に掲載された私の東アジア旅行に関する奇妙な記事のことを知ったのは、私をサポートしてくれている教員の一人からのメールのやりとりの中からだった。その記事の私の部分は非常に肯定的なものだったが、私の部門長であるジェリー・パッカードへのインタビューは、びっくりするほど否定的なものだった。

「パストリーヒは東アジアの大学の管理職と話をするだけだ。彼は大学の正式な代表者ではない」とEALCのジェリー・パッカード代表は語った。

「私たちは彼に、かかとを冷やし、理路整然と物事を進めるように言ったが、彼はそうしないことを選んだ」とパッカードは言う。

EALCはパストリーヒの旅費を一切出していない。代表者によれば、大学の管理職はパストリッチの計画に「賛同するかどうか決めていない」という。パストリッチは他の部局にも連絡を取ったというが、パッカードはパストリッチが旅費の大部分を自腹で払っていると思うと述べた。

必要な技術はすでにほぼ整っているが、まだ大きな課題がある。もしパストリッチが大学のサポートを得ることが困難だと感じているなら、海外ではさらに大きな困難に直面するかもしれない。

「お役所仕事との付き合い方について話そう。何かを押し通すのは難しいと思うかもしれないが、中国に比べれば比較的簡単だ」とパッカードは言う。「中国でのお役所仕事は、もっと複雑だ。特にあなたが部外者である場合、それは非常に困難である。

ジェリーは私がイリノイ大学に入学したときからの親友だった。彼が学部長からプレッシャーを受けていたかもしれないことは確かに理解できた。しかし、たとえそうだとしても、わざわざ公の場で私の旅について否定的に語るというのは奇妙なことであり、彼にとってはかなりのダメージになるだろう。結局のところ、私は**学内**の12の部局から支持を得ていたし、大学の改善に**献身**する若い**教員**としてかなり**人気**があった。ジェリーらしくないし、**不誠実**にも思えた。人気のあるプロジェクトで、**全学的**に幅広い支持を得ている自分の**学部**の後輩と**対立**するというのは、政治的に理解しがたいことのように思えた。ジェリーは私にあのような**対応**をせざるを得なかったのだと、今は思う。

数日後、工学部のブルース・ヴォジャック副学部長と**会**ったとき、彼もまたジェリーが公の場でこのような**発言**をしたことに驚きを隠せなかった。私はその時点で、彼がこのような**発言**をせざるを得なかったのは、明らかに**学内**（そしておそらく**学外**）の深い政治的分裂があったからだと判断した。しかし、デリア学部長の政治を知る限り、それは大きな間違いであり、あまり意味のないことのように思えた。いずれにせよ、私はこの件に関する議論を控え、次の**教授会**まで待つことにした。その**学期**に**教授会**が開かれることはなかった。

LAS 学部長室の秘書の一人とのやりとりは、2000年9月に私が**経験**した典型的なケースだった。**帰国**後すぐに彼女に手紙を書き、私の成功について話した。彼女はかなり積極的に私の努力をサポートしてくれたが、何の**反応**もなかった。**数週間**後、ホールで彼女を見かけたとき、挨拶はしたが、非常に奇妙な態度で私を避けた。私が見た限りでは、喧嘩や問題はなかった。

月初旬、私はチャールズ・スチュワート副学部長から親しげなメールを受け取った。私が到着すると、スチュワートは愛想よく迎えてくれ、いつもと**変わらない**様子だった。そしてデリア学部長からの手紙を渡され、私の努力に感謝し、その時点から東アジアとの交流はすべて学部長室が担当することになり、私にはそれ以上の責任はないので、**教育と研究**に全力を注ぐようにと言われた。

スチュワートは私にこの手紙を**説明**しようともせず、「これからは私たちが何とかします。



当初からこのプロジェクトに熱心で、私がずっと**気**に入っていたスチュワートに**挑戦する気**にはなれなかった。**実際**、彼は極めて政治的な副学部長ではあったが、私はこの件が彼と**関係**があるとは考えたこともなかった。

その手紙は信じられないものだった。私は、**学部長**が**助教授**としての私の行動について、何をすべきか、何をすべきでないかを指示する**権限**はないことをよく知っていた。**学部長**が好むと好まざるとにかかわらず、私は自分の考えを主張する自由があった。もちろん、プログラムの大きな合意には**学部長**の責任があったが、インターネットを使った授業をここかしこで**教える**ことは、**学部長**の助けなしに私にもできることだったし、その提案はすでにイリノイ大学の他のユニットで取り上げられていた。

その後、**大学**のあるべき理想と**実際**の姿との間にどれほど大きな隔たりがあるのかを、私ははるかによく理解するようになった。

この手紙は、**学部長**が私に渡すにはかなり**危険**なものであることは明らかだった。**学長**を訴えることができ、**学長**が**職**を失う可能性もある。工学部のハリ－・ヒルトンも、この見方を認めてくれた。

私は、**デリア学部長**は政治的なバカであり、**学内**の他の人々がいずれ彼を**正気**に戻すだろうという結論に達した。**実際**、彼はこの件をすべて水に流したかったに違いないが、その**選択肢**はなかった。

また、8月末には日本からいくつかの重要なメールが届いた。ひとつは、**東京大学**に**留学**していた最後の年に**大変**お世話になった**佐藤博昭教授**（英文学）からの手紙である。もし私が日本に**残**っていたら、かなり親しくなっていたかもしれない。その通り、私たちは頻繁に文通をしていた。彼は早くから私の提案にとっても協力的だった。**高田康成教授**が、私が**東京大学**の新しい方向性を提案したメールに大きな苛立ちを示していたことを**説明**してくれた。**高田教授**や他の**上級教授**たちにとって一番の問題は、**東大**はとても**権威**のある**大学**であり、**ソウル大学**、**北京大学**、**イリノイ大学**を**パートナー**にすることを示唆するのは、卑屈なことだと彼は**説明**した。もし何かするとしたら、**ハーバード大学**か**ケンブリッジ大学**だろう。

そのメールは、私の提案の話題が大学内で広く議論され（たとえ誰も私に連絡しなかったとしても）、かなりの反対派とかなりの賛成派の両方がいたことを示唆していた。その数通のメール以上に、その議論について私は何も知らなかったばかりか、この18年間、私の提案について日本の教員から言及されたことは一度もない。文字通り、何事もなかったかのである。そのため、日本で何が話し合われたのか、これ以上詳しく説明することはできない。

東大の200人ほどの教授に手紙を出したのは、自分の範囲を超えた提案だったことはすぐに認める。しかし、私はそれほどの熱意を持っていたし、当初の反応はかなり好意的だった。アジアへの旅の記述には、私ができないことを示唆するものは何もなかった。実際、私はそのような不明瞭な形で話し合いのために派遣されたため、私の提唱に明確なルールはなかった。どちらかといえば、私がいっしょに努力しなければ、将来イリノイ大学が協定から外されるかもしれないという懸念の方が強かった。

いずれにせよ、私は自分の行動の責任を取り、効果的な方法で緊密な関係を促進するために最善を尽くすことを約束し、時間をかけて入念な手紙を書いた。その手紙を高田に郵送し、メールでもコピーを送った。彼からの返事はなかったが、受け取ったことは間違いない。私たちは2015年にキョンヒ大学のイベントで韓国で再会する機会があった。私たちは楽しい会話を交わし、東京で会うことを約束した。

また、1991年に授業を受けたことのある日本文学の信弘教授からも連絡があった。信弘教授もまた、インターネット教育の提案について高田教授に連絡するよう促してくれた。彼は、私のしたことが決して間違っているとは言わなかったが、むしろ管理者としての高田の感受性を理解する必要があると強調した。今さらながら、私は田中が生贄の子羊だったのでないかと思った。彼は私の提案について私に腹を立てる正当な理由はなかったし、イリノイ大学のチャールズ・スチュワートと同様、協力的であった。問題は、この交流強化のプロセスを阻止しようとする権力者たちが、自分たちの正体を知られなくなかったため、特定の教授たちに圧力をかけ、陥れようとしたことだ。

東京大学のもう一人の教授、日本史が専門の三谷博教授から詳細な手紙を受け取った。三谷教授は、私の提案について長々と書いてくださり、

移植に関わる官僚的な問題について議論して下さった。知的歴史に関する問題についても話し合った。彼は、このプロジェクトに関わる時間はないが、成功することを願っていると一言してくれた。

最後に、東京大学の伊東 乾教授から長文のメモをいただいた。伊東 乾氏は作曲家、指揮者、文化研究者であり、物理学とコンピュータ・サイエンスの確かなバックグラウンドも持っている。伊東先生は、私の提案とまったく同じ時期に東京大学で発足した革新的な学術プログラム「情報学環・学際情報学府」の中心人物である。

私は旅行の準備段階からこの構想について知っていたし、関係するすべての教員に手紙を書いて協力を申し出ていた。伊藤教授は最も興味をそそられ、長々と手紙を書いてきた。

彼のメールからは、東大の高官や教授の間で繰り広げられた私の提案をめぐる論争について、彼がすでに耳にしていたことがうかがえた。彼は、この提案には本当にメリットがあると判断し、公然と支持すると私に言った。

伊藤は非常に思慮深い読者であり、彼の指摘や提案のひとつひとつにかなりの洞察力が感じられた。私たちは複数のトピックについて長い間メールのやりとりをした。彼は、私たちがどう進むべきかについて提案を出した。

2週間にわたる激しいやり取りの後、彼からの連絡は途絶えた。彼が話し合いに応じない理由があったのか、私に届かないメールがあったのかはわからない。私は彼に電話するつもりだったが、他の問題に圧倒され、その機会は無かった。

その2年後、私は東京に短期間行くことができ、秋葉原の近くで伊藤教授と昼食を共にした。私たちは歴史、文学、音楽について話し、教授の授業について教えてもらった。彼は私のプロジェクトについては一言も触れなかった。実際、2000年10月以来、日本人が私に、あるいは公の場で私のプロジェクトについて言及したことはない。

また、9月にはソウル大学の**会**ったこともない**教授**から奇妙なメールが届いた。**実**は、そのメールは私宛のものではなかった。そうではなく、ソウル大学と北京大学の間で開催されるビデオ**会議**への招待の一部として、何人かのCCの一人として私が含まれていたのだ。私はこのチャンスに興奮し、すぐに返事を書いた。しかし奇妙なことに、その**教授**は私の依頼に対して「申し訳ありません。そのメールはあなたに送るはずではなかったのです」。

言うまでもなく、これは**単**に奇妙なことだった。この2つの大学は、私の提案のアイデアを進めながら、それを私に**秘密**にしていたのだ。そしてその最中に、私にわかるようにわざとリークしたのだ。私はこのメールをどう受け取ればいいのかわからなかったが、何か腑に落ちないものがあった。このプログラムがそれほど**価値**のあるものだとしたら、それを**意図的**に無視することは私の大学にとってかなりの損失であり、私を**意図的**に疎外したことは管理者にとってかなりの責任である。しかし、私はこの**経験**を通して、十分に高いレベルで行われたいくつかの行動は、基本的に無期限に**秘密**にしておくことができるということを**学**ぶだろう。

また、インターネットと**教育**に関する日韓の新聞記事には、私の**当初**の提案を直接示唆するものが**数**多くあった。3校間のより緊密な**学術交流**や、インターネットを利用した**学習**プログラムの提案である。すべての記事を保存したわけではないが、私の提案に最も近いと思われる記事をいくつかクリップした。

何人かの**教授**が私を強く支持してくれて、私が次に何をすべきかを何時間もかけて提案してくれた。彼らの努力があったからこそ、私は**深謀遠慮説**の**検討**を先延ばしにすることができた。私のためにそのような努力をしてくれる**教授**がいることは、あまりに意味がなかったからだ。ハリー・ヒルトンは航空工学の**教授**で、大学がアイデアを**発表**する場であることを強く信じていた。彼はまた、貴重なアイデアを持つ有能な若手教員として、私を保護する必要があると感じていた（**実際**には、イリノイ大学の改善について私が持っていたアイデアはひとつに過ぎず、彼は私の努力を十分に承知していた）。

それにもかかわらず、彼は私を事務方の誰とも**会**わせず、問題を解決しようとしなかったのは奇妙だった。また、私が**数**日のうちにアジアへの渡航資金を調達できたにもかかわらず、それ以後、彼は私にわずかな資金援助さえ見つけることができなかった。この話を振り返ってみると、ヒルトンもまた、この**写**真には何か重大な間違いがあると、あるレベルで**気**づいていたように感じる。

アジアでの、そしてイリノイ大学での出来事が展開する過程全体が、私を深く**混**乱させた。**数**週間は身を潜めようとしたが、同僚たちは意**図**的に私を無視し、**学**部事務局長は突然無愛想になった。それでも私は、この**状**況を何とかしたいと感じた。私は大学の仕組みについて十分知っていたので、私の弱小部署と怠慢な**学**部長が、私に**対**して何カ月にもわたる複雑な陰謀を**実**行することは不可能だとわかっていた。何か他のことが起こっているはずだった。

私と妻が同僚のラニア・ハンティントン宅での夕食**会**に招待されたのは9月初旬のことだった。ラニアはハーバード大学時代の同級生で、私はこの部門の誰よりも彼女のことを知っていた。彼女の夫でインド系アメリカ人のディペッシュ・ナヴサリアは**医**学の知識があり、私たちは彼らと社交的に**会**うことが多かった。その夜、私たちは彼らのビクトリア様式の豪邸を訪れ、**広**大なディナーを**楽**しんだ。夕食後、ディペッシュは私が部長と抱えていた問題について話し始めた。しかし彼は、なぜそのような問題が起きたのかについて議論したり、どうすれば部長と関わって問題を解決できるのかについて提案したりするのではなく、私に心理的な助けを求める必要があると言った。

もちろん、セラピストを探すことに問題はないし、以前もそうしてきた。しかし、このコメントは**実**に奇妙で、著しく不適切だと私には感じられた。私が落ち**込**んでいるとか、過度に怒っているとか、そんなことはどこにも感じられなかった。むしろ彼は、**実**際の**状**況をまったく考慮することなく、私がセラピーを受けることが唯一の解決策であると示唆したのだ。このときラニアは非常に緊張した**様**子で、完全に沈黙していた。あまりに奇妙な**会**話だったので、ディペッシュが第三者によって私にあのような**発**言をするように仕向けられたとしか**説**明できない。彼らしくない**発**言だった。

翌日の午後9時頃、私はもう一人の同僚、ナンシー・アベルマンの家に立ち寄った。ナンシーもハーバード大学に留学したことがあり、私の学部では新進**気鋭**の教授とみなされていた。学生たちから非常に**人気**があり、有能な作家でもあった。彼女は、私のアジア旅行の成功が、突然、私の**学部**の上級教授陣が私に**会**いたくもないという結果を招いた**実際**の過程については、何も語ろうとしなかった。彼女が言ったのは、もし私が望めば、弁護士を雇うことができるということだった。この**発言**は、問題の回避に似ているように思えた。私が望んでいたのは、他の**教員**と話し合っ、何が問題なのかを確認することだった。しかし、誰も解決策を探そうとはしなかった。

2000年の秋は、私が高等**研究センター**から助成金をもらっていたため、**教職**を離れていた**学期**だった。しかも、**神経学**の**専門家**であるビル・グリーンノフが高等**研究センター**の所長であり、私たちは**当初**から非常に**意気投合**していた。**学期**は本の原稿を書き、もちろん**ビデオ会議**も試してみるつもりだった。私はその**学期**の資金をイリノイ大学に申請した。何人かの人たちから、もし私が高等**研究センター**で**学期**を受けることになれば、資金援助は保証されていると聞いていたのだ。言うまでもないが、私は何ももらえなかった。

とはいえ、私は部署から離れて自分のオフィスを持っていた。そこには詩人もいて、何度も**楽しい話**をした。しかし、**強烈**に**敵対的**な環境と、さまざまな嫌がらせに**対応**するよう常に**プレッシャー**をかけられたせいで、本の原稿はほとんど進まなかった。

2000年9月中旬、父は私をサンフランシスコに招待した。アッシュベリーの自宅に着くと、父は私に、カリフォルニア大学サンフランシスコ校メディカルセンターでセラピストの診察を受ける予約を入れたと言った。この訪問は、私が最近**脳**の手術を受けたことを考慮し、父に**勧め**られたものだった。私は喜んで父と一緒にそのセラピストに**会**いに行った。

1999年7月、私は右側頭葉の良性腫瘍の手術を受けた。手術はUCSFで行われ、有名な**脳外科医**であるミッチェル・バーガーが執刀した。手術は大成功で、私は翌日退院した。しかし、手術に副作用がなかったわ

けではない。その後数カ月間、軽い発作に悩まされ、薬を飲んだ。さらに、その後数年間、私のエネルギーレベルはかなり低いままだった。

UCSF に到着したときの出来事にはちょっと驚いた。ドクター・バーガーにも神経科医にも会わなかった。脳手術からの回復について質問されることもなかった。むしろ、父が心理学者との面談を予約してくれていたのだ。私は彼と30分ほど話した。私は自分の人生、結婚生活、キャリアにおけるさまざまな出来事について話した。その後、奇妙な理由で、セラピストは父と別々に会うことを求めた。私はこれに反対しなかった。

この出来事について深く考えたのは、ずっと後になってからだった。しかし、記憶に残っているシーンがある。帰りの車の中で、父がふと私に言ったのだ。「先生は、"人間は頭が良すぎて、異常を発見するのが難しいことがある"と言っていたよ」。その瞬間、私はこの言葉を何とも思わなかった。しかし、医師は私に何も言わなかったし、父もその会話について何も明かしていないにもかかわらず、私が何らかの精神状態に苦しんでいることについて、何らかの形で父に言ったことを示唆しているように思われた。

私の父であるピーター・パストリーヒは2000年9月、親友であるUCSF 副学長のザック・ホールと私の病状について話した。

私はザック・ホールとも高校時代からの知り合いであり、彼の息子と2番目の妻も知っていた。ザックは父に、ザックの親友で同じ神経科医でもある私の上司ビル・グリーンフによると、私の部長に対する態度はかなり不合理で、私が精神疾患を患っているに違いない、おそらく最近の脳手術が原因だろう、と話していた。父は、この情報を私に話したり、私の言い分を聞いたりするよりも、この会話とセラピストに会いに行った理由全体を私に秘密にした。その日から父は犯罪的陰謀に手を染め始めたのだが、自分の行動がどれほど重大な意味を持つのか、父はあるレベルで気づいていなかったのだろうか。

父はその後、2001年1月にサンフランシスコで開かれた会議でグリーンフに会った。グリーンフは私の精神状態を深く憂慮し、私が職を失うことを恐れていることを示唆した。父はこの出会いに深く心を揺さぶられ、

私が精神病に苦しんでいることを多くの家族や友人に話し続けた。父はこの面会を私にも完全に秘密にし、私が精神病に苦しんでいると考えていることはもちろん、その理由も言わなかった。

2001年2月までに、多くの家族は私の言うことをすべて否定するようになった。なぜなら、私が精神疾患を患っていることは、観察された行動ではなく、すべてグリノフが話したことに基づいていることが、家族には広く知られていたからだ。

2000年9月の時点でも、父はイリノイ大学での問題は私の精神的な問題によるものだと考えていた。父は、私がどうすべきかについて何の提案もしなかったし、法的なアドバイスもしなかった。どの時点で家族全員が私の精神病のことを耳にしたのかはわからないが、私がどうすべきかについて家族から文字通り何の助言も受けなかったことは確かである。

この家族の私に対する態度の変化は理解できなかった。私は子供の頃から、現実的な問題については家族の助言を頼りにしていた。父はおしゃべりが大好きで、私たちの会話のほとんどは、職場で困難に直面したときにどう対応すべきかについてだった。過去には政治的なアドバイスもよくしてくれた。今回の圧倒的な沈黙は私にとって衝撃的だった。しかし、そのような行為は極めて非倫理的かつ違法であり、必ず発覚するものであるため、私はその可能性を否定した。

9月の終わりには、イリノイ大学の環境に苛立ち、外に出たいと思うようになっていた。学内には、コーヒーを飲みに来てくれる友人も何人かいたが、基本的に私は誰からも孤立していた。私の部署のメンバーは皆、私のメールに返信したり、ホールで話しかけたりするのを避けていた。誰ひとりとして、何が起こったのかを聞こうともせず、私が何をすべきなのかアドバイスしようとしなかった。私の熱狂的なサポーターの中にも、今は私と話すことを拒否している人がたくさんいた。

10月1日頃、チャールズ・スチュワート副学部長に、まだ受け取っていないLASからのアジアへの旅費について手紙を書いたのはこの時だった。スチュワートは、そのような契約をした覚えはないと短いメール



を返してきた。私は彼に、他で資金を探すことを示唆する当たり障りのないメモを返した。

でも、私は怒っていた。学部長は私に旅費を自腹で払えと言ってきたのだ。でも、なぜ私がお金を要求したかというと、学長が私の大学に資金を求めるように手紙の中で明言していたからだ。そうでなければ、大学に何も頼まなくても、旅行のための十分な資金を簡単に調達できたはずだ。

この突然の方向転換の原因は、副学部長からこのプロジェクトは大学に引き継がれると通達された後も、私が学内の人々と会い、インターネット指導プロジェクトについて議論し続けていたことにあったようだ。しかし私は、大学が教員に何をすべきか、何をすべきでないかを指示する権限はないことをよく知っていた。私はこの仕打ちに腹を立てたが、おそらくチャールズ・スチュワートは自分の権限がないことを十分承知しており、指示された命令に従ったのだろう。彼はいつも非常に協力的で、私にそのような態度をとる理由はなかった。

私は憤慨し、学内の支援者たちにメールを送り、私の旅がいかに成功したかを説明し、大学全体から資金援助を受けているにもかかわらず、自分の学部や単科大学からは一銭も援助を受けていないことを説明した。最終的に100通ほど送ったが、十分な効果があった。ジェリー・パッカーからは、彼のメールボックスが敵対的なEメールで溢れかえっているという話を聞いた。

私はそれを続けたが、次第に状況はまったく意味をなさなくなっていく。私の学部長はそれほど強力ではなかったし、私にはキャンパス全体の後ろ盾があった。通常であれば、何らかの妥協がなされ、前進するはずだった。しかし学部長は、私が学部長への圧力を強めても、私のプロジェクトに関連したことをひとつもさせてくれなかった。私は、学外の誰ともこの問題について話さないようにし、学内でもごく限られた人たちとしか話さないようにした。解決策は簡単だったが、私の学部長と学科は行動できなかった。彼らは機密扱いの勧告を受け、このような行動を取らざるを得なかったのだと思う。

私は9月にジェリー・パッカーから電子メールを受け取った（全教員に送られた）。前部長のロン・トビーが学部長と親密な関係にあったことを考えると、これもあまり意味のないことだった。私のプロジェクトに反対したのは、学部長側が私たちの学部への資金を削減するという密かな脅しの結果であるかのようにだった（これは証明できなかった）。

パッカーからそのメールを受け取った2日後、チャールズ・スチュワートから受け取ったメモの5日後、私はこの件についてアール・ケログ副学長にメールを書いた。私は、彼に、よくできた思慮深い人物として、解決策を考えてほしいと訴えた。私は率直に、学部長のこの行為は明らかに復讐の一種のように見えたと書いた。

アール・ケログの反応には衝撃を受けた。

彼は非常に形式的なEメールを返信してきた。"あなたがおっしゃったことはデリケートなことなので、所属長か副学部長にのみお伝えください"と書かれていた。口調も内容もまったく常軌を逸していた。この手紙は、弁護士でリチャード・ハーマン学長顧問のティナ・ゴンザレスが書いたものだと後で知ることになる。メールのブラインドコピーは、私のジェリー・パッカーと副学部長のチャールズ・スチュワートにも送られていた。事実上、この手紙は、私が学長室に話をしたことを、私に隠れて学長に知らせることを意図していた。後に私はこの件を問題にし、ケログは12月にブラインドコピーを送ったことを認めることになる。

このとき私は、デリア学部長には容赦しないと決めた。彼は学部長として複数の汚職行為に手を染め、私に対しても違法な一連の行為に及んだ。それは大学がどのように機能するかについての、私のかなりナイーブな思い込みだった。

現実がどうであれ、その時点では反撃するしかないと思った。この腐敗した勢力は、私を孤立させ、イリノイ大学をはるかに超えた世界的な意義があると私が考えていたプロジェクトを破壊するためにあらゆることをしていた。私は自分のキャリアを左右するようなものを手放すつもりはなかった。

また、キャンパスには私を支持してくれる人が大勢いることも感じていた。何しろ、LASとサイエンスの協力を奨励し、若手教員の政策への貢献を奨励し、東アジア研究へのコミットメントを高めるための新プログラムが学内各所で発表されていたのだ。私に対するものではないにせよ、このような私のアイデアに対する支援の多くは、私とは距離を置いていたものの、当初から明らかに私を支持していた学長によるものだったのではないかと思う。また、私の研究に強い関心を示していた、私の知らない学外の他の勢力からの支援であった可能性もある。

また、人類学のジョン・リー教授から受け取ったメールを100人ほどの教員に転送してしまったのも失敗だった。そのメールには、デリアはとても無能だから、私からの提案には当然反対するだろうと示唆する内容が書かれていた。ジョンは、個人的なものだと思われるメールを共有した私にかなり怒っていた。彼は、私たちの友情はこれで終わりだと言ったが、後に私たちはその件について話し合い、私は後にジョンに謝罪した。私たちは後日、10年ほど経って私が韓国にいたときに再会する機会を持つことになる。

父は9月末にフランスの自宅での休暇に出発しようとしていた。私の仕事にまつわるストレスについて何度か話したことがあり、アドバイスや助け舟は出さなかったが、漠然と私のことを心配してくれていた。妻のスウンを連れてフランスに遊びに来ないかと誘われ、翌週の出発を快諾した。せっかく仕事をしたのに、所属部署からそのような扱いを受けるのは、私にとってはかなり辛いことだった。

出発の前日、私はジェリー・パッカーに最後のメールを書き、副部長のデビッド・グッドマンに送った。その時点で、そのリストはかなり破滅的なものだった。私は、学部長が辞任に追い込まれかねないこの情報が公になるくらいなら、くだらないビデオ会議を数回やるだけで許してくれるだろうと確信していた。私は完全に間違っていた。

翌日、私たちはフランスに向けて出発した。空港に向かう直前、デビッド・グッドマン副代表に出くわした。彼は、事態の深刻さを十分承知しているかのように、かなり中立的な口調で「メールは受け取ったよ」と言った。帰国したら電話すると伝えた。

フランスへの旅はリラックスできるものではなかったが、職場にいるよりはマシだった。大学で私に起こったことにまったく**関心**を示さない父に、私は少し**ショック**を受けた。結局のところ、私は父の冗談を**楽しみ**ながら育ってきたし、**交響楽団**で**気難しい**人たち（特に有名なのはブレイトン・ウィルバー**会長**）にどう**対処**したかを聞いてきた。父は、私がリラックスしてそのことを忘れるべきだと言うだけだった。まったく父らしくなかった。

イリノイ大学に戻ってみると、何も**変わって**いなかった。部長は私の最後のメールに返信しようとせず、私は**部内**の誰からもまったくメールを受け取っていなかった。

工学部の最大の支援者であるハリー・ヒルトン、高等**研究センター**の指導教官であるビル・グリーンフ（および彼の助手である入江真澄（入江昭ハーバード大学**経済学部**教授の娘））、そしてオンブズマン事務所のジャクリーン・ボウマンである。

ジャクリーヌは唯一、**真摯**な態度で私の話**に耳を傾けて**くれた。彼女は即座に、この**写真**には何か**重大な問題**があることを理解し、何度も**面会**の手配をしてくれた。チャールズ・スチュワートとの**面会**は成功した。また、彼女は**周囲**に尋ね、私との交流を控えるようにとの**社内**メモが出されていることを突き止めることができた。明確な忠告であった。彼女はコピーを入手できなかったが、そのような文書が存在することは公然の秘密であった。

私はジャクリーンの手腕に深い感銘を受け、私の懸念の多くについて彼女に手紙を書いた。しかし、ビル・グリーンフのように、アソシエイト・プロボストに相当する立場で解決策を講じる**権限**が彼女にはないことは明らかだった。

ハリー・ヒルトンは、私がいろいろな**教授陣**に何を言うべきか、的確なアドバイスを**与え続け**てくれたが、私が提唱していることを明らかに評価していたにもかかわらず、最初の1ヵ月を過ぎると、彼は**面会**を手配しようとしなくなった。状況はますます**厳しく**なった。

もっと複雑な関係だったのは、ビル・グリーンノフとの関係だ。もちろん、当時は彼が父と密かに交流していたことなど何も知らなかった。

彼の性格は少々トゲトゲしかったが、私は最初から彼と仲良くしていた。そして私たちは神経学や科学に関して何度もメールを交換した。インターネットについての私の考えや、教育への影響についても話し合った。ビルはわざわざ私をサポートしてくれたが、私のケースについてどうするつもりなのか、あまり打ち明けることはなかった。彼は私に同意するとは決して言わなかったが、私のケースに時間を割いてくれたことから、彼がかなり共感してくれていることはわかった。彼は以前、自分の仕事の価値を他の教授陣が認めなかったため、職を解かれたことがあった。

グリーンノフとの何度もの会話は、途方もない時間の無駄のように感じ始めた。しかし、私が自分の仕事についてアール・ケロッグに送ったメール（学部長の行動について伝えた）について彼に話したとき、私たちは突破口を開いた。この話は以前彼には隠していたのだが、彼は気分を害したようだった。彼は自分のオフィスに戻り、数時間以内にアール・ケロッグからその奇妙なメールのブラインドコピーについて知らせるメモを受け取った。

グリーンノフ学部長が私に何も告げずに私の父と倫理に反する深い会話をしたことを考えれば、なぜ私の学部長がしたことにあれほど腹を立てることができたのかと思うかもしれない。私にはわからないが、イリノイ大学の私に関する機密勧告を受けた職員は皆、私との正常な関係を維持しようとし、同時にある種の不測の事態に対する規則を守ろうとしたのだろう。その結果、非常に混乱した出来事が起こった。

それが私の望みだった。私はすぐに、自分の部署について文句を言った覚えのある全員に手紙を書き、自分の未熟な振る舞いを詫びた。プロジェクトに興味があるなら、チャールズ・スチュワートに直接連絡するようにと伝えた。

結局、ビル・グリーンノフはチャールズ・スチュワートから、私の仕事に関する今後の話し合いについて、比較的前向きな返事をもらった。

チャールズ・スチュワートは12月に、次の学期にインターネットを使った共同指導の提案をどのように進められるか、喜んで調査したいと親切な手紙をくれた。私たちは冬休み前にコーヒーを飲みに行き、私たちの仕事についてとても親しく話をした。私はイリノイ大学で管理職のキャリアを追求することに興味があると話したが、彼は私がイリノイ大学に深い関心を持っていることに感動しているようだった。チャールズがとった不愉快な行動に対して、私は彼に敵意を抱くことはなかった。

ジェリー・パッカードとも先週ランチをした。彼はとてもフレンドリーで、移籍をととても喜んでいようだった。次の学期の私の仕事について話し合ったが、彼は私が戻ってくることを待ち望んでいるようだった。別れる前に、私は9月に書いた、球団が私に対して行った8つの違法行為を列挙した手紙を破棄したことを彼に話した。彼はあっけらかんと答えた。私は一瞬、万事休すかと思った。

問題は私の学部にも、学長室にもなかった。この時期、米国は急速に変化していた。10月、ジョージ・W・ブッシュのコンサルタント、カール・ローブが、ブッシュのライバル、ジョン・マケインに対して、捕虜としての経験から精神を病んでいると非難するキャンペーンを展開した。このキャンペーンは、私も精神的に病んでいると主張する私に対するキャンペーンと関係があったかもしれない。

ジョージ・W・ブッシュ周辺の勢力が、政治的圧力と武力による威嚇を利用してフロリダ州の選挙を封じ込め、実質的にクーデターを起こしたときに、それは頭角を現した。ブッシュ一族や、ブッシュによる買収で利益を得ようとする他の派閥に連なる大勢の軍部や諜報部員が、選挙に絡む不正についての真剣な議論をすべて封じるために、資金と腕力を使った。ブッシュは企業メディアによって勝利者と宣言された。最高裁がアル・ゴアに不利な判決を下し、選挙の再集計が違法に中止された。ゴアはヨーロッパで6ヶ月の休暇を余儀なくされた。

この国は非常にピリピリした雰囲気にも包まれた。私の周りの教授たちは、ただバカを演じることに終始した。誰も前例のないことが起こっていることを認めたくなかったのだ。

しかし、反対派を封じるために諜報機関が自国で働く権限を増やしたことは、予期せぬ結果をもたらした。ブッシュ政権樹立の混乱の中で、軍部と諜報部の中でブッシュの乗っ取りに反対する派閥が勢力を伸ばしたのである。

私は1月、所属部署の初会合に出席した。すべてがスムーズに進んだ。もちろん、完全に安心したわけではなかったが、私は自分の提案について再び言及するのを待つことにした。

私は自分の部署に全く馴染めず、また2人の学生アシスタントに仕事を手伝ってもらったが、奇妙なことに彼らは全く何もしてくれなかった。私はまだ何か問題があると感じ、彼らに何かを頼むことはしなかった。私はまたもや、問題は私の部署よりもずっと大きなところにあるのだという考えに立ち戻った。

2月初旬のある晩、私はビル・グリノフから奇妙なメモを受け取った。その不可解なメールには、「あなたの最近のメールは、あなたのケースを助けるものではない。

グリノフは詳しく説明しなかった。しかし私は、彼がどのメールのことを指しているのか知っているかと確信していた。私は、東アジアにいる10人ほどの友人に、フロリダ州の選挙が閉鎖された違法な方法について述べた記事のリンクを転送し、これらの違法行為についての議論を抑圧する陰謀について説明した。このEメールには、明らかにアジアに漏れるはずのない情報も含まれていた。私を担当するFBI/CIAのユニットがこの件について報告し、グリノフが今度は私を止めるように命じたのだと思う。

私はそのような背景をまったく知らなかった。私にとっては、大学から要求されたことをすべてやり遂げ、私に対するさまざまな違法行為に関する裁判を投げ出した後、突然ビルが政治のことを私に話すのが自分の仕事だと考えたように見えた。

私は彼がいかに役立たずだと思ったかを、言葉を濁すことなく伝えた。いかに彼が私の時間を無駄にし、約束を守らなかったかを説明した。その日の夜、私はフォローアップのメールを送り、彼からの援助はもういないことを伝えた。彼は最後にこう返事を書いた。明らかに、何か月も何か月も経って、すべてのプロセスが皆に負担をかけていた。彼は明らかに自分の行動の重大さを理解していたため（そしてまた、私よりも私の状況の重大さを理解していたため）、私の他のメールに返信しようとしなかった。

翌朝、以前から約束していたミーティングのためにビルに会った。前夜の電子メールのやりとりには一切触れず、和やかな会話を交わした。会話の最後に、彼は「学長ができる決定がある。彼が実権を握っているんだ」。

このコメントは私の注意を引いた。私は学長室をよく知っていたし、学長にそのような権限がないことも知っていた。ビルはリチャード・ハーマン学長のことを言ったのではない。彼は、政治的な領域でより強力な人物について斜めに言及しているようだった。彼のメッセージは紛れもないものだった。



その会話に続いて、その後数日間、奇妙な会話がいくつも続いた。日後、教育学部に勤める友人と会い、挨拶を交わした。彼は私を見て、"君がまだ笑っているのに驚いたよ"と言った。その発言は、私が置かれている状況は深刻で、不安でいっぱいなはずだということを暗に示していた。

その週の大学のレセプションで、法学部時代の親友フィリップ・マコノネイにも会った。彼は私を見るなり、"敵が何千人もいるエマニュエルがここにいる"と言った。このコメントは異様だった。学部長との問題が絶頂にあったときでさえ、実際に起こったことの詳細を知る人はほんの一握りだった。エマニュエルは、アジアに新しい開放的な環境を作り、中国を取り込もうとする私の努力を憎み、そのためにミサイル防衛やその他のプロジェクトの予算を脅かす軍部や諜報部の人々のことを指していたのだと思う。

このような会話と、ほとんど面識のない管理職たちが私に敵対的な態度で接してきたことが相まって、イリノイ大学、そしてアメリカの状況は非常に深刻であり、私はただ身を潜めて自分の仕事をすべきであると確信した。私のプロジェクトには、そのために世間を敵に回さなければならないほど重大なものはなかった。私は自分の意志で主張した。法の支配を提唱することはあっても、テレビ会議と教育を再び持ち出すことはないだろう。

他の教員による奇妙なヒントは、あまりにも完璧にコーディネートされているように思えた。また、私が目にするように特定のポスターが貼られることも何度もあった。脅すようなものもあれば、励ますようなものもあった。

私のメールが読まれていることは次第に明白になっていった。私に割り当てられた CIA/NSA のチームは、ますますずさんになっていった。長い間、私がされていることを間近で見てきた彼らが、ある種の同情を示すために、わざとそうしたのだと思う。一日のうちに起こった出来事が、私が前夜に書いたメールに関連していることが明らかになったことが何度かあった。

例えば、チャールズ・スチュワートに私のメールが読まれていることを示唆する手紙を書いたところ、翌朝、ログオンできないトラブルが発生した。その状況は8時間ほど続いた。奇妙なスパムメールも届いた。しかし、明らかに敵意を持った行動もあったが、私に割り当てられた人たちは敵意を抱いているようには見えなかった。どちらかといえば、彼らはますます遊び心を持っていた。チャールズ・スチュワートに宛てた私の手紙も、次第に彼らに向けられるようになった。私は彼らに合わせて冗談を言ったり、彼ら宛てのメールを自分宛に送ったりして遊んだ。

そして運命の瞬間が訪れた。私は中国語で、インターネットを利用した教育の可能性と、それが人類にもたらすポジティブな影響についてのビジョンを書いた。その記事には、アメリカは中国、日本、韓国と協力し、アジアに共同体を設立すべきだという主張も含まれていた。友人の江宏生（北京大学の学生）の助けで、私は2001年2月21日、中国の雑誌『中華読書報』に論文を発表することができた。これは、ブッシュ政権が葬り去ろうとしていた意見であり、私が誰にも伝えることを許されなかったものだった。私へのアクセスはすべて遮断されていた。しかし、私はなんとか中国語でこの考えを伝え、中国側はかなりの関心を示した。

この記事は、軍産複合体の私の敵たちを赤っ恥にさせた。しかし、ブッシュ政権とともに軍に新たに設置された権力者たちは、最近手に入れた権力に酔いしれており、誰に対しても自分たちの望むことは何でもできると感じていた。大きな影響力を持つあるグループは、単に「事故」や「自殺」、あるいはその他の邪悪な手段で私を殺そうとした。しかし、私に配属された諜報グループはその派閥には属しておらず、彼らは真の反発を示した。しかし、2001年2月、新ブッシュ・マシンに対する政治的反発は弱まりつつあった。

私を潰せという命令が下った。嫌がらせは新たなレベルに達した。私のメールは常に中断された。友人から届いたメールには、奇妙な殺害予告が挿入されていた。

作業員たちが私たちのアパートの前にはしごを立て、ドアの修理に取りかかった。私が通り過ぎるたびに、彼らは悪意があると思わせるような威嚇的な視線を送ってきた。周囲に気づかれないように、私のストレス

レベルを上げるためだった。この二人とは、その後も何度か**会う**ことになる。その後、一日のうちに、彼らや他の見知らぬ人との**敵対的な出会い**が大幅に増えた。

2月20日午後9時頃、大家が突然アパートにやってきた。それまで一度も家に**来た**ことのない彼女の**来訪**は、私にとって著しく奇妙なものだった。彼女の目的が何なのかわからなかった。しかし、そのとき私は奇妙なことに**気づいた**。淡々とした表情で、すぐに**帰って**いったにもかかわらず、彼女の手は怯えているかのように震えていたのだ。この短いインタビューは、私たちがまったく未知の、きわめて**危険な領域**にいることを確信するには十分すぎるものだった。私は人との**関わり**を極力減らし、何もしなかった。

父は2001年2月24日にシャンペーンに私を訪ねてくる予定だった。私の様子を見に**来る**予定で、その後すぐに妻のジェイミーも**来る**ことになっていた。私が精神的に病んでいるとみんなに言っているのなら、直接**会う**努力をするべきだと、父はようやく**気づいた**のだと思う。

彼の訪問は、この問題を最終的に解決するチャンスだと思った。森の奥深くへ**散歩**に行く方法を見つけようと想像した。そして皆から遠く離れた場所で、私は彼に何が起こったのかを話すのだ。それは私にとってとても明白なことのようには思えた。結局のところ、私の父は、どんな奇妙な人であっても、私のことを深く心配してくれていたのだ。

そうなるはずはなかった。**実際、実現**することはなかった。

それから**数年**後、外を**歩**いているときに起きたことを父に少し話し始めたことが3度あった。父は私の話に耳を傾けたが、何も質問せず、何が起こったのかを理解しようとも、何をすべきかを提案しようとしなかった。おそらく彼は**機密扱いの勧告**を受けていたのだろうが、いずれにせよ、それが父との**関係の終わり**であり、ある意味、この**冒険全体**の最も恐ろしい代償であった。

シャンペーン空港に父を迎えに行き、私たちのアパートで荷物を下ろした。その後、家の近くのイタリアンレストランに食事に出かけた。夕食を**済ませ**た後、私は最近私に起こったことについて**会話**を始めようと努

力した。私は彼に最近の出来事を説明し、彼はそれに耳を傾けた。しかし、その語り口は10分もしないうちに壊れてしまった。

私は父の友人であるザック・ホールのお話をした。父がこの町に来る数日前、私はザックと私の仕事について、そしてイリノイ大学についての懸念について話した。私は官僚的な問題に終始し、私の深い懸念には触れなかった。ザックは、私が学部長や副学部長と話したこと、そして彼らが私のプロジェクトを進めることを許可してくれたのに、突然何もさせてくれなくなったことについて話したことに耳を傾けてくれた。彼は、そのプロセスや学部が考えていること、あるいは私が誤解していたかもしれないことについて、何の提案もしなかった。会話の最後に彼は、「君は少し興奮しすぎていて、ありもしないことを想像しているようだ」と言った。

私は手の込んだ陰謀論など持ち出しておらず、手順の問題だけにこだわっていた。私が13歳の頃から知っているザックが、私の話を簡単に否定したことに私は少しショックを受けた。彼は基本的に、私の部署の他のメンバーと同じ考えを持っていると感じていたからだ。

私は父との会話の中で、その時の会話を簡単に説明し、「ザック・ホールとの最近の会話の後では、彼をそれほど信頼できないような気がする」と言った。

父の反応は公然の憤りだった。ザックは親友の一人であり、ザックが私に対して倫理に反するような行為をするはずがないと、毅然と、そして怒りを込めて私に言ったのだ。ただ助けようとしているだけのザックに対して、私がそのような不信感を示したのは無責任だった。

父は、私がなぜザックへの信頼を失ったのか尋ねなかった。詳細を知りたくなかったのだ。

ザックが父を訪ねたのは、父が突然、イリノイ大学に飛んで行って私に直接会うことを決める1週間前のことだったと、後になって知った。私には秘密にされていたその二人の出会いが、父がイリノイ大学に来ることを決めた本当の理由だったのである。

父がイリノイに私を訪ねてくると決める1週間前、父はサンフランシスコのホテルでビル・グリーンフとザック・ホールと**会**っていた。ビルは父に、私の**精神状態**を深く心配しており、私の行動は極めて異常で、**大学**を解雇されるのではないかと心配していると話していた。

レストランで父と非生産的な話をした後、私は閉塞感を感じた。明らかに、何が問題なのか、父はすでに心を決めていたのだ。

その日の夜、私は妻に、このままでは私が**危険**な目に遭うかもしれないと思うと話した。彼女は、なぜ私がそんなおかしいことを考えるのか理解できず、むしろ面白そうに私を見ていた。

数時間後、再びこの話題を持ち出して詳細を**説明**しようとする、彼女は深い苛立ちを示した。"私は妊娠しているの！"と彼女は叫んだ。"どうしてこんなことで私を**悩**ませるの？"と。

私を孤立させる**作戦**は完全に成功していた。私は家族、友人、妻、同僚から切り離され、完全に**孤独**になった。イリノイ大学の他の**教授**たちから最近届いたメールには、密かに殺害予告の署名が**挿入**されていた。

たとえそれが**精神病**と**診断**され、**大学**を解雇され、その他の運命をたどることになったとしても、私は父やザック・ホール、**学部長**の提案に**従**うしかなかった。周囲の誰も私をサポートしようとはしなかったし、その話題について議論しようとしなかった。その日の終わりには、私の電話を**盗聴**し、私のメールを**読**んでいる賢い連中が、最も親しい友人だと感じていた。少なくとも彼らは、私への不可解なメッセージの中で、殺害予告と強力なサポートの誓約を交互に繰り返していた。

その夜、寝る前にチャールズ・スチュワートに何通かメールを書いた。

チャールズに手紙を書くことは、私を監視する役割を**与**えられた人々に手紙を書くときの私の作法になっていた。ジョージ・W・ブッシュの**政権**獲得は**犯罪行為**だと思うが、私たちは**奇妙な縁**で結ばれている、と私はメールに書いた。私がキャンパスで**巻**いていた赤、**黒**、**白**のカレッジ・スカーフは、**実**はダベンポート・カレッジのスカーフだと**説明**した。ダベンポート・カレッジは、エリート **WASP** 一族が**支配**する**学部** **大学**の中で、最も「**シュー**」（裕福な**学部生**を意味する**イエール大学**の

スラング) な大学だった。しかし、ブルックリンのマンハッタン・ビーチ出身の**薬剤師**の息子であるユダヤ人の父は、1955年になんとかイエール大学に入学し、大学システムに多様性を持たせるために新たに採用された**抽選システム**によってダベンポート・カレッジに配属された。1983年にイエール大学に入学した私も、ダベンポート・カレッジに入ることができた。

しかし、この話にはダベンポート・カレッジに在籍していた2人の人物が**関係**している。プレスコット・ブッシュ上院議員の息子であるジョージ・H・W・ブッシュは私の父より前にダベンポート・カレッジに在籍しており、その息子のジョージ・W・ブッシュは私の父の後、そして私より前にダベンポート・カレッジに在籍していた。従って、私のスカーフには何か皮肉めいたものがある、と私は提案した。

ハリー・トルーマンについては、私が**冒険**の過程でかなり共感するようになった人物である。

後に私は、デイビッド・マッカローによる**熱烈な伝記**の正確さを疑うようになったが、**当時の私**にとって、ハリー・トルーマンは倫理的関心に**忠実**で妥協しないリーダーの模範のように思えた。私は、ハリー・トルーマンは "最高位の役職に就き、公益へのコミットメントを持って最も勇敢な改革を**実行**した人物だが、**様々な人々の助け**を借りて**権力**を握った "というコメントでメールを締めくくった。最後のセリフのポイントはもちろん、トルーマンがいかにマシン政治から**出発**したかを示すことだった。しかし、監視を任されている人たちに、**一步踏み込んで**助けてほしいというアピールの意味もあった。その訴えは、あるレベルでは成功した。

トルーマンに関する**神話**も、**歴史的に不正確**ではあったが、**効果的**だった。

自分の命が**危険**にさらされていて、その**危険性**をまったく理解していない家族に完全に**困**まれているのだから、眠れないはずだと思っていた。しかし、**疲労**のためか、それほど努力することなく眠りに落ちた。ベッドに**横たわりながら**、次に何が起こるか想像してみた。文字通り、見当もつかなかった。

## 第2章

### スルー・ザ・ルッキング・グラス

翌朝起きて、妻と父と一緒に朝食をとると、父はその日の午前11時にシャンペーンにあるカール・クリニックのセラピストに会いに行くようにと、ビル・グリーンノフからメールが届いたことを教えてくれた。前日の夜、私たちが話をした後で突然このメールを受け取ったことに、父はまったく不思議に思わなかったようだ。父は私が精神的に参っていると思込んでいるのだろう。彼はこのプロセス全体が怪しいと気づいていたのだろうが、不穏な事実を無視し、安心させるプロセスにこだわることにしたのだろう。当時はそういうメンタリティが蔓延していた。

私は父と一緒にカール・クリニックに行き、山積みの書類に記入し、神経心理学・心理学部門の待合室に座った。20分ほどで呼ばれ、神経心理学者のジョセフ・アルパー博士と面会した。アルパー博士と父、そして私との30分間のセッションは、これまで経験したことのない奇妙なものだった。

ジョセフ・アルパーは、禿げ上がった頭にモジャモジャの茶髪、金色の眼鏡の奥に小さく強い瞳を持つ、かなり小柄な人物だった。ナレーションはかなりユーモラスなスタイルで、話し方には常に皮肉と軽妙さが漂っていた。ブルックリン訛りが強く、中西部の田舎町ではひととき目立つ。

アルパーは私に質問することなく語り始めた。彼はセッションの間中、私から何かを学ぼうとはしなかった。彼はむしろ、可能な限り共感的で礼儀正しいやり方で、私に法を示したのだ。

あなたは精神疾患を患っており、**脳の実行機能の不全の結果**です。その原因は、あなたの**脳腫瘍**と1999年の手術でした。この**状態**が、あなたの**社会的共感力**を低下させ、他人と仕事をしたり、**組織**で交流したりする能力に課題をもたらしているのです。

大学はあなたのことを心配しており、一日も早い回復のために適切なケアを受けられるようにしたいと考えています。この**病気**はあなたの人間関係に深く影響し、多大な誤解を招いています。直ちに1学期、あるいは1年間の療養休暇を取ることを**勧め**ます。"

ナレーションの手段は驚くべきものだった。アルパーの視線は私ではなく父に向けられていた。彼は時折私の方を見たが、それはユーモラスな目つきで、まるで"このルーティンは我々がやらなければならないことだ"とでも言うようだった。彼の私に対する**視覚的な合図**はあからさまだったので、父も**気づ**いているだろうと思っただろう。しかし父は、**神経心理学者**がノートを読み上げるだけの面接で、何が問題なのかを確かめるための患者への質問がひとつもなかったことに、まったく動揺していないようだった。しかし、父は**集団精神病の状態**に陥っており、そこから回復することはなく、その**状態**を**当時の多くの教養あるアメリカ人**と共有していた。

そして、父とアルパーの**会話**はブルックリンのことになった。二人は同じ町出身ということもあり、ブルックリンでの昔話、特にマンハッタン・ビーチやシープス・ヘッド・ベイの思い出話に花が咲いた。意気投合し、**帰り際**、父はアルパー**医師**に非常に好感を持ったようで、その一言一言を信頼していた。



面談にはいくつか注目すべき点があった。まず、最初の精神鑑定に父を同伴させたのは極めて異例だった。このプロセス全体が、父を重要人物だと思わせるためのショーであり、父は完全にそれに騙されたのだ。医学的な評価は一切なかった。

アルパーは用意された紙を読み上げた。そこには、科学的方法で確認されていない、私と他の教員との交流についての伝聞や噂が列挙されていた。検査も、質問も、何が起こったかを確かめる努力もなかった。結論は即座に、すべてが私の精神病に起因するというものだった。

実際、精神疾患は腫瘍のせいだと思われていたが、その後3年間の治療期間中、私のMRIは撮られなかったし、その他の標準的な検査も行われなかった。関係した医師たちは、すべての治療が最初から詐欺であったことを誰にでもわかるように、意図的に意味のある治療をすべて省いたようだ。

アルパーが「実行機能の不全」と言ったのは、医学的な評価としてではなく、むしろブッシュ政権が連邦政府を引き継いだ後の政治状況についての説明だった。インタビュー全体は、まるで『サタデー・ナイト・ライブ』の寸劇のような、かなりユーモラスなやりとりにも思えた。ある意味、このプロセスは、間接的でユーモラスな形であれ、現実の問題について話そうとする人々が少なくとも数人はいることを私に安心させてくれた。明らかに、私の近くには積極的に私を守ろうとする人々が何人かいた。

この話の他の多くの部分は、その後15年の間に、他の人たちから聞いた話や消去法によって明らかになったが、ジョセフ・アルパー博士の地位はあいまいなままである。当初、私は彼がCIAに雇われている人物を評価するプロの心理学者であり、もしかしたら前年から私を観察していたチームのメンバーだったのかもしれないと考えていた。結局のところ、CIAはそのような人物を多く雇っており、後日何人かに会う機会があった。また、アルパーがブルックリン出身のユダヤ人であることも理にかなっていた。そのような背景があれば、私の行動や言動をよりの確に判断することができるからだ。また、私の父にとっても、より説得力のある人物になるだろう。

さらに、アルパーが明らかに、**医師**や、極めて高いレベルのクリアランスを持たない人間には通常**与えられない**ような、極めてセンシティブな情報にアクセスする場面が何度かあった。おそらく彼は、私たちが**会う**前日に急遽そこに配置されたのだらうと思った。彼は、私が第三者と交わしたメールのやり取りを完全に知っているような**発言**をしたことを覚えている。時には、彼が知るはずのない**出来事**についてジョークを飛ばすことさえあった。もちろん、アルパーではなく、他の人物が私のメールを**読み**、アルパーに**説明**していた可能性もあるが、**確証**はない。いずれにせよ、私たちの**会話**の過程には、想像しうる限り最もデリケートな問題が含まれており、彼は**そのすべてに立ち会**っていた。しかしまた、私にもクリアランスはなかった。

また、初日に渡した名刺には「**心理学の外交官**」と書かれており、政治家との結びつきを示唆するユーモラスなディテールのひとつであった。これらの冗談はアルパーの作り話ではない。私は**絵**を描いたり、暗示的な意味を**込めた画像**を撮ったりして、それをアルパーや他の人に送って解説していた。私は、**正気**を保つための私の文章や投稿の**娯楽的価値**を過小評価するつもりはない。

私は後になって、アルパーが**実は**カルルか他の病院の**医師**で、この仕事を任せられ、正式な準備なしにこの複雑で困難な仕事をこなした可能性はないだらうかと考えた。私は2012年にイリノイ大学を訪れ、まだそこで働いていたアルパーと**コーヒー**を飲んだ。もし彼がCIAの臨時職員であったなら、**数年後**には間違いなく異動していただらう。

私は2012年、イリノイ大学と**韓国**の研究機関との**科学協力**について話し合うため、2日間シャンペーンを訪れた。ノース・キャンパスでアルパーと**コーヒー**を飲んだ。彼は**相変わらず**私の**研究**に興味を持ち、私の**進歩の遅れ**を心配してくれた。最終的には親密な友人関係となり、私は彼に絶えずメールを書いていたこともあったが、**非公式に会う**ことはできなかった（3度ほど**コーヒー**を飲むために**会**ったが...うーん...非公式といえは**非公式**に聞こえるだらうか）。時に彼は**厳しい**、あるいは少し**残酷**な行動をとった。しかし、私はいつも、彼はただ**命令に従**っただけで、そのプロセスには個人的なものは何もないと感じていた。私が**飲み**に行こうと誘ったとき、彼はこう言った。

私の経験の中には、たまたま私とすれ違ったという理由で、極秘事項を一時的に知らされた一般人が他にもたくさんいた。どちらかといえば、チームは意図的にずさんで、極秘の作戦に膨大な人数が関わることを喜んでいるように見えた。だから、アルパーがたまたまその場に居合わせた人物である可能性はなくはないが、それはとてつもない偶然の一致だろう。

2001年2月のアルパーとの出合いに話を戻そう。病院を出る途中、薬局で薬を買った。生きるか死ぬか、あるいは精神障害者施設に送られるかどうかわからないこの状態で、私はますます不安を感じていた。私はますます興奮していた。

薬局に着くとすぐに薬を飲み、スンウン、父、ジェイミー（継母も到着していた）が車で私たちのアパートまで送ってくれた。車で家に帰ると、私はさらに興奮し、少し妄想的になっていた。玄関に入ると、私はテーブルに座り、コップに水を注いだ。すぐに2錠を飲み込んだ。その3分後、私はとても奇妙な感覚に襲われた。脳の中で何かが突然切り替わったような感覚だった。薬が効いてくるまでのゆっくりとした過程ではなく、それまで感じていた焦燥感から突然解放されたのだ。頭の中は完全にクリアで、緊張や妄想は微塵もなかった。

後になって、私は知らないうちに薬物を投与され、その薬物の幻惑作用に対抗するためにこの新薬を投与されたのだと思い至った。

父に何があったのか尋ねると、医者に行ったことを少し説明してくれた。私は、もしかしたら自分がすべて夢を見ていたのではないか、ある種の被害妄想に陥っていたのではないかと感じた。

監視下に置かれていたこと、政府が私を殺そうとしたこと、不正選挙後に米国でクーデターが起きたこと、そして私を扱うために派遣された政府の人間であるアルパー博士に会ったこと。

家族はそんなことはないと言断した。私は肩の荷が下りたような気がした。たまたまその時、イリノイ州エルギンにいて翌日まで到着しない弟のマイケルから電話があった。私は彼に、イリノイ大学での私の問題に

ついて話したことはすべて大規模な妄想の一部であったこと、そして彼に迷惑をかけて申し訳なかったことを、熱意を込めて伝えた。

マイケルは少し困惑していた。私がすべてを想像していたというのは筋が通らない。

会話の後、私は少し混乱した。話のどこかが本当だったに違いないと感じたからだ。私は両親に現代の政治についてさらに質問し、私が記憶していた政治的出来事が偏執的な空想ではなく、**真実**であることを知った。私の家族はアメリカの政治的危機を深く否定しているだけだということが、次第に明らかになっていった。私は精神病の妄想から立ち直ったのではなく、自分の思い込みが本質的に正しかったことに気づいたのだ。私のメールをチェックすると、すぐにすべての話が正確であることがわかった。私が記憶していた、ボールに包まれた殺害予告やその他の嫌がらせを含むメールはすべてそこにあった。

病気から目覚めたあの瞬間は、私を興奮させ妄想的にする薬を投与され、その薬に対抗する薬を投与された結果だった。それは作られた出来事であり、私はその巧妙さに感銘を受けた。しかし、もし家族が私にまじめな質問をしたら、この話は破綻していただろう。家族はそうしなかった。彼らは私が精神的に病んでいると必死に信じたかったのだと思う。なぜなら、米国が今や軍事力に占領されているというこの兆候を直視したくなかったからだ。彼らが妄想を持ち続けるためには、私が精神的に病んでいるというストーリーを信じるのが不可欠であり、それが意味をなさないという証拠を前にしても、彼らはそれに固執した。彼らがそうしたのは、その話を疑うことは、アメリカにおける根本的に違法な活動という現実<sup>1</sup>に直面することになり、それは彼らにとって心理的に荷が重すぎたからである。

その結果、私と家族の関係は永久に損なわれた。その話はすべて穴だらけだったが、実際に何が起こったのかを判断するための質問はひとつもされなかった。

私は父やジェイミーに、この話をもっと複雑で、もっと説明が必要だと何度か言ったが、彼らは私を精神的に病んでいると考えたがっているようだった。当時、そして今も感じていることだが、もし私が「自殺」や

「**薬物の過剰摂取**」で突然死んでいたとしても、家族は**真実**を知ろうとはしなかっただろう。彼らは私を見限り、**真相**を究明しようとはしなかった。

父は翌日、デリア学部長、ティナ・ゴンザレス学長補佐、その他の高官たちに**会**うために連れ回された。彼らは皆、私のことをどれだけ**気**にかけてくれているか、どれだけ深く心配してくれているかを語った。しかし**実際**には、彼らの誰ひとりとして、問題が始まってから一度も私に**会**ったことはなく、副学部長以外の誰かにこの問題を相談しようとしても、ことごとくシカトされていた。その時は感心しなかったが、後になって、ほとんどの人が私と交流しないようにとの**機密勸告**を受けていたことがわかった。

父はこの話全体に疑問を持っていることを示す瞬間が何度かあり、自分が聞かされている物語に納得していないようだった。しかも、ディーン・デリアと**会**った後、"ディーン・デリアはあなたの大ファンです"と言って帰ってきた。しかし、私ができるだけ早くディーン・デリアに**会**いたいと言うと、父はこう言った。メールで彼のことを書いているのを見たよ」。父は、私がこれらの問題をすべて想像していたとは思っていないようだった。彼は深刻な問題があることを理解していた。

しかし、彼は何が本当で何が想像なのかを探ろうとはしなかった。**実際**、彼は私から何かを**学**ぼうとすることをほとんど避けていた。

父は最初からすべての**状況**を理解していて、私を助けるためにこのような行動をとっただけという可能性もあるが、助けようとした形跡はあまり見られなかった。父は、自分が私の人生においていかに重要な存在になったかを喜んでいるように見え、私の**状態**にはまったく**関心**を示さなかった。

その翌日、兄のマイケルがエルギン（地名が重要？ ちょっと難解）から私を訪ねてきた。その時点で私は、自分のケースについて**両親**に話そうとすることにうんざりしていた。当時のリスクが非常に高いことも**自覚**していたので、彼との**真剣な会話**は避けることにした。正確には、彼から質問されるまで待つことにした。彼は私についてさまざまな矛盾したことを耳にしていたにもかかわらず、その日のうちに私に質問するこ

とはなかった。私は、このまったく**関心**のない態度にいささか驚いた。また、兄はばかげた話を完全に信じたわけではなく、**単に真実**を知ることによる不都合を避けたかっただけで、深いレベルで**隠蔽**工作に付き合うことにしたのではないかと疑った。

しかし、彼が**本当**の質問をした瞬間があった。私たちはブジー通りのアパートの前の階段に座っていた。私は "何が知りたいんだ?" と答えた。彼は "死の脅迫は本当だったのか?" と言った。私は "そうだ" と答えた。そして彼は言った。"そんなことが起きたら、**警察**に行くのが普通だろう" と。

私は返事をしなかった。しかし、私が**殺害**予告を受けていることを示唆したにもかかわらず、**明確な説明**をしなかったという**事実**は、極めて深刻な事態を示唆するものであり、彼が再びこの件について私に尋ねる必要性を感じるだろうと考えたのだ。

私は完全に間違っていた。それから 20 年間、マイケルはそれ以上の質問をしなかった。私の**精神状態**はどうだったかと聞くこともなく、その日、あるいはその前後の日に何があったのかも聞かなかった。2006 年になって、私が何があったかをどうしても話したいと言うと、マイケルはその話を一切しようとしなかった。マイケルは私の話を聞いてはくれたが、返事をするとはなかった。後日、私が手紙に**経緯**を詳しく書いても、彼はそれにも**応**じなかった。

翌日、私はカルル・クリニックに行き、アルパー**医師**に**会**って今後の治療について相談した。私は到着するなり、2005 年 1 月までの 4 年間（その後も時々）私が受けることになる、低レベルの嫌がらせの最初の例を目にした。カルル・クリニックでは、私が駐車場から**歩**いていく道沿いに、自殺、行方不明の子供、精神病などに関するおどろおどろしい注意書きが書かれたポスターが、私への脅しとして目立つ場所にはっきりと貼られていた。また、ロビーのエレベーターの前には、明らかに武装して威嚇しているかのような格好をしたトレンチコートの男たちが立っていた。私は彼らに微笑みかけて**歩**こうとした。

しかし、アルパー**医師**のオフィスに着くと、スタッフはとても親切だった。アルパー**医師**は 10 分ほど待たされただけで私に**会**い、じっくりと

話をした。アルパー医師は私の健康にはまったく関心がなかった。ストレスがたたり、密かに投与された薬で消耗していたからだ。しかし、私を支えてくれる人はたくさんいても、この件で私を助けてくれる人は誰もいないことを知った。

アルパーは、私が "実行機能" に欠陥があることを再度説明した。そして彼は優しい笑顔で私にこう説明した。「あなたが精神疾患を患っていることを証明するこの書類にサインすることに合意しました。あなたは1年間休職し、その後キャリアを回復することができます」と。

私は "ごめんなさい" と言ってはいけないのですか？

彼は目を輝かせながらこう説明した。"死刑判決に謝罪の言葉は通用しない"。

アルパーは驚くべき状況把握能力とユーモアのセンスを持っており、私はそれを高く評価するようになった。命令されたことは何でもやるだろうと思っていたという点で、私は彼を完全に信頼していたわけではなかったが、彼は非常に洞察力があり、注意深く話を聞いてくれるし、明らかに私のことを人間的に気に入ってくれていると思った。また、彼が極めて高いレベルの情報に通じていることも明らかになった。

フロリダ州のように、物事がうまくいくはずのやり方と、本当にうまくいくやり方があるんだ」。彼はフロリダでの再集計の停止について言及した。

精神障害者であることを証明する書類にサインするのを避けるために、何か妥協案はないかと彼にもう一度尋ねた。

"私の記録には、ある種の精神病に言及したものは避けたいのです"

「とユーモラスな口調で言った。

「どんな状況で問題になり得るか？

「上院議員に立候補するとしたら？

このコメントは明らかにアルパーの注意を引いた。彼は私を強烈に、そして非常に興味深そうに見て、"本気なのか?"と尋ねた。

「上院議員である必要はない。

「治療が成功し、書類に不備がなければ、その記録はまったく問題にならない。

私はこう答えた。それなら、あなたがくれるどんな書類にもサインします」と答えた。

私たちは、アルパーが行政官との面会で私に大きな関心を示していたことを示唆した父について、少し話し合う時間を持った。

そして握手を交わした。私がオフィスを出ると、アルパーは "とても魅力的なスカーフだね "と言った。

「私が住んでいたイエール大学のダavenport・カレッジのスカーフで、私の父は私より前に住んでいた。ジョージ・W・ブッシュと彼の父もそこに住んでいました」と私は説明した。

「このあたりではあまり見かけない」と彼は言った。

彼はすでにチャールズ・スチュワートに送った私のメールの内容をすべて知っているようだった。

当時、印象に残っているのは、午後に軍用機が我が家の真上を超低空飛行したことだ。その意味が何であったかはわからないが、その飛行経路が異常であり、明らかに意図的であったことは間違いない。私はそれを応援のサインと受け取った。

翌日、母がカリフォルニアから私に会いに来た。私が精神的に病んでしまったと聞いて、急いで駆けつけてくれたのだ。私は母とかなり親しく、それだけに一緒に過ごした時間は深く苦しかった。私は以前、電話で母に何か深刻な問題があることをほのめかそうとしたが、母は私の言うことを意地でも無視した。



彼女が到着した翌朝、私たちは軽い会話を交わし、シャンペーンのダウンタウンを散歩した。その道すがら、私は自分の身に起こったことを少しずつ説明し始めた。母は私のことを深く心配していたにもかかわらず、あまり注意深く話を聞いてはくれなかった。当局によると、私がどれほど精神的に病んでいるか、すでに何人かの人から聞かされていたと思う。彼女にとって、私が言ったことを頭ごなしに否定する方が簡単だったのだと思う。なぜなら、そこに真実があるかもしれないと認めることは、彼女の世界観全体を揺さぶることになるからだ。

しかし、父と一緒にいた最初の日薬局でもらった薬について、私が言ったことに、彼女がもう少し注意深く耳を傾け始めた瞬間があった。突然、彼女は私にこう尋ねた。"つまり、彼らは意図的に病気になるような薬をあなたに与えたと思いますか？"そんなことができるのは、どの程度のセキュリティクリアランスを持っている人たちなのかしら？"と私は答えた。私は答えた。

彼女はショックを受けた様子で、少し外の空気を吸いたいと言った。彼女は私から10メートルほど離れて歩き、それから思考を整理して戻ってきた。そのとき彼女は、自分の息子が精神疾患を患っているという可能性に直面し、泣きそうになっていたに違いないと思う。そのとき彼女は、息子が精神的な病にかかっているという可能性に直面し、泣きそうになっていたに違いない。確かに、政府がアメリカ人にそのようなことをした前例があるのかどうか尋ねることは思いつかなかった。もし彼女がこの問題を調べていたら、そのような話はまったくあり得ることだと知っただろう。

その後、3時間ほど離れたセントルイスまで一緒にドライブした。私はセントルイスで育ったが、人生の危機に瀕しているこの瞬間に一緒にそこにいるのは奇妙な瞬間だった。子供の頃から知っている書店、レフト・バンク・ブックスに立ち寄り、母がとても好きだった小説家の朗読会に参加した。私はそのイベントを楽しみ、ようやくリラックスし始めた。子供の頃を懐かしく思い出すレフト・バンク・ブックスのオーナー、バリー・リーバーマンと会った。後日、彼と電話で話すことになったが、あの時の私の努力に実際に感謝してくれたのは彼だけだった。追及はしなかったが、私には少し曖昧に思えた。彼が何に対して私に感謝

しているのかはよくわからなかったが、それまで私に起こったことを考えると、何に**対**しても感謝されることは慰めになった。

その日の夜、ホテルの部屋に**戻**ってからバインダーを取り出すと、私がイリノイ大学を休職することになった日に『デイリー・イリニ』紙に掲載された記事を見つけた。その記事には、中国の朱鎔基首相が、でっち上げの汚職容疑で不当に罷免された中国政府高官を**称賛**する言葉が引用されていた。その記事はもう手元にはないが、かなり**作為**的なもので、私の事件への言及であることは明らかだった。そのような記事が『デイリー・イリニ』の一面に**掲**載される理由はない。私はそれを母に渡して**読**んでもらった。私に起きたことを理解する助けになる」と言った。

彼女はそれを**読**み始めた。彼女は**混乱**しているようだった。「理解できないわ。中国の官僚の記事よ。「あのね、私が大学を不当に解雇されたことを暗示しているんだ。私は**説明**した。」

彼女はしばらく**黙**っていた。そして彼女は突然立ち上がり、深く動揺した表情を浮かべた。彼女は**実際**に奇妙な記事に目を通し、その不自然さに**気**づいたのだ。私が主張していることが**本当**かもしれないと、初めて彼女の**脳裏**をよぎったのだ。当時、家族の中で私の話**に**耳を傾けてくれたのは彼女だけだった。

しかし、彼女の反応は理解を深めようとするものではなかった。むしろ、理不尽な恐怖に振り回されていた。私は、もしかしたらこの件について話したこと自体が間違いだったのかもしれないと思い始めた。

彼女は私に、すべての書類を燃やし、すべてのファイルを破棄しなければならないと言った。私の行動のあらゆる側面について、誰もが十二分に知っていることは明らかだったからだ。その時点で秘密はなかった。彼女は緊張のあまり、**冷静**に話し合うことができず、**会**話はバラバラになってしまった。

翌朝、私たちは早朝に**帰**路についた。運**転**しながら極度の不安と緊張を感じ、ここ**数**日の出来事が常に頭の中を巡っていた。緊張のあまり、5分ほど運**転**を中**断**せざるを得なかった。

この一連の緊張も**薬物**によるものだったようだ。母に私が精神的に病んでいることを確信させるのに**効果的**で、母はその日、二度とこの話題について話したがらなかった。その4日後、母から電話があり、ある友人が、ストレスにさらされたある種の人々が、いかに手の**込んだシナリオ**を想像させられるかを**説明**してくれたと**教**えてくれた。彼女は、この逸話が私のケースを完全に**説明**していると受け入れてくれたようだった。

私の母と父は、**当時米国**に蔓延していた否定文化の影響を受けていた。**国家**が軍事クーデターで**乗**っ取られたという明確な**証拠**に誰も向き合おうとせず、**現実**を直視せざるを得なくなるような**証拠**は一切無視した。それから18年経った今でも、**アメリカ人**はその**現実**を直視することを恐れている。

私は母の**解釈**にも同意できなかった。私の影響力はもう限界で、ハラスメント**作戦**は私を罰するためというより、私を**担当**する**捜査官**を含む他の人たちに、もし常軌を逸した行動をとったり、私をサポートしようとしたりすれば、どんな**罰**を受けるかを示すためのものだったのだ。

また、**当時**私を監視するために任命された**CIA**チームのメンバーとの交流も興味深かった。もちろん、メールを**読**んだり私を**観**察したりする、**会**ったこともない人たちもたくさんいた。しかし私は、たとえ一方通行であったとしても、彼ら全員に感謝の意を表し、**関係**を築こうと何度も努力した。

**関係者**の多くはイリノイ州にはいなかった。私は幅広い**読者**のことを考えてメールを書いた。私はそれを、支持者を増やすための明確な政治的**行為**だと考えていた。結局のところ、私のもとに配属されるのは、最高機密保持者だけだろう。その人たちに私の**アイデア**を**売**り**込**むべきだ。

私の家の外で働くように任命された人たちの中には、私がすぐに見分けられるような特定の人たちもいたし、何が起きているのかを隠そうとするようなこともなかった。

まず、アパートのドアを修理することになった**青年**がいた。彼は**選挙戦**の**真**っ最中、私に敵意をむき出しにし、**威嚇**するような目で笑った。私は**当惑**した。後日、私は彼に自己紹介し、名刺を差し出した。彼は、2

週間も私に嫌がらせをするよう指定されていたのだから、私の心遣いにかなり感謝しているようだった。その後も何度か話をしたし、シャンペーン市内を歩いていると、人ごみの中で不定期に彼を見かけることもあった。

その後、家の近くの道路で車が私たちの車に衝突する事件があった。私たちの車は軽い損傷で済んだ。運転手は同じ若者だった。私たちの車の後部から煙が出たことも含め、事故全体が少し不審に思えた（このような接触事故で車から煙が出るのは奇妙に思えたので、不審に思えた）。この事故は嫌がらせの一環であったが、そのころには私は彼と十分親しくなっていたので、かなり安心していた。

私に割り当てられたもうひとつのグループは2人のカンボジア人で、3週間かけて家の外壁を塗ることになっていた。彼らはいつも私に親切で、連帯感を感じてくれているようだった。私も近くを通るたびに声をかけるようにしていた。家に小さなブロンズの仏像があったので、彼らにプレゼントしようと思った。彼らのトラックのハンドルの上に置いて、後で彼らが見つかるちょっとしたサプライズにしようと思ったんだ。それは、私を監視していた他のメンバーによって私の家に置かれた様々なユーモラスなオブジェと並行するものだった。

しかし、私がトラックのドアを開けようとしたとき、大きなアラームが鳴り、彼らはかなり心配そうに私の方へ走ってきた。私は何をしようとしているのかを説明し、仏陀を彼らに渡した。彼らは喜んでくれた。でも、あのトラックは誰もいたずらしてはいけなかったようだ。

最初は冒険のすべてを楽しんだが、同時にブッシュ政権によるアメリカの完全な乗っ取りと、クーデターに対するアメリカ人の無関心に深く憂慮した。アルパーと政治状況について、わかりにくい例え話を通してジョークを言い合うのは楽しかった。私は彼に謎めいたメモを書いた絵葉書を何枚も書いた。私のお気に入りの葉書は、D・W・グリフィスの映画『イントレランス』のバビロンのシーンが描かれたもので、アメリカの政治状況をユーモラスに表現していた。

この種の**内輪**ネタの最も鮮明な例は、私が部門長のジェリー・パッカードに送ったメールだろう。結局のところ、私たちにはもっと大きな魚がいるのだ。”

後日、アルパーとの**会話**でこの手紙のことに触れたが、彼は神妙な面持ちで私を見つめ、一言も**発**しなかった。まるでそのメールを読んだかのようにだった。アルパーと私の間だけでなく、**学内**や他の場所でも、「ブッシュ」が「フィッシュ」に似ているとか、「We have bigger fish to fry（我々にはもっと大きな獲物がいる）」というフレーズがブッシュを指しているといったギャグが飛び交った。

いずれにせよ、新聞や看板、郵便受けに届く迷惑メールに至るまで、魚のフライに関する記述が右往左往していた。なかなかの光景だった。翌日の夜、私たちはケビン・キムと彼の家族に連れられて、魚のフライがスペシャルメニューのレストランに出かけた。その週の終わりには、魚フライのジョークは古くなっていた。

このキャンペーンが注目されたのにはいくつかの理由がある。私の部長とアルパーの間の**内輪**の冗談から始まったにもかかわらず、膨大な数の人々がこの情報をあちこちに**広**めることに**関与**し、何千人もの人々が知っているに違いない、一種の巨大な**悪**ふざけへと**発**展したのである。しかも、ブッシュ政権は**事実上**の**支配権**を**掌握**していたにもかかわらず、こうした大集団はそうした行動に少しも怯えているようには見えなかった。また、大勢の人々が私の件を知っていたが、直接には認めなかったと考えるのが妥当だと思われた。

2001年1月から2004年12月までの間、そしてその後も私が受けた低強度、時には高強度の嫌がらせにはいくつかの特徴があった。何よりもまず、私に対して**敵対**的な行動をとるよう命令され、時には明らかに脅迫的にさえ見える警官がいたにもかかわらず、誰も私に対して**本気**で怒っているようには見えなかった。そして彼らは、この完全に違法な命令に**忠実**に従わなければならないと感じていた。

そのプロセス全体は、私を怯えさせるためでも、私の行動を修正させるためでもなく、むしろ、私の**周囲**の人間、そして命令系統のさらに上の人間に対して、私がゲームのルールに違反したことで罰せられることを

明確にすることを目的としていた。金儲けや出世はできても、システムのあり方についてビジョンを描くことはできないというメッセージだった。

全体的に、その時期は他人との交流が極端に限られていた。私と会う人はほとんどいなかった。私は給料を減らして生活し、精神疾患のインテキ治療に関連した医療費もかなりかかった。病気で休職していた期間中、翻訳、執筆、コンサルティング、その他の仕事の可能性について人々と連絡を取ろうと試みたにもかかわらず、私が通常の給与以外に収入を得る機会は何もなかった。妻の社会的交流も同様に制限され、妻には多大なストレスがかかる。アメリカでの収入と行動範囲の制限は、機密扱いの勧告によって規定され、現在も続いている。

多くの人々が、私に対してどのように振る舞うべきか、私と接するときは何をすべきか、あるいは何をすべきでないかを明確に指示された。私が軟禁され、絶え間ない嫌がらせにさらされるこのプロセスについて、どれだけの人に知られるかを制限する努力はほとんどなかった。脅迫は、ユーモラスで叙情的な瞬間とさえ組み合わせられていた。私を担当することになった男女は、退屈な脅迫を切り抜け、小さなサインで私への支持を示した。イリノイ大学での作戦を知っている人の数は、それ以上ではないにせよ、数百人に上った。そして、アメリカでは何千人、あるいはそれ以上の人々がこの作戦を知っていた。今日に至るまで、私は正直なところ、違法性の規模や関係者の数を考えると、なぜこの事件が表沙汰にならなかったのか理解できない。

私はこの作戦について、いくつかのことを肯定することができた。それは私を脅すことが目的だったということだ。私を脅すために、より高いレベルで実際に命令が下されていたが、その命令を下していた人たちは、それを実行していた人たちから遠く離れており、ごくまれに例外があるにせよ、殺害予告は死んだような、あるいは滑稽なやり方で伝えられていた。

私にされたことは、私を罰するためでも、私の行動の誤りを納得させるためでもなく、むしろ私の周囲の人々に、知識人は白昼堂々と最悪の政治的訴追を受ける可能性があり、誰もがそれに従うだけだという明確なメッセージを与えるためのものであることは明らかだった。

ルールを作っている側には、普通の状態に戻りたいという願望はなかったし、すべてが起こったことを忘れたいという願望もなかった。嫌がらせはあからさまに続けられ、見ず知らずの人たちに、何かとても奇妙なことが起きているのだと気づかせてしまった。それでも問題はなかったようだ。時には、極秘とまではいかないまでも、機密性の高そうな出来事に見ず知らずの人が巻き込まれることもあったが、それも問題視されなかった。

また、CIA/FBIの中で私を扱っていた人々の中には、私に共感していただけでなく、私を指導的役割を果たせる人物として見ていたグループがかなりいたことも明らかだった。行動の自由がないという意味で、私は最下層にいたが、彼らはほとんど最初から、次に何をすべきかのアイデアを私に求めていた。私へのメッセージの多くは、キャンパス内を歩いているときに私が遭遇するように設定されたシーンであり、細部への愛情深い配慮と、さまざまな象徴的レベルで私とコミュニケーションを取ろうとする努力が感じられた。

おそらく本来のメッセージは、私が落胆し、常に殺される脅威にさらされ、何の希望もないと感じさせられることだったのだろうが、実際に目にしたものについてはそのようには感じなかった。むしろ鼓舞されることもあった。この作戦の矛盾した構造は、今でも私の中で謎のままである。干渉パターンなのか、それとも別の何かなのか。しかし、はっきりしていたのは、威嚇のプロセスは私を止めることが目的ではなかったということだ。むしろ、私はこれまで以上に大胆に発言するよう促された。

当時、同じような事件が他にもいくつかあったという話を間接的に聞いたことがあるが、私はその事実を確認することができなかった。しかし、その行動の極端さ、賭けの大きさにおいて、私のケースに匹敵するものは他になかったと感じている。個人的には、このプロセスの多くは、私が中国語、日本語、韓国語に堪能であったことよりも、文章を書くことが好きであったことに関係していると思う。ローウェル高校で『Myriad』という詩誌の編集長を務めていた頃まで遡るが、私は本質的に作家としてのスキルを取り戻したのだ。皮肉交じりのおしゃべりが大好きで、時事問題を簡潔にまとめることに多大な努力を傾けた。

2001年1月から2004年11月頃までの数年間、私の個人的な生活について、内輪ネタや間接的な言及、時には曖昧な部分を示唆するような表現が、メディアのあちこちに散見された。最も一般的だったのは『デイリー・イリーニ』紙だったが、『シャンペーン・ニュース・ガゼット』紙や『ニューヨーク・タイムズ』紙にも、記事の中の奇妙な言い回しや広告などで扱われるテーマの中に、時にはかなり露骨な暗示があった。トム・トゥモローのコラム "This Modern World" も、定期的に私の事件に露骨に言及していた。『デイリー・イリーニ』紙の毎日の運勢にも、私の私生活に関する記述があった。この作戦全体は、秘密にしておくことができないほど巨大なものだったに違いない。そんな意図はなかった。

ある例では、私が頻繁に書類に落書きしていたくるくる巻いた落書きが、突然、ターゲットのコマーシャル・デザインや広告の分野で人気のテーマとなった。しかし、他にも私が作ったものが注目されるコマーシャル・アートに組み込まれた例はあったが、私と結びつける手段はなかった。もしかしたら、私はナルシストになってしまったのかもしれない。しかし、2004年12月にイリノイ大学を解雇されたとき、そのような楽しい遊びは永久に終わった。そのような隠されたメッセージは完全に消えてしまった。

最初はいろいろな切り抜きを集めていた。しかし、あまりに資料が豊富だったので、私はそれをあきらめた。私の政治的迫害に関する言及の多くは、政府によって処罰された中国の学者についての叙述という形で表現されていた。それは、この極秘の作戦を公に認めない秘密法のために、公には扱えない何かをほのめかすかわい方法だった。少し嫌な感じもした。この一連のプロセスは、映画『ビューティフル・マインド』で明確に言及されている。

私の想像力が活発すぎたのだろうと思ったこともあった。しかし、15年経った今、そのメッセージはかなりストレートなものであったようで、2004年11月にそのプロセスは実質的に停止した。

いずれにせよ、私は多くの人々と幅広い対話をする貴重な機会を与えられた。私が書くメールはすべて、幅広い支持者に向けたものだと感じていたが、私の書いたものを読むのは、無関心な人たちであることも自覚していた。



私が何をすべきか、何を間違えたかを示唆する非常に明確なメッセージや指示を受け取ることもあれば、曖昧な、あるいは暗示的なメッセージを受け取ることもあった。その多くはかなり巧妙で、誰かが相当な手間をかけてヒントを作ったことを示唆していた。また、メールに書かれた奇妙なフレーズやアルパー博士のコメント、メールボックスに残された奇妙なメモなど、小さなパズルのようなものもあった。

私はアルパーから、3月にイリノイ大学のオフィスを明け渡し、教員や大学院生との交流を一切やめるように言われた。それ以前から交流はほとんどなくなっていた。この措置は精神疾患の治療の一環であり、同僚と話をすることは対人関係の問題を引き起こす可能性があると言われた。その命令は意味不明だったが、私は忠実に従った。しかも、私は彼らと話すことにほとんど興味がなかった。私は午後にはオフィスから本をすべて運び出し、アパートの地下室に保管した。部長は私がオフィスを去ることを知らされておらず、1週間後、私がすべてを持ち去ったことにショックを受けたとメールを送ってきた。

興味深いことに、私が病氣療養中だった16ヵ月間、私の部署は私のオフィスを利用することはなく、私の運命がどうなるかは不透明だった。私と直接話すことは許されなかったが、これは連帯と支援の行動だったと思う。私は彼らの扱いに苛立ち、怒りさえ覚えたが、同時に、私はすべてを知っているわけではないことを認識しなければならなかった。

楽しい雑談のわりに、ストレスは相当なものだった。今思えば、すべてが素晴らしかったように思えるが、当時は正直なところ、自分が「自殺」するのか、施設に入れられるのか、長期失業に追い込まれるのか、生活保護に追い込まれるのか、それ以外の何かになるのか、わからなかった。私は何時間もひとりで過ごし、深刻な問題を話し合える本当の友人もいなかった。多くの人は私と話すことに緊張していた。

非常に斜に構えたコメントからかなり恐ろしい注意まで、テンションの低い嫌がらせを受けると、集中するのは控えめに言っても難しかった。同時に、重要だと思う特定の話題には効果的に集中できた。読書ができた時期もあった。ベンジャミン・フランクリンの本を何冊か読み、ヒューイ・ロングの伝記（政治におけるカリスマの重要性を理解するのに大いに役立った）、ヴィクトール・フランクルの著書『人間の意味の探

求』(母の勧めで)を読んだ。しかし、インターネットで多くの記事や論文も読んだ。というのも、私の人生では前例のないことだが、他の人々にとってはそうではないのだから。

アルパーへのメールや手紙に書かれた話題は、歴史や政治から文学や哲学まで多岐にわたった。私は、インターネット指導案のために書いた資料を基に、アメリカの東アジアへの関与のあり方について自分の意見をまとめようとした。実際、嫌がらせや活動の厳しい制限にもかかわらず、私はアルパー(や他の人たち)に書きたいことを自由に書いているように見えた。その書く過程が私を変え、10年後、主に現代問題への洞察を提供する短いエッセイの書き手として登場するための舞台を整えたのである。

月中旬、アルパーは私に、「大学の誰か、学長か**国務長官**が」私のために計画を練っていると説明した。彼はそのプランが何なのか説明しなかったが、私は**数週間**、何か大きなブレイクスルーがあると確信していた。実際には、私にとって大きな改善は決してなかった。

いずれにせよ、私は延々と書類に記入することを要求され、その書類は紛失し、また記入することを要求された。その書類はイリノイ大学でのリハビリのためのものだった。ハーバード大学で働くという夢は忘れ、イリノイ大学に留まることだけでも不可能に近いことだった。

学内の教員たちから、私が参加できそうな**研究プロジェクト**を何度も提案された。私は何時間もやりとりに費やしたが、**実現した企画**はひとつもなかった。その中でも、**中国**に建設される**ジュラシック・パーク・タイプ**のテーマパークの**開発**に取り組んでいる企業とのプロジェクトがあった。

私は主催者と何時間も電話で話し、提案の手紙を何通も書き、彼を助けてくれそうな人を紹介したりもした。しかし、このオーガナイザーは大変な熱意を示してくれ、私のアドバイスすべてに温かく感謝してくれたにもかかわらず、私は一銭も報酬をもらえず、プロジェクトに参加することも許されなかった。おそらく、私にお金を稼ぐチャンスはなかったのだろう。私は病気休暇からの収入で生活することを余儀なくされた。他の仕事に対する報酬はなかった。一律の**勧告**が出されたことは明らか

で、私はこの状況を受け入れた。少なくとも、近い将来自分が殺されるのではないかという恐怖はなくなった。

イリノイ大学での残り3年間で、このようなプロジェクトは30~40はあったと思う。他の場所で働くチャンスもあったし、海外旅行、コンサルタント、学会出席のチャンスもあった。結局、私は誰からも何も期待されなかった。私にとってアジアはかなり遠いものとなり、アジア人と交流する機会は激減していた。

ある日、3月25日頃、アルパー博士から突然、アジア、そして世界における米国の真の課題は何だと思うか、エッセイを書いてほしいと頼まれた。その依頼はかなり深刻なもので、まるで私の意見を率直に知りたがっているグループの代表のようだった。私はとても光栄に思い、その晩、腰を据えてかなり複雑なエッセイを書いた。私は、将来、安全保障にどのようなニーズがあるのかというビジョンを明確にしようとした。私は、テクノロジーの進化や環境の変化に関連した根本的なシフトがあると仮定し、根本的な再定義が必要だと提案した。

テクノロジーが進化し続ければ、一個人が何百万人もの人々を殺すことができるようになる。そうなれば、安全保障の概念も完全に変わってしまう。私たちは軍にいる全員を必要とするだろうが、完全に再編成しなければならない。"当時、このトピックに関する私の考えはまだ十分に練られていなかったが、ほとんどの兵器システムは完全に時代遅れで、我々が直面するであろう課題とは無関係だと考えていた。私はまた、アジアについての私の見解も述べ、アメリカが生き残るためには中国ともしっかりと緊密に協力する必要があることを示唆した。アルパーや友人たちはこの意見に同意してくれたようだが、アメリカ全体ではあまり支持されなかった。

翌日、私はアルパーと彼のオフィスで会い、父や妻、その他私の奇妙な立場から生じた同僚との問題にどう対処すべきかについて話し合った。友好的な会話ではあったが、同僚たちと正常な関係を築けるようになるまでには何年もかかることは明らかだったので、少し無意味だった。実際、同僚たちが再び私と交流を持つようになる前に、私は疎外感を感じ、アジア研究から距離を置くことになるだろう。

会話の終わりに、私は彼に送った手紙について尋ねた。「私の手紙は不適切でしたか？」と尋ねた。彼はいたずらっぽく笑みを浮かべ、「まあ、こういうことを考えてお金をもらっている人もいるんだ。そうだね、たまには意見を言ってくれと助かるよ」。アメリカは制御不能に陥っていたが、私たちはその時、美しい友情への道を歩んでいた。

2001年4月1日、米海軍の諜報機と中国のジェット戦闘機が空中衝突し、少なくとも公式発表によれば、中国機は墜落、パイロットは死亡した。その話を聞いた瞬間、私は少し驚いた。この事故は、発表の数時間前に私がアルパーにメールで送ったジョークと完璧に関連しているように思えたからだ。私たちは何事にも備え、常に計画を持っていなければならない。たとえ飛行中に翼を失ったとしても、何をすべきかのプランを持っておく必要がある。

もちろん、私が話したことと実際に起こったことの関係を実証することはできない。その話が正確だったかどうかはわからない。しかし、いったい何が起きているのだらうと思わせるような奇妙な瞬間が何度かあった。2機の飛行機が絡む事件というテーマは続くことになる。

何か大きなブレークスルーがありそうなときには興奮を覚えたものだが、時が経つにつれ、私のメールがどんなに人気があっても、どんなに役に立ったとしても、イリノイ大学の部下という立場から抜け出せず、いつも一文無しで、何年も何年も過ごしていることが明らかになった。落胆したこともあった。深夜に一人で車に乗ってドライブに出かけたこともあった。妻はもう許してくれないだろう。でも、U2とか、なんとなく気分が高揚するような音楽を聴いて、完全に孤立し、誰からも切り離されながらも、自分が何かとてつもない変化を起こしているのだと想像しようとした。

では、その間、私はどのように扱われたのだろうか？私の肉親は当初、私が精神疾患を患っているという作り話をすべて素直に信じていたようだ。父が本当にそう信じていたかどうかは疑わしいが、父は他の可能性を直視することができず、あまりにも恐ろしいことであるため、それが本当であるに違いないと自分自身を納得させる努力をしていた（私にはそれが観察できた）。

1 ヶ月ほどすると、彼らは皆、私の治療や気分、仕事について尋ねなくなった。父親や母親、兄弟なら、これほど深刻な精神病を患った私の様子を尋ねるのはごく自然なことだが、彼らは放っておいた。また、この話のどこまでが本当で、どこからが私の妄想なのかを知らうともしなかった。彼らは、私が解雇され、身体障害者となり、そして最終的に病気休暇を取るに至ったプロセスについて議論することを避けた。これらの話を注意深く追ったり、簡単な質問をしたりすると、すぐに公式の物語に融和不可能な問題が生じてしまうので、彼らは本当の質問をすることを避けたのである。

それぞれの家族に真実を伝えようと努力した結果、母は理解しようとしてくれたが、私は全員から拒絶された。家族は誰も、何が起こったのかについて意味のある質問をしてこなかった。もしそうされたら、本当のことを話し始めると心に決めていたからだ。家族に一人ずつ私の話を聞かせたのは、それから3年後のことだった。彼らは自分たちでは決して尋ねなかつただろうし、私が詳細を語った後に質問をすることも、突っ込んだ質問をすることもなかった。

このプロセスは私にとって深刻だった。私の母、兄、父のような人々が、見ず知らずの他人になってしまったのだ。まるで、この大がかりな詐欺に付き合うのが当然であるかのように思えた。私を監視しているCIAの職員は、私の家族よりも正直で素直だった。もしあの日私が殺されていたら、父は私の葬式で、息子がどうやって命を絶ったのか理解できないと涙ながらにスピーチしただろうと、私は思ったし、今でもそう思っている。彼は真実を知ることに関心がなかった。

ある程度、私はアメリカ社会のアップーミドルクラスについて何かを発見していた。彼らは不都合な真実には興味を示さない。しかし、アメリカは全体的に文化として衰退しており、市民は以前ならあり得なかつたような行動に出ていると思う。

いずれにせよ、私は家族に嫌悪感を抱き、質問されるまで何も話さないと心に決めた。というのも、私の家族はこの奇妙な話を永遠に葬り去ることに満足していただろうから。

実際、私に対する共謀罪の捜査に協力してくれる人に**会**ったことは一度もない。ごくまれに、このプロセスを暗示してくれる人はいた。

この現象から私は、問題は間違いなくジョージ・W・ブッシュではないと感じた。むしろ問題は、アメリカ文化の衰退と、知識人たちの消極性の結果であると感じた。知識人たちは皆、非常に有能だが、まったくリスクを取ろうとせず、自分たちの都合のために完全な**虚構**を維持することに**満足**している。

『夢遊病者』(Die Schlafwandler)とは、オーストリアの小説家ヘルマン・ブロッホによる長編小説の題名である。この小説では、第一次世界大戦に至るまで、崩壊しつつあったヨーロッパの文化秩序に**巻き込ま**れた3人の架空の人物の人生が描かれている。ブロッホは、当時のドイツの**教養階級**の奇妙な心理状態を**描写**している。人々は夢遊病者のように生活し、**社会**では機能し、仕事では有能であったが、最も深い意味では、**経済**とシステム崩壊の兆候にまったく**気づ**いていなかった。彼らは自分たちの行動の結果に**気づ**かないまま**社会**を**運営**することができたため、考えられないようなことが可能になったのだ。

2000年12月から2005年6月(そして今日も同様)の間に起こったことを見れば、**米国**の何が間違っていたかがわかる。**米国**は明らかに軍事クーデターで**乗**っ取られた。少人数のグループが政府の大部分を**掌握**したが、政府全体を**掌握**したわけではない。2001年1月以降の約1年間、メディアは完全に非現実的なプロパガンダを提供したが、その水面下にはまれに珠玉の情報が**隠**されていた。しかし、極めて稀な例外を除いて、私が**会**った人々のほとんどは、この明白な**事実**について完全に沈黙していた。

誰もあえて何も言わなかったし、もっと言えば、自分たちの都合のいいように妄想していた。その後、何度かクーデターが試みられ、反クーデターも起こったが、私は左翼、右翼、陰謀のブログをいくつも**読**みあさったが、インターネット上でその過程を**説明**しようとする努力は見たことがない。

ひとつだけ**確実に**言えるのは、私は明らかにブラックリストに載せられたが、私のためにユーモラスな**出来事**がたくさん演出され、私の最近のメールを引用したTシャツを着ている人に偶然出くわしたり、机の上にスケッチが**残**されていたりする奇妙な**出来事**もあった。それは複雑な**経験**であり、時に私をかなり**混乱**させた。

しかし、嫌がらせは止むことはなく、半年ほど**経**てばどうなるかとそれほど心配していなかったにもかかわらず、私や家族に**対**する殺害予告までであった。

この話は決して議論されることはないが、極めてよく文書化されており、おそらく機密扱いされていないものも含め、多くの**関連文書**が**残**っていると私は確信している。私が文書を要求し始めたのは、そのような行動をとることを支持してくれる人が**米国内**に一人も見つからないという**単純**な理由からである。

Eメールを書くことの**危険性**は承知していたが、これらのEメールを書くことは、幅広い読者に向けて自分の意見を表明するチャンスであり、その**読者**には、私に嫌がらせをするために**送り込**まれたFBIやCIAの人間も含まれている可能性が高いと、おそらく間違っ**て**信じていた。その中には、私を深く敵視し、私が**与**えた情報を**悪**用した者もいたかもしれない。しかし、それまでに私に起こったことに基づくと、私のはっきりとした印象では、彼らは基本的に**同情**的で、私の考えを知りたがっていた。

私は、外交政策に**関**して、あるいは後に他の安全保障問題に**関**して、私が提供した助言が、それを**読**んだ見知らぬ人々によって、不**道**徳な、あるいは非倫理的な目的のために**悪**用されるかもしれないという**現**実的な**危険性**があることを認識していた。このリスクは十分に承知していた。また、CIAとは何なのかという幻想も抱いていなかった。ただ、私を助けるために**重**大な**危険**を冒すことを厭わない人々の中核が、明らかに存在すると感じていた。

しかし私は、そのようなリスクがあるにもかかわらず、**米**国における法の支配の回復を追求する意思のある人物と協力する倫理的義務があると感じた。これはお人好しのための努力ではなかった。計算されたリスク

を負わなければならなかったのだ。そのリスクは、その後の数週間で増大することになる。アイデアが悪用されるリスクはあるが、アイデアを提案するチャンスがあるのなら、当時の米国の混乱に鑑みて何かをする義務がある、と自分を納得させようとした。その賭けが成功したかどうかは、最終的にはわからない。

以前、イリノイ大学で悔しい思いをしたときに、**国務省の試験**を受けようと応募したことがあった。第一志望ではなかったが、唯一の**転職先**だった。試験は2001年4月だった。私が**大学**での仕事について連絡を取った他の人たちは、しばしば返事さえくれなかった。私のものになると思っていたハーバードのポジションには、候補者としてさえ呼ばれなかった。

**国務省**のチャンスはそれしかなかった。妻は、私が**外務省**に入るという考えに固執し、中西部を離れて新しい生活を送ることに大きな期待を抱いていた。私は、そのような環境でそのような試験に合格することは絶対に不可能だと思ったが、その**象徴的な行為**に何かチャンスがあるかもしれないとも思った。

そんな中、4月18日頃、妻との**会話**の中で私は奇妙な**発言**をした。運転中に何気なく、"CIAに入ったらどうかしら"と言ったのだ。彼女は私の**発言**に驚き、**国務省**を志望するよう主張した。

私は、しばらくの間、私の頭の中で展開していた考えを明確にしたのである。もう何年も前のことであり、私とアルパーの間で交わされた**米国**の深刻な政治危機についてのやりとりを正確に思い出すことはできない。確かに私は**当時**、CIA全体がどのような存在であるかについて幻想を抱いていたわけではない。CIAが何十年にもわたり行ってきた**犯罪行為**や、**麻薬取引**や**マネーロンダリング**との**関係**についてはよく知っていた。

その少し**軽率な発言**は、むしろ、私を監視するため、より正確には私を擁護するために送り込まれた、私が**出会ったCIA**に**関係する少人数**の人々の規律と生の勇敢さに、深い感銘を受けたという意味だった。私はすでに、**ブッシュ政権**に**対抗する勇氣**を持ったこの小さな**グループ**を利用し、**米国**の**真**の改革へと前進させる方法を頭の中で練り始めていた。



明らかに証明することはできなかったが、私は、アメリカを新しい方向に導く唯一のチャンスを持っているのは、**実は CIA 自身と軍の中のこの小さな一派なのだ**と信じるようになった。私は見誤っていたかもしれない。確かに、その後起こる勇敢な行動の**数々**に対して、体制内の勇敢な魂たちは、**米国の制度的・文化的崩壊**を食い止めることはできなかったのだが、**2001年当時の私にはそれがわからなかった**。

翌日、私はアルパー**医師**と**面会**する約束をした。私は週に3回彼と**会**っていたが、精神的な問題よりも政治や外交政策について話していた。私が机を挟んで向かい側に座ると、彼は微笑みながらこう言った。あなたの**強烈な個性**なら、きっと**奥さん**を虜にできると思いますよ」。

そのセリフは突然出てきた。それまでは妻についての話はまったくなかった。アルパーは、まるで事前に完璧に練習していたかのような口ぶりを**続**けた。彼は妻の頑固さについて言及し**続**け、私が**国務省**の試験を受けることについて具体的に言及した。そして台詞の途中で、彼は最も妊娠したような台詞を使った。

その時点で、彼は私が妻と車の中で交わした**会話**を明確に指していることがはっきりした。彼は私に、（おそらくチーム全体が）私に加わってほしいという非常に**強い意見**を伝えていたのだ。しかし、それはCIAの**勧誘**とはまったく逆のものだった。私には少なくとも、私の考えに**真剣**に興味を持ってくれる聴衆がいた。その聴衆が**当時**、あるいはその後、どれほどの規模になったかは、最終的には決して答えの出ない問題かもしれない。

その後、**会話**のトーンが**変わった**。アルパーはちょっと**変わった**口調になった。彼は**冷静**でありながら、リラックスした態度で話し、突然、**本当に真剣**な表情で私に向かってきた。彼は、それまで私の周りにいたアメリカ人が誰も口にしなかったようなことを私に言った。この**国**は**アノミー**状態だ。政治は完全に混沌としている。彼は、ブッシュ一派が**権力**を**掌握**したものの、政府のあらゆる部分を完全にコントロールすることができなかったため、政治体制に**深刻な混乱**が生じていることを率直に述べた。<sup>1</sup>また、この**状態**が**続**けば、**本当の紛争**（私は**内戦**を想像して

---

<sup>1</sup>ジョージ・W・ブッシュの周辺にいた、クーデターで権力を固めようとしていた人々、彼の過激な行動に反対していた人々、暴力的な行動を考えていた人々、混乱に乗じて組織内で権力を掌握した

いたが、彼の意図以上に彼の言葉を読み取ってしまったかもしれない)が起る可能性も示唆した。

その会話は、私たちの関係だけでなく、私の役割においても転機となった。もちろん、それまでも国際関係について意見を述べることはあったが、実際に積極的な役割を担っていたわけではなく、遠まわしにアドバイスをしていただけだった。しかし今、私はアメリカ政府の水面下の対立が暴走しているのではないかと危惧していた。私は、アメリカにおける極めて危険な状況を政治的に解決するために全力を尽くそうと決心した。

私のこのビジョンは、私の人格に対するとてつもない自信（あるいは傲慢さ）の表れだと解釈することもできる。事実上の軟禁状態にあり、常に監視下に置かれているにもかかわらず、なぜか私は、ショー全体を誰よりもうまく運営できると考えていたのだ。しかし、それが私の性格であり、良くも悪くも、私は座って何をすべきか考えた。

また、このようなあからさまに違法な作戦で私を監視するように任命された人々は、明らかに地位が高く、高いクリアランスを持っていると思った。彼らにアイデアを提示するのは、これ以上ない戦略だと思った。

しかし、もちろんリスクはあった。私個人にも、私の周りの人々にもリスクがあっただけでなく、同じくらい重大なのは、私が有益な提案をすれば、それが後に悪用されるという現実的なリスクがあったことだ。ある程度は実際に起こったことだと主張することもできるだろうが、あの時は本当に選択肢がほとんどなかったと思うし、そう思っていた。

どんなリスクがあるにせよ、私はそのとき、インテリジェンスを、少なくとも部分的には、ネガティブな役割ではなく、ポジティブな役割を果たす組織へと変貌させる方法について、いくつかのアイデアを書き留めておこうと決心した。

---

が、必ずしもブッシュの支持者ではなく、軍閥に近い人々。そのとき何人が殺されたのか、私には見当がつかないが、暴力なしにこのようなレベルの紛争が起ることはあり得ないと思う。いつかわかる日が来るかもしれない。

18年経った今、私が交流した忠実なグループは、私の信頼を乱用することなく、インテリジェンスを有意義なものにし、その影響力と生の勇氣をもってブッシュ政権に抵抗しようと真摯に取り組んでくれたと信じている。しかし、私が書いたものが最終的にどのような結果をもたらしたのか、また他の考えとどのように作用したのかは、最終的にはわからない。

米国で最も腐敗し、反民主的な組織のひとつであるCIAが、積極的な役割を果たせると私が考えたとは、誰もが奇妙に思うに違いない。私は、情報機関内のこの派閥が、文字通りこの国で唯一、真実が公表される場所であることをはっきりと見た。アメリカの進歩的でリベラルな機関はすべて崩壊していた。イリノイ大学でも、危機についてこれほど率直に語ろうとする者はいなかった。だから私は、CIAには企業を助けるために法律を堂々と破る派閥があるだけでなく、適正手続きのために多大な圧力に立ち向かって闘う小さな細胞もあると感じていた。

当時形作られつつあったのは、やがてアノニマスやウィキリークスのようなグループにつながるオルタナティブな情報コミュニティであり、エドワード・スノーデンやブラッドリー・マニング、その他何千人もの諜報機関や軍の立場を利用して違法行為を公表したり、政府の責任を追及しようとしたりした人々の努力を支援するものだったと思う。私はそうした抵抗行為とは何の関係もない。最も重要なことは、独善的なリーカーたちは皆、私の事件に何の関心も持っていなかったということだ。

この抑圧に立ち向かおうとしているのは、軍や情報機関の中にいる少数の人々だけだと私は感じた。私はその姿に感銘を受け、良くも悪くも彼らとともに立ち上がることを選んだ。私は思い違いをしていたかもしれないし、確かに私の言ったことが悪用されたかもしれない。彼らは、私が友人や家族、同僚に見た臆病さとは対照的だった。

私自身は高い倫理基準で行動してきたつもりだし、それがこの小説の読者にも伝わっていることを願っている。すでに多くの人がこのストーリーの一部を知っているので、記録を正すために私が考えたことを書く義務があると感じている。もちろん、知らないことについて書くことはできない。

私が**確実に**言えることは、この「エマニュエルのお守り」という**作戦**は非常に**複雑**で、**集中的**なものであったため、**相当な文書**が存在するはずであり、いつかその**詳細**が公開されると**確信**している。この**作戦**には、**クリアランス**をまったく持たない**多くの人々**が**関わ**っており、**厳密**には**秘密**ではなかった。

私がこの本を書かなければならないと感じた理由のひとつは、私が CIA のために**働**いているという**コメント**や**ジョーク**を言う人が非常に多かったからだ。私はここで、**実際**に何が起きたのかを疑われないように、できるだけ**正確**に話をしたい。私は CIA から**報酬**を受け取ったことは一度もないし、**精神病**を患っている人のように振る舞って自分を辱める以外のことを頼まれたこともない。明らかに**非倫理的**なことをされても、**周囲**の人たちからは**おおむね親切**に扱われた。

この話を理解する**最善**の方法は、CIA がアメリカで**唯一独立**した**予算**を持ち、**複雑**で**強力**な**ヒエラルキー**を持つ**組織**で、その**内部**には**ブッシュ政権**に逆らうことのできる**派閥**があり、**当時**は**反体制派**に**いかなる地位**も**与**えることができた**と想像**することだ**と思う**。おそらく CIA は**文字通り**、**私**のような者を採用できる**唯一の組織**だったのだろう。

翌日、私は**習慣**のように**大学**の**ジム**で汗を流した。ウェイトリフティングの合間に、私は**アメリカの秩序**を回復するために何をすべきかについて、さまざまな紙に走り書きした。決して**過激な内容**ではなかった。しかし、私が書き残した**提言**は、私の**思考**と**文章**の中でも**最高**のものだった**と思う**。言葉は少なかったが、その**意味**するところは**膨大**だった。何年前かに、そのメモの**内容**を短い手紙に書き直したことがある。

私は**中国語**で書かれた文章を含むすべての資料を封筒にまとめ、"Dr. Alper"宛に送った。封筒の裏には、昇る太陽と沈む太陽を描いた：アメリカは**衰退**しているのか、それとも**再生**の瞬間なのか？もちろん、この形は CIA の**ロゴ**の形を反映したのものである。



私は、私を生かすためにあれほどの危険を冒してくれた目に見えない人々に、彼らの勇気と想像力によって、どうにかして CIA、あるいはその一部を高潔なものに作り変え、国を立て直す運動を起こすことができるのではないかと訴えていたのだ。これはかなりナイーブな仮定かもしれない。結局のところ、封筒の裏に印をつけただけであり、それ以外に何かを説明する契約書が書かれたことはない。私のコメントは饒舌で、私が斜めに言及した危機が何であるかをすでに知っている人々にとってのみ意味があるものだった。

多くの点で、私の提案は成功しなかった。CIA の中には危険な立場をとった勇敢な人々もいたし、後にその努力を引き継ぐ内部告発者も現れたが、CIA の大部分は破壊的な方向へと突き進み、それは今日もさらに加速している。

しかし、ブッシュ政権に組織的に抵抗するための努力は、基本的にブッシュ一族に属すると想定された組織から始まったという反論は成り立つと思う。野蛮な政府の中で法の支配と実力主義の断片を維持するための勇敢な戦いは、オバマの下で（限定的な意味で）行われたいくつかの改革の舞台を作り、他の政府職員に抵抗する勇気を与えた。

私が書いたことについて、記録を正したい。ここでは繰り返さないが、その文章は別の場所で読むことができる。私が書いたことは、その当時、自分がいつまで生きられるか確信が持てず、まるでアメリカにおける低強度の内戦の真っ只中にいるような気分で、迅速に行動しなければならないと想像しなければ理解できないだろう。私の視点が正しかったと思うかどうかは、当時のアメリカ社会であなたがどのような立場にあったかによってまったく違ってくる。

私が CIA と何らかの関わりがあるという話は、その後数年間、友人や同僚、そしてまったく知らない人たちの間で広く流布された。この "キャンペーン" (ほとんどユーモラスなものだったと思う) は、数年後、挨拶代わりに「あなたはアジアの言葉をたくさん知っているね。あなたは CIA のために働いているのでしょうか」と。比較的無害ではあったが、私はこの噂キャンペーンをそれほど面白いとは思わなかった。

しかし、私の行動に関する最重要事項を整理しておく必要がある。私は契約書にサインしたことはなく、CIA との協力について文書や口頭で合意したこともまったくない。私は米国でなすべきことについて助言を与え、その助言には諜報活動の改革方法についての提案も含まれていたが、勧誘された助言はほとんどなかった。CIA の人間に言われたことに基づいて第三者に発言したことはない (エージェントとして行動したことはない)。最も重要なことは、私は CIA からアメリカ政府からも、いかなる形であれ一銭たりとも報酬を受けたことがないということだ。そして皮肉なことに、私のアイデアは時折高いレベルでフォローアップされたものの、CIA は私を守ることはできても、月々の財政という最も基本的な問題の解決や、私が受けていた低レベルのハラスメントの終息に手を貸すことはできなかった。他の 3 人の教員より長く勤めていたにもかかわらず、私の学部での給与はどの教員よりも低いままだった。存在しない病気の治療費のために借金を背負わされ、4 年間、絶え間ない嫌がらせと脅迫 (時折ユーモアや応援のコメントも混じる) にさらされた。

Eメール、広告、ジャンクメール、メディアに隠されたメッセージは、あまりにも日常的で、ありもしないものを見て大袈裟に反応しているのではないかと思ったこともあった。しかし、2004 年 12 月にイリノイ大学を去る準備をしたとき、そのようなメッセージは突然消えた。時折、ある役員が私に何かを示唆しようとしていることを示すような経験はあったが、そのような瞬間はほとんどなかった。基本的に、この対話は 2004 年に終わったが、私の仕事と活動に対する機密扱いの制限は現在も続いている。

翌 2001 年 4 月 20 日、私はカルル・クリニックで検査を受けることになっていた。アパートを出ようとする時、ラジオのニュースで飛行機が墜落したとの放送が流れた。その内容は、対麻薬作戦に従事していたペル

一空軍の戦闘機が、世界福音バプテスト連盟が契約していた麻薬密売の疑いのある飛行機に発砲したというものだった。人が死亡し、飛行機はCIAが運航する飛行機からの情報提供のおかげで緊急着陸した。この放送の特筆すべき点は、CIAが「情報を提供している」という点であった。これはすぐに、前日の午後に私が書いたアルパー博士への手紙に直接言及していることに思い当たった。この放送を聞いてすぐに、その言及は私には明らかだった。おそらく、私が寝ている間に、私の手紙はすでにコピーされていたのだろう。その放送は、私が書いた手紙の内容を明白に直接言及しているように、**当時も今も私には思えたからだ。**

重要なのは、その日、私が期待していたようなアルパーとの**面会機会**がなかったことだ。その代わりに、私は一連の心理テストを受けた。テストの内容は、さまざまなイメージや図形を照合するというもので、その多くは私の手紙と非常に**関連**があるように思われた。**実際**、私はCIAの研究室の誰かが8時間かけて私の手書きの手紙を読み、納得のいく形でこの「テスト」を組み立ててくれたのだと、はっきりと感じた。

いずれにせよ、そのときから私は、**米国**で何が必要かを、体制と深くつながっているとされる人々にアドバイスしようとしていた。また、新聞で目にした私**に対する**間接的な言及や、私の**周囲**の人々の行動、あるいはイリノイ大学に貼られたポスターなど、私を支持してくれたこれらのグループのブッシュ政権**に対する**深い敵意を示唆するものがいくつもあったことも記しておく。私は**当時**、この非常事態が深刻な暴力、あるいは**内戦**に**発展**するのではないかと同じように懸念していた。その点で私は間違っていたが、あの時の**混乱**の中で**政府内**の緊張は非常に高まっていた。2000年12月から2004年7月にかけて**米国**で何が起こったのか、その物語はまだ語られていない。

いずれにせよ、私はいつまで生きられるか、何をされるかもわからなかった。だから、**米国内**の**混乱**に関する**最悪**の事態を恐れ、**危険**を顧みず立ち上がることを厭わない**CIA内**のこの小さなグループと協力することが、最も賢明な行動であり、倫理的義務であるとさえ思えた。

しかし、私は自分の行動が曖昧になる可能性があることを**自覚**していたし、自分が計画したわけでも**意図**したわけでもないことに**巻き込ま**れたり、知らないうちに利用されたり操られたりするリスクも受け入れてい

た。全体として、私は当時、そして今も、重要な問題について**真実**を語ることを許されていると思う。それは、しばしば**完全な大惨事**となる中で、大きな**恵み**だった。私はあまり操られたり利用されたりしていなかったと思うし、私が提案したことが後に**犯罪となる行為**に結びついたことは確かだが、私がアプリケーションのシフトに**関与**していないことは明らかだった。

映画『ビューティフル・マインド』が、当時の私のイリノイ大学での**経験**、特に2001年にブッシュ政権が**権力**を掌握した際に立ち向かったCIA / 軍の**離脱グループ**との**関わり**を描いた「**映画一葉**」として、どの程度**意図**されているのかについて、多くの人から質問を受けた。私が知らないことも多いので、この質問に答えるのは**簡単**ではない。

ロン・ハワードが監督したその大作は、ジョン・ナッシュ教授、とりわけプリンストン大学在学中に**統合失調症**を患った**天才数学者**としての彼の**体験**を描いたものだった。この映画の大部分は私の事件とは**関係**ない。しかし、基本的な筋書きは私のケースで起こったことをよく表しており、筋書きが私のケースにより**マッチ**するように、またジョン・ナッシュの**実際の経験**にはあまり**マッチ**しないように修正されたことを示す**証拠**はたくさんある。

この映画が公開された2001年12月は、イリノイ大学での私の地位をめぐる**論争**が最高潮に達していた時期であり、この映画で言及されていることの多くが、多くの**視聴者**に**伝わ**らなかったことは確かである。しかし私は、この映画の多くの部分が、政府、**学者**、**法律家**など、**当時同様**に政府から**虐待**を受けていた他の多くの個人を指していると**読み取**れることも提案したい。

大学で**教鞭**をとる**教授**が、**周囲**からは**精神病**を患っていると思われるが、自分は**国家**を救う**機密作戦**の先頭に立っていると**考**えている。

ナッシュが**自然体**で授業を行おうとする一方で、いつ殺されるかもしれないという**恐怖**に怯えるシーンは、私の**経験**を**正確**に**描写**しているように思えた。しかも、ナッシュの**実際の**人生にはそのようなシーンは**な**い。



ストーリーは、私のシンプルな生活に合うように、すっきりさせた。ハワードは、ナッシュが結婚しなかった女性との家庭や、性的**実験**についての詳細を省いた。2001年、イリノイ大学にいた私の方が、息子のベンジャミンが生後数カ月（映画に出てくる男の子の赤ん坊と同じ月齢）だった頃をはるかによく表している。

さらに、『ビューティフル・マインド』という本に書かれているナッシュの妄想は、それほど信じられるものではない。アメリカにおける大規模な共産主義者の陰謀から UFO の訪問に至るまで、空想的な話が含まれていた。ナッシュの幻覚は論理的ではなく、一貫したプロットを形成していなかった。宇宙人がメッセージを送ってきたり、赤いネクタイの人はみんな秘密の共産主義者だと考えたりした。同僚には、自分はローマ法王であり、南極大陸の皇帝であると主張した。自分が神から遣わされた使者だとさえ言っていた。

しかしこの映画では、ある**教授**が予期せず軍 / 諜報機関による極秘作戦に参加させられ、家族にも話してはいけないと告げられる。作戦は失敗し、彼は自分の命が**危険**にさらされていることに**気づく**。その結果、彼は精神病だと非難され、仕事を解雇される。このようなシナリオは、**実際**、まったく信憑性があり、**実際に記録された CIA に関わる出来事**とほぼ一致する。しかし、もっと重要なのは、このストーリーの**改変**によって、ジョン・ナッシュよりも私の方がはるかにこの作品に合っているということだ。

『ビューティフル・マインド』の冒頭に出てくるネクタイのシーンがその典型だ。ジョン・ナッシュはカクテルパーティーの席で、多面体のガラスを通した光の屈折にパターンを見出す。そのパターンがオレンジのスライスに投影され、再びガラスの**花瓶**を通して光が屈折し、生徒の一人のネクタイに**転写**される。そのネクタイには、昇る太陽のモチーフがいくつも、そして大きなものがひとつ、光に照らされている。

ナッシュは、「あなたのネクタイがいかに**悪**いか、**数学的に説明**できるはずだ」と言う。

この物語の中で、ナッシュは赤いネクタイを締めている男性を共産主義者の陰謀の一部だと思い**込み**、恐怖心を抱くようになったことを、ネク

タイに関する物語が示唆している。しかし、『ビューティフル・マインド』の場合、ネクタイは赤ではなく、オレンジ色である。そしてナッシュは怯えるどころか、むしろそのネクタイを面白がっている。

2002年初頭にこの映画を見たとき、私はこのシーンがCIAのロゴのコンパスの形と、先に述べたような「アメリカは昇る太陽か沈む太陽か」という問題に直接言及しているとすぐに理解した。映画を観たとき、一部のグループ以外には知られることはないだろうと思っていたあの事件が、こうして誰もが見られる形で公になったことに驚いた。今日に至るまで、なぜそんなことをしたのか正確な理由はわからないが、私が普通の教授に戻るつもりがないことは明らかだった。

映画とナッシュの人生とのもう一つの顕著な違いは、彼の妻との関係である。実生活では、ナッシュの結婚は病気の進行中に完全に破綻した。彼は別の女性との間に子供をもうけ、その他大勢の女性と性的関係を持った。私の場合は、そのような傾向はまったくなく、誠実でむしろ家庭的な生活を送っていた。

映画の中のいくつかのシーンは、私の人生における実際の出来事にかなり近い。特に、家族全員が当局から私が精神病であると告げられた時点における私の人生の混乱は、実際に何が起きているのかまったく気づいていなかった。

ナッシュと彼を担当する国防総省のウィリアム・パーチャー（エド・ハリス扮）との会話は、私のアルパーでの経験と実によく似ていた。映画の中でナッシュがやっていたような信じられないほどの新聞の切り抜きの山を私は持っていなかったが、将来の参考のために自分の経験を示唆する記事や広告を切り取った時期もあった。それらの切り抜きのほとんどは、その作業が何年も、あるいは何十年も続くとわかったときに捨てた。この映画には、当時同じような扱いを受けていた米国内の多数の人々を巻き込んだ、まだ公表されていない他の事件への言及も含まれていたと思う。

映画の最後、ジョン・ナッシュは老人になってノーベル賞を受賞する。このシーンは、私が何十年もの間、公的な役割から遠ざけられていること、そして、もし私の努力が評価されたとしても、それは人生の極めて

遅い時期になることを示唆していた。少なくとも韓国内では、そしてアジア全体では、12年以内大きな注目を浴びるようになった。

私はこの危機の1年前に、イリノイ大学を去り、できればアカデミズムからも離れようと心に決めていた。イリノイを離れるためにハーバード大学の教職に応募し、**国務省**の職にも**応募**した。どちらも私の夢の仕事ではなかった。もっと幅広く就職先を探すこともできたが、**通信教育**における私の革新的な技術で十分なキャリアが築けると思っていた。しかし**実際**には、私が提案書に書いたアイデアの大規模な**発展**において、私はほとんど何の役割も果たしていない。

少なくとも**数年間**は、私のキャリアが終わったことは明らかだった。米**国**が何をすべきかについて私が提示した助言は、一部の**人々**には深く感謝されたかもしれないが、彼らが私の地位を向上させるためにできることはほとんどなかった。尤も、彼らは私に少しは面白いことをしてくれ、私を脅威から守ってくれた。

多くの人が私を最有力候補と見ていたにもかかわらず、私が**応募**したポジションでハーバード大学から講演に呼ばれることはなかった。そのリストから私を外すには、**相当な努力**が必要だったに違いない。しかし、外務省への**応募**は**進み続け**、私は最初の筆記試験に合格した。驚いたことに、3月に外務面接と試験のためにシカゴに**来る**ようにという手紙が送られてきた。

アルパーに外務省の面接のことを話すと、「君の**病気**のことを考えると、まだ少し早いと思うが、**挑戦**してみたらどうだ」と言われた。彼の言葉をどう受け止めるべきか迷ったが、私は計画を実行に移し、レンタカーを借りてシカゴ大学の試験を受けに出かけた。

その夜はシカゴ大学近くのインターナショナル・ハウスに泊まった。とてつもない**冒険**だった。インターナショナル・ハウスはロマネスク様式の建物で、モールディングや木工細工が素晴らしく、私の好みにぴったりだった。**残念**ながら、今はもう部屋を貸していない。建物内には、私のEメールに書かれたテーマや、**当時**の政治的な**出来事**に言及したポスターや**広告**がたくさん貼られていた。それはかなり面白い**経験**で、そう

でなければ残酷な夏になるところだったのだが、私の中ではリラックスしたひとときとして際立っていた。

翌朝、コーヒーを飲みに早朝に出かけ、ミシガン通りのテストセンターまで歩いた。

試験そのものは、エッセイを書いたり、同じように試験を受けに来た人たちといろいろなシナリオを演じたりと、何の変哲もないものだった。試験を担当した外務官との最後の会話は奇妙なほどユニークだった。彼らは私に不合格であることを告げ、健闘を祈った。彼らはややユーモラスに、そして親密そうに私に告げ、あるレベルでは私のすべてを知っていることを示唆した。

事務所を出て、明るい日差しの下、公園の緑の芝生に出たとき、ふと、試験を受けた事務所にカレンダーを忘れたことに気づいた。慌てて取りに戻ると、以前は現れなかった別の外務官僚が出迎えてくれ、かなり思慮深い短い会話を交わした。その後、その人は私がイリノイにいる間、私の話を聞くために配属された人の一人だったのだろうかと自問してみたが、私にはわからない。自分の意志でカレンダーを置き忘れたような気もするが、すべてが振り付けられたような気がした。誰にもわからない。

レンタカーに乗り込み、駐車場を出ようとした。出口を指し示す矢印が何度も何度も私を間違った方向へ導いている。それはゲームと化し、ついに私は外に出ることができた。それは、たとえ外務員試験に合格しなくても、私にはまだサポーターがいるということを示唆するための、一連の愉快な悪ふざけやトリックの始まりだった。

私の個人的な利益のための、ちょっとした特殊作戦の誇示だった。あの体験を作り出すために、私一人の利益のためだけに、とてつもない努力が払われたに違いない。私を楽しませるため、あるいは神秘化するために仕組まれたこのようなイベントは、その時期にたびたび行われた。

ラジオから聞こえてきた音楽はとても特徴的で、その放送はすべて私のために作られたものだと確信した。私の好きな曲も何曲か入っていたし、もちろん『ホテル・カリフォルニア』や、有名なエンディングの "You can check out anytime you want, but you can never leave." も入っていた。

国務省にまともに入れなかったとはいえ、内定をもらったと思っていたが、それは私の読み違いだった。私を監督し、管理し、最終的には私を守るために送り込まれた実務レベルの人々が示してくれた親切は、彼らがどんなに配慮してくれたとしても、私のキャリアに与える影響は限られていた。最初のうちは、私たちの抵抗に連帯感を感じる楽しい瞬間もあったかもしれないが、2001年の夏が近づくにつれ、私は連邦政府内で起こっている非情な戦いを次第に意識するようになった。私は、以前と同じように低レベルの嫌がらせを受け、同僚や友人から完全に孤立し、疎外感を味わうようになっていた。

私に何が起こるかについての私の予想は完全に間違っていた。私は、自分の役割の結果、すぐに大成功を収め、私が支援し、私を支援してくれた人々が、すぐに世界で強い地位に就き、その結果、私のキャリアが大きく飛躍すると考えていた。しかし、単に殺されるか、あるいは刑務所に入れられ、私のキャリアが終わる可能性も十分にあると思った。もうひとつの可能性、つまり、多くの人が私の話を知っていても、それを語らないという可能性については、思いもしなかった。『ビューティフル・マインド』などを通じて、私はわかりにくい形で不当に評価され、何年も、あるいは何十年も、屈辱とキャリアの挫折に苦しみ続けるだろう。

また、私に対して行われた行為は違法であり、多くの人々がこの行為を直接目撃していたため、責任ある人々はこの茶番劇を終わらせ、すぐに事態を正常に戻すために全力を尽くすだろうと私は考えていた。私のハラメントの中であからさまな法律違反を犯した者が何年も続き、何百人、何千人もの人々がその過程を知ることになったとしても、まったく問題はなかった。

振り返ってみると、この作戦の全目的は、私を威嚇したり罰したりすることではなく（明らかに私は罰せられたが）、むしろ警告として最高レベルの政策を変更しようとした人物に何ができるかを世界に示すことだ

ったようだ。私の家族、友人、同僚、そして基本的に頼まれた地域のすべての人が、この違法な茶番劇に参加した。その**事実**は、時を経て、私が**自国**を見る目を変えた。

私は本書で「ブッシュ政権」という言葉を、若干の不安を抱きながら使っている。ブッシュ、チェイニー、ラムズフェルドをはじめとする政権のメンバーは、弾劾に値する**数々の違法行為**に手を染めたが、私が目撃した行為の多くは、早くから**関心**を失っていたトップが命じたものではなかったと確信している。むしろ、**国防総省**やその他の場所で生じた**権力**の空白を利用し、**権力を拡大**するために**独自のキャンペーン**を展開したのは、政府の下層部にいた**幅広い人々**だった。我々はブッシュを非難するが、それは部分的にしか正しくない。略奪と**温情主義**はブッシュだけの産物ではない。これらのグループはブッシュのために働いていると**周囲**は素朴に思い込んでいたが、多くの場合、連邦政府を破壊しようとする彼らの努力はブッシュとはまったく**関係**がなかった。

私の2001年の夏はスローだった。2月、3月、4月の行動は恐ろしいものだったが、同時に刺激的で有意義なものでもあった。特定の派閥の間で私が注目されたとしても、奇跡的な回復の可能性はなく、私のキャリアを回復させるには**数年**、もしかしたら**数十年**かかる可能性が高いことが明らかになった。第1ステージの興奮はすぐに冷め、私はかなり失望した。

それでも助言をすることもあったし、**実行**に移されることもあったが、ほとんどの場合、私の時間はイリノイ大学に提出しなければならない「**病氣**」の書類の記入や、私の利益のためにでっち上げられた多額の**医療費**による莫大な借金の**返済**、新しい住宅ローンの**支払い**に費やされた。診断された**病氣**で苦しんだことがなかったこと、大学の給料以外の**収入**を得ることがいかなる形であれ**一銭**たりとも許されなかったこと、他人との交流に極端な制限が課せられたことが、この期間をはるかに苦しいものにしていった。私は2月という**最悪**の時期を超える、新たなレベルの**孤独**に達した。

しかし、その過程で最も苦しかったのは、民主主義を回復するための勇敢な闘いの中で、私は英雄的に殺されるわけでもなく、世界中であれほど**幅広い支持**を得た驚くべき有能な人物として**宣伝**されるわけでもない

ということを知ったことだった。むしろ、私は同僚たちから長い間、何者でもない者のように扱われ、口をきいてもらえなくなるのだ。

ようやく授業を終え、いわゆる病氣休暇に入ることができてほっとした。二つのクラスを教えながら、同時にアメリカ史上最大の政治危機（と私は思っていた）の一つを理解し、それに対応しようとするに巻き込まれ、政治的な変化があれば私たち家族はいつ危険にさらされるかわからないと思うと、まさに殺人的だった。講座は時間がかかり、何も問題がないかのように装い、日本の古典詩や中国の小説に集中することを求められた。

アルパー博士から、次の2学期は病氣休暇に入ると告げられた。もちろんほっとしたが、このプロセス全体が完全に政治的なものであることを露骨に示すものだった。何の問題もなく2つのクラスを担当していたにもかかわらず、私は健康診断も受けず、その理由も説明されないまま、病氣休暇を命じられたのだ。何が起きているかは誰の目にも明らかだったはずだが、このプロセスがおかしいと私に指摘したのは1人か2人だった。

また、アメリカ全体に対する見方も変わり始めていた。最初は、ジョージ・W・ブッシュが明らかに違法なやり方で政権を握ったことに怒りと屈辱を覚えた。しかし時が経つにつれ、真の問題はブッシュ政権でも、彼らの戦争への推進力でも、彼らが行っているその他の楽しい遊びでもないと感じるようになった。本質的な問題は、個人の倫理観の低下であり、アメリカにおける制度の腐敗であった。そのために、大学教授、政府高官、専門家、そして私の家族までもが、私が最悪の政治的迫害を受けるのを横目に、ブッシュ政権下でも大して変わっていないかのように装って、裕福に暮らし続けることはまったく問題ないと考えるようになったのだ。

もし中国やロシアの知識人にそのようなことが行われていたら、彼らは大騒ぎしただろう。しかし、ここにいる私は身近な家族であり、彼らは私の話のあいまいさを浮き彫りにするかもしれない質問を意図的に避けた。例えば父は、2月末に一度だけ電話をした後、私の「精神病」について再び尋ねることはなかった。家族は誰ひとりとして、私の話を尋ねようとはしなかった。彼らは私が何百もの仕掛けられた屈辱を受けるの

を受け身で見ている。作戦はまったく秘密ではなかった。近くにいたほとんどの人は、何が行われているのか正確に見ることができた。

シャンペーン、そしてイリノイ大学のかなり敵対的な環境から逃れたいという希望は、アルパーから「精神疾患から回復するためには家を買わなければならない」と指示されたことで終わりを告げた。この命令は最も落胆させるものだったが、選択の余地がないことは明らかだった。私は一刻も早くシャンペーンを出て、自分の技術を生かせる大都市に移り住みたかった。イリノイ大学で教鞭をとっていた2年目から、そう考えていた。シャンペーンのような中西部の小さな町は、小さな子供を育てるにはもってこいだ。全体的に見れば、私も妻もできることの制限に不満を感じていたし、無愛想な同僚にもうんざりしていた。家を買うということは、何十年とは言わないまでも、何年もシャンペーンにすることが決まっていることを示唆していた。

息子のベンジャミンは2001年6月11日に生まれ、その存在は私の人生に多大な影響を与えた。ベビーカーで近所を連れ回したり、アパートのカーペットの床と一緒に格闘したりと、ベンジャミンと膨大な時間を過ごしたこともあった。その後、私はずっと忙しくなったが、当時はちゃんと彼と過ごす時間があった。そして、彼は思慮深く、常に注意深く耳を傾ける、素晴らしい息子だった。彼は明らかに父親が軟禁されていることを知らなかった。

しかし、家庭生活の楽しみがすべての問題を解決してくれたわけではない。私たちは何年も倒産の危機に瀕し、家族は私の人生に何が起きているのか質問することさえ嫌がった。私は同僚たちから深く疎外され、その関係を回復することはできなかった。私の国が軍事クーデターを起こし、これほど長い間深刻な政治的対立の淵にありながら、人々が事態の深刻さにまったく気づいていないように見えることが理解できなかった。また、彼らがそのような話題について話すような会話を避けることにも気づいた。彼らは明らかに、何かが深刻に間違っていることを知っていた。

ベンジャミンが生まれて間もなく、私たちはシャンペーンの新しい家に引っ越した。大学から少し離れたチャーチ・ストリートにある、1930年代に建てられた1階建てのバンガローだった。とても質素な家で、当



時はわずか75,000ドルで購入することができた。当時の私たちの**経済状況**を考えると、それくらいが**妥当な金額**だった。とても魅力的な木工細工が施され、私が育った家のようなカウンターウェイト付きのクラシックな窓があった。

最初は家を買おうとは思わなかった。近い**将来**、何とかしてシャンペーンから**脱出**したいという密かな希望を抱いていたからだ。しかし、アルパー博士はどうしても家を買えと言い、これまでのことを考えると、そのような命令にノーと言える立場にはないと思った。家を買うということは、何年も、あるいは何十年もイリノイに留まらなければならないということだ。それは私にとって、キャリアを前進させる希望が絶たれることを意味していた。それは**正確な状況判断**ではなかった。

**実際**、引っ越しを計画し**実行**に移したことは、非常に貴重な**気晴らし**となった。家を掃除し、木工細工を磨き、地下室を修理することに費やした時間は、私を麻痺させていた**地政学的・政治的な大問題**から私を解放してくれた。私は家の掃除と修理に日常を見出し、不規則だった生活に秩序をもたらした。私には定職がなく、絶え間ないプレッシャーや不明瞭な脅威にさらされ、**国家**がどうなるのか、自分がいつまで生きられるのかさえわからなかった。私は心の整理をつけるため、家の修理に打ち込んだ。

引っ越しが終わり、地下室のペンキが塗り直されると、**残りの夏**はトマトやキュウリを植えたり、芝を刈ったり、ベンジャミンをベビーカーに乗せて近くの公園まで散歩に出かけたり、料理を手伝ったり、日常生活に没頭した。遠く離れたワシントンD.C.のことを心配する時間は、たとえそこがどんなに深刻な**状況**に見えたとしても、ずっと少なかった。

2001年7月、アルパー**医師**は私からの仕事についての質問に肯定的な返事をくれた。**収入**が減り、**出費**が増える中、コンサルティングの仕事や**翻訳**の仕事を探すには十分回復していると言われた。私は何時間も何時間も**翻訳**の仕事を探したり、友人にコンサルティングの仕事がないか聞いたりした。私の仕事に**対する報酬**は一銭もなかった。それからの15年間、通常の給料以外の仕事の**対価**を受け取ることは極めて稀だった。

また、アジアと仕事をしている他の企業とも話をし、彼らのビジネス努力に私が協力できるかどうかを確認した。私には資格もあり、アドバイスもたくさんしたが、近いうちにお金を**払**うとよく言われたものの、誰も一**銭**も**払**おうとしなかった。

一例を挙げると、私は友人からカリフォルニアのグループを紹介され、中国でジュラシック・パーク型のテーマパークを計画する契約を結んだ。彼らは資金があり、どうしても私の助けが必要だと言った。私はプロジェクトの責任者と何時間も話し、彼の懸念に耳を傾け、詳細な提案書を書いた。私は彼らのパンフレットを編集し、有益な提案をした。彼らは私を中国に飛ばしてくれると言い、コンサルティング契約を結ぼうとしていると言った。彼らを紹介した友人は非常にプロフェッショナルだったので、それはとても合法的に見えた。しかし、最後の瞬間に、彼らは突然連絡をよこさなくなった。彼らは私に一**銭**も支**払**わず、二度と手紙も電話もよこさなかった。

2001年の夏から2004年にかけても、誰かが私に**研究**プロジェクトの話を持ちかけてきたり、**学会**に招待されたり、ワシントンD.C.で開催されたセミナーに**参加**する**機会**があったりと、このパターンは何度も繰り返された。ほとんどの場合、ブレイクスルーが近いと思われた矢先に、事態は破綻した。

振り返ってみると、アルバイトを探しているときに話をした人たちの多くは善意で、生活を苦しくするようなことはしなかったが、私を助けることは何もできなかったし、彼らはそれを知っていた。そのようないくつかの**経験**は興味深かったが、アルパーに意見を述べ、イリノイ大学から**病気**休暇手当を受け取る以外、私がまったく何もできないことは次第に明白になっていった。

それから3年間、本や新聞を**読**んだり、もちろん書いたりする以外には、ほとんど何もしない時期が長く**続**いた。大学の同僚や友人、家族からの連絡もほとんどなかった。アルパーともあまり**会**わないこともあった。

そして突然、誰かから連絡があり、何かのトピックについて刺激的でエキサイティングなメールのやりとりをするのだ。それは**教授**かもしれな

いし、ビジネスマンかもしれないし、NGOの代表かもしれないし、政府高官かもしれない。その議論は興味深く、私が中心的な役割を果たせるようなプロジェクトにつながっているように思えた。しかし、数週間か数カ月もすると、そのプロジェクトは立ち消えになり、そのパーティーから連絡が来ることは二度となかった。2001年以前はそのようなことはなく、自分の活動範囲が積極的に制限されていると感じていた。

しかしその過程で、私は何枚もの履歴書を書き、さまざまな経歴を持つ見知らぬ人々に自分を売り込もうとした。その経験は、もどかしいものではあったが、後にワシントンD.C.にいたときに限りなく役立つ真のスキルを身につけるのに役立った。

2004年まで、私は何度も失敗を繰り返していたので、実際に何かが届いたときにはとても驚いた。言うまでもなく、このような意図的な嫌がらせ（特に政府機関の命令による場合）はすべて完全に違法であり、重罪となる低レベルの心理戦を形成する。しかし、私の周りの人々は皆、この茶番に付き合ってくれた。過去の出来事について調べようとする人は、私以外には一人もいなかった。事実、私の周りにいた教養あるアメリカ人たちは、私の罪が平和を擁護し、権威主義的な政府に反対することであったことを知りながらも、このようなあからさまに違法で非倫理的なプロセスに従うことに何の問題も感じなかったのである。その事実が、何よりも私の深い疎外感を招いた。しばらくして、私は深く尊敬するようになったまともな労働者階級の人々のそばに居ることを好むようになり、学究的な同僚には何も言えなくなった。

私は1年間のリハビリプログラムに参加することになり、集中的なセラピーによって言語能力と社会性を回復させることになった。そのプログラムに関わるほとんどの人は、私が単に軟禁状態にあることを理解していたと思う。私のリハビリに関わった人たちとの交流は友好的で、ユーモアさえあった。この訓練の要点は、一線に従わない知識人に何ができるかを他の人々に明らかにすることだった。それ以外の意味はなかったし、抵抗もほとんどなかった。

リハビリテーション・プログラムは、ジュリー・ヘングストというイリノイ大学の心理学助教授によって運営されていた。彼女は「成人発症の認知言語コミュニケーション障害」の専門家で、彼女とギリシャからの

大学院生アンティゴネが2001年9月から2002年3月まで、週に2回私と面談した。その面談は滑稽なもので、私は言語的な問題にまったく悩まされていなかった。しかし、それから約16年後、私は言語的な問題を抱えるようになる。私はこのプログラムに参加するしかなく、そこで人前で話すことや文章を書くことについての良いアドバイスをたくさん見つけた。

その過程で、私は**学者**ではなく、人前で話をするようになったのだと思う。数年のうちに、私のキャリアにとって新聞への執筆は**学術的な執筆**を凌駕するようになった。その**変化**は、この時期から始まったというか、アルパーが私にアメリカの外交政策について意見を求めた瞬間まで遡ることができるだろう。

ジュリーはとても親切な女性で、個人的にも**現実的**にも私を助けようと努力してくれた。私たち家族は彼女の家族（2人の娘）と何度も**会**い、彼女は個人的に私の幸福を心配してくれた。しかし彼女は、他の人たちと同じように、決められた脚本に**従**うことにまったく**満足**していたし、このプロジェクト自体の**正当性**について疑念を抱くこともなかった。当時、イリノイ大学や他の大学の同僚たちは誰も私に話しかけてくれず、深く孤立していた私にとって、彼女は非常に重要な存在だった。だから、彼女の友情は大きな違いを生んだし、彼女のアドバイスは、私が誰からももらっていた唯一のアドバイスだったから、私はとても**真剣**に受け止めた。しかし、結局のところ、彼女の行動も他の人たちと同じように非倫理的だと思った。私は最終的に、その**立場**が扱いにくいものであればあるほど、誰にでも責任があると考えことにした。

アルパー**医師**は、セッションの間、何時間も私とアメリカの政治について話した。私たちのミーティングに**医学的**な要素はなかった。時折、**保険会社**に提出する**数**多くの書類のどれに私が記入しなければならないかを説明してくれた。しかし、2001年7月、突然、彼は私に、日本文学と中国文学に関する私の本の原稿の修正に取りかかる必要があると告げた。同僚からも家族からも、私が人生でできる仕事は**教授**になることだけだと思われていた。この考えは、アルパーや私の**学科長**の**発言**によって強化された。もちろんそれは、私が以前から何度も表明していた、**学問**から離れたたいという**強い願望**とはまったく**反対**のものだった。一般的には、私がこの本を書くしか道はないと思われていた。しかし、私にと

っては、ハーバード大学出版局からのリジェクトがかなり怪しかったし、古典文学について読むというプロセスにはもはや興味がなかった。私にとって、この仕事はほとんど不可能に近かった。それから約10年後の2011年、ようやく原稿の半分を本にすることができた。

原稿は2001年1月、私に対する嫌がらせの一環としてリジェクトされた。ハーバード大学出版局のハーバード・イースト・アジア・モノグラフ・シリーズの編集者であるジョン・ザイマーは、リジェクトの問題について私と話し合うことを拒否した。原稿の問題点が列挙された手紙を受け取ったが、どれも原稿をボツにする有力な理由にはならなかった。

その2年後、アジア研究協会の会議でツァイマーに会ったとき、彼は私と話をするのを避けるように私から離れた。

このような仕事上の親密な関係の変化は、ハーバード大学での指導教官であり、親しい友人でもあったスティーブン・オーウェンとの交流において最も痛切に感じられた。オーウェンは私が大学院生だった頃、様々な形で私を支援してくれた。そして私たちは大学院でのキャリアの中で、文学、歴史、その他多くのトピックについて文通を続け、それらは私の執筆活動の中でも最高のものの一部だと感じていた。彼は私の人生における重要人物であり、私が知識人として自分自身をどのように考えるかに大きな影響を与えた。しかし、スティーヴン・オーウェンは決して楽な性格の持ち主ではなかった。

オーウェンは2001年4月、私の原稿がボツになったからといって希望を失わないようにと、短い手書きのメモを送ってきた。彼は自分の最初の原稿もボツになったことを話した。それは感動的なメモだったが、私たちの文通はそれで終わった。彼はそれ以来、私からのメールや手紙に返事をくれることはなかった。2005年のアジア研究協会の会議で少しだけ彼に会い、簡単な挨拶をしたが、その後会話を交わすことはなかった。

その後10年間、ボストンに行くたびにオーウェンにメールを書いたが、返事はなかった。関係が完全に終わったことについての説明はない。おそらくオーウェンは、私が文学の教授であることから遠ざかって

いくのを感じていたのだろうし、私がそうになっていくのを見て、あまり共感できなかったのかもしれない。そうかもしれない。しかし、可能性として、私に**対する嫌がらせキャンペーンの一環**として、二度と私に手紙を書くなと明確に指示されたという**事実**は否定できない。

私はアジア**研究**の同僚たちから完全に切り離されていた。アルパーは政治的な話しかしてこなかったし、私は古典文学の執筆過程には否定的なイメージしか持っていなかった。本の原稿を書く意欲を高めるのは至難の業だった。ほとんど不可能に思えた。しかし、何とか無理矢理にでも修正を始めた。韓国と日本における中国の大衆小説の影響についての本を書こうとする代わりに、中国の小説の日本での受容だけに焦点を当てることにした。2003年の夏に日本でこの原稿に取り組む**機会**を得て、2011年にソウル大学で出版する本に改訂した。

奇妙なことに、イリノイ大学で完全に孤立していた私は、友人のアダム・カーンに誘われ、2001年10月にハーバード大学で**学術発表**を行った。私はこれをとてつもない突破口だと思い、**学者**としてすぐに元に戻れると考えた。しかし、そうではなかった。理由はわからないが、私はハーバードの人々に**会い**、親しい友人であるエリック・マーラーとニール・カトコフと一緒に過ごすという、たった一度の**機会**を与えられた。2001年にイリノイを離れる唯一のチャンスだった。

私は9.11のちょうど1週間後にハーバードに行き、そこでどんな**混乱**が待っているのだろうと思った。あのような大混乱の中で、米国がどのようにして自国を維持することができたのか、今でも私には謎である。ハーバード大学で博士論文を書いていたカトコフと話し、私の身に起こったことを少し話してみた。私の最も信頼する友人の一人であるニールが、私に起こったことの詳細を聞きたくないと言ったので、私は驚いた。彼は本質的に私を切り捨てたのだ。彼も、私が**声**をかけた他の誰ひとりとして、9.11でいったい何が起こったのか話したがらなかった。私にとってアメリカはますます異質なものに感じられ、そのダメージはそう簡単には修復できないものだった。私は、アメリカの知識人や**専門家**たちが、部分的には軍事政権下にある**国**ですべてがうまくいっているかのように装っていることに**嫌悪感**を抱いていた。

私の活動を制限する作戦は、巧妙でも限定的でもなかった。何百人、何千人もの人々が、私が正当な手続きにアクセスすることを否定し、私が精神疾患を患っているという虚構を広め、世界中の同僚や友人たちとの交流を遮断し、私を低レベルの嫌がらせの対象にしようとする努力に巻き込まれた。彼らは何年も、何十年もそうしてきたが、これに抵抗したり批判しようとした形跡を私は見たことがない。関係者全員が、この件がいかにも違法で、いかにも倫理に反するかを知っていたに違いない。それなのに、彼らはこの一連のプロセスを喜んで引き受けたのだ。

とはいえ、孤立無援の中、何度か実際に活躍する場面もあった。最も顕著だったのは、オクラホマシティのアルフレッド・P・ムラー連邦ビル爆破事件の共謀者として告発されたティモシー・マクベイの事件である。復讐に燃えるブッシュ政権は、2001年5月に彼を処刑しようとした。私は、当時の政治的混乱と、彼の支持者がさらなるテロを起こす可能性を考慮すれば、この男を死刑にするのは重大な誤りであると主張した。

私の提案に対して、FBIが裁判が強行されたことを示唆する大量の文書を公開するという形で、即座に反応があった。私を助けようとした政府職員は全力を尽くしてくれたが、悲しいかな、傲慢なブッシュ政権の危険なプロセスを止めることはできなかった。マクベイは2001年6月11日に処刑された。

時には、同僚や私を見守る人たちから屈辱的な虐待を受けたこともあった。しかしある時は、大学やアメリカで重要な役割を果たすまたとない機会を与えられた。時にはブッシュ政権に反対する組織作りの中心人物としての役割を果たしながら、誰とも会う機会を与えられず、同じような罵倒を浴びせられ続け、財政的、官僚的な課題を果てしなく与えられ続けた私が、どうしてそこまで評価されるのか、私には理解できなかった。

おそらくブッシュ政権に反対する勢力は、連邦政府のある部分を再び支配することはできたが、ブッシュに忠誠を誓う人々を一部から追い出すことはできなかったのだろう。企業も同様だった。その結果、奇妙で予測不可能な政治環境が生まれ、多くの不可解な行動が起こった。あるレ

ベルでは自由に好きなことができたのに、別のレベルでは美德の檻に閉じ込められたままだった。

新しいキャリア、新しい収入源、エキサイティングなネットワークに私を迎え入れてくれる新しい友人たち。そのパターンは予想通りだった。まず、電子メールでの提案、次に電話での会話、そして最終的には私が訪問してポジションを得るという話だった。しかし、結局は必ず、その提案はうまくいかなかったり、立ち消えになってしまう。ビジネスマン、研究者、あるいは政府高官からの連絡は、徐々に減っていき、完全に終わってしまう。どの場合も、私は一銭も報われなかった。

当初、私は、北東アジアにおける真の経済的・政治的統合に向けた運動を米国の支援を得て始めた罪に対する罰であり、予算を危険にさらしたくない国防省の権力を怒らせたことが原因だと考えていた。私の処分の意味は、私が計画していたことをやめさせ、二度と何もしないようにすることだと思っていた。しかし、それは私の嫌がらせの目的ではなかったことが明らかになった。むしろ、CIA（および他の機関）は私を保護し、支援し、もっとやるように、もっと率直であるようにと励ました。

嫌がらせや私の活動の妨害（これは18年経った今でも、あるレベルでは行われていた）の意図は、むしろ、自分の狭いキャリアパスに集中するのではなく、完全に独創的なことをしようとし、遠慮から外れて大それたことを考えた人物に何が起こりうるかを、他の皆に示すことだった。そのメッセージは、過激な抑圧はシステムの中で可能であり、それについては何もできないというものだった。たいていの場合、保守派や中国の脅威を煽る軍事タカ派の側には、私に対する特別な感情はなかった。

この新進気鋭の若いリベラル派が、非常に有益な中国封じ込め政策を台無しにしかねないところまで追い込み、しかもそれを何の権限もなく、完全に独断でやってのけたことに対して、軍の一部には怒りがあったかもしれないが、そのような要素は大きくはなかったし、後に私の著作が直接批判されることもなかった。

間違いなく、私が自分ひとりでアメリカの政策に大きな影響を与えることができ、連邦政府自体の内部で抵抗を推進してきたという事実は、私



の「政治的破壊力」を詳細に記した分厚いファイルを持っていたことを意味するが、その詳細は誰にも公開されなかった。

基本的に、私は正社員として働くことも、既成の組織に関与することもブラックリストに載せられていた。なぜなら、私は政治的スキルを持ち、**学歴**や**社会的ネットワーク**もあり、放っておいても大きな役割を果たせると思われていたからだ。野心的な若者の多くは、ハーバードの教授や成功した弁護士、上院議員、あるいは大統領になりたがる。それらは予測可能な目標であり、そこに到達するための道筋も決まっている。しかし、私は2000年当時、自分のキャリアを第一に考えることをやめていた。すべてを投げ打ってでも、**大学**や**国際関係**のあり方を改革することで成功できると考えたからだ。それはかなりリスクなアプローチであり、そのような道を選ぶ人はほとんどいない。しかし、私は**国際遠隔教育**というコンセプトにそれだけの**価値**を見出したのです。

私は多くの点で、我慢できない自惚れ屋だった。自分のことばかり話していたというよりは、自分が提唱していることの**価値**を完全に確信していたのだ。自分ひとりで座ってアメリカの外交政策を考え、それを主張することは十分に可能だった。自分の考えを**説得力**のある形で書き上げ、あたかもその考えが常識であり、議論すべき重大なものであるかのように、他人と語り合う自信もあった。しかも、私は決してイデオロギ一的な**内容**を示唆するようなやり方で自分の考えを示したりはしなかった。私は、耳を傾けてくれる人なら誰にでも喜んで話をしたし、イリノイ大学には保守的な人物を友人として多く持っていた。

2001年秋には、長期的な政治キャンペーンは決定的になり、私が公的な場で再び注目を浴びることはなかった（非公式な場ではしばしば話題になったが）。

米国で政治的**権力**を手に入れることになるからだ。私には、執筆や講演を行う**権限**と、時折、米国や世界中のいくつかの雑誌に私の文章を掲載する**権限**が**与えられた**。その結果、私はエッセイストとしての道**を歩む**ことになった。

当時から私の家族、友人、仲間は、私との交流**に関して**何を命じられたのかを正確に話すことを拒んできた。誰ひとりとして、命令を受けたこ

とを私に確認した者はいない。私のケースはあまりに奇妙で、あまりに深刻であったため、私の友人や同僚の誰一人として、**実際**に何が起こったのかについて私に尋ねなかったことは、極めて重要なことである。私はこの**事実**を、**当時の米国**を特徴づけていたグロテスクな臆病さと**偽善**の表れだと考えている。

私の家族（父、母、義父母、兄弟姉妹、いとこ、**両家**の叔父、叔母）の場合、私がどうしても主張するまれなケースを除いては、20年間この話題を持ち出すことは皆無だった。私は個人的に、彼らは**単**に怯えていただけでなく、自分たちの行動がどうあるべきかを指示する機密扱いの**勧告**を受けていたと考えている。このような指令が私の**周囲**で何百と出され、この18年間で何千という指令がアメリカ全土で出されたと信じるに足る理由がある。アメリカ史上最大の詐欺のひとつは、なぜこれほど多くの人々が、そのような違法な指令に、ほとんどの場合、**忠実**に従ったのかということである。手紙にアクセスできなくても、私の周りの人々の不自然な行動によって、その存在を証明することができる。そのような調査に興味のある人がいれば、それは**簡単**なことだ。

20年間守り**続け**られてきた2つ目のポリシーは、事件全体をメディアやEメールのやりとりに出さないというものだ。誰もがこの事件をなかったものとして扱うよう求められた。この包括的な命令は、陰謀論ブロガーや右派、左派のオピニオンリーダーにも及んだ。彼らはこの指示に**忠実**に従った。

プライベートなことでさえ、誰も私とその**出来事**について話し合おうとはしなかった。まれに、私がそのことを問題にすると、何が起こったのかについて質問してくれる人はいたが、私に**対**するこのような扱いをやめさせるよう主張する努力はなく、ましてや、この話を公にするよう主張したり、補償を受けるべきだと主張したりすることもなかった。私が非常に違法で前例のない方法で虐待されていることがあからさまであるにもかかわらず、**周囲**の誰もこの問題について議論しようもしないことが私を**悩**ませた。そのうちに、ブルース・カミングスのような著名な「**進歩的**」知識人を含め、この茶番に喜んで付き合う知識人仲間に**嫌悪**感を抱くようになった。つまり、他の陰謀は左翼によって**糾弾**されるべき恐ろしい犯罪だったが、私のケースは "起こらなかつた "ものだった

のだ。私の仲間のアメリカ人たちとの体験は、2000年の**実際**の出来事よりもはるかに辛く、有害なものだった。

### **第3章**

#### **私のパティ・ハースト時代**

私の状態の変化の速度は氷河期的だったが、**実際**の変化はあった。2001年秋に受けた言語療法は継続され、2002年春にはまた別の心理学者と面

談した。そしてその学期の終わりには、将来また教壇に立てるかもしれないという話もあった。これらすべての変化は、私の孤独や、リハビリのための絶え間ない挫折や書類作成を軽減することはほとんどなかった。

病気休暇中は家の掃除をしたり、息子のベンジャミンと遊んだりして過ごした。お金を稼ぐこともできず、学会に呼ばれることもなく、たいていの場合、仲間が私と距離を置こうとしたり、私が何も話すことがなかったりして、仲間と付き合うのはとても難しいことだった。体制側が犯罪者による支配を許し、それを是認しているという事実<sup>1</sup>に照らして、自分の社会に対する見方が永久に変わってしまったことは確かだった。

9.11 同時多発テロ事件後の数ヶ月間、そしてその事件の前後数ヶ月間、軍と情報複合体における内戦に近いと思われる状態は、極右と極左のウェブサイトや関連する陰謀のページを検索しても、私が見つけたどの文章にも一度も記録されていない。アメリカの歴史におけるこのような重大な瞬間が、これほど長い間、誰からも黙って見過ごされてきたことは、私にとって本当に驚くべきことである。議論を始めるための第一歩を踏み出したのが、他でもない私でなければならなかったとしたら、同じように驚くべきことである。

2002年1月、軍部と諜報部の大部分は、2001年12月に権力を掌握した陰謀家たちによって依然として掌握されていたが、政府内には、必ずしもブッシュの忠実な支持者ではないが、それでも混乱に乗じて支配権を拡大しようとする派閥も存在した。行政府は権限を失ったが、大統領に代わって行動すると主張する軍事派閥が影響範囲を拡大した。

9.11 は今日に至るまで曖昧なままの作戦だった。ブッシュとチェイニーの直属の部下たちによって実行されたのか？ラムズフェルドの部下も関与していたのか、それとも反対していたのか。白人民族主義者、イスラエル、組織犯罪、その他の関係者はどこにいたのか？イスラム教とも関係があったのか、なかったのか？オクラホマ連邦ビルを爆破した反政府白人ナショナリストはどうだったのか？彼らが果たしたとすれば、どのような役割か？

9.11 は、愛国者法を成立させ、国防費を大幅に増やし、警察国家を創設する好機だった。しかし短期的には、同時多発テロは、ブッシュ一派を容赦なく攻撃する政府内の頑強な反対派を勢いづかせることにもなった。

しかし、9.11 には別の意味もあったことを忘れてはならない。当時私が書いたように、それは "オリエント急行殺人事件" だった。つまり、さまざまな派閥が刺客を立てたということだ。

重要なのは、ブッシュ政権に反対する軍部内の組織的勢力が、当時勢力を拡大し、実権を握りつつあったということだ。9.11 は、ブッシュを支持する人々の手に権力を残すための、反撃の努力として読むことができる。

しかし私は、これがブッシュやチェイニーの仕業であるかどうかは疑っていた。実際、9.11 がブッシュとチェイニーに反対する派閥の仕業だったのではないか、あるいは奇妙な重なり合いだったのではないかと、私たちは自問する必要があるとよく考えてきた。

『ニューヨーク・タイムズ』紙のような新聞は、ブッシュ寄りのプロパガンダと、体制内部からのあからさまなブッシュ反対を示唆するメッセージとが組み合わされ、混乱したパリンプセストを形成していた。ブッシュ政権への深い敵意を示唆する当時の奇妙な記事や広告の多くは、その後デジタルアーカイブから完全に編集されてしまった。

ある会合でアメリカの政治について議論していたとき、アルパーが私にこう言ったのを覚えている。私はまさにそう感じた。親ブッシュ派と反ブッシュ派が同時に台頭し、互いに協力しながらも舞台裏で文字通り激しく争っているように見えた。状況は文字通り意味不明だった。

2002年1月13日、ジョージ・W・ブッシュがプレッツェルを喉に詰まらせて失神したとされる奇妙なエピソードで、連邦政府内の混乱は頂点に達した。この話はまったくあり得ないもので、専門家も誰も信じなかった。この話は、セキュリティ・クリアランスを持つ政府関係者を狙った内輪のジョークと見るのがベストだろう。おそらくこの話は、私が言った "もっと大きな魚 (=ブッシュ) が揚がる" というジョークに関係しているのだろう。その読みに従えば、プレッツェルは魚の口の中の釣り針を意味し、この出来事はブッシュが餌に食いつき、あとは巻き取るだけであることを示唆している。

その際、シークレットサービスはブッシュを数時間手荒く扱うことができたが、それはブッシュが自分たちを傲慢に扱ったことに対する復讐であり、戦争の推進や国家経済の軍事化に反対する声明を出したわけではなかった。善意ある人々は連邦政府の大部分を奪還し、オバマ当選の舞台を整えることができたが、9.11によって加速したシステム内部の大規

模な崩壊を好転させることはできなかった。また、チェイニー軍とその同盟国によって占拠されたペンタゴンの主要部分を取り戻すこともできなかった。時には（時には3つ以上の）派閥が同じ空間で異なる目的のために協力し合い、複数のレベルで奇妙な政治戦争が繰り広げられた。私は何が起こったかを知っているふりはしないが、確実に言えるのは、この話はまだ誰にも語られていないということだ。

政府内のブッシュ反対派は、些細なことでブッシュを罰することができたし、彼のイスラエル支持を少し後退させることもできた。しかし、チェイニーと彼を支持する多国籍企業が連邦政府そのものを民営化するのを止めることはできなかった。ブッシュの周りの腐敗した勢力は、右派と左派の大勢の人々を買収する金を持っており、多くの人々は、愚かなふりをし、公式のシナリオに疑問を抱かないことと引き換えに、金を受け取ることを厭わなかった。

憲法制定会議以来（そしてもちろん南北戦争以来）連邦政府を支えてきたイデオロギー全体が毒され、一部の官僚がどんなに賢くても、この構造的な戦いには勝てなかった。

2002年の春、私は大学の他学部の教員、特に工学部や政治学部の教員と話す機会が増えた。当時、私の学部からは、私と話をしようという教員はいなかった。米国内の誰からも、東アジア研究に関する学術活動への参加の誘いはなかった。アルパーは私に本の原稿を修正するように言い続けたが、その学問分野全体が私にとってどれほど遠いものになっていたかを考えると、それは不可能に近かった。

イリノイ大学をより良い学校にする手助けをしたにせよ、東アジア研究の分野を築いたにせよ、アメリカにおける軍国主義や全体主義と闘ったにせよ。『ビューティフル・マインド』に見られるような、後ろ向きで曖昧なクレジットもたくさんあるだろうが、それらはこの事件に関してある程度知識のある者にとっては意味のあるものでしかない。

状況は厳しいように見えたが、真の希望も残っており、2018年の惨状とはまったく違っていた。印象的なブレイクスルーがいくつかあった。

最も特筆すべきは、2002年4月、アルパーから「あまり騒がないでくれ」とメールで連絡があり、私が再び事務所を与えられたことだ。それまで私は、チャーチ・ストリートの自宅の地下にすべての書物を保管しており、すぐに出入りすることはできなかった。イリノイ大学にオフィスを与えられたことの象徴的な力は絶大で、後にアルパーから聞いた話では、この移転は隠された巨大な闘争の結果であったような気がした。

私がこのオフィスを与えられた経緯は、それ自体興味深い話である。イリノイ大学ではなく、アルパー博士が私に兵器庫の臨時オフィスを割り当てたことをメールで知らせてくれたのだ。彼のメールは、この割り当てがかなり重要な性質の画期的なものであることを示唆していた。

というのも、そのオフィスは米軍が管理する大学の一角にあったからだ。つまり、アメリカ社会の中で唯一ブッシュ政権に立ち向かい、私に居場所を与えてくれたのは、米軍そのものだったのである。



私を軍の手に委ねるといふ決断は、アメリカの悲劇を物語っている。私が慣れ親しんできたシステム全体、そして文化は、深刻な崩壊状態にあった。私が知っている学者や管理者たちは、私のためにまったく何もできないことがわかり、彼らに押し付けられたばかりの話に根性なしで従った。アメリカ社会で極右に立ち向かい、ブッシュ政権の犯罪行為に抵抗できるのは、軍部だけだった。後に、エドワード・スノーデンやブラッドリー・マニングのケースで、この皮肉はより顕在化することになる。もし私が緑の党やその他の環境 NGO に支援されていたら、死んでいたに違いない。しかし、スノーデンやマニングと違って、私は少なくともアメリカでは有名人にはなれなかつただろう。

私はアルパーから、東アジア言語文化学部の新しいオフィスの鍵を受け取るように指示された。秘書のジャンヌ・プールに会いに行くと、彼女は親切にも鍵を渡してくれた。労働者階級出身のきちんとした女性で、私はいつもジャンヌの行動に感心していた。礼儀正しく、思いやりがあり、その一方でとんでもない行為にも目を光らせていた。イリノイ大学を去る頃には、私は彼女を身近に感じていた。私は武器庫に向かった。巨大な建物で、上部の半円筒の両側にはアーチ型のクレストリー・ウィンドウがあり、そこから陽光がランニング・トラックを照らしていた。中央のスペースは ROTC が訓練に使っていた。私はその後、何度かそこでジョギングをした。

私のオフィスは 2 階にあり、かなりわかりにくい一角にあった。鍵を開けてドアを開けると、異様な光景が目飛び込んできた。窓のない小さ

な部屋で、四方を黄色い油葉のかかったレンガで覆われ、家具は隅にある小さな金属製の机だけだった。しかし驚くべきことに、部屋の電気はついており、机の前には初老の男性が座って書類をめくっていた。彼は私に上級管理者（名前は覚えていない）と名乗った。彼は私と握手すると、すぐにその場を立ち去った。そもそも彼がああのクローゼットの中にいたことがまったく意味不明だった。実際、彼は私の到着をしばらく待っていたようだった。彼は、"ああ、最近この事務所を利用しているんだ"と隠語まじりに言った。それ以来、私は彼に会うことはなかった。

私だけのために用意された愉快的イベントのひとつで、しばしばかなりの困難を伴う。そのおかげで、常に生き残りをかけて戦っていた私のストレスは軽減されたし、ユーモアと連帯感はありがたかった。同時に、この特別待遇は私をより孤独に感じさせた。新オフィスの開設はとてつもなく画期的なことだったが、それは可能な限り屈辱的で卑劣な方法で提示されなければならなかった。私の知らない親切な人たちが、その打撃を和らげようとしてくれた。

私が兵器庫に配属されたということは、実質的に軍の管理下に置かれたということであり、彼らは私を守るために配属されたのだ。誰が私を監視するように任命されるのかが変わったのかと思ったことがあるが、私にはわからない。私は新しいオフィスでそれほど多くの時間を過ごすことはなかった。自宅で仕事をする方がはるかに楽だった。武器庫との提携は新たな機会を与えてくれた。軍のリクルーターや軍曹、さまざまな理由で駐在している将校など、武器庫の他の住人に自己紹介することが

できた。彼らは、私の所属する部署のメンバーにはない真剣さで、私に話しかけてくれた。私は彼らの所属を批判する気にはなれなかった。

その経験は、それまで経験したことのないものだった。私は国際関係や技術、時には自分の個人的な経験について、軍の新しいメンバーや、後に安全保障や国際関係の問題に取り組む教授たちと何時間も話し合った。

私はアカデミズムから遠ざかっていたし、そこで働きながら日本の古典文学について書くことは不可能だった。確かに、アメリカの軍事政策には賛成できなかった。しかし、私はまだアメリカの軍国主義に完全に反旗を翻すような時期ではなかったので、このグループの思慮深いメンバーたちとともに、世界におけるアメリカの積極的な役割についてどのような計画を立てることができるかを、おそらくは素朴に、喜んで考えていた。

私は武器庫で過ごした時間を "パティ・ハースト時代" と考えている。聞き慣れないかもしれないが、パティ・ハーストは裕福な出版社の娘で、左翼グループに誘拐され、彼らのテロ活動に協力させられた。結局、彼女は彼らの作戦に積極的に参加し、彼らのイデオロギースローガンを繰り返した。しかし結局のところ、パティ・ハーストは、周囲の革命家たちの主張に影響されたとはいえ、そうした行為に参加することを強制されたのであって、自分の意志でそれを選んだわけではなかった。

同様に、私は一時期、付き合いのある人々からかなり深い影響を受けた。私は安全保障問題について、戦争の性質の変化、ドローンやサイバー戦

争など、私が関わった軍人たちが抱いていた前提に沿った議論を含む、数多くのメールを書いた。私の主張は複雑で、ブッシュ政権全体を深く批判するものだったと思う。しかし、それは普遍的なものではなかった。

将来、この時期に私が書いた E メールやその他の文章が明るみに出て、後に私が韓国平和運動の創設者であり、気候変動問題への取り組みを提唱する人物となったのとはまったく別の人間であることを示すことになるかもしれない。本書は、私自身の考え方や行動の矛盾を説明しようとするものではない。むしろ最初から、このような時期があったことを述べたい。私はある意味で、価値観とシステムの崩壊がもたらした私自身の人生の危機の結果であった。

しかし、私は自分の環境を選ばなかった。他の教授や緑の党と付き合うという選択肢はなかった。私は何年もの間、アメリカでの日常生活から疎外され、リベラルと呼ばれる人々の多くは積極的に私を敬遠した。アメリカ社会の中で私の自然な味方になりそうな人物たちは、指示に従って私と距離を置いた。私がドローンの利用方法についてノートに書いたのは、そのテーマが私の関心事だったからではなく、そのように考えざるを得ない環境だったからだ。私は文字通り、すべての同僚から切り離され、1年間だけ軍のメンバーと交流することを許された。その状況が終わると、私の活動も変化した。パティ・ハーストのように、私はその期間、囚われの身だった。

私は第三者によって置かれた場所で、唯一交流できる人々に引き寄せられた。私が出会った軍人のなかには、ほとんど何もしてくれなかった人

もいたが、言動に思いやりがあり、本当に心配してくれた人もいた。同様に重要なこととして、私は米軍との交流の中で階級の問題を意識するようになった。私の家族には職業として軍務に就いた者はおらず、そのためこの制度は私にとってかなり異質なものだ。しかし私は、軍隊が多く、労働者階級のアメリカ人にとって、キャリアとして、また社会的交流のための基本的価値観を学ぶ手段として、一般的な道を形成していることを目の当たりにした。私は初めて、人々を米軍に入隊させる経済的圧力を目の当たりにし、また彼らが自分の仕事を正当化し、意義を見出そうとする努力に共感するようになった。私はアメリカ社会に対する以前の見方に戻るつもりはなかった。

さらに私は、ブッシュ政権の全体主義への推進に抵抗することを誓った軍内の派閥が、最終的には民主主義を回復するために勝利するだろうと信じていた。それゆえ私は、どちらかといえば素朴に、軍そのものによる米国の変革に希望を感じていた。この部分は間違っていたが、100%間違っていたわけではない。

ブッシュ政権や彼の命令系統の違反に反対した軍部の多くは、民主主義や適正手続きに関心があったわけではない。彼らがブッシュに激怒した理由はさまざま。彼が自分たちの利益を無視し、慣例に違反したから、中国が将来の良きパートナーになりうると考えたから、あるいはチェイニーとは異なる独自の軍改革アジェンダを持っていたからである。

自分の家族、そして教育を受けた上流中産階級のアメリカ人全体が、私を見殺しにし、何の質問もしないことに決めたことに対する私自身の感

情的反応も、当時の私の行動に大きく影響した。ハーバード大学のよう  
なアメリカ社会で最も慣れ親しんできた部分が、突然異質なものに見え  
たのだ。家族や友人と同じように会うことは二度とないだろう。

私の周囲にいた諜報部員や軍人たちは、正当な手続きと真実への真の関  
心から私を守ってくれたという兆候があった。他の多くのケースでは、  
人々が私を助けることで何を得ようとしたのかは不明であり、複雑な政  
治的駆け引きに巻き込まれていた。ジョージ・W・ブッシュとその内閣  
が常に私に敵対的であったと決めつけてはならない。このゲームには多  
くのプレイヤーがいた。明確な答えが出ることはないだろうが、誰も質  
問を始めていない。

武器庫で働いていた将校たちに自己紹介し、友好関係を築こうと努力し  
た。その時点で私が知っていたことは、私はもうすぐ米軍に振り回され  
るところだったのかもしれない。確かに、私は教授に戻るつもりはなさ  
そうだった。軍人たちの中には、ブッシュ政権に対する懸念や、その時  
の危険性について、私に正直に話してくれた者もいた。しかし、振り返  
ってみると、彼らの個人的なコメントに大きな意味があると考えた私は  
ナイーブだったと思う。

ある陸軍軍曹に会ったが、彼はブッシュ政権のイラクとの対決について  
多くの思慮深いコメントを私に提供し、アメリカの政策に対してかなり  
思慮深く、批判的ですからあるようだった。私たちはよく一緒に昼食をと  
り、イラク戦争への準備について話し合った。そこで出会った下級生た

ちの飾らない正直なアプローチが気に入った。彼らの文化を学ぶことは、私が生きていく上でかけがえのないものになるだろう。

2001年以降に米国で暮らすには、根本的な選択が必要だった。アメリカ政府の大部分が、ディック・チェイニーのような傭兵や皮肉屋に乗っ取られ、彼らは軍隊を利用して冷酷な目標を達成したのだと受け入れるか、あるいは保守的な新政権のせいであまり問題があるだけで、この国は基本的に変わっていないと装うか。私は前者の仮定を選び、口をつぐんだが、心地よい無感覚と否定の中で生きたいと願う人々からは永遠に見放された。

私は国際関係や安全保障に関する多くの記事を読み、自分の周りで何が起こっているのかを理解しようとした。この作業によって、私はそれまでよりもはるかに専門的になり、やがて現代の国際関係に関する記事を書くようになった。私は、9.11以降の米国が東アジアや中東で何をしているのかを体系的に研究した。ACDIS（軍備管理軍縮と国際安全保障）のセミナーにも定期的に参加するようになった。この時期、政治学部のエドワード・A・コロジイや物理学部のジェレマイア・サリバンといったACDIS所属の教授たちと親しくなり、計り知れないアドバイスをもらった。

アメリカ空軍の大佐たちが毎年ACDISに配属され、私は3年間、彼らと多くの時間を過ごし、彼らの世界を理解しようと努めた。そうしたのは、（好むと好まざるとにかかわらず）自分が軍人になる可能性があると思ったからでもあるし、彼らが世界をどう見ているのかを理解する必要性を感じたからでもある。

2002年12月に台湾で開催された第三世界研究協会の年次大会である。2000年7月に不運にも中国、日本、韓国を訪問して以来、アジアに戻ることを許された初めての機会だった。私は「主権、富、文化、技術」と題した講演を準備した：中国本土と台湾は21世紀における『国民国家』のパラメーターと格闘している」と題した講演を準備し、後にインターネット上で大きな注目を集めた。一瞬、私はアメリカの学者として普通のキャリアに戻るのかと思った。

ACDIS プログラムは2003年の春、私が台湾で行ったプレゼンテーションをもとに、台湾と中華人民共和国の関係についてACDIS オフィスで講演する機会を与えてくれた。私はACDIS プログラムに受け入れてもらえたと感じ、まだ病気休暇中で、教えることも、所属学部との交流も許可されていなかったにもかかわらず、所属を許可してくれた。

2003年1月から2月にかけて、ブッシュ陣営が支配する軍部派閥が対イラク戦争を強行するために他の軍部派閥と戦い、アメリカ国内では文字通りの戦争が始まった。国防総省での影の戦いで、少なからぬ数のアメリカ人が命を落とした。マスコミは、大量破壊兵器を開発しているからアメリカがイラクに侵攻しなければならない、という馬鹿げた論調であふれた。

政治的、経済的な利益のために誇張されたこの戦争について、家族や友人が沈黙していることに、私は再びショックを受けた。私は番組全体に嫌悪感を覚え、あの失敗の後では、軍とのACDIS プログラム・イベントに魅力を感じなくなった。



私は、この戦争の推進に公然と抵抗できるような派閥を軍内に組織するしかないと考えようになり、この推進を打ち負かすことはできなくても、少なくともその勢いを抑えることはできるだろうと考えた。

私はアルパーに必要だと思うことを詳しく話したし、彼にも必要だと思うことを書いた数通のメールを送った。尤も、それらのメールはかなり言い訳がましいもので、直接の関係者でなければ理解するのは難しいだろう。

私の提案は、ブッシュ政権が仕掛けた独裁体制に公然と反抗し、国防総省の一部を掌握しようとする、軍部内の小規模だが献身的なグループによる大規模な取り組みに直結していた。もし資料が機密指定解除されれば、私の助言との関連は明らかになるだろう。

2003年3月20日にアメリカがイラクに侵攻する数週間前から、軍がこの地域での武力増強を縮小し、平和的解決に向かっているという報道が散見された。さらに、いくつかのネットワークは、この問題についてのきわめて率直な分析を初めて放送した。国防総省内の水面下の争いは、詳細は知らないが、激しいもので、死者も出た。メディアの報道からその変化は明らかであり、この行動の正確な日付は容易に確認できる。

結局、イラク戦争に反対する軍の抵抗は、公開されたCIAの懐疑的な報告書を生み出したとはいえ、戦争への推進力を止めることはできなかった。しかし、強力な反対派がいることは明らかになった。こうした一致

団結した行動は、プロセスを大幅に遅らせ、チェイニーの選択肢を減らした。

悲しい事実は、ブッシュ政権が戦争を推進するために軍全体を完全に掌握する必要はなかったということだ。戦争への推進を阻止する努力が失敗に終わった主な原因は、軍の反対勢力の弱さではなく、むしろ市民の著しい無関心にあったと思う。悲しいことに、命をかけて適正手続きを守ろうとする軍人はごく少数であったが、そのような賭けに出ようとする市民は文字通り皆無であった。

イラク戦争が起こることを知ったのは、家の地下室の床の真ん中にタンポンが転がっているのを見つけたときだった。これもまた、監視者たちが私に残した特別なメッセージのひとつだった。

イラク戦争に対する軍の最後の抵抗における私の役割は大きかった。イラク戦争の推進に対する積極的な抵抗に関して、当時軍内で流布された声明の多くは、イラク戦争の3週間前に私が書いたものまで遡ることができる。私は、軍内のあらゆる抵抗を結集し、戦争への推進を阻止しようとする適切な時期であることを示唆した。私の提案の直後から、侵攻に備えていた米軍を撤退させようとする動きがニュースに出ていたし、イラクは脅威ではないとするCIAの報告書など、メディアのシナリオを転換させようとする動きもあった。私の役割をどれだけの人が知っていたかはわからない。

しかし私は、ブッシュ一族に対する政府内の抵抗を再び効果的に組織することで、行き過ぎたことをしてしまった。2 期目のアメリカ政府内の強力な新勢力は、私が二度とアメリカの政策にいかなる役割も果たさないと決定し、私を完全に締め出した。

この事件の後、私はときどき政府関係者に会い、ワシントン D.C.の有名人と文通をしたりもしたが、それ以来、私は永久にインサイダー・トラックの政策議論から外れることになった。長年苦しんだ脅迫や激しい嫌がらせからは解放されたが、アメリカ側の行動からも切り離された。私が何か提供できることがあっても、誰も私の意見を求めなくなったのだ。

アルパー博士は、日本文学の本の原稿はいったん脇に置いて、私の現在の関心に沿った外交、あるいは安全保障のキャリアを追求し始めるべきだと告げた。彼は、政府関係の仕事に就く可能性があるのだから、そのための準備をすべきだと言った。私は ACDIS の研究者、米空軍の客員研究員、その他 E メールで紹介で知り合った人たちと何時間も過ごした。私はすぐに、ワシントン D.C.で仕事の可能性について連絡を取るべき人たちのリストを集めた。

あまり意味のあることではなかったが、私が話をした誰もが、私は国務省、国防総省、CIA、あるいはその他の場所で新入社員としてスタートしなければならないと示唆した。やがて私は、時間を割いてそのプロセスの詳細を教えてくれる人を見つけた。その人こそ、ジョージタウン大学の教授で、情報機関出身で中国の安全保障問題の専門家であるロバート（ボブ）・サターだった。彼は約半年間、私を彼の下に置いてくれた。

彼は私にどのような仕事ができるかをアドバイスし、また私が話をすべき人たちを紹介してくれた。そのうちの何人かは私の E メールに返事をくれなかったが、他の人たちは私と広範な会話をしてくれた。

その後、私が韓国大使館に勤務していた頃、ワシントン D.C.で何度かボブと会う機会があり、ジョージタウン大学でちょっとした講演をするよう手配してくれたこともあった。私たちは何年も音信不通だったが、10年後に E メールで再会することができた。

そのプロセスは、2001年に私が行った仕事探しとさほど変わらなかった。私は、ボブや他の人の紹介で学者、政府、政治家の誰かと出会い、何度も激しい議論を交わし、その後、何度もメールのやり取りをした。そして、そのプロセスは突然終わり、仕事のチャンスはもちろん、イベントに参加する機会すら一度も訪れなかった。それでも私は、それだけの価値があると思っていた。私が出会ったすべての人は、私が勤勉で善意ある人間であることに気づいてくれる人だと思ったからだ。その気づきが生死を分けるのだと思った。しかし、私たちはもう気軽な友人の話をしているのではなかった。

サターは私に、政府の仕事の可能性について相談すべきさまざまな専門家のリストをくれた。私は、シンクタンク、政府関係者、企業関係者など 30~40 人に連絡を取り、可能性のあるキャリアについて尋ねるといって、時間のかかるプロセスを開始した。正直なところ、どの連絡先も私を就職に導いてくれるとは思っていなかったが、それでもこのプロセスに真剣に取り組み、このような努力を通じてワシントン D.C.の支援者ネ

ットワークを構築し、最終的に私のために何かを手配してくれるかもしれないと考えることが重要だと感じた。

興味深いことに、ボブが紹介した NSA で働いている人物だけは、電話にも E メールにも出なかった。私は 2004 年に一度だけ、父の友人の紹介で NSA の人と少しだけ話したことがあるが、それ以前も以後も、NSA とはまったく交流がなかった。この事実は、組織内の敵意を示唆しているのだろうか。

私は 2003 年にワシントン D.C.を訪れ、ボブ・サッターと彼が推薦した外交・安全保障に携わる数人の人物に会った。ワシントン D.C.は私にとって異世界だった。ワシントン D.C.に行くのは 10 年ぶりだったし、国家安全保障や外交に携わる政府関係者と一日中会ったこともなかった。当時は、イリノイ大学での活動が制限されていたこともあり、魅力的な機会に思えた。

ワシントン D.C.で出会った人々は、私の発言に関心を持ち、私の意見を評価してくれた。シャンペーンでは、私の教授としての役割はごくわずかだった。家族を養うためのわずかな給料で生活し、何年もの間、どこにも旅行する機会是与えられなかった。妻は私以上に閉塞感を感じていた。彼女はワシントン D.C.への移住を切望していた。私たちはシャンペーンを出る方法を探したかったが、どの機会も行き止まりだった。

この時期にワシントン DC で知り合った東アジアの安全保障に携わる研究者や政府高官たちとの交流は、私に大きなチャンスを与えてくれたと

思う。もし私が外交問題評議会（ Council on Foreign Relations ）のコンセンサス的な態度をとり、環太平洋地域のインサイダーたちのスタイルを真似していたら、彼らは私を真剣に受け止め、何らかの形で受け入れてくれたらと思う。もし私が自由貿易に関するアメリカの政策を擁護する記事を書き始めたり、日本との軍事協力を提唱したりしていたら、もっと多くのチャンスが巡ってきただろう。

問題は、私が目の当たりにした腐敗と犯罪に嫌悪感を抱いていたことだ。私にとって CIA や国防総省の唯一の魅力は、そうした組織の中に、危険を顧みず腐敗に立ち向かおうとするほんの一握りの大胆不敵な人物がいることだった。私は、楽な仕事に就くために世間一般の常識に合わせることはまったく興味がなかった。私はそのようなキャリアを追求するつもりはなかった。

それから約 17 年経って振り返ってみると、連邦政府が実際にどのような機能しているのかについて私は少しナイーブだったようだ。

この時期のもうひとつの重要な進展は、安全保障全体に対する新たなアプローチを試みることだった。私は、受け入れられている意見を摂取し繰り返すのではなく、軍と情報コミュニティが非伝統的な脅威、特に気候変動に対応するために再編成されることを意味する、軍と情報コミュニティの機能の根本的な転換に関する包括的なビジョンを策定し始めた。この記事が掲載された 2 日後、太平洋軍司令官のロックリア提督がハーバード大学を訪れ（2013 年）、気候変動について専門家と議論した。

因果関係を証明することはできないが、深い影響を与えたと思う。悲しいことに、その議論の多くは、危険な地球工学や炭素取引、その他の詐欺のために吸い上げられた。

Truthout』の記事は、2012年10月にジョン・フェファーと共著で『Foreign Policy in Focus』に掲載された「太平洋ピボットから緑の革命へ」というタイトルの記事を推敲したものである。

その記事では、気候変動に直接対処するために完全に再編成された米軍について詳しく述べている。コンセプトは、安全保障に関する革新は、新しい兵器システムの提案に限定されるべきではなく、最も根本的なレベルでの安全保障の定義も含まれなければならない、というものだった。この考え方は、2003年に私が台湾について行った講演にまで遡ることができる。その講演では、テクノロジーの進化と、その結果として生じる国家間の分断が、現在のシステムでは見過ごされている安全保障上の重要な問題であると論じた。

私は、企業が喜んで資金を提供することではなく、本当の脅威とは何かについて話したかった。自分の意思に反して政治的対立に引きずり込まれ、何年も罰を受け続けたというトラウマ的な経験が、安全保障の定義という問題で妥協したくないという気持ちにさせたのだと思う。私の視点はアメリカの専門家の中ではユニークなものだったが、実際に影響を与えた。

2003年の春、私はシカゴの日本領事館に招かれ、講演を行った。私は聴衆のために東アジアにおけるアメリカの役割について話し、総領事とも親密な関係を築き、それは私がワシントンに発つまで続いた。

一瞬、主流派に返り咲きそうな気がした。また、国際交流基金から日本文学に関する著書の執筆を継続するための助成金も得ることができた。

そして、数年ぶりに日本に戻ることを楽しみにしていた。東京での夏は、私の人生で最も楽しい経験のひとつだった。ベンジャミンは、私たちが住んでいた国立の小さな家で過ごす時間をとても楽しんでいたり、スウンは近所の若い日本人ママたちとたくさんの友達を作った。私たちを助けてくれた獨協大学の本田博邦教授は、進歩的なコミュニティーの友人たちに私たちを紹介するために多大な努力をしてくれた。私たちは公園で何時間もベンジャミンと遊び、地元の幼稚園に通わせた。

18世紀の日本における漢語物語の影響について、自著の新しい章を執筆し、東京大学の2人の指導教官、長島宏明と信治と会って、私の仕事について議論した。簡単なことではなかったが、私は日本文学の教授として軌道に乗せる努力をした。コンセプトは私の中に甦り、最終的に2011年にソウル大学出版部から出版される原稿をまとめた。

私は2003年秋にイリノイ大学東アジア言語文化学部の助教授に復職し、2004年に3年目の審査を受けることになった。私は2つのクラスを任され、再び教授会に出席することになった。もはや学部の一員という感覚



はなかったが、時折他の教授陣と会い、再び教えることに心地よさを感じた。

私は、生徒たちがアメリカの大規模な政治的混乱にまったく気づいていないことに驚いた。時には、私はこの問題を明確な議題として取り上げ、議論した。そのようなことをした数少ない教授の一人だったと思う。おそらく日本で過ごした数年間、私の世界の捉え方に何らかの影響を与えたのだろう。海外にいた数年間、私の家族を含むアメリカ人が見ることのできなかった、あるいは見ようとしなかったアメリカのイデオロギーの歪みを、私に見ることを可能にしたのかもしれない。

2003年の秋、私は初めて自分の身に起こったことを短く書いた。詳細や名前から遠ざかり、5ページで主な内容を要約した。私は**真実**と和解のプロセスを始めたかったが、誰も興味を持ってくれなかった。結局、母、父、兄にコピーを送った。父は後日、受け取ったと返事をくれた。母からも兄からも明確な返事はもらえなかった。その後、母と兄と話したところでは、私が書いたものを**読**んだが、この件について話したくないということだった。

2006年には、母、父、兄が（別々に）私の話を聞いてくれる時期があったが、何が起こったのかについて意味のある質問をすることはなかった。2007年以降、意図的な**会**話の窓は閉ざされ、兄は私の物語に穴を開けようとするようになった。2017年になると、兄と父、そして妹のアンナは、私が精神疾患を患っていると陰でほのめかすようになった。そのような疑惑は、彼らにとってほとんど自然なことになっていた。

私は、当時ジョージ・W・ブッシュ弾劾の論文を起草していたイリノイ大学法学部のフランシス・ボイル教授を探した。彼のオフィスはどこかと尋ねると、法学部の秘書が怪訝な顔をしたのを覚えている。彼は大学のスタッフからやや不人気だったようで、私の問い合わせは彼女を驚かせたに違いない。私は、彼がブッシュ政権にどこまで**対**抗できるかを考

えると、彼は私にとって自然な味方だろうと思った。私は間違っていた。

ボイルは私と現代政治について話すのを楽しんでいただったが、イリノイ大学での私の問題については、私が無愛想な上級教授から不当な終身在職権審査を受けているということ以外、一切語ろうとしなかった。当時私は、ボイルが私のために弁護してくれるなら、この偽装工作を受け入れてもいいと思っていたが、この状態には不満だった。私は、ボイルが最低限、実際に私にされたこと（ボイルは明らかに承知していた）について、内密に正直に話すべきだと強く感じていた。しかし、それは求めすぎだった。ボイルは2004年の春、私の3年目の審査委員だったデビッド・グッドマンと会い、私のケースについて話し合った。ボイルは、グッドマンから「唯一の問題は私の出版物が少ないことだ」と言われたと私に話した。

テニユア（終身在職権）を拒否される可能性が高まってきた2004年の春から、私の将来についての議論に、ある意外な人物が加わってきた。その人物はシカゴ大学のブルース・カミングスで、韓国学の分野で最も有名な進歩的メンバーであり、私にとっては自然な味方になりそうだった。カミングス氏は、私が1997年に韓国に滞在していたときから知っていた人物で、明らかに私を助けようとしてくれていた。彼はシカゴ大学で私が講演できるように手配してくれたし、何度か電話で話したこともあった。興味深いことに、彼はまた、ニューヨーク・タイムズ紙に時事問題について頻繁に寄稿していたスタンリー・フィッシュ英語教授を紹介してくれた。カミングスによれば、フィッシュ教授は私の将来の就職先について何か考えているようだった。フィッシュの短く不可解なEメールには大した説明はなかったし、電話で話したり、具体的な提案をくれたこともなかった。このような高尚な人が私の履歴書を見て、私の将来について考えてくれることに感謝すべきだったのだろう。

しかし、私の家族や友人たちは一体何を聞かされ、私の言い分を聞こうとしなかったのだろうか？後日、私はFBIやその他の機関からこのような勧告を受けた前例を少し調べ、その手紙のようなものを下書きした。父と兄は、そんな手紙は受け取ったことがないと言い張ったが、このような重大な話題について私と真剣に話をしようとならないのは、おそらく勧告の仕様に従って、私に嘘をついているのだろうと思われた。

その手紙にはこう書かれていたと思う、

この書簡は、エマニュエル・パストリッチ教授とのすべての交流に関して、あなたの協力を正式に要請するものです。パストリッチ教授は現在、一連の国家安全保障指令によって決定された、米国での活動に関する制限を受けています。これらの指令の内容は機密です。あなたはここに、連邦捜査局から提供されるパストリッチ教授との交流内容に関するすべての指示に従うよう要請されます。これらの助言は、私、XXXX 巡査、または権限を与えられた他の FBI 巡査からあなたに提供されます。そのような勧告は、あなたがパストリッチ教授と会話、書面、その他の形式で接するすべての場合に適用されます。

パストリッチ教授の米国での活動に関する主な制限事項は以下の通りです。パストリッチ教授との交流について不明な点があれば、いつでも私に相談してください。

パストリッチ教授は、FBI からの明確な許可なく、米国内のいかなる機関または法人からも収入を得ることを禁じられています。パストリッチ教授にいかなる報酬を提供することも禁止されています。

パストリッチ教授は、FBI の許可なく、雇用、所属機関、その他正式または拘束力のある団体に所属することを禁じられています。また、FBI の明確な許可なしに、彼のキャリアに関する援助を申し出ることには許可されていません。

パストリッチ教授は、FBI の明確な許可なく、アメリカのいかなるメディアにおいても、インタビュー、写真撮影、その他の記述を行ってはならない。

パストリッチ教授は、明確な承認なしに、組織的な協力、業務契約、研究プロジェクト、教育イニシアティブ、または金銭的な影響を及ぼす可能性のあるその他の事項に関する長時間の議論に関与すべきではありません。

この微妙な国家安全保障上の行動へのご協力に感謝いたします。今後の進展はすべてお知らせいたします。

合衆国法典第 18 編第 \* 2709 条(c)(1)に従い、FBI が本書簡に記載された要請を行った事実を開示することは、米国の国家安全保障を危険にさらし、テロ対策や防諜の犯罪捜査を妨害し、外交関係を妨害し、または人の生命や身体の安全を危険にさらす可能性があります。したがって、合衆国法典第 18 編第 \* 2709 条(c)(1)および(2)により、あなた、またはあなたの役員、従業員、代理人が、この書簡の要請に従うために開示が必要な相手以外に、この書簡を開示することが禁止されています。

2004年は私にとって非常に混乱した年だった。年の初めには、ブレイクスルーの兆しが見え始めていた。専修大学のインターネットを利用した指導プログラムに参加しないかと誘われたのだ。このプログラムを企画した教授で、18<sup>th</sup>世紀の日本文学について幅広く執筆している坂本素子と詳しく話をした。私は彼女の仕事をよく知っていた。彼女は私を東京に招き、計画中のプロジェクトについて何度も打ち合わせをし、将来専修大学で働くチャンスがあるかもしれないとほのめかしてくれた。

2004年4月、私は3日間専修大学に飛び、坂本教授や他の教授陣とディスカッションをした。とりわけ、私を案内してくれた日本の若い学生たちとの会話を楽しんだ。坂本教授は私をご自宅に招き、ご主人と夕食を共にした。その間に、18<sup>th</sup>世紀の日本における中国小説の影響に関する私の研究について話し合い、将来の共同研究を計画した。一瞬、私は再び軌道に乗ったような気がした。

専修大学から提供された日本への旅費は全額ではなかったが、それでも私は、日本の教授陣と再び仕事ができること、そしてインターネットを通じて日本の学生に直接教えることができることに興奮していた。

しかし、私がアメリカに帰国して数週間も経たないうちに、このプロジェクトは突然終わりを告げた。私は坂本教授に詳細なお礼状を書いたが、日本での会話とはまったく矛盾するような、そっけない返事が返ってきただけだった。彼女のアシスタントにも手紙を書いたが、プロジェクトは延期になったと言われ、その後、私のメールにはまったく返事が来なくなった。私は彼らの生徒に教える機会もなく、プロジェクトに費やし

た多くの時間に対する報酬も受け取らなかった。すべてが不可解な経験だった。私が再び日本人と真剣に交流するのは、それからさらに 10 年後のことである。

2004 年春、第三者を通じて伝えられた契約更新の見送りにもかかわらず、私のキャリアがある程度回復する見込みがあったのは、日本人教授やブルース・カミングスの努力によるものではなく、むしろ、国務省のコーリン・パウエルや CIA のジョージ・テネット（および国防総省内の他のあまり知られていない人物）によって守られてきたため、前世代から生き残ってきたレベルの高い人物が、政府の実務レベルで再び台頭してきたからである。当時は、どうにかして民主党が大統領に当選し、民主党が上下両院を掌握するだろうという考えがあった。

この可能性の瞬間は現実のものとなったが、長続きはしなかった。ブッシュを支持する派閥は、強硬派を支持しないすべての人々を追い出すために過酷な手段をとった。2004 年 5 月には、さらに残忍で冷酷な人物たちによって運営されるブッシュ第 2 期への移行がすでに決定しており、私のアメリカでのキャリアは実質的に終わっていた。私のケースは印象的ではあったが、デニス・クシニッチやロン・ポールが下院から永久に追い出されたやり方や、ラリー・ウィルカーソンのような人物が国務省から追い出されたやり方と、それほど違いはなかった。

2004 年、私にとってもうひとつの重要な進展は、4 月に始まったデニス・クシニッチ大統領選挙キャンペーンでの活動だった。デニス・クシニッチは、（ロン・ポールと並んで）ブッシュ政権に対抗する度胸のあ

る、残された一人の下院議員だった（もちろん、限られた意味での対抗ではあったが）。彼は弾劾訴追案を提示し、ブッシュ政権が提示した役職候補者たちに対しても、十分な情報に基づいて突っ込んだ質問をした。私はクシニッチの活動に感銘を受け、支持するに値する唯一の大統領候補だと思った。2004年の春、私はアメリカ政治に関するいくつかのオンライン・ディスカッション・グループに参加し、より良い社会のために働こうとする、熱心で思慮深い人々を見つけることができた。

例えば、クシニッチのキャンペーン・マネージャーだったデイビッド・スワンソンは、戦争を終わらせ、持続可能な平和を確立するための世界的な運動「ワールド・ビヨンド・ウォー」を立ち上げることになり、何度か私をサポートしてくれた。また、ロサンゼルス出身のジム・カワカミとも知り合った。彼は数年来の（LINEでの）親しい友人の一人となり、2004年にはほとんど毎日メールしていた。カワカミはその後、（私が彼のデザインを手伝ったニュースレターを含め）彼の書く文章は民主党主流派に傾倒し、私たちは疎遠になっていった。

私はクシニッチが効果的な政治家だとは思わなかった。彼の提案には十分な説得力がなかったし、彼の「平和省」法案はナイーブな言葉で説明されていたため、どうすれば支持を得られるのか想像しにくかった。しかし、気候変動や富の分配といった重要な問題については、他の誰もやらないような方法で明確に強調し、世界における米国の役割について、バーニー・サンダースが選挙戦で持ち出すようなものよりもはるかに優れた前向きなビジョンを提示した。

クシニッチのキャンペーンは、全体としてポジティブなインパクトがあったと思う。私は、ディスカッション・グループや彼のキャンペーン・メンバーに、彼が予備選にどう臨むべきか、どうすれば強力で幅広い支持を集めることができるかについて、何時間も何時間も提案した。このプロセスは私にとって素晴らしいトレーニングであり、私はこのプロセスで多くの政治的コンセプトや戦略を身につけた。その結果、私は日本文学の研究から遠ざかってしまった。

私は、クシニッチはあまり長く選挙に残るつもりはないと思っていた。しかし、私たち（私と討論会に参加した他のグループ）は、彼が最後まで選挙に残るべき理由をかなり強力に主張することができたし、彼のアプローチの改善点を提案することもできた。しかし、民主党内の隠れたプレーヤーたちは、彼があまり成功することを望んでいないことが明らかになり、彼は発言を減らすよう圧力をかけられた。私が議論に参加すればするほど、私たちの考えは最高レベルで拒否され、クシニッチは民主党内で大したことはできないということがはっきりしてきた。時折、彼は何か壊れた男のように見えた。確かに、2006年にワシントンD.C.で彼に会ったとき、私にはそう見えた。彼は私をととても歓迎してくれ、中間選挙で民主党が成功したら仕事を見つけると約束してくれた。

結局、私たちの努力によって彼は最後まで選挙戦に参加し続け、最終的に指名を受けたジョン・ケリーがブッシュに対して強く批判的な発言をするよう、政治的圧力をかけることになった。しかし、このプロジェクトには落胆させられた。熱狂的なフォロワーが政治的な工作人員に惑わさ



れ、会話は常に些細な問題に引き戻され、真の政策論争から遠ざかっていくのを目の当たりにした。

その経験から私は、アメリカ社会には忌まわしい退廃が存在し、それが私たちを未曾有の破局へと否応なく導いているのだと考えるようになった。私たち全員が力を合わせれば、どうにかしてこの国の方向性に真の変化をもたらすことができるのではないか、この危機をチャンスに変えることができるのではないかという希望を抱いていたのだが、もはやそうは思えなくなっていた。活動への意欲を完全に失ったわけではなかったが、政治体制や政府では大したことは達成できず、同胞であるアメリカ人の目を覚まさせることができるのは大惨事だけだと、次第に感じるようになった。

クシニッチ・チームでの仕事は、コンセプトやテーマを簡潔でわかりやすく、しかも素早く書き上げる訓練にもなった。学術的な文章を書くとはまったく違うスキルだった。私のメールは、私を少しずつジャーナリズムの方向に引きずり込んでいった。私が最も効果的だと感じたのは、現代的な問題について2ページほどの短い記事を書くことだった。学術的な文章とは異なり、私はそのような仕事を楽しんでいった。しかし、このシフトは単なる個人的な進化ではなかった。私はアジア研究の仲間たちと交流する機会を基本的に絶たれ、将来また学会で発表することはあっても、自分がそのコミュニティの一員であると感じることはなかった。アメリカ社会における学問の影響力も急激に低下していた。

アルパーとの会話、他の教員との会話、そして大学当局が私に対してますます無関心になってきているという一般的な読みから、私は2004年5月の終身在職権審査を乗り切れないだろうと思われた。委員会は一度も私と会ったことがなく、私が実際に何をしているのかにほとんど興味を示さなかった。私には契約更新に十分すぎるほどの学術的業績があることは間違いなかったが、権力者の裁定が下されれば、できることはあまりないことはわかっていた。私は準備のために3つのステップを踏んだ：1) ボブ・サターが推薦してくれた政府やシンクタンクのさまざまなコネクションを追跡調査した。2) 通常の条件下では決して応募しなかったような無名の小さな教育機関も含め、全米の大学やカレッジの学術職に広く応募し始めた。福利厚生はなく、給料もかなり安い、希望すれば無期限で教え続けることができると言われた。最悪の場合、キャンペーンにこれ以上いたくないことを考えれば、当面の仕事を提供してくれることになる。

大学、NGO、企業、その他いかなる組織も、私の手紙や電話に応じて面接に呼んでくれたところはひとつもなかった。私の手紙にわざわざ返事を書いてくれた人さえ、ほんのわずかしかなかった。

数年後、マルクス主義者の友人は、主な問題は私が階級に対する裏切り者であることだと言った。私はこのような還元主義的分析は好きではないが、この解釈には一定の論理があると言わざるを得ない。私の発言には、米国の多くの専門家が全体主義政府との協力を正当化するためにでっち上げたストーリーを崩す何かがあったのだ。体制側のメンバーと

して、私が組織的に間違っていることを指摘し続けたことは、とりわけ耳障りで苛立たしかった。結局、私の存在そのものが、何かが非常に間違っていることを思い出させるものとなってしまった。

その後、私の家族や他の人たちは、私が仕事を見つけられなかったのはイリノイ大学での問題のせいだと言うようになった。この言い分は明らかに不誠実で、当時私に限ったことではなかったが、彼らがタブー視していたブラックリストの議論を避けるためのものだった。私は所属していた学部とは比較的良好な関係を築いていたので、彼らが私とうまくいっていないことを第三者に話すのに多くの時間を費やしたとは思えない。

『ニューヨーク・タイムズ』紙やスパムメールにさえ、何が起きているのかを理解するための参考文献を見つけることができたのに。2004年の夏までに、私のケースに関する言及は、メディアには微塵も見当たらなかった。さらに、政府関係者や国際関係者との交流も、ゼロにはならなかったものの、かなり縮小された。このまま私は失業、あるいはパークランド・カレッジでアルバイトをするような過激な非正規雇用の道を進むことになりそうだった。

しかし、実際に次の段階に進み、面接と内定につながった仕事もあった。このチャンスは、かなり偶然に訪れた。2004年4月、イリノイ大学のキャンパスを歩いていた私は、イリニ・ビルで開催されていた大規模な就職フェアに出くわした。私はFBIとCIAのブースをぶらつき、CIAのリクルーターのひとりと非公式な会話を始めた。それまでの4年間、政府機関、大学、NGO、その他の組織との話し合いをことごとく断られてき

た私は、その出会いをそれほど深刻には受け止めなかった。しかし、私は名刺をリクルーターに預け、オフィスに戻った。

数日後、採用担当者から E メールが届き、私は最近の履歴書（言語療法のクラスで磨いたもの）のコピーを送った。彼はその履歴書を他の人に渡し、数週間後、もっと詳しい経歴が必要だと言われた。結局、2004年の秋に CIA のオープン・インテリジェンス部門である FBIS（Foreign Broadcast Information Service）の日本部門に応募するよう勧められた。もちろん承諾し、中国語、日本語、韓国語の新聞記事を渡され、一級試験の一環として翻訳するよう求められた。

FBIS は連邦政府内で定評のある組織で、政府高官のために世界各国の高級紙の重要記事の英訳を提供している。FBIS は、国務省やその他の政府機関のメンバーにとって重要な情報源であり、英字雑誌とは対照的に、現地の言語で実際に掲載されている記事の最も信頼できる翻訳を提供している。

2004年5月、私は最後の悲愴な外交官試験のためにワシントン D.C.を訪れ、現地の大学や政府関係者など、アジアに関心を持つさまざまな人々に会った。FBIS の日本チームで働く若者と会う機会があり、オフィスを見学した。他の社員たちとも少し言葉を交わし、韓国チームにも出くわした。短い訪問だったが、そのオフィスの努力は、私の申請が真剣に受け止められていることを示唆していた。

2004 年の夏には、FBIS への応募が、唯一残された就職の可能性だった。パークランド・カレッジで非常勤講師をすることになるかもしれないし、失業する可能性さえあった。

FBIS の仕事が私に残された理由は 2 つある。まず第一に、CIA は十分な実力を備えた組織であり、内部に存在する深く複雑な資金調達構造に支えられている。この "ディープ・ステート" 構造は非常に危険だが、特定の派閥がホワイトハウスや議会を支配していても、CIA の中にはノーと言えるサークルが存在するという明確な利点もある。その現実が、そもそも私が CIA と関わることになった理由だ。

加えて、私を支えてくれた人たちには、非常にストレスの多い時期に、私に希望を与えてほしいという思いもあったと思う。私の将来はかなり厳しいものになりそうだったので、あまり落胆してほしくなかったのだ。

2004 年 9 月、私は FBIS の日本語翻訳ポジションの面接のため、バージニア州レストンに呼ばれた。正直なところ、この面接が本気なのか、それとも手の込んだゲームの一環なのか、私にはわからなかった。おそらく関係者の多くもわからなかっただろう。最後まで曖昧なままだったのかもしれない。私が知っているのは、CIA は私に航空券代を払い戻すことになっていたが、何度も催促したにもかかわらず、一度も支払いを受けなかったということだ。

午後にシカゴのオヘア空港からワシントンに飛び、面接会場の近くのホリデイ・インに泊まった。ホテルは CIA の面接を受けに来た 20 代から

30代の若者たちで満員だった。大学を卒業したばかりの彼らは、面接の全過程が極秘事項だと思い込んでいたが、レストンでは特に極秘事項などないことがすぐに明らかになった。チェックインしたときにCIAの資料を堂々と渡され、面接会場まで移動するミニバンに乗る時間をホテルの前で告げられた。

そこで出会った若者たちとの会話を楽しんだ。また、彼らの公共サービスに対する理想が、冷酷で民営化された政府の製材工場にいかにも食い込まれているかを目の当たりにし、悲嘆に暮れた。彼らの多くは、私がイリノイ大学で学んでいる学生たちと同年代だった。

私たちは無愛想な官僚から短い歓迎のレクチャーを受けた後、高いフェンスに囲まれた森林地帯にある木造パネル張りの2階建ての広大な複合施設の中で、各自が異なる部署の専門家と1対1の面談を重ねることになった。私はマニラ封筒に印刷されたスケジュールに忠実に従った。

ほとんどのインタビューの内容は忘れてしまったが、心に残っているものが2つある。ひとつは、森の見える角部屋で心理学者と面談した時のことだ。その部屋には、アルパーのオフィスを思い出させるような、メンタルヘルスに関する著作で埋め尽くされた本棚があった。テーブルを挟んで向かい側にいたのは、どことなく東欧訛りのある年配の女性だった。彼女は私の価値観について、両親の離婚について、そしてこれまでの私の人生の歩みについて、矢継ぎ早に質問してきた。彼女の表情は文学的で、遊び心さえ感じられ、まるでジョゼフ・キャンベルの『千の顔を持つ英雄』のような私の人生の壮大なプロフィールを作ろうとして

いるように感じられた。そして、CIA という組織の奥深くには、孤立しているからこそ繁栄できる人間性のポケットがあるのだと感じた。

この日の面談で一番のハイライトは、長年諜報活動に携わってきた "ボブ" と面会したことだった。"ボブ" は地位の高そうな人物で、私に嘘発見器テストを実施するよう命じられていた。その日のうちに 3 回会ったが、彼は責任者のようだった。彼は一日中私を見ていたとも示唆した。ボブはかなり思慮深く、私に話しかける態度が親しみやすかったので、おそらくイリノイ大学に戻ってから私をよく観察していた人物の一人だったのだろうと思われた。これは彼が実際に私に会う唯一の機会だった。この件に関して特に確証があるわけではないが、すぐに友人として交流した様子から、そのような長期的な関係を暗示した。

そのような関係があることを感じていた私は、最初の短い出合いを終えて別れるとき、"ボブ" にこう言った。彼は感謝して優しく微笑んだ。

その日のうちに、私は 30 歳前後の若い男性に嘘発見器のある部屋に連れて行かれ、モニター用の電極を体に取り付ける間、横になるように言われた。セットアップが終わると、彼は私の人生や仕事について質問を始めた。その質問は自明で、ありふれたものでさえあった。私はそれに正直に答えた。この若者は私のことを知らないかもしれないが、私を観察している人たちは私自身よりも私のことを知っているに違いないと思ったからだ。このプロセスは 30 分ほどスムーズに進んだ。

しかし、彼が私にイリノイ大学で教えている仕事について質問したとき、突然、火災報知器のようなかなり大きなビープ音が鳴り響いた。彼は立ち止まり、もう一度私に質問した。

残念ながら正確な質問は思い出せないが、できる限り正確に答えたつもりだ。決して美辞麗句を並べようとしたわけではないのだ。ベルがまた鳴った。若者は部屋を出て行き、代わりにボブが入ってきた（おそらく、舞台裏から私を見ていたのだろう）。ボブは、イリノイ大学での私の仕事について、そしてなぜ辞めたのかについて、より具体的な質問をし始めた。ビープ音が不規則に鳴り響き、すべてのプロセスが一種の喜劇のように見えてきた。

ついに私はショーに飽き始めて、彼に言ったんだ。"聞いてくれ、なぜ最初から全部話さないんだ"ってね。

「いい考えだ。ごゆっくり」とボブは答えた。

私は2000年7月のアジア旅行から始まり、その瞬間までの主な物語を話し始めた。ボブは熱心にメモを取り、人の名前やおおよその日付を私に尋ね続けた。しかしこの過程で、ボブは一線を越えて、私を手ひどく扱った人々の動機について、私の物語にはない詳細を示唆することがあった。例えば、彼は私の考えに反対している軍の最も重要なグループは、"ミサイル防衛"を推進している派閥であると示唆した。私はそれまで、そのような解釈を提唱したことはなかった。



約 90 分後、ボブはその日にできるのはここまでだと告げた。私はそれを楽しみにしていると伝え、握手をして別れた。その時点では、私たち二人とも会話をかなり楽しんでいたと思う。悲しいことに、ボブと再会することはなかった。数週間後、フォローアップ面接のためにいつワシントンに来なければならないかを知るために、CIA の雇用センターに電話をした。電話に出た女性は、面接は無事終了したので、配属先が書かれた手紙を待つようにと言った。

私はイリノイ大学に戻り、最後の学期の残りを教えた。自分自身には安らぎを感じていたが、次のステップがどうなるかはまったくわからなかった。ひとつ確かなことは、私とイリノイ大学との関係は完全に終わったということだった。私と交流のある人はほとんどおらず、私は学部内では事実上、赤の他人だった。おそらく、私が仲間はずれにされたというよりも、他の教員たちが、私がこの「決して口外してはならない問題」について何か発言し、自分たちを窮地に追い込むのではないかと心配していたのだろう。

学期が終わり、1 月からの失業（貯金もなく、仕事の見込みもない）に直面したとき、FBIS のアナリストとしての雇用が承認されたという手紙が届いた。その手紙には入社日は書かれておらず、明らかに法的拘束力のあるオファーではなかった。しかし、私がセキュリティ・テストに合格し、プロセスが完了すれば採用される可能性があることを示唆していた。

私たち夫婦は、あらゆることに関して意見が食い違うが、この場合、どうすべきかについては意見が食い違うことはなかった。家売って、当時3歳だったベンジャミンと、2004年7月に生まれたばかりの娘レイチェルと一緒にワシントンに引っ越すべきだと、私たち夫婦は考えていた。シャンペーンにはほとんど見込みがなかった。イリノイ州には、私と私の親アジア協力構想が根付くことを望まない人種差別主義者たちもいた。

たとえFBISのオファーがうまくいかなかったとしても、1週間舗道を歩き、紹介されたさまざまな人たちと会えば、何らかの仕事が得られるだろうし、少なくともチャンスは広がるだろうと思った。

私たちは、チャーチ・ストリートの家を見つけたのと同じ不動産業者、ボブ・ウォラーにこの家売りに出すよう依頼した。彼はすぐに売却することができ、私たちは数千ドルの利益を得た。家売るタイミングとワシントンに引っ越す計画を完全に一致させることはできなかったので、イリノイ大学で教鞭をとり始めた頃に住んでいたオーチャード・ダウンズの教員宿舎に、月極めで小さなアパートを借りることにした。とてもシンプルな2ルームのアパートだったが、2人の小さな子供とたくさん荷物の、かなり混雑した。持っていく予定だった家具は倉庫にしまった。

幸いなことに、子供たちはまだ幼く、何が起きているのか理解できなかった。スンウンも、彼女が信頼する占い師も、FBISの仕事が私にとって輝かしい新しいキャリアの始まりになることを信じきっていた。彼女は、モザンビークにいる父親（父親が最近工場を開いた）に電話をか

けて、私の新しい仕事について伝えさせさえした。私はこの移動にかなり不安を感じ、このオファーが何かに変わるかどうかまったく疑っていたが、未来には希望があると思った。ジョージ・W・ブッシュ第2期政権下のアメリカは、さらに抑圧的でファシズム的に見えたが、少なくともいくつかの明るい兆しはあった。私はもう嫌がらせを受けることはなかった。郵便物を読まれたり、電話を聞かれたりすることはあっても、日常生活に支障をきたすことはまったくなかった。シャンペーンを離れたことも嬉しかった。

クリスマス直前、外国語ビルで私たちの部署のメンバーが集まる小さな集まりがあり、私も出席した。私は同僚たちの中で、自信に満ち溢れ、多少反抗的でさえあるように見えるよう最善を尽くした。次に何をするつもりなのか、誰も私に質問しなかったし、ほとんどの場合、同僚たちは私に話しかけるのを避けていた。ジェリー・パッカーがイリノイ大学の時計をプレゼントしてくれた。私はそれを受け取り、大学が私にとっていかに重要であったかを少し話した（具体的に何が重要であったかは言わなかったが）。私の授業を担当することになった新入りの若手教員、カレン・ケズレーが、「すべてに勝つことはできない」と奇妙なことを言ったのを覚えている。しかし、その最後の出来事は苦もなく終わり、私は家族のもとに帰れてうれしかった。

2004年12月、私たちはほとんどの財産を引越し業者を通してワシントンD.C.に送り、そこで一時保管した。その後、生後6ヶ月のレイチェルと4歳のベンジャミンをフォード・タウラスに乗せ、小さなU-Haulトレ

ーラーを連結し、ワシントンへの壮大なドライブに出発した。オハイオ州のホテルに立ち寄り、そこでひとつの大きなベッドにみんなで寝た。翌日、私たちは疲れ果てて到着したが、妙に活気があり、まったく新しい環境に興奮していた。

ワシントン DC のような物価の高い都市に移り住み、お金もなく、雇用の見込みもないというリスクはあったが、それでも、自分のスキルを生かす選択肢のない小さな町、シャンペーンにいるよりはるかにましな状況だった。ワシントン D.C.に行けば、新しい展望が開けるかもしれないという希望もあった。

スンウンは、同じくワシントンに住む妹のヨンスクに私の輝かしい新しいキャリアについて話しており、誰もがすべてが決まったと思っていた。しかし、私は最終確認の手紙を受け取っていなかった。ワシントンに着いてから、ブッシュ政権がいかに強固な支配力を持っているかを目の当たりにし、さまざまなシンクタンクの友人たちとも会うようになったので、私は FBIS のオファーに望みを託すのをかなりあきらめていた。スンウンの姉は、私たちが1週間ホームステイをすれば、あとはお金が入ってきてマイホームを購入できるだろうと考えていた。

ヨンスクはバージニア州北部の高級住宅街に大きな家を持っており、かなり快適に暮らしていたからだ。それとは対照的に、私たちは文字通り何も持っておらず、私が知る限り、経済的に破綻に向かっていた。スンウンが彼女の姉と近所に住む彼女の叔父に私の新しい仕事の話をしたことで、彼らの目には私の地位が上がったように映った。

私は旅に出る前から、アジアの専門家リストに載っている人たちに連絡を取り始め、到着の翌日から面談を重ねた。シンクタンクの専門家、弁護士、政府高官、コンサルタント、そして父が推薦してくれた友人たちにも会うことになっていた。スンウンは姉と一緒に台所に座り、家族のさまざまなことについて噂話をしたり、夫の新しいキャリアについて自慢したりして喜んでいて、私は、私たちが生きていくためには常に苦勞がつきまとうだろうと思った。

国務省の外国語通訳者 2 人から、私のメールにととても親切な返事をもらい、通訳・翻訳の一時的な仕事が見つかるかもしれないと言われた。翌朝、フォギーボトム地下鉄駅に行き、国務省の中国語と日本語のトップ通訳者と会う約束をした。中国語の通訳の名前は覚えていない。彼は中国人だったが、長年アメリカに住んでいた。日本語通訳はチャールズ・ハーシーで、私より数歳年下の非常に優秀な人物で、長年国務省の最高レベルの通訳を務めていた。

私はその中国人通訳者をオフィスに訪ね、コーヒーを飲みながらプロの通訳の現実について歓談した。私は彼に、私は何の訓練も受けていないが、中国語、日本語、韓国語はそれなりにできると話した。彼はすぐに雑誌を手に取り、英語の文章を音読し、それを中国語に訳すよう私に求めた。私はできる限りの努力をしたが、かなり不完全な仕事だった。彼は懐疑的な目で私を見て、私の翻訳には初歩的なミスがあると指摘した。異論はなかったが、この抜き打ちテストの形式全体がかなり奇妙だと思った。面接は、私のこれまでの経験と似たようなものになった。

翌日のチャールズ・ハーシーとのミーティングは、より充実したものであった。私たちはそれぞれのキャリアについてじっくりと話し、私たちの経験に共通するものがあることを確認した。彼は、どのようなチャンスがあるか調べ、数日以内に電話をくれると約束してくれた。

日後、チャールズから電話があり、40分ほど話をした。ワシントンD.C.でフリーランスとして働ける仕事について少し話した後、彼は私のために簡単なテストもしてくれた。なかなかのショーだった。テストの半分は、まるで彼が日本のことを何も知らない無知な政治家であるかのように、南部なまりで話していた。彼は専門用語を多用し、私が同時通訳で答える時間は比較的少なかった。

私はこのかなり無理な仕事にベストを尽くした。彼は丁寧に耳を傾けてくれた後、こう言った。「君は明らかに高度な日本語の知識を持っているが、このような実務の訓練はあまり受けていないね」。私は彼の評価に同意した。彼は、私に何か仕事のアイデアがあれば、また電話すると言ってくれた。しかし、その1年後、安倍晋三首相がウィラード・ホテルで講演を行った際に通訳を務めた際、少し話をした。

シンクタンクや法律事務所で出会った人々は、誰もがフレンドリーで歓迎し、私がこの街にいることを妙に喜んでくれた。その優しさだけで、正気の沙汰とは思えない世の中で正気の代弁者として働き続けるには十分だった。外を歩き回っていないときは、ワシントン中の人々に修正した履歴書を転送し、アポイントメントをとっていた。

その過程で、私の親友であるペンシルベニア大学の中国文学教授ビクター・メアーが、彼の学部で1年間の客員教授の地位を得るといふ、かなり複雑な仕事を引き受けてくれた。この地位は収入にはならないが、名刺に書くことのできる正式な地位を与えてくれた。ペンシルバニア大学の図書館も利用できたが、利用する機会はなかった。この所属は、失業中であることを見せないための手段であった。

妹の家に10日ほど滞在した後、スンウンは、私たちはもう長居をしてしまったので、引っ越す必要があると私に説明した。言うまでもないことだが、彼女自身は仕事を探す努力もせず、家族にも私たちの身分を偽っていたのだから、この件には少なからず苛立ちを覚えた。しかし、スンウンが多大なストレスを受けていることも知っていた。このような場合、多くの女性はただ立ち去っていただろう。

私たちの状況の深刻さを考えると、姉のこの対応はかなり不公平に思えたが、そんなことを心配している暇はなかった。私は残ったお金で、家族が韓国に戻り、彼女の母親の家に滞在するためのチケットを購入した。そうすれば、家族も安定するだろうし、私のアメリカでの就職活動という神経をすり減らすようなプロセスからも距離を置くことができる。同時に、私は従兄弟のマニーに、仕事を探している間、数週間彼の家に泊めてもらえないかと頼んだ。マニーは快諾してくれた。

私は自分の状況について父と電話で話した。父は、私がワシントンで妻と2人の小さな子供と一緒に、就職の見通しも立たないまま過ごしていることを知っていたはずなのに、私に連絡することもなく、「なぜ、彼

の息子である有名なアメリカ人のアジア専門家が、この国のどこにも就職できず、何もできないのか」という核心的な問題についての会話を避けていた。父は私の話を黙って聞いていた。そして最後に、沈黙の後、私の当面の経済的な問題を解決するために 2,500 ドルを送ることに同意した。父は、これ以上の援助はできないと言った。

その返答に傷つき、私は自分の人生で実際に何が起きているのかを彼に詳しく説明し始めた。その数カ月前には、主な問題を数ページにまとめた手紙を父に送っていたが、父からの返事はなかった。父は、ブラックリストに載ったという私の「陰謀論」を否定し、すぐに会話を打ち切った。後に他の家族から、父はできる限り私を助けようとしてくれたと聞かされたが、私の印象では、父は事実を確認するために少しも行動を起こそうとせず、本質的に、私に対する犯罪的陰謀に積極的に加担していた。同じことが、大なり小なり、他の家族や同僚にも言える。

家族を韓国に帰国させるのは難しい決断だったが、そのおかげで私は、何らかの仕事を見つけようと真剣に取り組むことができた。数日のうちに、弁護士や外交官だけでなく、派遣会社の経営者にも会うようになった。彼らも私に仕事を見つけることはできなかった。私は考えた末、二度と日の目を見ないかもしれない秘書の仕事に消えるよりも、自分の強みに集中し、本当の仕事を見つける努力をしたほうが良いと決心した。

従兄弟のマニー・パストリーヒとの滞在も魅力的な体験だった。父方の曾祖父であるマニー・コーハンは、息子夫婦と銀メッキのコーハン・エ



プナー社を立ち上げ、第二次世界大戦中と戦後に巨万の富を築いた（経営判断の誤りが後にその富を消し去ることになるのだが）。マニー・コーハンは大家族の集まりが大好きで、孫たちを甘やかし、家族の誰からも慕われていた（彼の工場で雇われていた低賃金の黒人労働者たちからはそう思われていなかったかもしれないが）。

父は最愛の祖父を偲んで、私にエマニュエル・パストリッチと名付けた。ヨーロッパ人である母は、私をマニーではなくエマニュエルと呼ぶことを条件に、この命名に同意した。父の弟で、1970年代に貧困層や病院労働者の組織化に深く関わったビルも息子にエマニュエルと名付けたが、その息子はマニーと名乗った。

あるレベルでは、エマニュエルとマニーは、どちらの息子がより成功するかをめぐる家族のちょっとしたライバル関係を体現していた。二人とも長所を持っていたし、学校の成績も良かった。時が経つにつれて、私たちはどんどん離れていった。最後には、私たちはもはや競い合うことはなく、別の世界に住むようになった。

マニーは父親の後を追うように組織労働者の道に進んだ。彼は SEIU（サービス従業員国際労働組合）のオーガナイザーとして就職した。すぐに彼はデスクワークに就き、私がイリノイ大学で稼いだ給料をはるかに超える大金を手にした。彼はほとんどリスクを取らず、どちらかといえば反動的な SEIU の立場に沿っていたと私は思う。彼のフェイスブックへの投稿は、組合の腐敗を調査する取り組みについては一切触れず、囚人のストライキや、組合の主流路線に従わない労働者によるその他の

不都合な取り組みについても無視した。刑務所のストライキについてフェイスブックで沈黙していることにショックを受け、私は彼にメールを書いた。彼はそれについて何も知らないし、知る気もないと答えた。

彼の考え方は、メリッサとの結婚に影響されたのだと思う。メリッサは医療分野の企業弁護士で、疑わしい仕事でも高額給料を得ていた。彼はD.C.北側のおしゃれな地区に大きな家を持ち、子供たちは甘やかされた生活を送っていた。私たちは幼い頃から仲が良く、何年もの間、時折重要なやり取りをしていた。私がイエール大学に入学した数年後、彼はハーバード大学に進学した。

問題は、従兄弟が法の支配のために立ち上がり、軍国主義に反対したことで政治的にひどい問題に巻き込まれている今、マニーがどうするかということだった。自分のいどころが明らかにブラックリストに載り、米国で働くことができず、米国の政策に正気を取り戻そうとする努力のために絶え間ない嫌がらせを受けている今、彼はどうするだろうか？

マニーの家に泊めてもらえないかと頼むのはまったく気が進まなかったが、その時点では本当に選択の余地はなかった。私はほとんどお金を持っていなかったし、父からはわずかな生活費をもらっただけだった。私はまた、滞在中にマニーが私に何が起こったかを尋ねてくるかもしれない、そして彼がその話を知ったら、彼の幅広いネットワークを通じて、ワシントンのあるレベルで私のために弁護してくれるだろうとも思っていた。それは私のかなりナイーブな思い込みだった。

電話での会話で、マニーは私が仕事を探している間、数週間一緒にいられることを喜んでいると言った。3日も経たないうちに、妻と子供たちは韓国行きの飛行機に乗り、私はマニーとメリッサの家の3階にある快適な小部屋に落ち着いた。

快適な環境で、マニーとメリッサ、そして彼らの3人の子供たちと食事をし、それから仕事を見つけようと夜遅くまでパソコンに向かった。全米の人々にメールを書き、D.C.にいる私を助けてくれそうな人を紹介してもらい、2001年後半に私がプロデュースし始めた政策に関する記事の一部となる自己紹介文を書くことは、大きな仕事だった。そして、ワシントンのさまざまなインサイダーとの会合もあった。

マニーとメリッサとの会話は、内容が極めて限定的であることがわかった。私は自分の政治的問題の方向に話を押し進めることはしなかった。しかし、ある時点で、マニーは私に何が起きているのかについて意味のある質問をし始め、おそらく率直な話をするために私を森の散歩に連れて行き、あるいは何が起きているのか、あるいは単純にどのように助けることができるのかについて興味を示し始めるだろうと思った。でも、そんなことはなかった。

彼は思いやりがあり、私が行くべき場所への行き方を教えてくれた。礼儀正しく、清潔なタオルや食事を喜んで提供してくれた。私が仕事の可能性について話したとき、彼は私の話に耳を傾けてくれたが、なぜ私が失業しているのか、なぜ誰も私を雇いたがらないのか、私がいったい何をしようとしているのか、といった話は一切避けようとした。

メリッサは家族ではないので話しやすかったが、それほど違いはなかった。私は、彼女やマニーが聞きたくない話をしようとはしなかった。ただ D.C.で人に会い続け、メールを書き続け、韓国に移住できないか、あるいはあの混乱から抜け出すために何か他のことができないか、考え続けた。もし質問されたら、はっきりと答えようと心に決めていた。

私は、マニーの両親であるビルとアンとの夕食会での 2 つの瞬間を鮮明に覚えている。それは、マニーとメリッサの両方の家族、そして何人かの友人たちとの大家族の夕食だった。

夕食はうまくいった。みんながキッチンに集まり、フローリングの広々としたダイニングルームでビュッフェスタイルのおいしい食事をした。

最初の瞬間は、マニーの母アンとの短いやりとりだった。それまで何十年も親密な関係を築いてきた私たちとは対照的に、彼女は私に対して目に見えて苛立ちを見せた。

彼女は、私をもっと夕食の配膳を手伝うべきだった、もっと社交的でユーモラスに他の出席者と接するべきだった、と感じていたのだと思う。私が面白くなかったし、話しかけやすかったわけでもないことは確かだ。この先どうなるのか、生きていけるのかさえわからなかった。

彼女の苛立ちは、私が失業し、従兄弟の家に避難せざるを得ないのは普通のことであり、私の状況に理解を示す理由などないという思い込みに基づいているように見えた。言うまでもないが、アンは私の人生に何が起きているのか、一切質問してこなかった。私の家族がなぜ韓国に戻

ったのか、それさえも聞かなかった。私は彼女の私に対する態度を受け入れる気にはなれなかった。アンおぼさんと言葉を交わしたのは、数年後にサンフランシスコで短い挨拶を交わした以外には、文字通りこれが最後だった。

二つ目の出来事は、夕食後、リビングルームで一緒に座っていたことだった。ビルおじさんが私に、"失業手当を申請したらどうだ?"と言ったのだ。

このコメントはいくつかの点で重要だった。まず、良いアドバイスだった。失業して5週間も経っていたのだから、もっと早く失業手当を申請すべきだった。失業手当を申請しようとは思ってもよらなかったし、ワシントン D.C.に移る前にイリノイ大学で尋ねようともしなかった。それは私の無能さの表れではなく、私の注意が単に生きていることに集中し、何らかの仕事を見つけようとしていたからだ。それは私の過ちであったが、異常な状況の産物であった。

ビルがこのような発言をしたことに、私は深く苛立った。この発言は、私がなぜ失業しているのかについての議論なしに、私の現状について助言することだけが彼の責任であることを示唆していた。貧しい人々の運動の左翼組織者である彼が、ファシストの協力者であることを厭わず、愚かなふりをするとはい理解できなかった。偽善と不誠実は、私にはあまりにもひどかった。失業保険は私の悩みの種だった。もし彼が私のことを気にかけてくれているのなら、正当な手続きを受ける権利を重視していたはずだ。

マニーでの滞在で、もうひとつ覚えている出来事がある。メリッサの妹（名前は忘れた）が夕食に来たとき、彼女の仕事について短い会話をした。彼女は民主党で何年も働いていたが、1年間休職してヘッジファンド会社で働いていた（おそらく、企業利益への奉仕の報酬として大金を稼げるように）。当時、私にはまだシャンペーンに戻った民主党の友人がいて、彼らは善戦していると思っていたので、私はまだその組織に対して、後に抱くことになる敵意を抱いてはいなかった。

私は彼女に、いつか会えないか、いつか民主党事務所を訪問できないかと尋ねた。彼女はすっかり途方に暮れた様子で、まるで私が彼女の車を1週間貸してくれないかと頼んだかのようだった。それから彼女は緊張した面持ちで、友人、メリッサ、そして最後にマニーに目をやった。彼女はさらに数秒ためらった。最後に彼女は言った。彼女は電話番号とメールアドレスを紙に書き留めた。翌日、私は彼女にメールを書き、電話を試みたが、返事はなかった。私は間違いなく、彼女が交流を許される相手ではなかった。

だから、マニーとの滞在は不快ではなかったし、彼らのハンサムな家からメトロの駅まで並木道を歩くのは楽しかったが、そこに住むことで自分が劣化していることを日々感じていた。

私自身だけでなく、他の家族や同僚にも損害を与え、屈辱を与える可能性のある昔の出来事について、なぜこのような率直な記録を書いているのかと、何人かの人から聞かれた。その質問に対する答えは2つある。

第一に、この文章では、私のできる限り真実を正確に捉えようとする  
ことが不可欠である。そのようなアプローチが必要なのは、私の行動や私  
について、深い誤解を招くような多くの誤った物語が流布されているか  
らだ。私は真実の物語を公表する必要がある。私の事件については、い  
まだに理解できない詳細があるのは明らかだが、私は事件の渦中にいた  
ため、事件の経過について他の誰とも違う視点を持っている。CIA や  
FBI の職員が私の行動や経歴に関する報告書を熟読したとしても、中国、  
韓国、日本の要人との会話で何が起こっていたのか、私の動機が何であ  
ったのかを理解できたかどうか、私は真剣に疑問に思う。私の明らかな  
過ちや傲慢ささえも含めて、記録を正す客観的な記述にしたい。

同様に重要なのは、私には家族や同僚を守ったり擁護したりする責任は  
ないという思い込みだ。アルパー博士、前部長のジェリー・パッカード、  
私の父、母、兄、あるいは従兄弟のマニーとその妻のメリッサは、ちょ  
っとしたことでも私を助けてくれたり、何が起こっているのか私に尋ねる  
方法を見つけたり、私が直面した深刻な問題の解決策を見つけようとし  
たりする機会が何度もあった。私が扱った政治問題は、彼らに直接関係  
するものだった。彼らはそれを拒否した。彼らは臆病ゆえに、そしてア  
メリカのエリートが持つ利己的で自己愛的な文化のために、あのような  
ことをしたのだ。

マニングやスノーデン、あるいはスターリングのケースを公にする一方  
で、私のケースを葬り去ろうとした米国のエリートたちの決断は、極め  
てネガティブな影響を及ぼしたとさえ言える（そして、私のように沈黙

のうちに苦しんだ人たちは明らかに他にもいる)。その決定は、教養あるアメリカ人の間に、当時の大規模な腐敗に対する深い偽善的姿勢を生み出した。

私のケースは、膨大な数の人々に知られながら、決して議論されることのない、語り尽くせない真実の一形態となった。私の家族の努力は茶番であり、茶番劇であり、彼らには自分たちがしたことに向き合う倫理的責任があると感じている。





## 第4章

### 偉大なる変貌

ワシントン D.C.での2ヶ月間の無職生活で、(多くの人に会ったこと以外での)唯一の進展は、ペンシルバニア大学の客員研究員に無事任命されたことだった。中国研究者のビクター・メアーは以前からの親友で、私のために特別な努力をしてくれた。この地位は私に収入を与えてはくれなかったが、所属を与えてくれたし、図書館へのアクセスも与えてくれた。また、2月の初めにはペンシルバニア大学で私の研究についての講演に招かれた。

私は、コリアン・アメリカン・スタディーズ研究所の副所長を務めるサンジュ・キムという無名の人物と文通していた。この組織が何なのかはいまだによくわからないが、ワシントンで定期的にセミナーを開き、主要な政策関係者を招いていた。コリアン・アメリカン・インスティテュートのオフィスはフィラデルフィアにあり、ペンシルバニア大学を訪れた際、数カ月前から文通していたサンジュ・キムと会って楽しい昼食をとることができた。

韓国史についての会話をもとに、彼は 2 月 24 日にダークセン上院ビルで開催される ICAS セミナーに招待するメールを送ってきた。なぜ私がスピーカーとして招待されたのかはわからないが、このイベントは明らかに注目度が高かった。興味深いことに、このイベントは、私がイリノイ大学を病欠してから 4<sup>th</sup> の記念日にほぼぴったりと重なった。

イベントのラインナップは以下の通り：

## **2005 年冬季シンポジウム"人類、平和、安全保障"**

**ワシントン D.C.、米上院ダークセン・ビルディング**

**2005 年 2 月 24 日**

### **スピーカー**

パトリック・M・クローニン 米国平和研究所研究部長

「東アジアにおける米国の外交政策朝鮮半島と地域の安定」

ニコラス・エバースタット (アメリカン・エンタープライズ研究所上級  
研究員

「北朝鮮とのレッドラインはどこにあるのか？外交が失敗したら？」

岡野正孝、在日大使館外交官

「日本の視点東アジアの課題」

エマニュエル・パストリッチ（ペンシルバニア大学客員研究員

「朝鮮半島と世界大国間の闘争：タフト・桂合意、ポーツマス条約から  
100年」

エバンス・J・R・リビア 米國務省東アジア・太平洋担当次官補

「朝鮮半島の平和への道」

<sup>4</sup> タフト・桂合意とは、20世紀初頭に東京が韓国を植民地化したことをワシントンが承認し、東京がワシントンのフィリピン植民地化を承認した日米間の密約である。このテーマは金尚洙（キム・サンジュ）から私に与えられたものだ。私は、このようなフォーラムで話す機会を与えてくれたお礼として、彼の要請に喜んで従った。私はまた、北東アジアの長期的な歴史的発展についても長々と話した。外交の本質と長期的視野の必要性について、私なりの考えを述べた。パトリック・M・クローニンのようなシンクタンクの著名人による活気あるスピーチというよりは、ゲティスバーグ演説のような、大雑把で、内省的で、哲学的なアプローチだったと思う。このようなアプローチは、ワシントン D.C.の文化とは

あまりにも異質であり、聴衆の中のごく少数の人々にしかアピールできなかっただろう。

ニコラス・エバースタットとパトリック・M・クローニンは、このようなイベントでアジアに関する確立された見解を披露する、好感の持てる人物である。会場は、政策ウォッチャー、議会や国務省のスタッフ、そして韓国や日本を中心とするメディア関係者で埋め尽くされた。このシンポジウムは、私がこれまで米国で招かれた政策関連のイベントの中で、唯一このような注目度の高いものだったと言ってもいいだろう。

私は、当時東アジア担当国務副長官代理で上級外交官だったエバンス・リビアの直前で話をした。その後、リビアとは何度も会うことになったが、時が経つにつれ、彼はますます危険で犯罪的なブッシュの政策を受け入れ始めていることがわかった。プリンストン大学出身の彼は、中国語、日本語、韓国語も学んでおり、意気投合できるかもしれないと思ったが、それは間違いだった。

私が招待されたのは驚くべきことだった。就職斡旋会社から秘書の仕事を断られ、2 ヶ月間失業していた私が、ワシントンの重要な政策討論会にプレゼンターとして現れたのだ。私は、FBIS の仕事のオファーと同様、この瞬間も、私がまだ終わっていないこと、そして彼らもまだ終わっていないことを世間に示そうとする、私の支援者たちの努力であったと解釈している。しかし、結局のところ、私と同様、彼らもワシントンでの戦いに敗れたのである。

講演後、多くの人が私のところにやってきてコメントを寄せてくれたが、最も熱心だったのは、アメリカ人とは対照的に、日本と韓国の外交官やジャーナリストたちだった。翌日、もらった名刺をメールでフォローアップしたところ、韓国と日本の明確な違いが明らかになった。日本の外交官でコーヒーを飲もうと言ってきたのは 1 人だけだった（その週はかなり忘れっぽいやり方でコーヒーを飲んだ）。

ところが帰国してみると、郵便受けに CIA の FBIS への採用内定を取り消す手紙が入っていた。正確な文面は次のようなものだった：

リクルートセンター

L100-LF7

ワシントン DC 20505

2005 年 2 月 16 日

パストリッチ様

この手紙は、あなたが中央情報局への就職を希望していることについて述べたものです。残念ながら、現時点では、あなたは CIA での雇用に適さないと判断しました。この決定は、あなたが提供した情報、またはあなたの手続き中に明らかになった情報に基づいています。この新しい情報に基づき、2004 年 10 月 1 日付の条件付採用内定を取り消さなければなりません。この決定に対する不服申し立てはできません。

この判断の具体的な理由をお伝えすることはできませんが、当庁の雇用に適さないと判断される原因となる多くの状況や事情は、時間の経過によって緩和される可能性があります。したがって、1 年後に状況を再評価し、その時点で当庁への再申請を検討することができます。

この決定は、安全保障上の考慮事項ではなく、諜報機関の雇用に対する適性に基づいているため、今後の安全保障上の申請書および書式において、この決定に関する限り、安全保障上の許可を拒否されたことがないことを確認することができます。私たちは、あなたが CIA での雇用に関心を寄せてくれたことに感謝し、あなたの今後の活躍を祈っています。

敬具

リーガン・V・ダニエルズ

このような結果になることは予想していたが、残念だった。

このイベントで出会った 2 人の韓国人の熱意と献身は印象的だった。ワシントンの韓国大使館の外交官、カン・イクヒョンは、私が韓国の立場を文化的・歴史的に説明しようと努力したことに個人的に感動したようだった。翌日、私たちは寿司の昼食をとり、韓国大使館内、そして韓国国内での私の努力の認知度を高めるために何ができるか考えてみると言ってくれた。彼は私の仕事探しを手伝いたいと言ってくれた。その後、私たちは何度も一緒に仕事をし、韓国とアメリカの複雑な関係について話し合う機会を持つことになった。

名刺をくれた韓国人ジャーナリスト、世溪日報紙のクク・キョンとも同じ日の昼過ぎに会った。ククはワシントン D.C. に留まり、そこで家族を育て、社内での出世コースに見切りをつけた変わった外国特派員だった。彼の考え方にはある種の進歩的な傾向があり、韓国を実際に理解してい

るアメリカ人にもっと露出する方法をすぐに考えたいと思った。彼はワシントンのほとんどの人よりも盧武鉉政権に肯定的だった。

ククは私を擁護する決意を固め、約 10 日間、強い集中力をもってそれを実行した。KBS ラジオの韓国語インタビューを受け、『世溪日報』に私の記事を書いてくれた。彼は私を韓国の主要メディアに紹介してくれ、それが後に韓国での私の最大の成功の源となった。それ以前にも、どうすれば成功できるかというアイデアはたくさんあったが、メディアとの関わりはそのリストの上位にはなかった。

最も重要なのは、キヨンが友人であったことだ。彼は自分のこと、個人的な心配事を話してくれた。彼は私の話に耳を傾け、注意深く、思いやりをもって聞いてくれた。私たちの会話が進んでいく過程からすると、正直なところ、初めて会ったとき、彼は私のことを完全に理解していたわけではなかったと思う。途中から、彼は私に適切な質問をするようになり、私は詳細ではないにせよ、率直に答えた。彼は少し戸惑ったようだったが、私を擁護してくれる友人をさらに探すことにした。しかし数日後、私たちは再会し、彼は「そう簡単にはいかないようだ」と告白した。しかし、彼はあきらめず、定期的に電話で提案してくれた。韓国語の履歴書を作るのを手伝ってくれたり、自己紹介の仕方を提案してくれたりした。

個人的には、それまで韓国に対して特別な偏見は持っていなかった。日本が私の研究分野であったため、前年に日本で夏を過ごしたことがあったし、3 人の日本人学者と 1 年間にわたる研究プロジェクトを行ったこ



ともあった。しかし、日本人や中国人、アメリカ人には、私に対するそのような熱意はなかった。

キヨンは電話で、新しく駐米韓国大使に任命されたホン・ソクヒョンと会う約束をしたと私に告げた。彼は、私に代わって個人的なアピールをするつもりだと言った。それはいい考えだと思ったが、彼がそれまでしてきたことと比べて、それほど変わった行動には思えなかった。

ホン大使との会談が終わってから 30 分ほどして、キヨンから電話があった。ホン大使は私の件に大きな関心を示し、韓国を知り尽くしたハーバードの博士がワシントンで全く活用されていないのは非常にもったいないと思うとキヨンに言った。ホン大使はこの問題を個人的に受け止め、可能性があるかもしれないことを調べるとキヨンに言った。

日本とのつながりが深まったのは事実だが、韓国の盧武鉉新政権には、私の周りのどこにも感じられなかった希望を見たのも事実だ。

当時の韓国大統領だった盧武鉉は、軍事独裁政権と闘うキャリアをスタートさせた進歩的な弁護士だった。金大中大統領の政権末期にさまざまな汚職スキャンダルが発覚し、ジョージ・W・ブッシュ政権下で金正恩が北朝鮮との交戦を推進したためにアメリカとの緊張が高まった後、欧米のマスコミでは保守派が政権に返り咲くだろうと広く思われていた。ところが 2002 年、ジープを運転していた 2 人の米兵が 2 人の朝鮮学校の女子生徒を轢き殺し、そのまま走り去ったという事件が起きた。軍事法廷で裁判が開かれたが、兵士たちの犯罪性は見逃された。

この出来事は多大な抗議を引き起こし、韓国とアメリカの關係に深い疑問を投げかけることになった。その公開討論は、盧武鉉が主流派からブロックされていたときでさえ、リアルな聴衆を与えた OhMyNews のようなオンラインメディアの出現によって増幅された。彼の激しい演説は非常に効果的で、典型的な候補者よりも左寄りであったにもかかわらず、選挙に勝つことができた。盧武鉉は、政府や企業の無責任さを非難することをためらわず、伝統的な政治権力の中樞をすべて避けた。彼は、韓国社会で権力を握るための必須条件である 4 年制大学を卒業していない。私は彼の演説に感銘を受け、良きにつけ悪きにつけ、米国で軍事政権と戦っていた私にある種の親近感を感じていた。

ブッシュ政権は当初から、盧武鉉を重大な問題とみなし、彼を弱体化させ、あの手この手で失脚させようと画策していた。しかし、盧武鉉は長年にわたって殺害予告を受けながら生きてきた人物であり、簡単には脅かされなかった。当時、ブッシュの陰謀にグロテスクに従順だった主要国の国家元首の中で、率直に発言する意志を持っていたのは彼だけだった。しかし、彼は政治的な急進派ではなく、狂気の世界で何らかのバランスを模索している人物だった。

洪錫賢（ホン・ソクヒョン）大使は盧大統領から駐米韓国大使の任命を受けたが、保守派の友人たちの多くは驚いた。しかし彼は、北朝鮮との真剣な対話が必要だという盧大統領の考えに共感し、その使命に協力する意思を真剣に持っていた。ホンがワシントン D.C. に到着したのは、私に関するキョンとのインタビューの数日前だった。ホンは盧武鉉とそれ

ほど親しかったわけではなかったが、彼の力強い演説と、韓国により透明性の高い社会を作ろうとする姿勢に感銘を受けた。

ホン大使は、韓国の大手新聞『中央日報』の創刊者であるホン・ギジンの息子であり、かなり恵まれた環境で育った。ホン・ギジンは李承晩の下で法相を務め、李承晩の市民一斉検挙の要求をすべて拒否したため牢獄に入れられた。政治家としてのキャリアを終えた後、洪基仁はサムスングループの創業者である李秉チョルの顧問を務めた。日本の最高学府の文官試験に合格した数少ない人物の一人として、高い教養と明晰な頭脳を持ち、サムスン躍進のブレーンと言われた。その後、ホンの姉はイ・ビョンチョルの息子でサムスンの会長だったイ・ゴンヒと結婚した。

ホン・ソクヒョンは一般的に保守本流の財界人として認識されており、盧武鉉政権下で大使を引き受けたことは、むしろ奇妙に思われた。何しろ、盧武鉉のぶっきらぼうなスタイルと、既成の政治慣例に従おうとしない態度は、自民党の（元の政党である）民進党の党員でさえ、保守派と一緒にあって彼の弾劾を要求するに至ったのである。盧武鉉はメディアで急進的な左翼として描かれ（私は彼がそうだとは思わないが）、ブルッキングス研究所や CSIS（ホン・ソクヒョンが長年にわたって主要な学者たちと親密な関係を築いてきた場所）で広く批判された。

しかし、ホン・ソクヒョンは多くの点で保守的であり、米国や日本の保守的な主要政治家とも緊密な関係を保っていたが、ある種の勇敢さを持っており、北朝鮮との対話という公約に妥協しようとしなかった。洪が

大使の職を引き受けたのは勇氣ある決断であり、その瞬間に私を大使館で雇うことを検討したのは度胸のある決断だった。

私が韓国大使館のカルチャーセンターで働くために、盧大統領や洪大使がどのようなことをしてくれたのかは知らない。そのプロセスは単純ではなく、おそらく両者が関与していたのだろう。また、私の採用には支払いも含まれていたに違いない。私を雇うのはそう簡単ではなかった。また、何人かの韓国人は、私が韓国の問題に関心を持ち、韓国語がわかり、洗練された政治活動の実績があるアメリカ人として、かなり価値があると考えたのだと思う。しかし、最終的には戦略的というより感情的な決断だったと思う。多くの韓国人は、1980年代に軍政によって自分たちがどのような扱いを受けたかを鮮明に覚えており、助けたいと思っていた。また、ワシントンに自分たちの言葉を実際に学んだアメリカ人がいることを高く評価していたのだと思う。

私は必ずしも韓国とその文化を熱狂的に愛してきたわけではない。韓国での仕事や韓国文化について、特に当時は難しいと感じたことがたくさんあった。しかし、韓国には独特のものがあると思う。韓国人は、日本人や中国人、アメリカ人がしばしばそうでないように、私の話に耳を傾けてくれる。韓国人の中には、座って私のアドバイスにただ耳を傾け、真剣に受け止めてくれる人もいる。

日本大使館のような他の大使館が私を雇うことも、アメリカのどこかの機関が私を採用することも、十分に可能だっただろう。結局のところ、

私は DC で仕事を探していた 2 ヶ月間、多くのコネのある人たちと話をした。

おそらく、韓国大使館の仕事がうまくいかなかったとしても、最終的にはどこかで何かが見つかっていただろう。そのことは決してわからない。私が言えることは、韓国人がわざわざ私を助けてくれたということであり、その決断は単に私が韓国語を話し、韓国人と結婚したからということではなかった。その後 13 年間、多くの韓国人が、時には私に極めて率直で批判的な意見を述べるよう促し、常に真実を語るよう励ましてくれた。そのような議論は、政府機関内の極めて公的で正式な場面で行われることもあった。あるレベルでは、韓国人は私が関係を持ったすべての国の中で、私の性格のタイプに対して最も寛容であったと思うようになった。

盧武鉉（ノ・ムヒョン）大統領の政権は、ワシントンを相手にした経験がほとんどない進歩的な政治集団であり、ブッシュ政権と、彼が北朝鮮を敵と見なした「悪の枢軸」演説を相手にする準備はまったくできていなかった。彼らはブッシュ政権がどのように機能しているのかほとんど理解していなかったし、シンクタンク全体を見渡しても相談できるような人物はいなかった。盧武鉉、あるいは盧武鉉の周囲の人々は、そのような目的のために私を利用することを望んでいたのだと思う。残念ながら、外務省の官僚機構はそのような考えに敵対的であったため、私にはその機会が与えられず、私は盧大統領に会うことも、その周辺の高官に会うこともほとんどなかった。

その5日後、クク・キヨンが韓国大使館からカルチャーセンターでの雇用の具体的なオファーを持って戻ってきた。年俸はわずか4万ドルで、健康手当も年金制度もなかったが、少なくとも仕事にはなった。私はアメリカ人への文化的な働きかけを手伝い、広報資料を編集することを期待されていた。大使館が法的にはアメリカ領でなかったことが、私を雇いやすくしたのだと思う。

私は、基本的にはすでに約束されていたこととはいえ、すぐに募集に応じた志望理由書を作成し、翌朝韓国文化院を訪れ、担当外交官のイ・ヒョンピョに会った。

イ・ヒョンピョは外務省のドイツ専門家で、長年ベルリンのカルチャーセンターの責任者を務めていた。彼はドイツ語よりも英語が流暢ではなく、気難しい性格だった。私は、彼が盧大統領に忠誠を誓っていたため、あるいは過剰に忠誠を誓っていたため、任命されたのではないかと疑っていた。彼はかなり饒舌で、自信たっぷりに話した。常に何かに夢中で、いつも急いでいた。

リーは働くのが難しい人物だった。彼は文化的なアウトリーチについて空想にふけり、何の準備もなしにスタッフがすぐに受け入れることを期待していた。彼はほとんど何でもないことでスタッフを怒鳴りつけ、私がオフィスで口にしたこともないような侮辱的な罵声をしばしば使った。

当初、彼は私にコーポレートカードを渡し、(最初の2ヶ月間だけ)人々をランチに連れ出すことを許可してくれたが、彼はただ命令に従っ

ただで、私あまり露出したり宣伝されたりしないことを望んでいるのではないかと疑うようになった。

とはいえ、彼がとても親切なときもあったし、一緒に出かけてワシントンをつらつらすることさえ許してくれた。シンクタンクのセミナーにも参加し、有益なアドバイスもした。しかし、全体的に見ると、彼は威圧的で、私を一人にしてくれたときは嬉しかった。彼はまた、私の権威を弱めようとする明確な手段をとったこともあった。これは政治的陰謀ではなかった。ほとんどの韓国の外交官にとって、私は単に大使館の風景の一部だった。それまでの4年間、私の人生を支配していた米国内の緊張感の高い政治的駆け引きは消え去り、私はただの職員となった。

韓国大使館では、専門的なスキルを持つアメリカ人を正規職員として雇ったことはなかった。常勤職員として、私は大使館の他のすべての外交官と完全に接触することができ、最初の3カ月間で、計画的に、すべての外交官に会うことができた。韓国大使館は私に与えられたものであり、私はそれを有効に活用するために最善を尽くした。何人かの外交官は私の能力を認め、定期的に昼食に招いてくれた。また、韓国文化院での私の地位の低さから、私の社会的地位を決めつける人もいた。

正式なオファーを受けた後、私は韓国にいる妻に電話し、子供たちを連れてワシントンに戻ってくるよう頼んだ。どのようにして私たちに金銭的な余裕があるのかわからなかったが、何とか方法が見つかることを願った。友人の娘が不動産屋で、コリアタウンにほど近いバージニア州アナンデールに、緑の庭のある小さな白い家を探してくれた。私は倉庫に

あった家具をその家に移し、妻と子供たちが戻ってくる前に家らしいものを準備しようとした。

従兄弟のマニーの家を出られて嬉しかったし、ある程度の収入のある仕事に就けたので、もう家族と話したり、屈辱的な格好で仕事のためにひれ伏して回ったりする必要がなくなった。

アナンデールの家は、広い庭の真ん中にある小さなトラクトハウスだった。近所付き合いもよく、コリア・タウンにも歩いて行ける。そこで家族と暮らした当初、私はかなり興奮していた。ホン大使との面会で、彼は私が彼の役に立つ可能性があると見ているような気がした。しかし、そのような考えを持つ外交官は多くなかった。ほとんどの外交官は、ブッシュ政権との関係を危うくするようなことはしたくなかったのだ。

当初、私はホン大使とともに注目されるイベントに何度か招待され、そこで軍の要人やアメリカや韓国の政治家たちと交流することができた。このプロセスは長くは続かなかった。ホン大使は私に重要な役割を果たしてほしかったようだが、残念ながらワシントンでは長くは続かなかった。

最初の半年間、私はホン大使を含む大使館の多くの人々と驚くほど接触することができ、多くのイベントのリストに載せてもらった。また、カルチャー・センターで開催された注目のセミナーは、ワシントンのインサイダーに好評だった。ホン大使のオフィスやウィ・ソンラク政務公使



(後に親友となる)のオフィスを訪れるのも、とても心地よかった。しかし2001年7月、その蜜月は終わりを告げた。

突然、ソウルのMBCニュースが、洪氏が政治家に違法な献金をしていたことを示す10年前のテープを公開したのだ。このスキャンダルは連日メディアで取り上げられ、案の定、テレビでは洪の辞任を求める声が上がった。ホンは盧政権に強い感情を持っていたわけではなかった。彼は数日で辞任し、すぐにソウルに戻った。

告発の正当性については疑いを持っていないが、時期についてはかなり懐疑的である。私には、韓米外交にこのような独立した人物を関わらせたくない様々な勢力によって、洪氏が意図的に降ろされたように思えた。スタンフォード大学で博士号を取得し、洗練された英語を話し、読書家でもあった洪は、効果的な方法で政策を主張することができた。彼は米国のシンクタンクなどの重要人物に独自の広範なネットワークを持っていた。彼は、国務省や韓国外務省の助けを借りずに会談をセッティングすることができた。さらにホンには、統一や北朝鮮との関わりについて独自の考えがあり、それに妥協するつもりはなかった。彼は北朝鮮との関与が重要だと感じており、それを躊躇なく口にした。

彼は保守派だったが、安全保障に関しては多くの標準路線に反対していた。ジョージ・W・ブッシュとの関係は良好であったが、ワシントンD.C.には独立志向の強い人物をこのような高名な地位に置きたがらない人物が多くいたことは間違いない。盧武鉉政権にも、ホンが独立しすぎ

ていると感じた人々がいた。私は、韓国でこのような著名な人物が私のことを真剣に考えてくれたことをとても嬉しく思っていた。

洪の後任は李大植（イ・デシク）だった。冴えないプロの外交官で、その任期中は独創的なことは何もせず、大使館全体を眠らせていた。個々の外交官と会ってワシントンでの生活に慣れるよう手助けすることはできても、大使館の最高レベルでは私の意見に関心がないことは明らかで、李大使と有意義な会合を持ったことは一度もなかった。ウィ公使とは時々話をしたが、私たちの友情は私たち二人がソウルに移ってからずっと後に発展することになる。

ブッシュ政権に反対するアメリカ政治の周辺にいる人々とのコミュニケーションは、私が韓国大使館で働き始めたときに終わりを告げた。私は監視されていたかもしれないが、異常な兆候はなく、私に相談しようとする努力もなかった。スパムメールや雑誌の広告など、そのような方法で私とコミュニケーションを取ろうとする兆候を見たのは、トランプ時代になってからだった。この沈黙は、イリノイ大学で私に起こったと思っていたことが想像の産物ではなかったことを示唆していた。というのも、これらの隠されたメッセージは、かなり劇的な結末を迎えていたからだ。

韓国大使館はマサチューセッツ・アベニューにあり、シェリダン・サークル・パークから数ブロック北に行ったところにある。最初はアナンデールから、後にウェスト・フォールズ・チャーチから、妻が広いアパートを見つけてから、私は毎日地下鉄でフォギー・ボトムに通った。私の

日課は、毎朝フォギーボトム駅から丘の両脇に立ち並ぶ 20 世紀初頭のボザール様式の邸宅を通り抜けることだった。時折、途中で立ち止まってコーヒーを飲み、その日の仕事に備える。それは瞑想の時間であり、時折、ワシントンが混沌の淵にあるような恐怖のトレッキングでもあった。私はそのルートを 2 年間通った。

本書は詳細な自伝ではなく、私の政治闘争を簡潔に綴ったものである。韓国大使館での私の仕事の多くは、「キムチの日」を企画したり、定期的にセミナーを開催したり、2002 年のワールドカップに関する日韓合同展示会を企画したり、フランス、ドイツ、イタリアの各大使館と中国、韓国、日本の各大使館が合同で開催した映画シリーズを立ち上げたりと、私にとって有意義なものであったが、アメリカにおける説明責任を求める闘いとはほとんど関係がなかった。ある意味で、それは私に強要された現状を受け入れることだった。このような活動や他の活動は、10 年後に韓国のメディアでパブリック・ディプロマシーに関する一連の記事として結実するアイデアを私に与えてくれた。特に朴槿恵政権時代には、個人的にはそれほど関心がなかったにもかかわらず、私はしばらくパブリック・ディプロマシーの専門家とされていた。

カルチャーセンターでは、時には官僚的な活動で一日が埋まってしまうこともあったが、それ以外の時には、基本的に「外に出て、役に立ちそうな人に会ってこい」と言われた。アメリカのアジアの専門家に会ったり、国務省を訪ねたり、ジャーナリストや教授と話したりするのは自由で、私はかなりのネットワークを築いた。ワシントン D.C. がどのように

機能しているのか、ぶらぶら歩きながら学ぶことができたのは、本当にありがたかった。

韓国文化センターは、韓国大使館から数軒坂を下ったところにあるこじんまりとした建物だった。4人の韓国人長期現地採用職員、3人の韓国人外交官、そしてさまざまな短期インターン（大学院生）が働いていた。階には展示室があったが、滅多に訪れることはなかった。オフィスは2階の奥にあった。私は2階のロッククリークの見えるデスクで働いた。在任期間の終わりには、文化的なイベントや機関誌『ダイナミック・ 코리아』の編集に携わるチームが私の助けをあまり求めていないことが次第に明らかになり、私は3階の小さなオフィスに移った。

一日中、自分が何をすべきなのかははっきりしないこともあった。ダイナミック・ 코리아のために毎日投稿される記事を編集する韓国人チームがいたのだが、2005年の終わりごろには、彼らは私の仕事に嫉妬するようになっていた。私はちょっとした編集を頼まれ、ワシントンのさまざまな人物へのインタビューをジャーナルに掲載したが、ジャーナルの運営やコンテンツの開発には一切関与させなかった。

結局のところ、大使館での私の最も重要な役割は、韓国大使館に勤務する外交官や各省の代表者たちと、人々のオフィスやカフェで、昼食や夕食を共にしながら1対1で会うことだった。私は大使館にいるすべての政府代表に自己紹介し、協力を申し出るよう努めた。ほとんどの人は特に手助けを必要としていなかったが、アメリカ政府の担当者を紹介した

り、ワシントンの仕事ぶりについて情報を得たりして、彼らと分かち合うことができた。

外交官たちは海外特派員を非常に重要視しており、そのジャーナリストたちは時として大使館員よりも優れた問題意識を持っていることを私はすぐに学んだ。何人かのジャーナリストが私の記事を引用し、ジャーナリズムへの道を歩み始めた。

結局、メディアへの執筆が私のキャリアで最も成功した部分となった。おそらく、そうなることがわかっていたら、記事や本を書くことにもっと時間を費やし、人に会ったり、プロジェクトや仕事の機会について話したりする時間はもっと少なかっただろう（どれも何にもならなかった）。私の活動を制限する機密文書が、私がより自由に行動できる分野として、特に執筆を特定していたのかもしれない。もちろん、私とアメリカの主流メディアとの交流は常に深く制限されてきた。しかし、極めてデリケートな問題について書くことを許されたことは何度もある。

私が初めてメディアに記事を書き始めたのは、韓国大使館にいた頃だった。それまではあまり興味のない活動だったが、ワシントンでより多くの読者を獲得する必要性を真剣に感じ、文章力は私の重要な資産のひとつとなった。その後、新聞に文章を書くことが私のキャリアの中心となり、韓国に移ってからは、論説形式をマスターすることが私の主な表現手段となった。しかし、文章を書くという問題は、私にとって簡単なことではなかった。何しろ私はイリノイ大学在学中、知的な仲間たちとの有意義な交流は基本的にすべて遮断されていたし、シャンペーンの緑の

党の党员であろうと、兵器庫の軍人であろうと、学術的な議論に関心のない人は大勢いた。私は日本古典文学に関する本の原稿を完成させなければならぬと何度も言われたが、そのテーマにはもう文字通り何の興味もなかった。私は、学術書を書くことは懲役刑に等しいと考えた。あるレベルでは、私は物事を行うこと、政策上の戦いに逃げ込み、学究生活を捨て去ることを望んでいた。

しかし、ワシントンで私を待っていたのは、そんな世界ではなかった。善戦する人は極端に少なく、自由貿易や伝統的な兵器システムの応援団にことごとく直面した。大使館は魅力的な経験だったが、それは明らかにキャリアではないし、周りのシンクタンクや大学が私のような人間に興味を持つとは思えなかった。

文章を書くことは、シンクタンクの世界で他の人たちが自己を確立するのに役立つものであることは明らかだったし、セミナーで配られた専門用語だらけのたわごとをいくつか読んで、ある種の自信を感じ始めた。

私が最初に挑戦したのは、*Japan*

*Focus* (アジア問題に関する学術誌) に寄稿した韓国の盧武鉉大統領に関する記事だった : *The Balancer: Roh Moo-hyun's Vision of Korean Politics and the Future of Northeast Asia* (2005年8月1日) と題したものである。この記事は広く読まれ、コメントも寄せられた。盧武鉉の正体に関する報道がまったくない中、私の記事はその空白を埋めるものだった。

この記事に対する批判は実際にあった。その中には、私と親交のあった国務省韓国デスクのテッド・オシウスも含まれていた。私は、私の記事が盧大統領を擁護するものだとはまったく思っていなかったし、どちらかといえば、韓国のために中道路線を見出そうとする彼の明確な努力にもかかわらず、人々が彼を左派と決めつけようとするやり方が問題なのだと考えていた。

そして利益相反の非難もあった。ある学者はジャパン・フォーカスに、私が韓国大使館で働いていたので、この記事は私の雇い主を喜ばせるためのパフ・ピースではないか、と書いてきた。時間をかけて記事を熟読した人なら、そのような結論に達することは難しかっただろう。しかし、私の状況はあまりに異常だったので、そのような意見を持つ人がいてもおかしくはなかった。もちろん、私が韓国大使館で働いているのは、法の支配のために戦ったために米国から不法追放されたからだの説明しなかったが、そのキャンペーンは後回しにすることにした。

そして、直属の上司であるイ・ヒョンピョからは、承認を得ずに大統領のことを書いたことを叱られた。彼は自分の仕事をしただけだと思う。実際、盧武鉉政権が、盧大統領について思慮深く書いているのは実は私一人であることを知ると、彼は一日で口調を変えた。実際、李は私に、一般に配布するために記事を日本語や中国語に翻訳する手配をするように頼んできた。

次の記事は、米中の対立を一時代前の英米の対立と比較したものだった。年3月6日に発表された「中国は新たな冷戦の宿敵か」という記事は、さ

らに成功を収めた。この記事はまず韓国のオンライン新聞『OhMyNEws』に掲載され、その後ノーチラス研究所の NAPS ネットリストに掲載され、政策立案者に広く配信された。

私は、米中間の競争は本質的に経済的、文化的、政治的なものであり、軍事的な側面もあるが、おそらくそれは最も重要な要素ではないと主張した。さらに、米国は旧米国のようであり続け、中国は新ソ連のようであるという「冷戦」モデルの使用はまったく的外れであることを示唆した。この記事は広く読まれ、別の学者による複雑な反論を含むフォローアップが NAPS ネットに掲載され、私の反論も掲載された。この記事は『フィナンシャル・タイムズ』紙にも掲載されたが、私に関する記事が企業メディアに掲載されたのは、過去 18 年間で極めて稀なことだった。

大使館で最も成功したプロジェクトは、私が運営を許可され、李館長から誰を招き、何を議論するかについてかなりの自由裁量権を与えられた KORUS ハウス・セミナー・シリーズだった。私は、このセミナーがワシントン D.C. で開かれた討論のためのユニークな場であり、毎回参加してくれる熱心な会員を増やしたことが、最高の成果であったと感じている。このレクチャー・シリーズは、コリアン・カルチャー・センターの李賢杓（イ・ヒョンピョ）館長が考案したコンセプトである。KORUS とは、当時交渉中だった KORUS（韓米）自由貿易協定のことだ。私がカルチャーセンターで経済学や自由貿易の利点に関するさまざまなイベントを企画することが提案された。私は指示されたとおりに何度かそうしたが、いわゆる「自由貿易」に強く反対していたため、楽しむことはで



きなかった。私は自由貿易が環境や地域社会に与える破滅的な影響を知っていたし、与えられた資料を繰り返し読むこともできたが、大使館全体を支配していた自由貿易の推進には賛同できなかった。

多くのセミナーは、文化、経済（貿易以外）、気候変動、社会、歴史に関するものだった。私が招いた講演者には、アメリカのアジア政策に極めて批判的な人たちも含まれていた。『フォーリン・ポリシー・イン・フォーカス』のジョン・フェファーや、元駐韓大使でジョージ・W・ブッシュの猛烈な批判者であるドナルド・グレッグのような人たちを私が招待しても、韓国人はまったく気にしていないようだった。イリノイ大学での講演で知り合い、私の仕事に強い関心を持っていたビル・オドム將軍でさえ、来てくれることになった。さらに、メールでのやり取りを通じて親しくなった政治学者のチャルマーズ・ジョンソンも招待した。ジョンソンは、健康上の理由でもう旅行には行かないと言っていた。

ビル・クリントン政権下の元国務長官マデリーン・オルブライトのアシスタントと、彼女のコンサルティング会社で交わした一連の会話もなかなか興味深いものだった。そのアシスタントは、まるで私が卑しい存在であるにもかかわらず、高貴な人物に接触するのは失礼で不適切であるかのように、私をあからさまに軽蔑して接した。しかし、そのアシスタントははっきりとノーと言わなかった。おそらく、韓国大使館がその事務所と何らかのコンサルティング契約を結ぶことを期待していたからだろう。

私はそのような期待に何度もぶつかった。アジアにおけるアメリカの役割はどうあるべきか、という率直な議論の一環として私が招待した人々は、コンサルティング契約が欲しいということをほのめかしたり、明言したりした。実際、すでに韓国大使館のコンサルティングに携わっていた人たちの中には、イデオロギー的な理由ではなく、私が競争相手を提供したという理由で、私を不倶戴天の敵と見なした人もいた。韓国経済研究院が、私が彼らの領域に踏み込んでいることに苛立ちを示す緊迫した場面も何度かあった。私はこのような問題に外交的に対処しようと努めたが、KORUS ハウスのセミナーに水を差すようなことはしなかった。ワシントン DC の有名なシンクタンクで行われるような、意義深く有能なプログラムを提供することを決意し、その目標はしばしば達成できたと思う。同時に、私の努力は、あの腐敗した街で商売をしているアジアの専門家の大多数には歓迎されないという結論に達し、少なくとも主要な機関で実際に地位を持たない限り、そのような環境に私の居場所はなかった。

2006年の春から、私はパートタイムで再び教鞭をとるようになった。個人的には、学問から永遠に離れたかった。教えたいとも思わなかったし、また学術論文を書きたいとも思わなかった。もっと事務的な仕事の方が自分の興味やスキルに合っていたらう。しかし、私には副収入が必要だったし、健康保険もなく、わずかな給料を補うための唯一のお金だった。ジョージ・メイソン大学、そして後にジョージ・ワシントン大学で教えた授業では、若い人たちと話す機会があり、アメリカという国をより深く理解することができたし、韓国大使館での生活とは違った新鮮さ

を感じた。ジョージ・ワシントン大学の何人かの学生は、その後も私と親しく付き合ってくれた。

ホン大使の退任後、大使館での私の影響力はいくぶん低下し、政府主導のオンライン・ブランディング・キャンペーン「ダイナミック・コリア」の運営に韓国人スタッフ全員が参加するようになったため、私の仕事量は減ったものの、リー局長は私を喜んで送り出してくれ、CSIS、ブルッキングス研究所、ウィルソン・センター、ニュー・アメリカン財団、ヘリテージ財団など、多くのセミナーを渡り歩いて一日の大半を費やした。私はメーリングリストに登録し、短期間で多くのスタッフと親密な関係を築いた。名刺を集めて整理し、『ダイナミック・コリア』のために専門家にインタビューし、コルス・ハウスに専門家を招いて話を聞き、時折ランチやコーヒーを楽しみながら、できる限り役に立ちたいと申し出た。

2005年秋以降、私の人生において重要な役割を果たした勉強会が2つあった。ひとつは、国防分析研究所のケイティ・オーが主催する、シンクタンクの若手韓国専門家のための定期セミナーシリーズである。ケイティはブルッキングス研究所にも所属しており、当初から私に強い関心を寄せてくれた。彼女は、私が重要な人物であると認識されるよう、わざわざ配慮してくれた。それ以来、彼女は良き友人であり、サポーターであり続けている。ある種の皮肉が大好きな優しい女性で、ミサイル防衛、北朝鮮の脅威、自由貿易についてDCのシンクタンクの「インサイダーズ・ピーク」を語るができると同時に、はるかに多くのことが起こっていることを認めていた。

このゼミの他のメンバーは私より若く、教授になってすでに8年も経っている私が若手扱いされるのは、ある意味奇妙なことだった。とはいえ、他のメンバーの何人かは親友になった。また、自分だけの優位性や影響力を主張することに喜びを感じる者もいた。私は、ケイティ・オーのように世界の架け橋になることはできなかった。私にとって、例えば気候変動や社会の分断など、当時の本質的な問題の多くは非常に重要であり、議論から外すことは単に不誠実なだけだった。だから、私はうまく溶け込めなかった。もしイリノイでの経験がトラウマになるような対立的なものでなかったら、もしかしたら移行できたかもしれないと時々思う。

もう1つのグループは、ジョージタウン大学のデイビッド・スタインバーグと、フォーリン・ポリシー・イン・フォーカスのジョン・フェファアと一緒に作ったもので、基本的な問題で意見が異なることはあっても、結局は私と親しい2人だった。

デイビッド・スタインバーグはビルマの専門家で、韓国問題についても幅広く書いており、温かい人柄と尽きることのない好奇心を持っていた。また、彼は自尊心もなく、最初から私の話を真剣に聞いてくれた。デイビッド・スタインバーグは、私が中国語、日本語、韓国語に堪能であることを財産だと考えてくれたワシントンでも数少ない人物の一人だったとさえ言える。彼はときどき私をコスモスクラブに朝食に招待し、フェアバンクスやライシャワーにさかのぼるアジアの専門家としての偉大な伝統をどのように再構築できるかを話し合った。デイビッドは当時、アジア政策で活躍する最も古い人物の一人であり、アジア財団と長い付き合い

があった（アジア財団が広範かつ積極的な役割を担っていた時代から）ので、私がルーズベルトやアドレー・スティーブソンを彷彿とさせるような発言をすることを、ある程度理解してくれていたのだと思う。彼はまだ、失われた伝統のようなものを覚えていたのだ。

ある日、私は間違えて、コルスハウスのイベントに定期的に参加する人たちのために、巨大なグーグルグループを立ち上げてしまった。グーグルに特別な許可を得て設定したのだ。コルスハウスのイベントに関する情報を発信し、定期的に参加してくれている人たちからの反応を得るのに最適だと思ったからだ。総勢 150 人ほどだった。しかし、グーグルグループが設定されると、私に送られたメッセージは他のメンバー全員にも送られることがわかった。20 分も経たないうちに、このシステムに対する苦情が何件も寄せられ、そのすべてがまた他のメンバー全員に流され、さらに苦情が増えた。グーグルグループを閉鎖するのに 5 時間かかり、私は何度も謝罪を送った。

その出来事をきっかけに、デイビッド・スタインバーグともっと長い話し合いをすることになり、彼は、オープンマインドな人たちを中心に、東アジアについて定期的に議論する独自のグループを作ろうと提案した。ジョン・フェファーの協力も得て、私たちは 10 人から 20 人ほどの参加者を集め、活発で思慮深いディスカッションを行う定期シリーズを企画した。

このシリーズは、私がワシントン去了後もしばらく存続し、韓国、日本、中国の各大使館とフランス、ドイツ、イタリアの各大使館の間で

開催した短編映画祭もそうだった。さらに、2007年2月に韓国へ旅立つ私を送るために、とても思い出深い夕食会に招待してくれたのもこのグループだった。

あの困難な2年間、私のために特別な努力をしてくれたのだから。

当時のアメリカ外交の中心人物は、ズビグニュー・ブレジンスキー（ジミー・カーターの元国家安全保障顧問、CSIS 創設メンバー）とヘンリー・キッシンジャー（リチャード・ニクソンの元国家安全保障顧問、同じく CSIS 創設メンバー）だった。この2人の間で、影響力は重複しながらも異なるサークルを形成していた。ブレジンスキーは、企業内部でのつながりが強く、罪がないわけではなかったが、自分の役割をプロフェッショナルとして認識し、最終的には大義のために働く学者であり戦略家であると自らを演出した人物だった。それとは対照的に、キッシンジャーは自分のコンサルティング会社、キッシンジャー・アンド・アソシエイツ（マデリーン・オルブライトが真似していたのはこれだ）に連邦政府の資金を吸い上げようとするビジネスマンだった。キッシンジャーは、特に急進的な民営化の提唱を通じて、アメリカの外交政策の本質を誰よりも悪化させた。

私はヘンリー・キッシンジャーに会ったことはなく、彼や彼の周囲の人々との交流も一切なかった。しかし、2006年に私がブレジンスキーにコルス・ハウスで講演してもらえないかと手紙を書いたところ、彼は詳細で丁寧な返事を書いてきた。国家元首や大物知識人に対するような真剣な態度で、彼はこの要請に応じてくれたのだ。その手紙は私に深い感

銘を与え、ブレジンスキーはおそらく当初から私を擁護してくれた人物の一人であり、私を援助する上で重要な役割を果たした人物の一人なのではないかとさえ思わせた。チョムスキーは結局 14 年以上のペンフレンドになり、私たちの電子メールのやりとりは何百回にも及んだ。

ブレジンスキーと直接会ったのは、CSIS のセミナーで一度だけだった。私は彼に近づき握手をしたが、彼はまったくノーコメントだった。まるでよそよそしい態度ではなかった。まったく逆だ。公の場で親密さを示唆する必要はない、ということだったのだろう。ブレジンスキーがアフガニスタンにおける過激派の台頭やロシアとの対立にどのような責任を負っていたにせよ、私と話したいと思う人がほとんどいなかった時期に彼がしてくれたことに私は感銘を受けた。

しかし、ブレジンスキーが私に対してそこまで熱狂的だったのが事実だとすれば、外交政策に対する冷酷な環境を示唆している。私があれば長い間そのような扱いを受け、ブレジンスキーらのような人物の強い支持を受けてもほとんど変わらなかったと考えることは、そのような政策知識人がもはや意思決定プロセスに関与していないことを示唆している。

ジョセフ・ナイ（当時ハーバード大ケネディスクール教授）も、わざわざ私を助けてくれた一人だ。2003 年に彼がイリノイ大学を訪れたときに会って話をする機会があり、それ以降、私たちは広範囲にわたって文通もしていた。彼は、私の信頼性を確立するのに役立った記事のために、何度か私のインタビューに応じてくれた。

一緒に過ごした時間は比較的短かったが、私はナイにかなり親近感を抱くようになった。2015年に私がハーバード大学の比較文学部で、（韓国研究院が主催を断った後）少人数の学生と教員を前に講演を行った際、テーマが国際関係とは関係なかったにもかかわらず、彼がわざわざ講演に来てくれたことを鮮明に覚えている。

国際関係や安全保障の分野で、他にも何人か挙げたい人がいる。私は、米国が海外で犯した悪事についてナイーブになっているわけではない。しかし、奇妙に思われるかもしれないが、あの時代の腐敗に立ち向かい、反対しようとする唯一の人物は、しばしば軍や諜報機関に所属していた人々であった。平均的な人々ではなく、例外的な人々だったのだ。それとは対照的に、私が出会った NGO や左翼団体の完全な臆病さには衝撃を受けた。もしキャンペーンでの私の運命が緑の党やさまざまな左翼活動家の手に委ねられていたら、私は生き延びることはできなかっただろうと正直思う。

ブルッキングス研究所北東アジア政策研究センター所長のリチャード・ブッシュもまた、私をイベントに招待したり、単にコーヒーやランチを共にしながらワシントン D.C. で何が起きているのかを話し合ったりするために多大な努力をしてくれた。しかし、私のケースについて話し合ったことはなかったし、尋ねられたこともなかった。私は最初から、彼がすでに十分すぎるほど知っていると思い込んでいた。

彼はまた、ブルッキングスでの講演に私を招待しようとしたが、できなかった。それから 10 年後、私が韓国で著名な人物となり、主要なイベ



ントに招待されるにふさわしい人物となったときでさえ、それは不可能なままだった。

会長のストロブ・タルボットとは、イエール大学での私のクラスでスピーカーを務めたこともあり、親しい間柄ではなかったが、良好な関係を築いていた。2010年にCSISの再生可能エネルギーに関するセミナーで、奇跡的に講演させてもらったが。コルス・ハウスでは、シンクタンクの人たちを招待して話をしたけれど、彼らから返事をもらうことはなかった。私はブラックリストに載ったままだったと思う。

ラリー・ウィルカーソンとコーヒーを飲みに行くまでに1年かかったが、すぐに意気投合し、それ以来文通を続けている。彼は気さくで率直な話し方をする。彼がまったく率直だったとは言わないが、当時はそうであると感じる人はほとんどいなかった。

完全に気が合ったとは言わないが、会ったことはないものの、共通の友人が多いことは明らかだった。私は友人から彼のメールアドレスを入手し、突然手紙を書いた。彼は2時間以内に返事をくれ、2日後にフォギーボトムのカフェで会った。彼は当時の政治的混乱についても臆することなく語り、「よくここまで生き延びてきたものだ」と私に言ったのをはっきりと覚えている。私はしばしばそう感じていたが、周囲はすべてがまったく正常であるかのように振舞っていた。その一言だけで、ラリーは私がワシントンの誰からも聞いたことのない真剣さで語ってくれた。私は何度も彼をさまざまなイベントに巻き込もうと試み、最終的には2013年に韓国で開催される会議に出席してもらうことになったが、奇妙

なことに、ラリーは明らかに経済的にははるかに恵まれており、私のような嫌がらせを受けることもなかったようだが、彼の移動の自由は私よりも制限されていた。韓国政府はネットワークキングを推進するために私を連れてきたのだが、その立場上、私はラリーが招待されなかったイベントに招待された。

後に私がワシントンでオルタナティブな政策討論グループを立ち上げようとしたときの中心人物は、当時『フォーリン・ポリシー・イン・フォーカス』のディレクターだったジョン・フェファーだった。私たちは似たような家庭の出身で、私が（文学の教授として）外交政策に関心を持っていたように、彼は文学に強い関心を持っていた（戯曲もいくつか書いていた）。私たちは多くの問題で意見が一致したが、時には反対意見もあった。ジョンは後に私が韓国に設立したアジア・インスティテュートのフェローになることに同意し、その後数年間、一緒に数多くの記事を書いた。

2005年の夏、私が非伝統的な安全保障上の脅威についてのコンセプトを練り始め、会議の企画書を作成したとき、最初にアドバイスを求めたのがジョン、デビッド・スタインバーグ、リチャード・ブッシュだった。

私は、水不足や環境の悪化がもたらす深刻な安全保障上の脅威について議論する会議を、たとえ小さなセミナーであっても開催しようと繰り返し努力した。私が「非伝統的な脅威」という話題を持ち出したとき、政策界のある人々がまったく関心を示さなかったことを鮮明に覚えている。

どういふわけか、私たちが直面している最大の問題は、それほど重要な問題ではないように思えたのだ。

私は、派手だが特に有能というわけでもないジャーナリストの政策王、スティーブ・クレモンズ（当時ニュー・アメリカン・ファウンダーションに在籍）と議論した：金と石油を合わせたよりも価値がある”。クレモンズは、このテーマは「面白い」と答え、もしかしたら “いつか” 検討できるかもしれないと言った。それについて彼から返事が返ってくることはなかった。

私たちはこのイベントのための資金を一切得られなかった。私はデビッド・スタインバーグにこう言った。この人たちは、気候変動や水不足に空母で対応できると考えているのだろうか？”

しかし、私は明らかに間違った場所にいた。安全保障の専門家と呼ばれる人たちは皆、安全保障にはまったく関心がなかった。しかし私は、気候変動を主要な脅威として認識し、この課題に直接対処するために軍全体を改革する必要があるというビジョンを見始めた。これはそれ自体貴重なコンセプトであり、私はこのテーマをより詳細に発展させることになる。このテーマは、後に私が自分のメッセージを洗練させたときに、政治的な問題を引き起こす原因にもなったが、2001年から2004年にかけて私たちが苦しんだような規模ではなかった。

ワシントンで私を助けてくれた人、重要な会話を交わした人、私なりにお世話になった人は他にもたくさんいる。コービー党の創設者である民

主党の進歩的活動家アナベル・パーク、思慮深い弁護士のシャーリー・ジョンソンとその優しい夫チャールズ、彼らの家に頻繁に招いてくれた人たち、他にもたくさんいた。

ワシントンでの経験には、一冊の本を書くのに十分な内容が含まれていました。実際、そこでの出会いの多くは、ソウルに移ってから大成功を収めた韓国文化に関する後の私の本に活かされている。しばらくの間、私はパブリック・ディプロマシーの専門家だと思われていた。しかし、それらの出来事はこの話とは直接関係ないので、割愛する。

その期間に自分が変わったことは間違いない。学者以外のさまざまな人々と出会い、ジャーナリスティックな書き方を学んだ。韓国人とはかなり親密に仕事をし、彼らがしばしば非常に受容的であることに気づいた。しかし、それ以上に重要だったのは、米国との結びつきが弱まったことだ。イリノイ大学にいたとき、私は殺されるかもしれないと恐れていたが、法の支配を回復しようとする他のアメリカ人たちと一緒に働いていたのは明らかだった。私はとてもアメリカ的で、アメリカのための闘いの中心に感じていた。しかし今、私の周りには、そのような情熱を感じず、サービスの契約や政治的コネクションに興味を持つ人たちが大勢いた。1年後、私は自分が本当に移行できていなかったと結論づけた。私はワシントン D.C.の政策インサイダーにはなれず、いくつかの基本的な行動パターンに予想外の反発を感じた。イリノイ大学では、大義のためなら誰とでも協力する、極めて現実的な人間だと想像してい

た。しかし、ワシントンの文化には私のような者が入り込む余地はないと悟った。

しかし同時に、2000年から2007年にかけて、私は明らかに変わった。具体的に何が起こったのかを特定するのは難しい。米国ははるかに抑圧的で退廃的になり、否定する文化が入り込んでいた。しかし、私はまた、世界や米国の問題を以前よりも意識するようになった。2000年11月に突然事態が変わったのではなく、政治的買収を前にして教養階級が愚か者を演じるという大失敗は、長いプロセスの産物であり、私の知らないところで過去にも似たような出来事があったのだと気づき始めた。また、階級や経済構造といった問題についても、以前よりずっと真剣に考えるようになった。私は決してマルクス主義者ではなかったが、資本と階級の間をマルクス主義的に分析することが、私が観察したある奇妙な現象を説明する唯一の方法であるように思えた。

2006年10月頃、イエール大学時代の同級生、ウー・チャン・リーとフォギーボトムでコーヒーを飲んだ。彼とは約8年ぶりの再会だった。ウー・チャンと私は、1987年に初めて会ったとき、友人であり、奇妙な意味でライバルでもあった。当時、私たちは日本の大学間交流センターで日本語を学ぶために登録し、同じ奨学金に応募していた（ウー・チャンは奨学金を受け、私は受けなかった）。ウー・チャンは韓国人で、日本語がかなりできたし、後に中国語も学ぶことになる。私たち2人は、将来の計画についてかなり野心的だった。

私が教授になったのは、ある意味偶然だった。ウー・チャンは結局、国務省に数年勤めた後、私たちが出会った頃、ブルッキングス研究所に多大な貢献をしてくれた億万長者の中国投資家、ジョン・ソントンの会社で働くことになった。彼は大金を手にし、日本人女性と結婚して悠々自適の生活を送っていた。私は文字通り銀行には何もなく、自分の仕事が長く続くかどうかもわからなかった。

彼はソントンとの新しいコンサルティングの仕事、ストロブ・タルボットとの関係、その他の重要な問題について長々と話した。同じカフェで)ラリー・ウィルカーソンとコーヒーを飲みながら、ワシントンD.C.の制度的崩壊について長々と話したのとは対照的に、ウー・チャンにとってはすべてがうまくいっているように見えた。

ひとつ確かなことは、高収入でなく、超富裕層と親密な関係を持たなければ、ウー・チャンから見て成功したとは言えないということだ。国務省での経験や人脈作りの努力の結果、彼が変わったという面もあるだろう。しかし、私自身もまた、自分の進軍によって大きく変わったのだ。それが彼に会った最後だった。

そしてついに、両親や兄弟、その他多くの人たちに、当時イリノイ大学にいた私に起こったことについて手紙を書く努力をした。要点を5ページにまとめ、印刷して郵送した。彼らに頼まれたからそうしたのではない。

私には 2 つの動機があった。第一に、私が何が起こったと考えているのかを知ってもらいたかった。結局のところ、私については多くの噂や半ば真実のようなものが流布されており、彼らが何を知っているのか確信が持てなかった。イリノイ大学のジェリー・パッカード部長は、私がされたことをすべて知っていると思っていたが、私がある種の深い政治的トラブルに巻き込まれていることを知っている以外には、彼は何が起こったかについてはほとんど何も知らなかったことを後で知った。

つ目の動機は、家族に言い訳をさせたくなかったからだ。後日、エマニュエルに何が起こったのか知らなかったと、あっけらかんと説明されるのが嫌だったのだ。私は、紛れもない形式で何が起こったかを伝え、彼らの助けを求めたが、彼らはそれに対してほとんど何もしなかった（これは正確である）ということを実に明らかにしたかったのだ。

父は手紙のおかげで理解できたと答えたが、それ以上は聞かず、それ以上話を聞こうともしなかった。2006 年末、私は父とサンフランシスコに散歩に行き、約 1 時間、何が問題なのかを説明しようとした。彼は（手紙にもかかわらず）まるで初めて聞いたかのように振る舞い、話を聞いてはくれたが、質問も提案もしなかった。

継母のジェイミーは、時間を割いて私と一緒に歩き、家族の中で最も有意義な質問をしてくれた。彼女は、この物語がどのようにまとまっているのか、何が反論の余地のないものなのかを確かめようとしているようだった。しかし、彼女はまったく何もしなかった。

年に弟のマイケルが会いに来てくれて、長い散歩にも出かけた。父と同じように、彼はただ話を聞くだけで、ほとんど何も言わなかった。彼は会話の最後に特定の出来事について言及し、私が言ったことを真剣に受け止めていたことを示唆した。しかし、彼は何も考えておらず、必要以上に聞こうともしなかった。彼は後に、私の話を信用できないと言い返すことになる。しかし、その会談の間、彼は耳を傾け、理解しようとする姿勢に近づいた。

母はすぐには返事をしなかったが、その後、私に真剣に関わろうと努力してくれた。そして、返事をくれなかった人たちもいた。私は 2015 年にも同じようなキャンペーンを始め、友人や家族に少なくともこの問題について議論させようとしたが、特に成功はしなかった。

そのため、私の意志や最善の判断に反してさえ、私と家族の間には例外なく明らかな距離が広がっていった。



## 第5章

### 韓国への移籍

私は韓国大使館に長くいるつもりはなかった。実際、短期間のうちにもっと重要な別の仕事が見つかるだろうと思っていた。しかし、イリノイ

大学を解雇されたときから、私のフォルダーには「アメリカ国内での雇用はできない」と明記された手紙が入れられていたのではないだろうか。それ以来、アメリカでの講演で報酬を得たことは何度かあったが、文字通りアメリカでの仕事のオファーは、コリア・ソサエティからのオファーを除いて一度もなかった。

私は 2006 年にニューヨークのコリア・ソサエティに招かれ、韓国文化に深い関心を持つ数人のアメリカ人とともに講演を行った。このイベントのコンセプトはある程度私のもので、最初の企画書も私が書いた。コリア・カルチャー・センターの李所長はコリア・ソサエティと連絡を取り合っており、ドナルド・グレッグ会長は私のケースに関心を持ってくれた一人だった。私の記憶が正しければ、父にはエール大学のルームメイトがいて、彼はビジネス関係の仕事をしていて、CIA ともつながりがあった。彼は昔からの韓国人、特にジェームズ・リリー元大使（これもエール大学出身）やドナルド・グレッグを知っていた。この友人もまた、私に好意的な言葉をかけてくれたのだと思う。ザック・ホールもエール大出身で、グレッグの家族とも知り合いだったと思う。グレッグは私のケースに同情的で、行われたことの不当性を認め、この国の混乱を認識していた。私は、レーガンの武器取引人質事件の立役者であり、CIA 政治の皮肉屋でもあるグレッグに幻想を抱いていたわけではないが、個人的には、ある時彼が私に言った言葉にある種の誠実さを感じ、そこらへんの誰よりも思慮深いと感じた。グレッグは後に、アメリカの朝鮮半島政策に対して、進歩的なメディアでさえ容認できないような、より強い批判を展開するようになる。彼は明らかにジョージ・W・ブッシュ

政権に嫌悪感を抱いており、私を助けるために何かしたいと思っているようだった。

しかし、彼は 2007 年以降、私からのメールに返信しなくなった。

コリア・ソサエティーでの私の韓国大衆文化についての講演は満員で、ワシントン D.C.まで届くほどの話題となった。グレッグは、コリア・ソサエティーで私を雇う方法を探そうとしたが、それは 2004 年以降、アメリカ国内から私にオファーがあった唯一の就職先だった。

その 2 週間後、コリア・ソサエティーのスタッフから電話があり、雇用の申し出があった。韓国大使館でのあいまいで不安定な仕事（手当なし）から解放されたかった私は、大いに興味を示した。

その仕事について 2 度電話で話し、何通かのメールを交わしたが、そのオファーが本気でないことがわかるまで、そう時間はかからなかった。マンハッタンにある知名度の高いコリア・ソサエティーのオフィスで働くということで、提示された給料は、イリノイ大学での最初の給料より少し少なく、韓国大使館が私に支払っていた給料とほぼ同じだった。今にして思えば、まったく意味のないことだった。私は 8 年間教授を務め、豊富な経験を持ち、コリア・ソサエティーの中心的なポジションを担う資格があったにもかかわらず、まるで大学を卒業したばかりの新卒者のような扱いを受けたのだ。

韓国側では、多くの友人たちが、アメリカの友人たちとは比べものにならないほど熱心に、私のポジションを探してくれていた。そして 2006

年春、高麗大学のテニユアトラック職の面接を受けるために韓国へ飛ぶことになった。この提案は、現実的なものであり、私にとって重要な突破口になりそうだった。同時に、このオファーには問題があることも最初からわかっていた。国際化を推進するキャンパス全体の努力の一環として、高麗大学の学長は外国人の雇用を増やそうとしていた。このポジションは韓国文学科で、明確に外国人のためのものだった。私は講演を準備し、面接のためにソウルに飛んだ。奇妙な経験だった。

私は韓国文学について、ワシントン D.C.の政策関係者の誰よりも知っていたにもかかわらず、韓国文学部門のポジションのために私を面接するのは馬鹿げていた。私は人生で韓国小説を 5、6 冊しか読んだことがなく、現代作家の名前も数えるほどしか挙げられなかった。しかし、他にやる人がいないのであれば、韓国文学を英語で紹介する手助けをする有意義な役割を果たすことは可能だろうと思ったのは確かだ。

実は、本当は教えたくなかったんだ。その時点では、むしろ管理職になりたかった。イリノイ大学で教壇に立つことは、私にとって悪夢だった。

私は韓国文学の教授たち 14 人ほどを前に、小説家パク・チウォンについて韓国語で 50 分ほどプレゼンテーションを行った。質問の中には思慮深く、興味をそそるものもあった。しかし、私を貶めようとする教授が 2 人いて、私が朴智元に関する主要な学者の名前を知っているか、この分野の重要な研究を知っているか、と詰め寄った。私は自己弁護する気はなかった。しかし、もし私を雇ってくれるなら、国際的な働きかけを手伝うことができると提案した。

質問は 10 分ほど続き、会議は終了した。私は退席を求められた。講演はしたが食事に誘われなかった初めての面接だった。後日、ある教授と電話で話したところ、教授たちは私に反対しているというより（実際、私が韓国語を学ぼうとした努力は評価していた）、学長が国際化プロジェクトの一環として私に無理強いしようとしたことに憤慨しているのだということがわかった。

この面接も失敗するように仕組まれたものだと感じていたが、以前よりはるかに成功に近づいたと言わざるを得ない。秋には、具体的で、ある意味、まったく異なる 2 つの未来を提示してくれる 2 つのオファーがあった。

ブルース・ベヒトルは海兵大学校で教鞭をとる退役海兵隊員で、個人的に好きだったし、韓国人と結婚することがどういうことなのか、その他のことについてもよく夜遅くまで語り合った。彼は一種の仲間であり、彼が北朝鮮について書いたことに必ずしも同意するわけではなかったが、基本的にまともな人だという感覚は持っていた。

たまたま 2006 年、私は防衛大学の卒業式でスピーチをすることになった。それまでも、ときどき会ってフランクに話をする軍のグループがあった。個人的には、国務省の人たちよりも、私が会った軍人の方の方が好きだった。というのも、私はときどき、真実を語ろうとする軍人に会っていたからだ。

そのような状況の中で、ブルースは私に海兵大学校で教鞭をとるポジションがあり、私はそのポジションを得るチャンスは大いにあると教えてくれた。ラリー・ウィルカーソンも助けてくれたかもしれないが、覚えていない。

私は東アジアの安全保障について、気候変動や現代政治を多く含む講演をした。彼らの中には、海外のさまざまな汚い戦争に深く関わっている筋金入りの軍人のような人もいた。しかし彼らは、シンクタンクの人々がしばしばそうでなかったように、私に対してはかなり歓迎しているように見えた。どの大学もシンクタンクも NGO もそうしなかったのに、なぜ海兵大学校は私に仕事を斡旋してくれたのか、その理由については推測の域を出ない。おそらく、私が3ヵ月間失業していたときに、CIAから仕事のオファーがあったのと同じような状況だったのだろう。

しかし、私はこのポジションを夢のような仕事だとは思っていなかった。この戦いで軍関係者と協力する必要性は認識していたが、避けられるのであれば体制の一部になりたくはなかった。しかし、大使館の仕事よりはいい機会に思えた。彼らは私にオファーを出す準備ができていたと思うが、私はそれを知ることはなかった。というのも、私はブルースに、韓国でのもうひとつの仕事のオファーを受けると手紙で伝えたからだ。

2006年、ワシントンD.C.にいた韓国人の中で最も忠実な友人のひとりが、内務省の高官だったチェ・ミンホだった。彼は私より数歳年上の思慮深い人物で、私のことを知るだけでなく、私の家族のことも知るために時

間を割いてくれた。私は彼にワシントンで役に立ちそうないろいろな人を紹介し、彼はとても感謝してくれた。

年6月、崔の高校時代からの親友である李完九が忠清南道知事に当選したとき、彼は私に顧問として働かないかと提案した。しかも、2人とも大田に大きな野心と人脈を持っていたため、実現させる決意を固めていた。李完九は一時、首相にまで上り詰めるが、さまざまなスキャンダルで辞任に追い込まれた。

2006年の夏、市民ジャーナリズムの会議に出席するためにソウルを訪れたとき、チェ・ミンホは、イ・ワング知事に会うために KTX で大田（テジョン）まで行ってほしいと言った。私は同意し、3時間以内に大田にある忠南道庁の玄関で会った。広々とした知事室で李完九と崔珉鎬（チェ・ミンホ）と席を並べ、彼が抱く世界的な忠南道の野心的な計画について、かなり楽しい会話を交わした。二人は私に、できるだけ早く一緒に仕事をしたいと強く望んでいるようだった。

それは、私がリベラルな政治家よりも韓国の保守的な政治家との交流の方が多かった10年ほどの期間の始まりだった。なぜそうなったのか、その理由を知っているふりはしないが、いくつかの基本的な要因があったと思う。第一に、保守派はより現実的な考え方をする。彼らは、私がアメリカの法の支配のためにどのような政治的闘争をしたかなんて、どうでもよかったのだ。彼らは私の名前や人脈、その他の無形資産を利用して、自分たちが良く見えるようなことを忠南で実現したかったのだ。

リベラルな政治家たちは、自分たちがトラブルに巻き込まれる可能性のある、甘やかされたアメリカ人に手を出すことをためらった。

韓国のリベラルで進歩的な政治家は、ネットワーク活動を重視しない傾向がある。彼らは福祉や環境問題に集中したがる。ある分野の外国人は、しばしば高給取りで、エリートの利益に奉仕することを目的としている。私自身はそのようには考えていなかったが、仕事には本質的にむしろエリート主義的な側面が多くあり、私は後に、このような上からの国際化に対する韓国人のためらいを理解するようになった。

とはいえ、当時、私はどこかで何らかの雇用形態を見つけようとしており、要求できる状況ではなかった。もし妻が同じように献身的であったなら、私は低賃金の仕事に就き、ただ正義のために働くことも厭わなかったと思うが、そういう選択肢はなかった。妻、私の家族、多くの親しい友人、そして私の中の価値観の違いという問題は、おそらくこの物語で最もつらい部分である。

それから6週間、チェ・ミンホは私の立場と給与に関する議論を穏便に済まそうとした。単純な問題ではなかった。そもそも、顧問としての収入では私の生活費を支払うには十分ではなかった。知事は私のために、大田にある烏城大学の新しいインターナショナルスクール "ソルブリッジ" の教授というポジションを用意してくれた。後になって、私は教授職について嘘をつかれ、後日「教授・学部長」と書かれた名刺を渡されたが、実際は講師だったことを知ることになる。



給料は、私がワシントン D.C.で受け取っていた給料の 2 倍だった（ただし、詭弁に基づいてその一部を受け取れないようにしてくれた）。住居も与えられ、自動車も貸してもらえた。このプログラムは世界的な国際プログラムになり、私とその責任者になると聞かされていた。おそらくそれが計画だったのだろうが、実際には、私が何も交渉できる立場にないことは十分承知しており、ハーバードやイエールで訓練を受けた教授陣がいると言ってさらに大物を引きつけるために、私を最初に引き入れたかったのだろう。

妻はワシントンを離れたがらなかった。しかも、彼女の占い師は、その時期に韓国に行くのは間違いだと言った。崔は 2 人の占い師にも相談した。そのうちの 1 人は韓国行きは間違いだと言い、もう 1 人は良い行動だと言った。

このときまでに、私は妻の信頼する占い師が間違っただけの判断を下すのを何度も見てきたので、特に怖気づくこともなかった。また、2 年間にわたる洗練されたロビー活動や、ワシントンで開催される注目度の高いイベントで、私のスキルと経験に見合った真剣なオファーを受ける余裕すらなかったことも明らかだった。私は行くことに決めた。もし、私の身分が教授ではなく、約束された給与を全額もらえるわけではないことを知っていたら、おそらくもっと躊躇しただろう。

私は 1 ヶ月間、この仕事が多様なものか確かめるために単身赴任した。快適な小さなアパートを与えられ、知事室とウーソン大学を往来した。妻は韓国に来たがらなかった。実際、私自身も韓国で数年以上過ごした

くはなかったが、成り行きはまったく私の手に負えなかった。1 ヶ月後の私の結論は、ワシントンよりも大田に可能性があるというものだった。当時、私は韓国語をそれほど知らなかったし、韓国に広範なネットワークを持っていたわけでもなかった。

しかし、韓国での活動には制限があったものの（その後 12 年間で明らかになることだが）、米国にいたときよりもはるかに自由があったことは最初から明らかだった。私の心は決まっていた。

アメリカを離れるまでの辛いプロセスや、それが私や妻、そして後に 2 人の子供たちにもたらした問題については詳しく述べない。その代償は大きかったとだけ言っておこう。また、私がウーソン大学（2007-2011 年）、そして後にキョンヒ大学（2011-2018 年）で行った仕事の全容をここで説明することもしない。というのも、ほとんどの活動は教育、大学の運営支援、そして国際交流に関するものだったからだ。私はある面では成功し、ある面ではあまり成功しなかった。その中で、本書と関係のある仕事は比較的少なかった。

2007 年 4 月までは、妻のスウン、息子のベンジャミン（6 歳）、娘のレイチェル（3 歳）が大田と一緒にいて、私は常に烏城大学と忠清南道の役に立とうと働いた。私は毎朝、町の北側にあるアパートからバスに乗り、誰もいない広いオフィスに座って、パンフレットの修正や教員の募集、プログラムの運営方法についての提案などを手伝った。

私がソルブリッジにいた数ヶ月の間に、ソルブリッジの性質は変わったと思う。まず、インターナショナル・スクールではなく、ビジネス・スクールにすることを決めた。ソルブリッジの学長として採用することを希望していた2人が国際関係に深い関心を持っていたため、彼らは国際関係の話をし続けたが、その決定は早い段階で下され、2007年の5月頃にその決定が下された後、私に提供できるものが少なくなったことは明らかだった。ビジネス一般に敵意を抱いていたにもかかわらず、私はビジネス・スクールの経営することはできなかったし、教えようともしたが、その資格もなかった。

知事のための仕事は、ソルブリッジの建設を手伝う仕事よりも興味深かったが、半年も経たないうちに、知事の長年の支援者である烏城大学の金成敬（キム・ソングヨン）理事長は、私を主に大学のために働かせ、知事室の仕事は時々だけにしてほしいとはっきり言った。そのため、知事との日本旅行が大成功を収め、観光や多文化教育のためにさまざまな努力をした後、知事室での私の役割は徐々に減っていった。

同じ頃、私はソルブリッジ・インターナショナル・スクール（後のソルブリッジ・インターナショナル・スクール・オブ・ビジネス）の新しい学部長を募集する役を仰せつかった。理由はわからないが、ウーソンはこの学校の学長に安全保障研究の専門家2人を引き抜こうとしていた。彼らはヘッドハンターを通じて、クリントン時代の対北朝鮮交渉の中心人物であった高名な外交官で教授のロバート・ガルチに接触した。しかし、無名の学校に行くというガルッチの要求はかなり高く、ウーソンは

断念した。そして、ジョージア工科大学のジョン・エンディコットに目をつけた。彼はアジアの安全保障の専門家で、北東アジアの非核地帯について思慮深い提案をしており、日本人女性と結婚していた。

エンディコットとは以前ワシントン D.C.で何度か会ったことがあり、非常に好印象を持っていた。当初、私たちは意気投合し、彼にウーソンに来るよう全力で説得した。

韓国ではすべてが楽だったわけではない。数週間で、大使館やワシントン D.C.全体の圧迫された環境から離れた幸福感から立ち直った私は、さまざまな人々とのつながりを復活させようと努力し始めた。何人かの著名な学者たちは、過去に親しい交流があったにもかかわらず、文字通り会うことができなかった。メールを書いたり、オフィスに電話したり、リサーチ・アシスタントに話を聞いたり、手紙を書いたりもしたが、何もできなかった。何年か後につながる人もいれば、二度と話すことのない人もいた。

大田での4年間、コンサルティングや金儲けのために私に持ちかけられた機会はあまりにも多かった。友人が経営する会社のコンサルティングをする、新会社を立ち上げる、韓国に投資を呼び込む手助けをする、何らかのプロジェクトを行うなど、文字通り何百人もの人々が私に計画を持ちかけてきた。そのうちの5%くらいしか、コーヒー1杯か、時には食事1食をタダでもらっただけだった。

しかし当初は、韓国では状況が変わると信じ、何百時間もかけてチャンスを追った。ビジネスがどのように行われているのか、韓国の投資家（あるいは海外の韓国人投資家）がどのようなニーズを持っているのかを知る努力もした。年かそこら経った頃、私にはビジネスでのキャリアはないだろう、アメリカで被った莫大な損失を埋め合わせる方法はないだろうということが明らかになった。私は、比較的自由に取り組める執筆と講演の仕事に落ち着いた。

韓国社会には、教授以外の活動に従事することを困難にする側面があると思うが、私はその時点で教授であることを永遠にあきらめることに完全に満足していたし、そのような一連のスキルと人脈を提供したので、私が直面した問題は、単に韓国社会に適応できなかったという点だけで説明できるとは思えない。むしろ、私に対する猜疑心と、高度なブラックリストの両方があったために、私は何もできなかったのだと思う。わざわざ私にコンサルティングの機会を与えておきながら、突然その機会を取りやめるというある種の韓国人の奇妙な行動は、私の活動を制限する勧告がかなり露骨な形で採用されることがあったことを示唆している。

今にして思えば、私は最初から英語と韓国語で韓国に関する面白い本を書き始めるべきだったのだが、提案されたことのわりに、実際に実行されたことはほとんどなかったことを理解するのに3年かかった。私が韓国でできた唯一のことは、書くことだった。

短い例外が2つあった。ある建設会社が海外進出のためのコンサルタントとして私を雇い、半年間毎月2500ドルほどの報酬を支払ってくれた。

大田にある高額のインターナショナル・スクールで息子を教育するために収入の多くを費やしていた私に同情した友人の勧めで手配された努力だったと思う。また、大徳リサーチ・クラスターの国際的な取り組みを担当する組織である大徳イノポリスから、海外進出の手助けをしたことで、同じような金額を支払われた時期が9カ月ほどあった。これは、当時の社長であったカン・ギェドゥと、私のケースに強い関心を寄せてくれた元官僚の特別な努力の結果であった。

ジョン・エンディコットがウーソン・ユニバーシティーの学長に就任し、初期の課題が解決されると、私は彼らにとって重要ではなくなった。彼らは私の存在を重視し、ハーバード大学やイエール大学の卒業生であることを宣伝してくれたが、私を会議に出席させたり、新しいソルブリッジ・ビジネス・スクールで働くよう、あるいは学ぶよう人々を説得するために私を雇ったりすることは重要ではなかった。私はもっと自由でよかった。関係がうまくいっていた時期もあったが、ある種の緊張感もあった。ウーソン大学の中には、ビジネススクールの教授でもないのに給料が高すぎると思っている人もいたし、自由に旅行や就職ができない私を利用していると感じている人もいた。つまり、彼らは私から十分な価値を得られていないと考え、私は冷酷に搾取されていると考えたのだ。

土地投機で儲けた金で大学に昇格した私立高校だが、教育に対する真のコミットメントには欠けていた。しかし私は、そこで教えた労働者階級出身で鉄道行政や工学を学ぶ普通の韓国人学生を高く評価するようになった。また、留学生の何人かと生涯続く親しい友人もできた。何人かの

驚くべき人たちに出会った。技術革新の最初の 2、3 年間は、どういうわけかソルブリッジにいることになった思慮深い教授もいた。

最も重要なのは、私にとってリラックスできる環境だったことだ。イリノイ大学やワシントン D.C.では、同僚たちは私の政治的問題が自分たちの問題になることを恐れて、私を遠ざけていた。

大田での冒険の中で最も成功したのは、KAIST を中心とする大徳研究クラスターでの仕事だった。ソウルのエール・クラブでは、韓国に来る前から知り合いになろうと努力していました。二人とも大徳の研究クラスターで働いていた。そのうちの一人、キム・ウォンジュンは技術革新の分野の教授で、私とほぼ同年代だったが、何度か私と同席し、研究クラスターがどのように構成されているかを説明してくれた。

大田には、まだ十分に評価されていない世界トップクラスの研究クラスターがある可能性があり、私はその手助けをすることができれば、大きな可能性があることを理解するのに時間はかからなかった。このプロジェクトは、私がイリノイ大学の工学部で行った仕事と少し似ていて、とても楽しかった。

キム・ウォンジュンから大徳イノポリスのスタッフであるキム・ギョンジェを紹介され、翌週の 2007 年冬の終わりに彼と昼食をとる約束をした。キム・ギョンジェはとても礼儀正しく思慮深い人で、私が大田にいる間、ずっと親密な関係を保っていた。大徳イノポリスが「国際化」し、

国際会議を開催するために政府の支援を受けていたことは明らかだったが、研究機関や KAIST の国際交流は、それらの機関自身が行っていた。

キム・ギョンジェから、大徳研究クラスターにあるすべての政府系研究所の副所長のリストをもらった。その全員に自己紹介と、彼らと彼らの研究所の役に立ちたいと E メールを書いた。15 人のうち 6 人が返事をくれ、会ってくれることになった。そのうちの 4 人は、私と密接に仕事をすることを約束してくれた。1 年も経たないうちに、私はすべての研究所と実質的なネットワークを築き、それぞれの研究所が何をしているのか、その管理者は誰なのかを体系的に学ぼうとした。

国際化への取り組みに支援が必要なのは明らかで、そのための資金援助の可能性もあった。

私はまた、当時のヤン・ジウォン副学長や数人の思慮深い教員たちから、KAIST 大学の教授候補として推薦された。KAIST の国際化に私が大いに貢献できることは明らかでしたが、私のような理系の博士号を持っていない者を採用することは非常に困難でした。さまざまな努力の結果、私は KAIST の小さな文化技術学部で人文科学科の教授として採用されることになった。

この試みは成功しなかったが、成功する可能性はあったと思う。克服しなければならぬ課題がいくつかあり、それは簡単なものではなかった。何よりもまず、私はもう教授になりたくなかった。私は教授として 7 年を過ごし、アメリカでは最悪の虐待を受け、とんでもない低賃金で働



いていた。自分にできることはたくさんあり、それに見合った報酬を得ることができるはずだと強く感じていた。教授という地位や、意味不明な終身在職権のプレッシャーは、自分の意志に反して課せられているものなのだ。

ですから、KAISTでの仕事は興味深い機会ではありましたが、私の人生において最も重要なことではありませんでした。KAISTの教授陣の見方は違っていた。彼らは、KAISTは韓国で最も偉大なエンジニアリング・スクールであり、私は感謝して、この仕事に就くために全身全霊を傾けるべきだと考えていた。後で知ったことだが、何人かの教授たちは私の就職面接の後、私がこのポジションに十分に興味を持っていないようだと聞いたそうだ。

しかし、それだけではなかった。KAISTはテニユアトラックで一からやり直すことを意味し、二度と書かなくてもいいと思っていた学術誌の記事を書かざるを得なかった。KAISTは大きく重要な学校であるため、より厳しく、私が従わなければ終身在職権を拒否することも十分に可能だった。そのような職場環境は私にとって魅力的ではなかった。

提示された給与と手当がウーソンの提示したものよりも少ないと知ったとき、私は熱意を失った。応募についてフォローアップすることになっていたが、私は電話しなかったし、彼らも私に電話しなかった。

振り返ってみると、もし私が韓国で主に教授として働くしかないことを知っていたなら、KAISTでの仕事に就くために最善を尽くし、適切な機

関としての資格を得ることで自分を確立する機会として利用したと思います。当時は、韓国で大学のランキングがどれほど重要であるか（米国や日本よりもはるかに重要である）知らなかった。私はまた、大徳の研究クラスターについて英語で本を書き、国内外から注目される方法として利用しただろう。

しかし、私は教授をやめることができると思ったし、単にジャーナル記事を書くだけでなく、何かを運営したいと思った。再び腰を据えて学術的な執筆に取り組めるようになるまでには、何年もかかった。

ウーソン大学は、彼らの正統性を高めるという潜在的なメリットがあるにもかかわらず、私と大徳との交流を支持しなかった。彼らの主な関心は、授業料で儲けることと、大学周辺に所有する不動産の価値を高めることであることが判明した。彼らは使うお金はたくさんあったが、他の学術機関との結びつきの質は優先事項ではなかった。その後、ジョン・エンディコットがジョージア工科大学との 2+2 共同学位プログラムの交渉に乗り出すのを手助けしたとき、彼らの関心はそのプログラムに向けられていた。私が携わった知名度の高い活動でさえ、金成敬会長の関心を引くことはなかった。重要なことは、エンディコットが 11 年間ウーソンに留まり、学校の質が劇的に向上したわけではなかったが、エンディコット・スクールが設立されたことである。それは私にとっては興味のないゲームのようなものだった。私は 4 年間、様々な形でウーソン大学を手伝い続けたが、エンディコットが彼らが求めていた人材であることが証明され、蜜月は終わった。私個人としても、彼の方が適任だと

思った。彼は挨拶回りを楽しんでいたし、ジョージア工科大学を定年退職したばかりだったので、将来のキャリアを計画する必要もなかった。

現代建設の元 CEO である李明博は、日付が変わって大統領に就任し、盧武鉉政権の多くの政策を後退させた。街頭では大規模な抗議デモが起こったが、韓国国民の大部分は彼の成長促進を促すレトリックに魅了された。彼は早くから「グリーン成長」という言葉を打ち出し、環境に優しい経済計画が政権の中心になることを示唆していた。最初の数年間は（最初は私も含めて）このイニシアチブを真剣に受け止めていた人々もいたが、最終的には、税金を使ってゴルフ場を大量に建設し、川や河川沿いのいたるところにコンクリートを流し込んで、いまだに元に戻らない混乱を引き起こす計画へと墮落していった。

しかし、「グリーン成長」に最初に焦点を当てたことで、韓国での最初の突破口となる機会を得ることができた。私の友人であるジョン・フェファァーがグリーン成長の発表の直前に大田を訪れ、私たちは当時、韓国がグリーン経済を受け入れる可能性について記事を書いた。私が共著で書いた記事では、大田がエコシティのモデルとなり、大徳研究クラスタの先端技術や科学研究を活用することでそれを実現する方法についてのビジョンを提唱した。

それから何年も経った今となっては、私は環境問題の解決に役立つテクノロジーの可能性について、かなりナイーブであったと思うし、私のアイデアがほとんどの研究者の優先事項からどれほどかけ離れているかも理解していなかった。しかし、この提案が韓国語で発表されたとき、私

がすでに知っていた研究者たちを含め、多くの人たちから非常に前向きな反応があった。大田市役所に長年勤務していた Woosong University の Yu Hyeok-jong 教授の協力を得て、私たちは研究者や政府関係者などを集め、大田環境フォーラム（後に大田グリーン成長フォーラムと改称）を結成した。

私たちはメディアから注目され、どうすれば大田を環境に優しい都市にできるかを議論する定例会議が開かれ、刺激的で壮大な話がたくさんあった。それから 10 年、大田はほとんど変わっていないし、先進的なエコ都市にはなっていない。私はかつてその環境フォーラムについて誇らしげに語ったことがあるが、今ではめったに口にすることはない。しかし、その過程で私が得たものは、ある程度の評価と、今後貴重な人脈だった。

約半年間、かなり注目され、ブレイクスルーに向かうかに見えた。しかし、李明博政権は私たちが提案した内容にはまったく興味を示さない。今後の研究資金は KAIST などに流れたが、私には何も来なかった。さらに、私がゲストスピーカーとして出席した注目の会議が何度かあったが、その後のフォローはまったくなかった。それが韓国滞在中の一般的な傾向だった。韓国では（アメリカでは決してないことだが）注目される瞬間が短く、その後は完全に無為無策だった。

大田環境フォーラムで最もエキサイティングだったのは、大田、日本のつくば研究クラスター、北京の清華大学周辺の研究クラスター、そしてパロアルトとスタンフォード大学とのエコシティ提携の提案だった。当

初は清華とスタンフォードから前向きな反応があったが（KAIST のヤン副所長と私が両拠点を訪問したことも含め）、最終的には大田、つくば、中国の深センの間で協力の合意がなされた。グローバルな協力について真剣な議論が行われ（私はそこから除外された）、大田、深圳、つくばで3回の国際セミナーが開催された。私は深センとつくばでのイベントには招待されず、プロジェクトはその時点から頓挫してしまった。しかし、一瞬、私たちは何か大きなことの端緒についたように思えた。

2010年に釜山大学校で教える仕事のオファーがあり、私はそれを受けるともりだったが、大田での有望な活動から引き離されることになった。妻は釜山に移り住みたくなかったし、どうにかして私がアメリカで雇われることを望んでいたからだ。

大徳クラスターにある研究機関でコンサルティングをする機会を実際に見つけることができた。大田で一流の研究機関は彼らだけであり、そうでなければ私たちのプログラムはほとんど何も提供できないからだ。その論理はまったく適切だったと思いますが、ウーソン大学には独自の優先順位があり、強力なプログラムを作ることはそのひとつではありませんでした。

私が最初に取り組んだプロジェクトは、KRIBB（韓国バイオサイエンス・バイオテクノロジー研究院）が提供する国際化戦略に関する1年間の研究だった。私が携わることになったのは偶然ではなかった。2008年、KAISTにはMIT出身のス・ナンピョという新学長が就任した。スは極めて政治的で、腐敗しきった行政官であったが、大田をより住みやすい

都市にするという共通の関心事をめぐって時折メールのやりとりはしていた。スは私を KAIST の教授として採用することを支持してくれたが、そのオファーはとてものわずかなもので、私が評価されていないことは明らかだった。

スは李明博（イ・ミョンバク）学長と親しくなり、大田よりもソウルで過ごすことが多くなった。その過程で彼は、KAIST が KRIBB を敵対的 M&A で買収するというアイデアを思いついた。このような合併の根拠はかなり怪しく、多くの専門家がこの動きに反対したが、スは科学技術省と青瓦台のコネを利用して推し進め、成功寸前だった。

KRIBB の劉長烈は文学と芸術に深い関心を持っており、私の作品を高く評価してくれた。

彼は KRIBB が KAIST の買収にどう対応すべきかについて尋ねてきたので、私は最善のアドバイスをした。私はまた、この物語の前に登場したザック・ホールの助けを借りた。最終的に、私たちは KRIBB に関する記事をいくつか発表し、韓国内の支持を集め、この考えが特に強固なものではないことを十分な数の人々に納得させた。

個人的には M&A 問題に強い思い入れはなかったが、研究所の真の価値を見極める取り組みに参加できることに興奮した。KRIBB とバイオテクノロジーに関する私の著作は十分な効果を発揮し、KRIBB で国際化と広報戦略に関する 1 年間の研究プロジェクトのオファーを受けた。

その後2年間、私は KIGAM (韓国地質材料研究所)、KRIS (韓国標準科学研究所)、KINS (韓国原子力安全研究院)、そしてソウル大学の大学院融合技術研究科でも同様の研究開発助成金を受けた。ソウル大学では、後に大統領候補となるアン・チョルス学部長(当時)と直接プロジェクトを進めた。

これらのプロジェクトは、私にリサーチ・アシスタントを雇い、海外旅行をし、ソウルで注目されるセミナーに参加するための予算を与えてくれた。つまり、これらのプロジェクトは、私がウーソン大学では見つけることのできなかつた正当性を私に与えてくれたのである。

私が大徳リサーチ・クラスターと仕事をするようになったのは、カン・ゲドゥという思慮深い政府高官が大徳イノポリスの CEO に任命されたときだった。私たちはすぐに意気投合し、複数のプロジェクトで緊密に連携した。カン・ゲドゥは、以前にはなかつた方法で私にクレジットが与えられるようにし、さらに私の仕事に対して報酬を支払うよう主張した。

このとき私は、急速な技術革新がいかに異分野の融合を引き起こしているかを考察する第二の会議「大徳融合フォーラム」を立ち上げた。このフォーラムは政府からも公式に認められ、大田環境フォーラムに匹敵する重要性を持っていた。しかし、私は今回あまり乗り気ではなかつた。なぜなら、このようなプログラムが私を搾取するためにどのように利用されるかを十分すぎるほど知っていたからである。

姜桂斗の治世は 2011 年春に突然終わりを告げた。私は直接的な影響を受けた。すべての資金を失い、しばらくの間、すべてのチャンスがなくなった。おそらく、私とカンが大田で影響力を持ちすぎたために、ある派閥が私たちを追い出したかったのだと思うが、詳しいことはわからない。

大田時代に学んだのは、書くことが私に開かれた唯一の扉であり、急激な浮き沈みのない安定したやり方で携わることができるものであることだった。さらに、ジャーナリスティックな執筆が軌道に乗り、次いで書籍が出版され、私のキャリアを軌道に乗せるために必要だと考えていた評価をようやく得ることができた。しかし、私は相対的な名声が収入に与える影響について間違っていた。韓国滞在後、3 冊の本がベストセラーになり、主要紙で最も読まれたコラムのひとつになったからといって、私が望んでいたような仕事に就くのにそれほど役立ったわけではないし、教授をやめることができたわけでもない。

明らかに、韓国での私の行動に関しては、極めて具体的な規定があり、それは無期限に続いた。

英語では、最初の数年間、ノーチラス研究所、フォーリン・ポリシー・イン・フォーカス、オーマイニュースに国際関係や気候変動（これが私の焦点となった）に関する記事を書いた。いくつかの記事は好評を博したが、画期的だったのは、韓国の科学政策、環境問題、大田市の未来への提言に関する韓国語の記事を Daedeok Net に寄稿したことだった。特



に大田環境フォーラムの共同代表に就任してからは、韓国の長期的な科学政策に関連する記事が幅広い読者を獲得した。

その結果、2010年に『前京経済新聞』に寄稿することになった。私はこれらの記事に膨大な時間を費やし、さまざまな経済フォーラムや、時には大田やソウルの企業での講演に招待されるようになった。

興味深いことに、外国人が前京のような経済誌に執筆するのは極めて異例であったにもかかわらず、烏城大学はこの突破口を完全に無視し、あたかも私が存在しないかのように振る舞った。私はすでに、何とかして烏城大学から抜け出す方法を見つけなければならぬと決心し、さらに執筆活動に力を注いだ。やがて、私はさまざまな中堅紙に記事を投稿することができるようになり、多くの露出を得ることができた。さらに重要なことは、外交政策、技術規制、文化、国際関係、教育、環境、その他多くのトピックについて、韓国語で書いた何百ページものオリジナルの文章が蓄積され始めたことだ。

その後、ソウルに移り住んだ私は、韓国を代表する新聞である朝鮮日報の寄稿者に抜擢された。この保守的な雑誌に6ヵ月間寄稿し、その後、中央日報に6年間寄稿することになった。

しかし、私が韓国社会でどこにも行けないことは明らかで、早く進まなければ、ウーソンか、あるいはもっと無名の大学で年を取って死んでしまうかもしれなかった。Woosong は私の昇進に興味がなく、韓国の大学はSSCIジャーナルの出版にしか関心がなかった。企業やNGOは私の著

作を喜んでくれ、講演に招いてくれたが、実際に私を雇おうとするところはなかった。

私が SSCI のジャーナル記事を書かなかったのには、複数の理由があったことに注意する必要がある。このような狭い範囲のジャーナルで教授を評価するシステムが気に入らなかつただけでなく、論文を書くことに喜びを感じられなかつたのだ。さらに重要なのは、私がもともと所属していた分野や他の学問分野の学会に招かれることがなくなったため、学術雑誌の記事を書くことを促したり、必要としたりするような同僚たちとの知的交流がなくなったことだ。

解決策は、韓国での私の冒険とアジア研究の経歴について韓国語で本を出版することだと私は心に決めた。その頃には、私がコンサルタントとして生計を立てることは不可能で、大学以外の組織に雇われることもないことは明らかだった。エール大学の同級生（直接の面識はなかつたが）が韓国で僧侶になり、そこでの体験を綴った本を書いてベストセラーになっていた（私の本よりも売れていた）。彼はヒョンガク・スニムと名乗った。私たちはやがて会うことになり、最終的に私の韓国語の本が出版されたときには、彼に序文を書いてもらうことになった。

私は幼少期、家族の構成、アジアでの最初の経験、韓国語の勉強、韓国での一般的な勉強、韓国の伝統に対する理解について、英語で詳細に原稿を書いた。大田での仕事についても詳しく書いた。その後、イ・ミンソンという若い女性を雇い、原稿を韓国語に翻訳してもらった。2010年3

月までに、私は韓国の若者の間でかなり人気が出ると思われる重要な原稿を手にしていった。

しかし、出版社に話をし始めると、興味はゼロであることがわかった。誰もこの企画を引き受けたがらず、多くの人は私に直接会おうとさえしなかった。しかし最終的に、イ・サンハという風変わりな作家と出会い、彼はマッコリ（韓国のアルコール飲料で、米ビールの一種ともいえるやや甘いもの）を3杯飲んだ後、この本を出版することに同意した。イ・サンハは、大きなビジネスチャンスを約束しながら大田に頻繁にやってくるある実業家の古い友人だったが、決してうまくはいかなかった。しかし、この紹介は貴重だった。

イ・サンハは学生運動家で、1940年代に済州島で起きた韓国政府による民間人虐殺についての詩を発表したため、1980年代に刑務所に入れられたことがある。彼は広く本を読み、思慮深く、薄っぺらではあったが知識人であり、私の事件に真摯な関心を寄せてくれた。

結局、彼はゴサンという作家であり先生でもある編集者を見つけ、私の関連した文章から韓国語の原稿を作るのを手伝ってくれた。幸い、ゴサンと話すのはとても楽しく、私たちはかなり親しい友人になった。出版社を見つける過程は困難だったが、ゴサンとの仕事は楽しく、原稿は完璧ではなかったものの、2011年3月までに李三和の出版社ノマドブックスから出版される準備が整った。

この本は若者を中心にカルト出版として成功し、少なくとも1万5千部、あるいはそれ以上売れたのではないかと思う。李三和は後の他の出版社同様、販売部数を正直に言わなかったので、私が受け取った印税はほんの一部だった。

しかし、この本は韓国全土の幅広い読者に読んでもらうことができ、単に科学政策や研究クラスタについて言うべきことを探すという大変な作業だけでなく、文化や歴史、現代社会に対する私の真の関心について語り、自分自身を直接表現する機会となった。

しかし、本の原稿が進み、大手新聞社を通じてより多くの国民に向けて執筆し、韓国語と英語の両方で講演者として幅広いイベントに招かれるようになってからも、私の教授としての地位はますます不確かなものになっていった。ジョン・エンディコットから、2010年秋にウーソン大学との契約が更新されないと突然告げられたのだ。私は韓国、日本、アメリカの大学などで複数の求人に応募していたが、面接を受けることはできず、イリノイ大学と同じように失業を待つことになった。

なぜ私が突然解雇されたのかはわからない（明らかに、教授としての職の保証はなかった）。大徳溪谷でこの時期に起こったある出来事と関係があったのだろうか。もしかしたら、大徳溪谷の強力な勢力、そしておそらく李明博政権も私を追い出したかったのかもしれない。

私は、大田を都市としてプロモートするという考えに基づき、研究戦略だけでなく、観光やイメージに関する幅広い考察に取り組んできた。大

田の新しいロゴを作ったり、楽しい大田の T シャツやボタンを作ったり、大田の面白い場所を英語で詳しく紹介する芸術的なウェブサイト「大田コンパス」を作ったりした。

しかし、市役所の友人たちの沈黙は際立っていた。さらにその頃、私は以前ほどイベントに呼ばれなくなったことに気づいた。大田での私の活動は明らかに凍りついた。後に友人は、私は小さな池の大きな魚になりすぎたのだと説明してくれた。しかし同時に、私の主要な後援者であったカン・ゲドゥが、明らかに政治的な動きで大徳イノポリスの CEO の職を解任された。しかし、その争いが主に大田の派閥間のものだったのか、それとも李明博政権を巻き込んだものだったのかはわからない。

次の学期は 2011 年 3 月に始まったが、2 月の初めになってもどの大学からもオファーはなかった。私はまたしても失業がやってくることを覚悟した。そして、2 つのブレイクスルーがあった。カン・ゲドゥが全羅南道光州市の副市長に就任したのだ。彼は私の数少ない真の友人として、すぐに私に仕事を見つけようと動いてくれ、朝鮮大学の学長から私がそこで教鞭をとれるという約束を取り付けた。有名な大学ではなく、妻もあまり住みたがらない町ではあったが、少なくとも一定の地位はあった。

もうひとつのチャンスは慶熙大学だった。慶熙大学は韓国でもトップ 10、いやトップ 7 に入る老舗の大学だった。イ・サンハはその卒業生で、彼の指導教官である英文学のド・ジョンイル教授は、「ユマニタス・カレッジ」と呼ばれる学部生向けの人文科学プログラムを始めたばかりだった。李は 2010 年の秋に私をド・ジョンイルに 2 度紹介し、私は後に自

分の仕事について手紙を書いた。当初、ド教授は大きな関心を示してくれた。しかし、1月に私が彼に連絡を取ったとき、彼は私が電話したことにかなり苛立っていたようで、しつこくするのはやめてくれと言った。

2月になり、朝鮮大学校への進学が決まったと思ったが、最後の最後に慶熙大学への出願が受理されたとのメールが届いた。

韓国での就職活動は、私がアメリカでの再就職を目指したのと同時期に行われた。私はビジネス新聞に寄稿し、グローバル化を計画する技術研究所のコンサルタントとして成功を収め、企業の主要な講演会に招かれるようになっていた。私は、再び主流派に食い込み、もしかしたらもう一度アメリカで成功を収めることができるかもしれないと考えた。結局のところ、妻は韓国での生活に毎日不満を漏らしていたし、息子は大田にある高額のインターナショナル・スクールに入学し、残りの資金を使い果たしていた。

YouTube に投稿したアメリカの軍国主義の危険性を訴えるビデオを削除し、履歴書をきれいにして最近のコンサルティングの仕事を強調し、専門的なアドバイスを求めた。要するに、私は主流派になろうとしたのだ。まずエール大学の同級生で、企業のヘッドハンティングを手がけ、採用プロセスの専門家であるグレン・グートマッハーに連絡をとった。彼は私の履歴書の内容についていくつかの提案をしてくれた。また、自分を宣伝する手段として、リンクトインやフェイスブックで自分を売り込む方法も教えてくれた。グレンのアドバイスを受けて、ブログ「circlesandsquares.asia」もまとめ、自分のフォロワーグループを作ろうと

した。グレンはまた、レオ・ハメルという人物に接触することも勧めてくれた。

レオはボストン近郊に住む高齢の男性で、キャリア・コンサルティングを副業としていた。私は2010年から、アメリカでの就職を中心に彼のアドバイスを求めるようになった。

彼に会ったのは、2011年2月、私がイエールとハーバードを訪問するために渡米したとき、ウーソン大学との契約が終了する数週間前、そして慶熙大学との契約が決まる前に、たった一度だけだった。怜央は私のために多大な努力をしてくれ、私が他人からどう見られているかを教えてくれた。彼は私の洗練度を大いに高め、私をはるかに政治的な生き物へと導いてくれた。

レオは2013年9月に他界した。私の人生における彼の役割は短く、かなり限定的なものだったが、彼は私に深く感動を与えてくれた。

私は2010年と2011年にアメリカでさまざまな学術職に応募した。面接を申し込んできたところは皆無だった。その中には、ジョン・エンディコットが特別に紹介してくれた主要大学の先輩たちも含まれていた。

より有望と思われるポジションが1つあって、数カ月は正直、自分にもチャンスがあると思った。

イエール大学がシンガポールにキャンパスを開設することを決め、何人かの友人が、これは私にとっていい機会かもしれないと勧めてくれた。私はすぐに、この構想を議論する委員会の中心人物のひとり、ハウン・ソーシー教授と連絡を取った。ハウンは以前から知っていた中国文学と比較文学の教授で、イエール大学で私の指導教官だった張康懿（チャン・カンイ）とも一緒に学んだことがあった。私たちはすぐに意気投合

し、私はすぐにシンガポールにおけるエールの戦略はどうあるべきかについて彼と議論を重ねた。委員会の他のメンバーともすぐに連絡を取り合うようになり、文字通り、私自身が委員会のメンバーになったような気分だった。2011年2月、私はエール大学を訪れ、委員会に会い、学内の他の友人たちに会い、また、長い文通を通じて親しくなっていたハーバード大学のヘンリー・ロゾフスキー前学長にも会った。

結局、私はシンガポールにあるイエール大学のキャンパスに応募したが、最終的には採用されなかった（大きな驚きではない）。その過程で、当時のイエール大学学長リチャード・レバインと直接接触することができた。彼は何度も手紙をくれ、その知人から、私はアメリカの主流に再び受け入れられるのではないかと一時的に錯覚した。

その後数年間、私とアメリカの機関との関係は急拡大し、私はアメリカの主要な組織の腐敗について書くのをやめた。2013年にはイエール大学とプリンストン大学に招かれ、講演を行った。アジア研究の分野に戻るための努力の一環として、私はアジア研究協会の会議に2度出席した（2002年以来初めて）。

米国との関係に対する新たな自信は（たとえそれが数年しか続かなかつたとしても）、韓国の教育機関にとって私をはるかに魅力的な存在にし、イエール大学への旅行やその他の活動によって、慶熙大学での地位が確約されたのだと思う。





## 第6章

メインストリームに戻り、そしてまた戻る

キョンヒ大学

慶熙大学の趙仁源（チョ・インウォン）総長は、私が新しいユマニタス・カレッジに任命されたことに相当な熱意を示していた。アメリカの高等教育の最高峰を韓国に持ち込み、アイビーリーグの強豪校と緊密な

関係を築くグローバル・プログラムを開発するという彼の計画に、私はうまく合致したのだ。私はその中心的役割を担うことになった。

彼は私に、同期の准教授たちよりも高い給与を与えることに同意したのだ（もっとも、私はもっと前に正教授になっているべきだったと主張するだろうが）。この決定は広範な恨みを買うことになり、逆効果だった。

チョ学長は私に学際的なプログラムを運営するための予算と大きなオフィスを与えてくれた。私はまた、キョンヒ大学の至宝である「グローバル・コラボラティブ」と題されたサマー・プログラムの責任者にも任命された。キョンヒはこのプログラムをペンシルバニア大学と共同で運営し、エール大学、プリンストン大学、ペンシルバニア大学などから一流の教授を招聘した。要するに、数ヶ月の短い間だったが、私はついに成功したと思ったのだ。

米国での人脈と、韓国の官僚組織で生き残るための確かな能力を生かして、私がキョンヒを国際的な大学として次のレベルに押し上げる手助けをするという期待は、根拠のないものではなかったが、彼らは私が米国で直面する政治的障害の規模を過小評価していた。この努力は特定のケースでは成功したが、最終的には、学長によって強制された外国人の関与を快く思わない大学の教授陣の抵抗や、米国の物事のシステムにおける私の敵対者たちからの背景的な低レベルの妨害の結果、影響は限定的なものにとどまった。私はキョンヒ大学で8年間勤めたが、その後、移らなければならないと思うようになった。

慶熙大学での最初の 2 年間は、英語学部のド・ジョンイル教授が設立した新しいリベラルアーツ・プログラムであるユマニタス・カレッジで過ごし、最後の 4 年間は、私に助教授のポジションを与えてくれる唯一の学部であった国際学部で過ごした。最初から正教授になる資格はあったが、この 6 年間は不必要な不安の連続だった。

私は学長顧問、学際研究所の所長、そしてペンシルバニア大学と共同でキョンヒが運営するグローバル・コラボレーティブ・プログラムのディレクターに任命された。学際センターには広大な部屋が与えられたが、スタッフや家具は与えられなかった。資金援助はすべて丁重に断られた。一緒に働いていた事務局の人たちは親切にしてくれたが、私が任命された仕事をサポートすることは何もしてくれなかった。ユマニタス・カレッジの学部長も親友になったが、資金援助に関しては手を縛られているようだった。学長は私に何か大きなことをやらせたがっていたが、それは文字通り不可能だった。

私は少しずつ責任を剥奪されていった。グローバル・コラボレイティブ・ディレクターの任命は契約書に書かれていたにもかかわらず取り消され、私はその理由を知らされることもなく、地位の変更について文書で説明されることさえなかった。私は主に社長のアドバイザーとして雇われたにもかかわらず、長い間、経営陣との交流はほとんどなかった。

その奇妙な状態の理由はわからない。教授たちは私の役割に嫉妬していたのかもしれないし、部外者が突然入ってきたことに不満だったのかもしれない。あるいは、学外から、それもアメリカから、私の役割を制限

する明確な命令があったのかもしれない。その理由を知ることはできないだろうし、実際、その時点で私はもう気にしていなかった。目に見えない鎖で縛られることに慣れていたので。

そのため、2011年3月からは一日中、自分の書斎に一人で座り、本を読んだり、文章を書いたり、時には他の教員と会ったりしていた。私が慶熙大学に来たことをとても喜んでくれた教員もいたし、慶熙大学が本来持っていた平和へのコミットメントと人文学へのコミットメントを取り戻すチャンスを私に見出してくれた教員もいた。当初の私の役割は、約束されていたにもかかわらず、極めて限定的なものだった。私の行動には重大な制限が課せられた。

私は執筆活動に打ち込み、記事や本を書くだけでなく、効果的な書き方を学ぶ機会を得た。例えば、8年間の心理的ブロックの後、私は再び学術的な執筆を始めることができた。近代以前の日本と中国の小説に関する本の原稿を、6ヶ月で（助けも借りながら）全面的に修正し、ソウル大学出版会から出版した。また、韓国の作家、朴致遠（パク・チウォン）の小説の翻訳も改訂し、ソウル大学出版部から出版した。

旧友のサラ・リュウが編集を手伝ってくれたし、ハーバード大学英文科の大学院生だったメリッサ・ピノという思慮深い女性も手伝ってくれた。彼女は自身の健康が危ぶまれるなか、私に多くの手助けをしてくれた。

私は毎月、あるいは毎週、韓国の新聞に数多くの記事を書いた。それらの記事の多くは広く読まれ、その過程で私は韓国で知識人としての地位

を確立した。たとえ私が主流派として認知されず、アジア研究に関する学会に招かれなかったとしても。執筆以外の活動は封じられたため、私はアメリカのアジア専門家のような成功への道を歩むことはできなかった。しかし、私が歩んだ道は、韓国の一般読者に向けて書く方法を学び、そうでなければ決して得られなかったであろう幅広い支持を得るのに役立った。

その後、私の人生経験と韓国文化との出会いについて書いた本『人生はスピードではなく方向性の問題だ』は、カルト・クラシックのようなものになった。小さな出版社から出されたにもかかわらず、多くの人が読み、私に直筆の手紙をくれた。

2012年になると、私はNGO団体や企業、その他の組織から、これまでにない数の講演依頼を受けるようになった。

私は、フランシス・フクヤマやノーム・チョムスキーといった著名な学者へのインタビューをもとに、韓国が直面する深刻な課題を取り上げた別の本の原稿を書いた。この本はよく書けており、2013年の選挙に間に合ったが、大ヒットにはならなかった。しかし、この本は韓国全体における私の評価に貢献し、次のステップへの舞台を整えた。

この本は、私をメディアの食物連鎖に押し上げた。2013年の春、私は韓国でナンバー3の新聞『東亜日報』のコラムニストのポジションをオファーされた。この就任で私の認識は一変し、短期間ながら（米国ではなく韓国で）メインストリームのよう扱われるようになった。そして2013

年秋、韓国で最も発行部数の多い朝鮮日報のコラムニストに任命された。朝鮮日報は極めて保守的な新聞で、まったくのミスマッチだったが、その時点で私は韓国を理解するアメリカ人として重要な戦力だと認識された。

その集大成が、2014年春から2019年1月まで、中央日報の常任コラムニストに任命されたことだった。基本的に、メインストリームの誰もが私の社説を読むようになり、メディアではあまり取り上げられないようなトピックについて、効果的な記事を作ることに多大な努力を傾けた。

また、私の作品を韓国語、中国語、日本語に翻訳してくれる人たちを長年にわたって見つけてきた。さらに、私が書いたものを出版してくれる雑誌もあった。最も重要なことは、私には、明らかにスポンサー企業からお金をもらっていない客観的で適切な記事を書くという評判があったことだ。

しかし、私にはさらにもう一歩先が待っていた。私は親友である YTN の記者、ワン・ソンテクに『**韓国人が知らない大韓民国**』の編集を依頼した。韓国の歴史に造詣の深いプロのジャーナリストである王は、私の文章を幅広い読者にアピールできるように手直ししてくれ、2014年に一流出版社である 21<sup>st</sup> Century Books から発売された。この本は最終的に全国的なベストセラーとなり、1週間全国8位を記録した。出版社は明らかに私に支払われるべき印税を支払わなかったが、それは問題ではなかった。私は新たな認知度を得ることができたのだ。その部分については、以下で詳しく説明する。

冊目の韓国語の本を出版し、朝鮮日報、そして中央日報の寄稿者に抜擢されたことで、韓国での私の知名度が上がるにつれ、私は慶熙大学でより大きな影響力を持ち始めた。さまざまな委員会に招かれ、チョ・インウォン総長へのアドバイスやスピーチの編集も頼まれた。私はもはや完全に監禁されていたわけではなかった。

2012年10月にプリンストン大学とイエール大学を訪れ、古典文学に関する講演を行い好評を博した際、幼なじみのマイケル・ギャレット高等研究所副所長など、さまざまな人物とも知り合うことができた。ウェスト・キャンパスを担当するイエール大学の副学長とも知り合い、韓国を訪問することになった。シンガポール・キャンパスで就職しようとする私を助けてくれようとしたエール大学のさまざまな教員たちとは、かなり積極的に対話した。

私はまた、友人のマイケル・プエット（ハーバードで教える中国史の専門家）に初めて韓国に来てもらい、キョンヒに私を訪ねてくるよう説得した。彼は最終的に、私とジョン・トリート（イエール大学で日本文学を専攻）と一緒に講演を行い、それがきっかけで1年間客員教授として招かれることになった。キャンパス内での私の影響力は全体的に限定的なものにとどまったが、かなりの成功を収めた瞬間もいくつかあった。

慶熙大学は私に終身在職権を与えてくれるわけでも、大きな収入を与えてくれるわけでもなかったが、ソウルが私にとって住みやすい場所になるように住居を提供してくれた。振り返ってみると、ソウルの下町に住んでいたあの時期は、私の人生において安定した幸せな時期だった。子



供たちは繁栄し、妻は高麗大学の美術史の修士課程でかなり活発で熱心に勉強していた。

年後、私はユマニタス・カレッジから設立された学部へ移り、テニユア取得のための再スタートを切る必要があると判断された。それまでの2年間、キョンヒでの私のポジションはテニユアトラックとはみなされておらず、私が出版した2冊の本はテニユアにはカウントされないことを知った。

実際、私は2004年以来、テニユアトラックに入ることを許されていなかった。大学は私の弱い立場を自由に利用できると思ったのだろう。

個人的には、2002年に学問の世界から永久に去っていてもよかったのだが、教授を続けざるを得なかった。今回、韓国で独立起業することも、それ以外の仕事に就くこともできないことは明らかであったので、何とかして、教授という主流の定義に戻ることで、私が直面する解決不可能な問題を解決できるのではないかと期待していた。他のすべての要素が同じであったなら、キョンヒにいたことはプラスになっていたと思う。しかし、他の政治的・社会的問題は急速に悪化し、やがて私の人生と思考に直接的な影響を及ぼし始めた。

各部署とのさまざまな交渉の末、大学当局は、私が遠く離れた水原（スウォン）にある慶熙（キョンヒ）大学国際学部に移ることを決定した。中国文学科、日本文学科、韓国文学科は私を必要としていないことを明らかにしていた。

これは、多くの韓国人が私に感謝すべきことだと思っていた任命だった。しかし、大学院時代の同僚とは違って、終身在職権が与えられないこと

にショックを受けた。しかしまた、私には他の人たちの基本的な権利の多くが欠けていた。前向きにとらえるなら、私は 10 年間の荒野の後、再びテニユアトラックに入ることを許された。新しいプログラムへの移行をできるだけスムーズにしようと努力してくれた親切な教授陣が何人もいた。

国際教養大学での最初の数カ月で、私がこのプログラムに適していないこと、そしてそもそもその教授陣が私を必要としていなかったことが明らかになった。文系出身者は私だけだった。教授陣のほとんどは経済学の教授で、新自由主義的なイデオロギーを受け入れていた。

授業が英語で行われたおかげで、私は時間を節約することができた。また、プログラムのランクが比較的高かったことで、韓国社会、特にエスタブリッシュメント・コリアンの間で、ある程度の影響力を持つことができた。その間、非常に優秀な学生が何人かいたし、事務所のスタッフとも親しかった。私は学科の教授たちとは親しくなかったし、彼らの同調主義を不愉快に思っていた。とはいえ、地位のあるポジションであり、一定の扉は開かれた。しかし、私が主流派に復帰しようとしたことが、最終的に最善の選択だったのかどうかはわからない。

国際教養学部で数年過ごした後、このプログラムは私にとって次第に退屈なものになっていった。不誠実な教育姿勢や、時代の主要問題に対する教授陣の完全な沈黙が気になっただけでなく、職員や学生に対する教授陣の態度が卑屈だと感じたからだ。私は労働者の苦境にますます同情的になっていたのかもしれないし、大学がますますヒエラルキー化していたのかもしれない。

キョンヒで 8 年間働いた後、私は他の教員と交流するよりも、生徒と話す方が好きだと気づいた。私は評価されなかった。社会的価値もなく、学術的な重要性もほとんどないと感じる学術雑誌の記事を書くことを期待されていた。学部は、私のキャリア全体を通していたどの学部よりも、私の役割に関心がなかった。

すでに 2016 年の秋、私はキョンヒ大学を去ることを真剣に考えていた。

私はキョンヒの国際交流の発展から排除され、講義と論文の採点しかできなかった。私はこの状況を受け入れ、自分の執筆活動（学術的なものではなかったが）とアジア研究所の発展に力を注いだ。しかし、私が学部から指示された優先事項から離れてしまったため、結局、学部は（正当な理由もなく）私の契約更新を遅らせることになった。

慶熙大学の文化にも大きな変化があり、それは 2012 年 2 月 18 日に創立者のチョ・ヨンシクが亡くなったことと関係していた。私はチョ・ヨンシクに会ったことはなかったが、彼が死の床に横たわっているときでさえ、大学における彼の存在を感じていた。複雑で意志の強い彼は、権威主義とリベラルな国際主義を同居させながら慶熙大学を築き上げた。芸術と人文学を支援し、環境と世界平和に献身する強い伝統があり、私はそこに惹かれた。さらに、過去には政治的な問題を抱えた人物が、キョンヒに身を寄せていたこともあった。

私が着任したとき、チョー・ヨンシクは寝たきりで、彼の考え方は図書館で読んだ本や、彼の息子で塾長のチョー・インウォンとの交流でしか知らなかった。私は彼のアドバイザーを数年間務め、親しくなった。チョー・ヨンシクが先代に登用した教授や上級管理職たちは、世界平和に対する彼のビジョンに共感し、私を支持してくれた。別の派閥は、出版などで学校のランクを上げようとし、大学を違う方向に導こうとしていた。趙先輩の死後、SSCI の論文や教育負担の増大が一般的になる。

慶熙大学は変わりつつあり、馴染みのない存在になりつつあった。

しかし、そうした世界の変化は、私をも変えていった。大学はますます学びの場ではなくなっていくように思えた。また、生態系の崩壊をますます意識するようになった。人類の絶滅が壁に書かれているのが見えたので、私は自分の価値観を急速に整理し始めた。2015年までには、気候変動が中心的大災害であることは明らかだった。私はそれについて書かずにはいられなくなり、周囲の誰もそれを望んでいなかったにもかかわらず、あらゆる場面で行動を起こさざるを得なくなった。

また、政府の腐敗が進んでいるのを目の当たりにし、特にアメリカではそうだったが、韓国でもそうだった。経済全体が投資銀行の利益のために定義されていた。経済の歪みや気候の破壊に対処すること以上に重要なことはなかった。SSCI のジャーナル記事を書くことは、私にとって何の意味もなかった。

富の集中とメディアの死によって、私は 2001 年当時とほぼ同じ危機モードに陥った。オバマ政権時代の短い休暇は終わり、危機感を感じた。さらに、何気ない会話も難しくなった。他の教授陣が、安全保障や外交については語るのに、気候変動や富の集中、テクノロジーが社会に与える影響については避けるのが我慢ならなかった。彼らは間違っているだけでなく、私たちの住む世界について積極的に学生を欺いていたのだ。

学術雑誌の論文に集中することもできず、大学では何の役にも立たない現代社会に関する学生や市民のためのイベントを企画した。

それから昇進という些細な問題もあった。2011年にキョンヒで仕事を始めたときから、私が正教授になる資格が十分にあることは明らかだった。キョンヒでは、私より少ない論文数で正教授になった教授がいることも知っていた。しかし、私の地位は7年間准教授のままだった。2017年に審査を受けたとき（昇進のためではなく、准教授としてさらに5年間を与えるため）、学部は私が契約更新の要件をわずかに下回っていると判断した。しかし実際には、私は彼らが要求した通りの数の論文を発表していた。プロセス全体が見せかけだったのだ。

半年間、私が正教授になれるかどうかはおろか、契約が延長されるかどうかも宙に浮いたままだった。結局、契約はさらに4年延長されることになった。しかし、私の出版物（2冊の本を含む）は何の役にも立たなかった。まるで新任の助教授のような扱いだった。

それだけではなかった。契約が延長されたことを知ってすぐに、私は研究を行うためのサバティカル休暇はいつもらえるのかと再度尋ねた。私は、出版が遅れているので、もはやサバティカルを取る資格はない（つまり、出版物を書く時間は与えられない）と言われた。その言い分は馬鹿げていたし、そのプロセスが合法的なものであったかどうかも疑わしい。いずれにせよ、明らかに私にこのようなことを言わざるを得なかったスタッフと議論する気にはなれなかった。明らかに、何か別のことが起こっていたのだ。上級教授陣が私を嫌っていたのか、それとも第三者から嫌がらせをするよう明確に命令されていたのか、私にはわからない。

私がキョンヒ大学を去りたいと思うようになったのは、他にもいくつかの問題があったからだ。私は自分の健康について、そして自分の健康が仕事に及ぼすかもしれない影響について、ますます心配するようになっていた。学部長に私が患っている神経学的問題について話したが、学部長はまったく関心を示さなかった。漢陽大学の医師が学部長宛に書いた手紙には、私のどこが悪いのかが詳細に書かれていた。学部長はその手紙を受け取ったことすら気づかず、私の健康状態について話し合うために私と会うこともなかった。しかし、私は事務職員から学部長がその手紙を受け取ったことを知った。彼らはまったく何もしてくれなかった。私が通常の給料の3分の2を取れば、1学期分の病気休暇が取れるということだけだった。

学部長の活動や私を助ける能力を制限する指令があったのだろう。韓国では、私を困難に陥れようとする圧力が高まり、イリノイ大学の再来のようになりつつあった。学部長は、私に対する要求（それは他の教員に対するものとは明らかに異なっていた）の妥当性について、他の教員とオープンな議論をすることさえ拒否した。プロセス全体があまりに強引で、馬鹿げているように思えたので、私にはこの制度と闘う努力に値するとは思えなかった。

おそらくラクダの背中を折る最後の藁は、学部長の勧めもあって私が企画し、申請して資金を得た気候変動講座だった。そのコースは、大学にとっても韓国にとってもユニークなものだった。というのも、私は気候変動の全貌を詳細に説明し、その脅威の大きさについて学生たちと徹底

的に議論するつもりだったからだ。また、化石燃料会社やその他の利益団体が、専門家を買収することによって気候変動をいかに軽視してきたかについての読み物も割り当てた。

すべての準備を終えて、2017年9月の初回の授業に参加した学生は全部で5人だった。キョンヒで6年間教えてきて、初日に満員にならなかった学部の授業は初めてだった。この状況は私にとって深い謎だった。その後、学部の秘書からメールが届き、少なくとも10人の学生が集まらなければ、授業は中止となり、私の給料は300万ウォン減額されると告げられた。

そのプロセス全体がばかばかしく思え、私の契約違反のように思えたが、その契約には、教えることが許されていないクラスを教えなかったからといって給料を減額することについては何も書かれていなかった。

しかし、少し調べてみると、真実がわかった。大学では数ヶ月前から大規模なリストラが行われ（教員には秘密）、ある授業は必修科目となり、ある授業は選択科目となったのだ。また、大学側は各教授が年間4科目ではなく5科目を担当するよう要求しており、その結果、とんでもない数の授業が行われていたのだ。

私の授業は選択科目として指定されていたが、私の授業を受けたい生徒の多くが、経済学の授業や他の新しい必修科目の履修を義務付けられていたため、受けられなかったことを知った。つまり、私のクラスの需要不足は完全にでっち上げだったのだ。翌日、私はこの件について学科長

とミーティングを持った。私はまず、このプロセス全体が私の契約違反であることを告げた。彼は黙っていた。

私は友好的な態度を崩さず、気候変動に関する私の講義を必修科目にし、経済学を選択科目にしたかどうかと提案した。彼は笑った。しかし、私は完全に冗談を言っていたわけではなかった。そこで私は、教授法に関するこの新しい規則と、気候変動を副専攻として扱うべきかどうかという問題について、教授会で話し合うことを提案した。彼はそのような会合を開くことを拒否した。

キョンヒは、より多くの授業を、より低い賃金で、より少ない知的内容で教授をゆすろうとする営利企業に成り下がったと感じた。授業や知的探求には何の価値も与えられていなかった。私は時が経つにつれてそうになっていくのを目の当たりにしていたが、学部長との面会ですべてを思い知らされた。私は数週間後、退職の意向を伝えることになったが、私のクラスで問題が起こる前から、すでにそのような意向を示していた。

私は、韓国のエリート大学のメンバーとしては、はるかに役不足な存在になりつつあった。ハーバード大学やイェール大学の教授たちと連絡を取り、キョンヒを多くの面で助けることはできたが、私の心はもはやこのプロジェクトにはなかった。大学全体、そして教授たちによって、自分たちの将来や優先順位について公然と嘘をつかれている、自分の学生を含む普通の子供たちの窮状を、私はますます心配するようになっていた。誰も戦争や気候変動、富の集中について語ろうとはしなかった。



私は、アメリカで行われている犯罪行為についてはおろか、実質的なことについては何も話さないという教授陣の姿勢にショックを受けた。自分をメインストリームに戻すための7年間のプログラムはそれなりに成功したが、私の心は別の方向、つまり急進的な批評へと向かっていた。私の所属していた学部には相談する相手がいなかった。

2017年までに、私は経済や政治に関する情報のほとんどを、過激な批判的ニュースソースから得るようになった。2007年には(2001年から信頼を失っていたとはいえ)情報のためにニューヨーク・タイムズ紙を見るが多かったが、2017年には文字通り全く見なくなった。さらに私は、マルクスが提供したような経済・文化批評でしか説明できないような、社会的・政治的な重大な変化が起きているのを目の当たりにしていた。私はマルクスの大ファンではなかった。彼の分析は単純だと感じていたからだ。しかし、権力とイデオロギーに関する彼の主張の多くはまったく正確であり、私が韓国とアメリカで目にしていることにまったくふさわしいと思った。

2001年の時点では、アメリカ政府で働けば自分の居場所があるのではないかとさえ思っていたのだが、2014年くらいには、トランプ大統領の台頭によって、そのような仕事はほとんど魅力的ではなくなっていた。アメリカの大学で働くことさえ、心理的に難しそうだった。

慶熙大学を去る決断をした背景には、私の健康状態も重要な要素だった。前述したように、私は1999年7月に脳腫瘍の手術を受けた。腫瘍を完全に取り除くことはできなかったが、基本的には10年以上問題なかった。

深刻な神経障害はなかった。しかし、2009年頃、大田で左手に力が入らなくなり、体の左側にしびれ（足が寝てしまうような感覚）があることに気づき始めた。病院で何が悪いのか尋ねると、予想されることだと言われた。MRIを撮ることも勧められましたが、それほど深刻なものではないとのことでした。

2011年の冬、シンガポールの新キャンパスで教鞭をとる可能性を検討するためにイェール大学を訪問したとき、左半身全体が引きずっているように感じ、これは深刻な事態で、急速に悪化しているのではないかと心配になった。実際のところ、神経症状は強い時期が短く、軽い問題がある時期が長い。

ボストンのマサチューセッツ総合病院でMRI検査を受けた。ひどい過剰請求だったが、ほとんど変化がないことがわかった。しかし、すべてが大丈夫だと完全に確信したわけではなかった。

2011年から2018年にかけて、明らかに運動神経が退化した。皿洗いに時間がかかるようになり、服を着るのに苦労し、ポケットからノートを取り出して何かを書き留めるような単純なことさえも面倒になった。タイピングも遅くなり、ベッドから起き上がる時や服を着るときに転倒するのではないかと不安になることもあった。

できないことはなかったが、すべてに時間がかかるようになった。その後、睡眠障害に悩まされるようになり、耳鳴りがして長時間横になっていることもしばしばだった。キョンヒはストレスの多い環境で、その

教授陣は明らかに私の生死など気にしていなかった。水原キャンパスへのバス通学は非情で、私は次第に嫌いになっていった。寝不足や体調不良、その他の心配事が原因だったこともあるが、そこの文化に対する単純な苛立ちもあった。

妻が以前よりイライラするようになったため、この状況はさらに悪化した。彼女の経験について詳しくは述べない。彼女もまた、この18年間に多くの苦しみを味わったことは間違いない。ただ、もし私たちが韓国であんなに長い間、困難な状況下で生活する必要がなかったら、おそらく精神的な負担の多くは避けられただろうと思う。

睡眠パターンが悪く、耳鳴りがするのは、さまざまな低レベルのエネルギービームを使って睡眠を妨害し、長期にわたって神経系にダメージを与える嫌がらせの結果ではないかという疑問もある。NSAによって、このような兵器が現在アメリカで人々を攻撃するために使用されているという文書が機密解除された。私の症状は、NSAがこのような装置を使って嫌がらせをし、標的となった市民の健康にダメージを与えたという、文書化された同様の嫌がらせに似ていた。

私が数年前に目にしたそのような嫌がらせの文書に加えて、アメリカの新聞には、中国が高周波を使ってアメリカ大使館でアメリカ人を攻撃しているという話もあった。アメリカの新聞に掲載されたそのような話には説得力がなかったが、アメリカ自身がそのような行為を行っていることを示唆していた。私がこの種の嫌がらせを受けたかどうか、どの程度受けたかは、機密文書にアクセスしない限り知ることはできない。ただ、

私が健康を害するようなある種の虐待を受けていたことを認識しているような人たちとは、何度か会話を交わした。

特に 2016 年以降、アメリカがイランと戦争を始めたり、韓国と問題を起こそうとしたりするさまざまな努力の中で、私は不眠や耳鳴りの最悪の事態を経験したと主観的に感じた。

いずれにせよ、もし私がそのような嫌がらせを受けたとしたら、それを止めることは容易ではなかっただろう。また、そのようなハラスメントは、実施者が私を傷つけようとしたというよりも、むしろ、より悪い形の罰を免れるための一種の妥協であった可能性もある。低レベルのハラスメント、私の神経状態への意図的なダメージ、ストレスの多い環境での長期にわたる深刻な神経症状の自然な結果、これらすべてのプロセスを最終的に整理することはできない。

¥

## 韓国と世界の読者のために書く

2011 年から 2017 年までの私の韓国でのキャリアを振り返ってみよう。この間、私が韓国で最も成功したのは作家としてだった。以前にも申し上げたように、私は作家という職業を韓国でのキャリアの第一選択としていたとは思っていない。コンサルタントとして仕事をしたり、アドバ

イザーとしてお金を稼いだりする努力は何度もしたが、そのような仕事をうまくこなすことはできても、まともにお金をもらって仕事をするとはほとんどなく、私のキャリアとして成立したことは一度もなかった。

私は、私の活動を明確に制限しながらも、教育と執筆は可能な活動として残した機密指令が存在すると信じている。実際、私は韓国や世界の誰よりも率直に問題を書き、その記事を主要な企業新聞に掲載することができた。私は裕福ではなかったし、妻もこれまでの生活で疲れ果て、仕事を得ることはできなかった。

ワシントンにいる間、私は『フォーリン・ポリシー・イン・フォーカス』やノーチラス・インスティテュートに寄稿し、いくつかの文章は注目を集めた。

大田に到着してからは、まったく書きたくなかった。ソルブリッジでの仕事をしっかりやりたかっただけだ。しかし、その過程で地元の『大田日報』に記事を書き、その後、広く読まれている科学技術の日刊紙『大徳ネット』に移った。私の記事のいくつかは、技術専門家や政策立案者の間で非常に広く回覧された。

2010年に『前京ビジネスウィークリー』のコラムニストを依頼されたとき、私は大躍進を遂げた。私の記事は、彼らを取り上げていたほとんどの記事よりも興味深く、知的で複雑だった。やがて、いくつかの大手新聞社で幅広く執筆できるようになった。

しかし、私が東亜日報に記事を書くようになったのは 2013 年のことである。韓国でも私の行動にはさまざまな機密事項が制限されているが、これは並大抵のことではない。

韓国でブレイクし始めたのは、多様なテーマで何百本もの記事を書き、本当の読者を獲得し始めたからだ。2013 年秋、私は幅広い発行部数を誇る保守系新聞『朝鮮日報』の寄稿者になった。私の 3 冊目の本がベストセラーになったまさにその時だった。

2014 年の春から中央日報に寄稿することになった。私は 6 年間、月 1 回のペースで執筆することになった。朝鮮日報と中央日報の記事は韓国で広く読まれ、教養のある韓国人の間で私の幅広い支持を確立した。私が他のメディアからブロックされていたことは、さほど問題ではなかった。もちろん、現代的な問題に関する短い記事を新聞に掲載するためにあれだけの時間を費やし、翻訳し、編集し、出版するよう人々を説得しなければ、これほどの成功はなかっただろう。外国人としての通常の道が閉ざされていた韓国で地位を確立するのは容易なことではなかったが、それなりの利点もあった。

中国語、日本語、そしてもちろん英語の記事も出版した。何度も失敗を繰り返した後、私は出版プロセスをうまくシステム化した。私はそれぞれの読者に向けてどのように書けばいいかを知っていたし、いつでも 3 カ国語で翻訳や編集をしてくれる有能な人材もいた。また、私の作品を喜んで掲載してくれる編集者や韓国、日本、中国の重要な新聞社もいた。

1本や2本の記事で大きな違いはないが、私は韓国語で数百本、中国語で約120本、日本語で50本の記事を書いた。

その結果、作家としても上達し始めた。文学的なタッチを交えつつ、韓国で読める他のどんなものよりもはるかに直接的で残酷な分析を書く方法を学んだ。創造性と厳しい分析の組み合わせが、韓国での私の評価を確立したのだと思う。

また、韓国語の本や記事を手がけながら、中国語の本も書きました。原稿を書き始めたのは2012年だが、実際に印刷されたのは2015年で、その後2016年に香港の大手出版社から出版された。『真実を求めて海を渡る』と題されたこの本は、自伝であると同時に、中国が国際社会に貢献できる可能性を評価したものだ。この本はあまり売れなかったが、PDFで広く配布され、中国の多くの一流の研究者にプレゼントしたところ、その多くが返事をくれた。全体として、この本は好評を博し、私がアジアを研究する目に見える人物であることを確立したと思う。中国語で書かれ、中国の読者を対象にした本であり、売り上げや市場、政府の意見をまったく気にしない本として、この本はユニークだった。

YTNの王善澤記者（後にアジア・インスティテュートの中心となる人物）は、韓国文化の隠された可能性に関する3冊目の本で、私を大いに助けてくれた。この本で私は、韓国の文化的過去の可能性を評価し、将来の発展の方向性を示した。さらに私は、韓国人がその事実気づいていないだけで、韓国はすでに多くの分野で先進国であったとも主張した。この主張の後半部分は多くの韓国人に好評であったが、王善澤は専門的

な知識と洞察力を持っており、私の主張をより力強いものにし、韓国の読者に感銘を与えるような多くの有益な事例を加えてくれた。

私は朴槿恵大統領の政策に特別なシンパシーを感じていたわけではないが、彼女は思いやりのある人物で、皮肉な政略家に囲まれていたとしても、国家に対する責任感を持っていたという話を複数の人から聞いていた。

私が初めて彼女を見たのは、子供たちと一緒に参加した新作アニメ映画のオープニングで彼女が挨拶したときだった。彼女は当時、私の娘レイチェルが通っていた小学校と同じ小学校に通っていたと聞いた。しかし、言葉を交わすことはなかった。しかし、彼女が出会った子どもたちの目を見ようと努力し、多くの政治家に見られる以上の共感を示していたことは覚えている。

2015年10月、朴大統領がオバマ大統領との会談のために訪米を計画する1カ月前、私は記事を書いた。その記事が掲載される3日ほど前に、ブルーハウスの秘書から電話がかかってきた。私の記事の草稿を見た誰かが、直接会うために誰かを送り込もうと考えたのだろうと思った。後で知ったことだが、彼女は私の記事をととても気に入ってくれていた。

翌日、私は秘書官と会い、訪問の複雑さについて話し合った。私は、日本の安倍晋三政権がやっていることと明確なコントラストを確立するような方法で、朴大統領が韓国の視点を示すことができるかもしれないこ



とについて提案した。私は個人的に、朴大統領の今回の訪韓は、そのアドバイスに忠実に従ったものだったと思った。

それから1ヵ月後、外交・安全保障担当のチュ・チョルギ上級秘書官から電話があり、昼食に招待された。プロの外交官であるチュは、私が韓国で何をしているのかに興味を持ってくれた。私は朴大統領の政策のほとんどに反対で、政権が不必要に近づきにくく秘密主義的だと感じていたが、彼とはとても話しやすかった。昼食では、現在の外交の複雑さについて話したが、主に文化について話した。食事の終わりに、私は彼に拙著『**韓国人が知らない別の大韓民国**』をプレゼントした。彼はこの本（朴大統領もこの本に関心を寄せていたようだ）や私の他の著作に興味を示してくれた。

数ヵ月後、私は第三者から、チュ氏が青瓦台に戻った朴槿恵大統領にこの本を渡し、朴槿恵大統領はほとんど即座に座り、隅から隅まで読んだという話を聞いた。朴槿恵はこの本と私の著作のことは知っていたが、その一読によって、私の本が韓国の未来に対するビジョンを提示していると信じるに至ったのだ。

その1週間後、またチュ氏から電話がかかってきた。今度は彼の個人携帯からで、同じ日の夜、コリアナ・ホテルで夕食を共にしないかという誘いだった。私にとっては少し無理な話だったが、午後8時にはそこに着いた。チュは、朴大統領が私の本に興味深く読み、韓国ができることについての私の提案を真剣に受け止めてくれたことを説明してくれた。朴大統領は近い将来、具体的な措置を講じるつもりであり、私の支援を

求めているとのことだった。朴大統領が具体的に何をしようとしているのかは定かではなかったが、このような関心を寄せてくれたことを私は嬉しく思った。

翌日、私の携帯電話にあるジャーナリストから謎のメッセージが届いた。何のことかよくわからなかった。パソコンに向かい、彼女が言ったことを確認するまでにさらに5時間かかった。

朴大統領は閣議の冒頭で、私の本について長々と語り、この本が彼女の愛読書であり、韓国のビジョンを提示していると述べた。韓国の歴代大統領が自分の愛読書を挙げるという伝統が過去にあったため、メディアはこの話にすぐに飛びついた。

韓国の大統領に会ったこともなかったし、社説で成功した割には、高名なイベントに招待されることもほとんどなかった。今にして思えば、VIPに会う時間を無駄にせず、読書と執筆に集中できたのは幸せなことだったと思うが、それでも当時は、メインストリームへの大躍進が最優先課題だと考えていた。限られた期間ではあったが、それはとてつもない前進であり、韓国以外では完全に無視されていたとしても、韓国に関する主要な論客としての地位を確立した。

後日、ブルーハウスのメンバーから「何をしたいのか」と聞かれたとき、私は「自分のアイデアについて、政府のいろいろなところで話をしたい」と答えた。

私はすぐに一連の講演に招かれ、最終的には政府高官を対象に4回の講演を行い、政府内で広く話題になった。私はまた、60人の高級将官と提督を前に講演も行った。気候変動やその他の新たな脅威について長々と語ったこのスピーチの準備と編集に、私は何時間も費やした。他にも法務省や外務省、その他多くの機関でスピーチを行った。私は、経済的不公正や気候変動など、話したいことは何でも話すことを許された。保守的なのは政権であることを考えると、かなり驚くべき瞬間だった。

しかし、民間のシンクタンクでは歓迎されなかった。重要なのは、このアメリカ人の本が韓国大統領の愛読書として認められ、海外の新聞でガバナンスについてあらゆるレベルで深い議論を交わしていることについて、一言も触れられなかったことだ。まあ、日本の新聞では少し触れられていたし、最終的にはコリアン・ヘラルド紙が私の短いインタビューに答えてくれたが、普通なら世界的に私の知名度がかなり上がるはずの一連の出来事は、完全にもみ消されてしまった。つまり、朴大統領の影響力、そして韓国の影響力は極めて限定されたままだったのだ。

私はこの講演をとっても真剣に受け止めていた。ガバナンスの本質と倫理的な要請に関するエッセイである。「リンカーンのような文章を書きたい」と友人に言ったのは、あながち冗談ではなかった。今にして思えば、演説は文体的には不完全だったが、単なる予測可能なフィールグッドな話ではないという点で際立っていたと思う。その事実が、私の文章を際立たせたのだと思う。

政府高官を対象とした講演では、韓国の良き統治の伝統が持つ力を強調し、過去の事例が韓国の未来を形作るためにどのように活用できるかを示唆した。軍将兵を対象とした講演では、気候変動が及ぼす影響と、今日の安全保障問題としての中心性について幅広く議論した。

私は、私が言いたいことを何でも言う自由を完全に与えられていたこと、そして私が彼女の政権の政策の多くに公然と反対していることを、朴大統領がまったく気にしていないように見えたことに驚いた。それだけでも、彼女が政策の多くを決定していないことを示唆していた。このような解釈は、標準的な "進歩的" 解釈とは正反対だった。

私はまた、朴大統領が正式に委員長を務める文化充実委員会の委員にも任命された。いくつかの会議に出席したが、その中には朴大統領が出席した会議もあった。私は朴大統領の隣の席に座っており、新聞に掲載された写真（今はもうないが）には、私が中央に写っていた。この委員会はその後、さまざまな金銭スキャンダルでメディアの注目を集めた。委員長であった淑明女子大学のキム・サンリョル教授は、違法な取引でひどい問題を起こした。後日、東亜日報の記者に呼び出され、委員会での出来事について質問された。私が伝統文化に興味があり、文化政策についてプレゼンをしたことを話すと、彼は退屈したのか、すぐに話を打ち切った。明らかに、私はすべての重要な仕事から完全に取り残されていたのだ。

全米ベストセラーの 8 位まで上昇した私の本の成功は、韓国の新聞で大々的に報道され、テレビのニュースでも何度かインタビューを受けた

が、注目されたのは韓国語メディアに限られていた。朴大統領が私の本を選び、その後ニューヨークでのレセプションを含む3つの公の場で私の本についてコメントしたが、海外メディアが注目することはなかった。『コリア・ヘラルド』紙に英語で掲載された私のインタビュー記事と、その数ヵ月後に『コリア・ビジネス』紙に掲載された記事があるだけだ。韓国以外の外国語雑誌は、このアメリカ人が書いた本について触れたものはひとつもなかった。

このトピックに関する海外報道が完全にブロックされたのは、私について語られることを様々な機密事項で制限した結果であると、私は確信を持って言うことができる。また、この本での成功が、長期的なコンサルティングや仕事のオファー、韓国での研究支援につながることもなかった。財団に何度か申し込んだが、講演をしたり、時には短期プロジェクトに携わったりする仕事しか見つけることができなかった。

いずれにせよ、2012年から2016年にかけて、私はアメリカの著名な研究機関と関係を築くことができるようになった。例えば、ノーム・チョムスキーは定期的なメール友達になり、私の学生たちとのインターネットを使ったセミナーに2度参加してくれた。また、韓国語で書いた2冊目の本のために、彼にインタビューもした。彼のサポートは大きな違いだった。

後日、私はチョムスキーに手紙を書き、私のケースを簡単に説明した。彼はその手紙を受け取ったことを認めなかったが、私が彼に手紙を書いた後、彼は私を助けるために特別な努力をしたと思う。

1992年から1993年にかけて、私はハーバード大学の博士課程に入学した後、マーク・シェル教授のもとでいくつかのコースを受講した。彼は、私がイリノイ大学で孤立していたとき、電子メールや電話で連絡を取り合い、また、アジア・インスティテュートで講演をするために何度も韓国を訪れ、私たちに大きな評価をもたらした。彼は忍耐強く、多くの教授や朴元淳ソウル市長のような人物と会い、将来の協力について話し合った。アジア研究所のチョン・ウジンが1年間、客員研究員としてハーバードを訪れるようにまでしてくれた。このような交流のおかげで、私は韓国の主流派に定着したのである。

フランシス・フクヤマは何度かインタビューに応じてくれた。2015年にソウルで開催されたセミナーにも、スケジュールの都合で出席できなかったが、ディスカッサントとして招待してくれた。この人たちは、私の状況に深刻な問題があることに気づいていたのだと思う。

アジア・インスティテュートは、最初の1年間は静かだったものの、その後、月に2回ほど頻繁にセミナーを開催し、2015年頃をピークに熱心なファンを増やしていった。文化や歴史から、核不拡散、気候変動、テクノロジーの進化まで、数多くのトピックを取り上げた。大きな資金援助を受けていなかったため、シンクタンクの公式リストには掲載されませんでした。有意義な議論を行う場として確固たる地位を築いたと思います。最盛期には、私たちのイベントに40~50人が集まったこともあった。決して多くの参加者を集めることではなく、重要な問題に焦点を当てることに重点を置いていた。

最初はキョンヒ大学の校友会館でプログラムを実施した。この取り組みはかなり成功したが、キョンヒの管理者たちは、補償する予算がないため、この取り組みをサポートするのは面倒だと感じていた。その後、ホン・ソクヒョンが設立した NGO が運営するオープンフォーラム、W スペースでプログラムを実施した。その後、慶熙大学と淑明女子大学でセミナーを開催したが、場所が不便だったため、参加者は少なかった。そして 2018 年、ビットコインの大富豪が設立した新しいプラットフォーム「コモンズ財団」でプログラムを開始し、現在に至っている。

アジア研究所が大田に戻って研究機関から受けていたような大規模なものではなかったが、小規模な研究プロジェクトに対して、ささやかな資金援助を受けていた。しかし、時には旅費をまかなうための資金や、政府機関とのセミナーの機会を得て、私たちの知名度を高めることができた。私はアジア研究所に所属する研究者を世界中から増やした。ジョン・フェファーのような親しい友人たちは、長年にわたって私たちのプログラムを支持してくれている。

淑明女子大学のキム・ヒョンギョル教授は親友となり、私の状況を理解し、適切な治療が受けられるように努めてくれた。2014 年から 2018 年にかけての彼の絶え間ない努力は、（両親の病気で役割を果たせなくなった）アジア・インスティテュートを図に載せる上で決定的なものだった。

キム・ヒョンギョルは、アジア研究所を支援する淑明の他の教授たちを私に紹介し、アジア研究所を支援した私の友人たちとも定期的に会った。

そのような会合の中で、私たちは法的に法人化すべきだという強いコンセンサスを得ることができた。キム教授と、アメリカから韓国に帰国したばかりの思慮深い若い女性、チョン・ユジンの懸命な努力のおかげで、私たちは2015年にソウル特別市の教育庁に正式に法人化された。

しかし2016年末から、私とアジア・インスティテュートの熱烈な支持者たちとの間にある種の距離が生まれ始めた。私は本質的に、世界の主流的な見方に関しては限界に達しており、私の著作はより批判的なものになった。私は企業や政府向けの講演を続け、主流メディアに記事を書き続けたが、『コリア・タイムズ』紙への寄稿は、米国の腐敗、軍国主義の台頭、気候変動の圧倒的な脅威を糾弾する内容で、ますます激しくなっていた。

私にとって、気候変動を隠蔽し、社会における不公平の拡大を無視し、軍国主義の台頭を無視する大規模な不正は耐え難いものであり、この醜い真実に立ち向かうことが私たちの義務だと感じた。その結果、交友関係は狭まり、ある種の人間関係は完全に崩壊したと思う。例えば、私は中央日報のテレビ放送で大成功を収めたが、私の発言は中央日報が推進する観点からはあまりにもかけ離れていることは明らかだった。

2018年、私は韓国での一般的な基盤を大きく失い始め、メディアからの取材やイベントへの招待が目に見えて減った。2019年、私は韓国におけるあからさまな反日的レトリックを公然と批判し、新常態への反対をおそらく過度に力説した。日本が完璧な国だと感じたというよりも、いわゆる進歩的な政権によってさらに悪い活動をしている米国を韓国が受け



入れているのを見るに耐えられなかったのだ。韓国で暮らす魅力は薄れ、アメリカに戻る可能性が再び出てきた。

## 日本との交流

私の主な突破口は韓国であったが、時折、日本や中国での成功や有意義な談話、さらにはアメリカでの新たなチャンスもあった。

日本の場合、2005年から韓国大使館に勤務するようになってから、交流の厚みが薄くなった。それ以前は、日本で数ヶ月間研究をするために招かれたり、学会に参加したりしたこともあった。また、私のEメールに返信してくれる日本の友人もほとんどいなかった。昔は年賀状を出すと、何十通も返事が来たものだ。今は2、3通しか来ない。

しかし、大田で働き始めて数年後、友人の本田博邦から日本で開催される2つの会議に招待された。とてもありがたかったが、私はその回路に入ることができなかった。おそらく問題のひとつは、私の考え方が学者らしくなくなっていたことだろう。

大田で科学政策に取り組んだ結果、2009年以降、日本でのイベントに招かれるようになり、ソウルの日本大使館の科学担当官とも頻繁に会うよ

うになった。京都で3年間開催された大規模な STS フォーラムには、日米や他の先進国から科学者や科学政策担当者が参加する、資金力のあるイベントの常連客となった。STS フォーラムの創設者である尾身幸次元大臣とは何度かお会いする機会があり、私を招待してくださることになった。一瞬、科学技術に関連した道が開けるかもしれないと思ったが、結局、ひとつも長続きしなかった。

さらに、父の友人であるザック・ホールの計らいで、2009年にバイオテクノロジー政策に関する研究プロジェクトの一環として沖縄科学技術大学院大学を訪問することができた。私は科学に詳しいわけではなかったが、韓国語と英語で頻繁に文章を書いた結果、韓国の科学政策において実質的な役割を果たし始めていた。当時、日本に進出することは理にかなっていると思われ、鳩山政権の高級官僚による科学政策セミナーに招かれたこともあった。

日本との関係で最も重要な転機となったのは、中央日報が私の毎月の投稿記事の多くを日本語に翻訳することを決定したことである。その記事は、文化、科学政策、外交、安全保障、教育などのトピックを取り上げており、一般的なメディアに掲載される記事よりも科学的なアプローチをしていたため、日本の読者もかなり獲得できるようになった。

幅広い影響力を持つ可能性に気づいてから、私はこれらの記事の草稿に何時間も費やした。中にはヤフー・ジャパンに取り上げられたものもある。また、私は2013年にハフィントン・ポスト・ジャパンのブロガーとしての場所を見つけることができ、2018年12月に彼らがオープンブ

ログを閉鎖するまで、何十本もの詳細なレポートを書いた。これらの記事は、ハフィントン・ポストの貴重な編集者の意見を取り入れて書かれたもので、私の最高傑作のいくつかを形成した。

2015年12月、日本で最も広く読まれている雑誌のひとつである『世界』に寄稿することになったときが、私の日本での執筆活動の頂点だったのかもしれない。私は日本の平和憲法について、過去の過ちを引きずるのではなく、未来の安全保障の前触れであると述べた。私はこの議論を気候変動への対応という文脈で行った。この記事は、後に私の日本語の著書の核となる。

フェイスブックはまた、日本での再起にも役立った。頻繁に日本での講演に招かれることはなかったが、私の文章を真剣に読んでくれる学者、ジャーナリスト、政府高官など、日本人の強力なネットワークとつながり、オンラインでのディスカッションは、彼らから学び、関わる機会を与えてくれた。私は、現代的な問題について日本語で文通する日本人との重要なネットワークを築いた。

もうひとつの重要なマイルストーンは、私の論文「Peer-to-Peer Science」である：2013年9月3日）は、レイン・ハーツェルとともに執筆した、福島原発事故への対応に関する論文である。

この記事は、フォーリン・ポリシー・イン・フォーカスの年間人気記事ベスト10に入るもので、福島原発事故による環境危機に効果的に対応するために、P2Pのアプローチを使って世界中の人々を参加させる方法

について述べたものだった。この記事が日本語で発表されてからしばらくの間、私は会ったこともない日本人からたくさんのメッセージを受け取り、福島原発事故への対応に関する政府・学術委員会に招待され、自分の意見を発表したこともあった。しかし、またしても連絡は途絶え、ほとんどの関係者とは音信不通になってしまった。しかし、川中陽という若い日本人女性には出会った。彼女は非常にエネルギーにあふれ、献身的で、後にアジア・インスティテュートの数々のプロジェクトに協力することになる。

私は自費で数日間福島を訪れ、福島とソウルの青少年の交流プログラムを企画した。娘の学校は最初の提案を拒否したが、私は小さな作品集を作るのに十分な生徒を見つけ、事故現場近くの小学校に送った。私はキョンヒ大学で福島出身の学生、本田仁香と出会い、この活動に協力してくれた。

個人的には、日本で福島問題に取り組んでいる人々との交流が終わった背景には、隠された手があったと思う。私が頭角を現し始めた頃、（2000年以降、これまで何度もあったように）突然、すべてのコミュニケーションがストップした。

中藤裕彦という名の思慮深い青年と文通を始めたのが2015年のことだった。彼は慶熙大学で博士号を取得した学者で、日本で政治家になる野心を持っていた。彼は北東アジアに実行可能な政治秩序を作ることに深くコミットしており、私たちの間で電子メールを通じて生産的なやり取りをしたことがきっかけで、福井県の政治家である伊野部耕太との昼食

会に私を招待してくれた。その昼食会は大成功を収め、2度の福井訪問につながり、最終的には2018年12月に福井に事務所を構える日本アジア研究所の設立に至った。

画期的なことではあったが、そのプロセスは複雑だった。私たちはアジア・インスティテュートを推進し、日本で実行可能なプログラムをまとめるために多大な努力をしたが、資金は得られず、結局、2019年5月現在、日本アジア・インスティテュートへの資金はゼロのままである。とはいえ、日本でアジア・インスティテュートをNGOとして立ち上げたことは、かなりの成果だった。

2017年8月4日、アジア・インスティテュートが気候変動に関するセミナーを開催し、東京の国会で韓日協力の可能性が高まり、広く国会議員に宣伝した。日本の政治家と直接交流する機会を得たのは2003年以来だった。

日本でのアジア・インスティテュートは、日本人にとって魅力的だったのではないだろうか。私が言えることは、国会でのイベントと日本のメディアに私の記事が掲載されたことで、たとえ私と交流がなかったとしても、かなりの日本人が私の仕事を知っていたということだ。

その途中で、イリノイ大学で親しくなり、何度か来日を手伝ってくれた本田宏明教授を失った。2016年に日本で対談した際、私に何が起こったのかという問題を持ち出したが、彼はほとんど関心を示さなかった。私は彼に経緯を簡単に説明し、文通をしたり電話で話したりした。しかし

結局、彼は私に二度とこの件に触れてほしくないと言った。私は彼と再び会話する努力をしなかった。

また、大阪の政治家、服部良一氏とは、私がいくつかのプロジェクトでお世話になった学生、山本北條氏の紹介で知り合った。服部は私に大阪の貴重な人物を何人か紹介してくれ、2017年には孫崎享（元外務省局長）との公開演説会をアレンジしてくれた。服部はその後も小さなプロジェクトで私を助けてくれ、日中韓米の誠実な交流に真剣な関心を持ち続けてくれた。

服部はまた、ソウルで何度も会い、日本でも会っていた編集者の川瀬英之を紹介してくれた。私は川瀬氏とともに『武器よさらば-気候変動の危機と日本の平和憲法』（2019年7月25日刊）の原稿を書き始めた。この本は、私と日本との関係にかなりの影響を与え、ある面では、2004年以来、あるいはそれ以前にはなかった程度に、日本を私の人生に取り戻すことになる。私と仕事をしたいと思う日本人はまだ限られていたが、この本は日本のメディアで取り上げられ、大手書店で販売され、政府関係者を含む幅広い人々に真剣に受け止められていた。

私の本の成功は、福井にアジア・インスティテュートが NGO として法人化され、事務所を構えたことと対をなしていた。突然、私たちが再び真摯に見られるようになったのだ。この変化は、アジア・インスティテュートの研究員であり、親友でもある川中陽が関わっていた「冷戦組」をはじめとする、日本における新しい世代の活動家の台頭と関係しているのかもしれない。さらに、私は絶滅の反乱ジャパンと仕事をする機会を

何度か得て、日本のことをもっと真剣に考えるようになり、ハフィントン・ポスト・ジャパンに書くことができなくなったとしても、日本の読者のためにもっと記事を書こうと思うようになった。

前述の本が出版された後、私は娘とともに日本を訪れ、国際社会で積極的な役割を果たす日本のビジョンについて一連の講演を行い、成功を収めた。保守的な政治家の多くはこの本の内容を嫌ったかもしれないが、政府や産業界の多くの人々の間では私の主張に大きな共感が寄せられ、2001年以前とは比べものにならないほど日本との交流が増えた。

## 中国との交流

中国での進歩もかなり遅く、苦しいものだった。当初、私は中国よりも日本で多くの成功を収めていた。しかし、ソルブリッジとキョンヒには真面目な中国人留学生がいて、私を引き留めてくれた。韓国では私の周りにそのような日本人はいなかった。中国の聴衆のために中国語で書くことは私にとって非常に重要であり続け、私は韓国で中国人学生や教授と中国語で話す機会を求め、時折中国を訪れる機会も見つけた。

韓国語で書いた自伝的著書『人生はスピードではなく、方向性の問題である』がまだ完成していなかったとき、中国語で出版してみようと思いついた。このようなプロジェクトはかなり難しいとわかっていたものの、

ソルブリッジには銭孟霖という情熱的で聡明な学生がいて、原稿の整理を手伝ってくれた。

私は3年間、中国の本の執筆を続けた。というのも、このプロジェクトは単純なものではなかったからだ。本にはお金がかかった。しかし、韓国で売った本から少し現金ができたので、2014年に中国語版の本を印刷し、中国やその他の国で共感してくれそうな人たち数百人に送った。その本のタイトルは『*Kuahai Qiuzhen*』（「真実を求めて海を渡る」という意味）で、私の幼少期の経験、中国文化との最初の出会い、そしてアメリカ人として中国の将来における潜在的な役割についての見解が書かれていた。私の子供時代に関する部分のいくつかは、私が韓国で書いたものにもあった。

この本によって、私の中国語の著作を真剣に読んでくれていた小さな、しかし重要なグループを得ることができたと思う。場合によっては、私が本を送った教授たちは、2000年当時、インターネット教育への取り組みで一緒に仕事をしていた人たちでもあった。学者たちから気の利いた手紙をもらったり、新聞社の取材を受けたりしたが、中国との関係に大きな進展はなかった。時折、会議への招待があり、中国の友人たちとは絶えず連絡を取り合っていた。おそらく最も重要なことは、この本の編集者である王平が親しい友人となり、私たちは簡単に仕事を調整することができたことだ。



多額の私費を投じて著名な教授たちに本を送り、ネットで検索して手紙を書くべきと思われる人たちの連絡先を入手することを厭わなければ、あれほどの影響力を持つことはできなかったと思う。

2016年、私は韓国の人気新聞『アジア・トゥデイ』のコラムニストだった時期がある。当時、アジア・トゥデイは中国の検索エンジン、バイドゥと契約を結んだばかりで、バイドゥを通じて多くの記事、特に私の記事や中国語での放送が中国で広く公開されるようになっていた。フェイスブック共和国」を提唱した私の記事の場合、中国国内で数十万ヒットを記録した。バイドゥはこの記事を閉鎖することも検討したが、貴重なコンテンツであったため、結局は掲載し続けることにしたと聞いた。バイドゥへの寄稿と中央日報への中国語での寄稿によって、私は物議を醸す話題の書き手として大目に見てもらえるようになった。これらの記事は必ずしも主流メディアには掲載されなかったが、読者数はかなりのもので、おそらく韓国での私の読者数を上回ることもあっただろう。

共産党の新進気鋭の人物、エリック・リーが運営する中国のブログ『Guanchazhe』（『オブザーバー』の意）に掲載された私の記事は、かなり重要なものだった。エリックとは上海で一度会い、かなり楽しい会話をした。

最初の記事は、2016年9月28日に観潮社に掲載した中国の巨大インフラプロジェクト「一帯一路」（イーダイイルー）に関するもので、タイトルは「チャイナドリーム、西洋化か変革か？世界経済の変革と環境危機解決の鍵は中国の過去にあり」と題したものである。

本稿では、持続可能な開発と気候変動への対応に立脚した、このプロジェクトの新たなビジョンを提案した。私は、一帯一路の将来にとって、西側の破滅的な石油消費経済よりも、中国の持続可能性の伝統の方がはるかに価値があると提案した。この記事は中国国内でたびたび引用され、私が書いた他のどんな記事よりも私の地位を確立した。さらに、この記事が『Guanchazhe』に掲載された後、私の記事がネット検索で大量に表示されるようになった。

2本目の記事「西洋を模倣するよりも、中国のシンクタンクは自らの伝統を大切にすべき」は、私が北京で開催された国際シンクタンク会議で講演した直後の2018年2月3日に『Guanchazhe』に掲載された。私は、中国がシンクタンクを発展させる大きな可能性について、もしシンクタンクがアメリカのシンクタンクが犯した過ちを避け、漢の時代にまで遡る中国の長い伝統であるアカデミー（修院）を最大限に活用するのであれば、と述べていた。

その後、Duowei Newsにも声をかけてもらい、レギュラーコラムニストにしてもらい、いつでも中国人向けに出版できるようにしてもらった（翻訳費用を払う気があれば）。もちろん、私があれだけの時間をかけて記事を書き直し、それを無報酬で掲載させるというのは、かなり不合理に思えるかもしれない。しかし、正しいか間違っているかは別として、中国で十分な支持を得ることができれば、他のチャンスもついてくるだろうと私は考えていた。

中国での 2 冊目の本の出版にも力を入れた。出版社候補に何度も会いに行ったが、何も得られなかったため、私は中国での出版を諦め、アジア研究所の名前で 300 部だけ印刷した。2018 年 11 月にそれらの本を中国のさまざまな学者や公人に郵送したところ、大物を含む何人かの人々から非常に好意的な反応があり、最終的には 2019 年 3 月に湘大文華出版社から出版契約を結ぶことになった。最終的な原稿のタイトルは『維来中国官网連聯誼于地邱民韻（意：未来の中国：人類と地球の運命）』で、好評を博した。

そのころには、中国には 11 年間一緒に仕事をしてきた友人の王平と、黒竜江省にいる彼の友人の蔡新という、きわめて強力な編集チームができていた。彼らは優れた翻訳者であり編集者であり、王平は私の本のレイアウトも引き受けてくれた。この本の原稿は、プロの出版社の手を借りずとも、非常によく書けていた。中国の現代的な問題に対して新鮮な視点を提供しながらも、西洋的な基準に陥ることのない多くのエッセイが含まれていた。

2018 年に中国で開催されたいくつかの会議に招かれ、大きくステップアップしたかのように思えたのは、2019 年 5 月 15 日から 16 日にかけて中国社会科学院（CASS）で開催された「アジア文明の対話に関する会議」と題するセミナーの講演に招かれたときだった。他にも 10 月と 11 月に北京で開催されたいくつかの大きな会議にも招待されたが、残念ながら出席できなかった。中国のメディアでは、私が主要人物として登場することはなかったが、それでも時折言及され、徐々に重要人物として認識

されるようになってきているようだった。私はまだ中国に 1 週間以上滞在する機会も、長期的な共同研究の機会も与えられていない。

『都維新聞』の私の記事は幅広い読者を獲得し、私はコメンテーターとしての地位を確立した。しかし、私は中国で著名な外国人になることはなく、大きなお金を稼ぐこともなかった。しかし、2019 年以降、中国向けの執筆活動は下火になり、中国人との交流もほんの一握りとなってしまった。

## アメリカの進歩

2015 年にエール大学とプリンストン大学で画期的な講演を行った後でも、アメリカとの関わりは明らかに制限されていた。私はいくつかの関係を再構築したが、いかなる会議にも招待されず、雇用の可能性に関する問い合わせはフォローアップさえされなかった。私は以前と同じようにブロックされているように見えたが、2001 年にハーバード大学で講演をしたときと同じように、ある約束のために例外が設けられていた。アジア・インスティテュートはソウルのアメリカ大使館と共同でプログラムを実施し、それはかなり成功した。しかし、私は明らかにクラブに歓迎されることはなかった。実際、私はアメリカに戻った 2019 年よりも、2007 年に初めて来日したときのほうがエール大学と良い関係を築いていた。

時間の経過は、アメリカの大学の同僚や家族との関係を、良くするどころか悪化させた。時間が経てば、彼らがいかに私に嘘をつき、私を陥れようとする大規模な犯罪的陰謀に積極的に加担し、私の精神病を冤罪で訴えることに同意したかという辛い記憶も薄らいでいくのは当然のことのように思えるかもしれない。しかし私にとっては、彼らが起こったことについて何も語らない時間が長ければ長いほど、よりグロテスクに感じられた。

私の家族は、私がされたことについての議論を避け続けた。長い年月を経て、私はそれが行き過ぎだと感じ、私に何が起こったのかという問題について議論を開こうとキャンペーンを始めた。この方針は、おそらく国家安全保障の書簡や、私と関わったことで懲役刑や罰金を科すと脅すような文章の結果であろうが、時間の経過とともに耐え難いものとなり、私はこれを終わらせなければならぬと決心した。この原稿を書き始めたのは、この危機に対する家族や同僚の沈黙に対する私の反応でもあった。

私は 2014 年から 2015 年にかけて、これまでの闘いにおいて家族や友人から完全に無視されてきた問題に取り組むため、大規模な真実と和解のキャンペーンを開始した。私の最初の真実キャンペーンは、2004 年に家族と数人の友人に宛てた一連の手紙という形をとった。あまり詳しくは書かなかったが、犯罪の規模ははっきりしていた。

ほとんどの家族はその手紙にまったく返事をせず、私と会っても一切の話し合いを避けた。父は手紙を受け取ったと言ったが、内容について尋

ねたことはなかった。年に一度、父と兄と話をしたことがあるが、その時は私が話の一部を話すのをしばらく聞いてくれた。その時、彼らは私が話の一部を話すのをしばらく聞いてくれた。どうすべきかについても何も言わなかった。私の母は、文字通り、話を聞くことを恐れない唯一の家族であったが、彼女もまた、多くを尋ねることをかなり躊躇していた。

父は何度も会話の中で（本心からそう思っていたわけではないのは確かだが）、私のリソース不足は私が学者になることを選んだ結果だと主張していた。そのような主張は苛立たしかったし、明らかに事実ではなかった。しかし、2016年までには我慢できなくなり、父とは一切会わないことにした。

しかし、私は家族と関わる努力を続けた。継母のジェイミーが、姉のアンナが私の手紙に返事をくれなかったのは、私が彼女の人生に十分な関心を示さなかったからだと言ったとき、私は何時間もかけて彼女の人生について電話で話し、彼女の関心事にできるだけ関心を示した。それは問題ではなかった。彼女は私に起こったことについて、何かをすることで、理解しようとする努力もまったくしなかった。

そして 2017 年、アンナと兄のマイケルが息子のベンジャミンに、私が精神疾患を患っていると言い始めたとき、私はそのようなあからさまに違法で非倫理的な行為にはもうたくさんだった。

精神病の証拠など微塵もないばかりか、私に反論する機会も与えずに、彼らは息子にこのような嘘をついた。事実上、私の家族が陰謀の一部であることは明らかだった。私は彼らに、私に真実を伝える方法を見つけるために16年間も時間を与えたが、彼らは動こうとしなかった。

私にはもう我慢ができなかった。私の家族、友人、同僚は、約20年間、犯罪の陰謀に協力してきた。もし彼らが、私を助けることはできない、あるいは私を弱体化させるために働かなければならないという手紙を出されたとしても、私はそれを容認することができた。必要なのは、彼らが私と一緒に森を散歩し、この事実を私に伝える方法を見つけることだけだった。しかし、彼らは何十年もの間、私に対して明らかに犯罪的で非倫理的な行為を行ってきた。2016年までに、私は歴史的記録のために彼らに正式な要請をし、完全な記録をまとめ始める時が来たと感じた。

2014年から2015年にかけてのキャンペーンは、私が2004年に試みたものよりはるかに大規模なものだった。私は著名な学者やジャーナリスト、ナオミ・クラインやコーネル・ウェストのような著名人に手紙を書き、そこで私に起きたことを説明し、彼らの協力を明確に求めた。はっきりさせておきたいのは、彼らは私の要請を意図的に拒否したということだ。

また、アムネスティ・インターナショナルのようないくつかの団体にも私のケースについて手紙を書いた。私が手紙を出した著名人たちからは、文字通り何の反応もなかった。ナオミ・クラインの場合は、彼女の秘書が「彼女に伝えた」と言っただけだった。彼女は進歩的であるにもかかわらず、私に連絡を取ろうとはしなかった。

また、イリノイ大学の同僚を含む多くの学者たちにも手紙を書き、協力と助言を求めた。約 120 通の手紙のうち、6 人から返事をもらった。その返事は、ある意味真剣なものだったが、いずれも「過去のことは忘れて前に進め」というものだった。その手紙の内容はここには書かないが、私は同僚たちの何事もなかったかのような態度に衝撃を受けた。私が受け取った返事の中で述べられていた議論のばかばかしさは、私の明白な手紙に対する大半の醜い沈黙よりもはるかにましだった。

私に返事をくれた同僚たちは誰も、私がそのような扱いを受けたことに対して何かもらう権利があるのかどうか、またなぜこのような措置が私に対してとられたのかについて話し合おうとはしなかった。

母は何度か正直に話してくれたし、少なくとも話を聞こうと努力してくれていると感じた。夫のポールも何度か話を聞き、率直に話してくれた。しかし、事態の深刻さや問題の重要性（軍国主義にノーと言ったり、気候変動に焦点を当てるよう要求したり）を考えると、この話題を避けるのは間違っていると感じた。また、たとえ不可能に近い状況であっても、5 年、10 年のロビー活動や説得活動によって、事態を好転させることができるとも感じていた。しかし私の母は、私を生んだアメリカのアップー・ミドル・クラスのインテリ層全体とほとんど変わらなかった。母が私を愛していたのと同様に、母もまた嘘の網の目の中にいたのだ。

率直な話ができるアメリカ人の友人は何人かいたし、私を助けようとしてくれた人も何人かいた。エール大学やハーバード大学との関係を深める努力をやめてから、私は二度とアメリカで講演に招かれることはなか



った。また、アジア・インスティテュートや後に脳教育大学を通じて機会を作ることはできたが、2015年以降は日本での講演にも呼ばれなくなった。しかし、日本の学者とのつながりは基本的に断ち切られた。かつて日本の教員が私の人生の中でどれほど中心的な存在であったかを考えると、これは非常に不自然であり、少し悲しかった。

父は2017年1月、ソウルの私たち家族を訪ねてきた。私が訪問を延期するよう要請したにもかかわらず、彼はそうした。父は5年前よりも、何が起きたのか話し合おうとはしなかった。彼は、私や妻や子供たちが直面した困難を理解しようとはしなかった。息子のベンジャミンが抱えていたストレスのことになると、彼はわざわざベンジャミンにセラピストに診てもらうよう勧めたが、彼が苦しんできたことを理解しようとはしなかった。

私はもう限界だった。父は明らかに、私に対する犯罪行為に直面するのを避けるためなら、どんなことでもするつもりだった。問題を解決するための計画はまったくなかった。最終的に、父は私や私の家族に対して、自分の不都合を避けるためなら何でもするのだと感じた。私は彼をまったく信用できなかった。

電話での交流は極めて限られていた。兄のマイケルとも時々話をした。子供たちにとって、何らかの関係を保つことは重要だった。しかし、家族のあからさまな犯罪行為が、以前にも増して私を悩ませた。

私は初めて、家族が私に対して犯罪行為を行っており、そのような行為は直ちにやめるべきだという立場をとった。秘密法や勧告によってそのような行為に及んだという事実は、もはや言い訳にはならなかった。私は一生を大嘘の中で生きるつもりはなかったし、家族が私が学者だからといってお金を持っていないかのように振る舞い、私の非常に現実的な業績をすべて無視するのを見るつもりもなかった。こんな茶番に溺れるくらいなら、（この物語を書くような）リスクを冒し、縁を切ることも厭わなかった。

2018年11月に父から手紙が来て、私の家族についてさまざまな質問をされたとき、私は父に返事を書き、仕事のことは喜んで話すが、イリノイ大学での直属の上司との秘密のやりとりや、私の精神疾患が私の同意なしにさまざまな専門家と話し合われたプロセスに関する質問には答えをほしいと言った。父はまったく答えなかった。私は事態が進みすぎたと判断した。私はやりとりを極限まで減らし、議論を公の場に押し出そうと動いた。

私は、父とやりとりするのは時間の無駄だと考え、次の段階として、全容を公表し、何らかの大きな国民的議論を強いることにした。

私は基本的にアメリカのメディアから締め出され、アメリカのアカデミズムでの活動からも排除されていたが、『フォーリン・ポリシー・イン・フォーカス』への執筆を続け、その記事のいくつかはより広く注目されるようになった。

大きな反響を呼んだのは、ジョン・フェファーとともに『Foreign Policy in Focus』に寄稿した「太平洋のピボットから緑の革命へ」（2012年10月4日付）という記事だった。私たちは、オバマ政権によってゴム印を押された、当時提案されたばかりの軍事的な「アジアへの軸足」を全面的に見直すべきだと主張した。それは気候変動への対応に特化したものだった。私たちは、軍全体が戦争ビジネスから手を引き、世界的な緩和と適応の取り組みに集中するように再編成すべきだとまで言った。この記事は、2012年の初めにノーム・チョムスキーと交わした手紙に触発されたもので、その中で私は、現在の議論と予算を根本的に変えるために、軍隊の役割と「安全保障」という言葉を完全に再定義することができると提案した。チョムスキーは、「まあ、やってみる価値はあるかもしれない」と答えた。

空軍はもはや戦闘機を使わず、大気汚染を食い止めることに専念し、海軍は海洋汚染を食い止めることに専念し、陸軍は土壌の保護に専念する。このコンセプトは極めて斬新で、幅広い読者がいたにもかかわらず、この記事が文字通り第三者から引用されることがなかったのは偶然ではなかったと思う。

私は、2013年3月7日に発行された『Truthout』に「気候について、国防は殺戮と破壊ではなく、保全と保護が可能である」と題したより詳細な記事を掲載した。この記事はさらに多くの読者に届き、より具体的な提案を行った。私はこの記事について、軍や外交の関係者数人から直接連絡を受けた。いくつかの協力案があったが、どれもうまくいかなかった。

幸運なことに、ダニエル・ギャレットという元外交官から親切なメモをもらった。彼は後にアジア・インスティテュートのメンバーとなる。興味深いことに、そして決して偶然ではないのだが、当時太平洋軍司令部のトップだったサミュエル・J・ロックリア3世提督が、私の論文が発表された翌日にハーバード大学とタフツ大学を訪れた。彼はボストン・グローブ紙のインタビューに答え、そこで初めて、軍のトップクラスの将校が地球温暖化について「安全保障環境を麻痺させるようなことが起こる可能性は、おそらく最も高い。

この声明は、アンドリュー・デュイット教授が記録しているように、当時軍内で行われていた、気候変動への有意義な対応の必要性に関する会話を反映したものだ。この声明が出されたタイミングと、その直後にロックリアから軍国主義者のハリー・ハリスに交代したのは、まさに気候変動へのシフトが脅威と認識されたからであり、私が（英語だけでなく、日本語、韓国語、中国語で）書いていたことが、大きな影響を及ぼしていたことを示唆している。

ジョン・フェファーとの共著で)多くの読者を獲得したもう一つの記事は、「アメリカのホームグロウン・テラー」(2014年4月7日、フォーリン・ポリシー・イン・フォーカス)で、私たちはアメリカのインフラの崩壊と、この状況が最終的にアメリカを屈服させる可能性について論じた。

しかし、古典アジア文学に関する2冊の学術書をアメリカの学術出版社から出版しようとしたときに受けた反応は、圧倒的に否定的で、私はあ

きらめた。私は2冊ともソウル大学出版局から出版し、二度とアメリカで本を出版しようとはしなかった。私が米国で本を出版することは、秘密法のために不可能であったと考える理由は十分にあると思う。

韓国でもアメリカでも、私が何かを管理することは許されないだろうし、会社を立ち上げることもできないだろうことは、2014年までには明らかだった。組織を立ち上げるために費やした時間は数え切れないほどだった。アジア・インスティテュートは、時折セミナーを開催する程度で、それ以外の活動はしていない。

執筆は、私が比較的自由であった領域である。ある面では、私は他の多くの人たちよりも自由であった。政治、安全保障、経済に関する私の重要な文章の多くは中央日報、後にはコリア・タイムズで発表された。皮肉なことに、10年間行政官を目指した後、私のニッチは学術論文ではなく、作家であることを知った。

2017年7月以降、『コリア・タイムズ』は私が記事を発表する主な機会となり、事実上、好きなことを書くことを許され、書いた内容に対して幅広い読者の支持を得た。ビクター・チャ前国家安全保障会議アジア部長、ハリー・ハリス前駐韓米国大使、マイク・ポンペオ前国務長官といった人物を取り巻く深遠な腐敗についての私の記事は、彼らによって再編集されることなく掲載された。このような記事がアメリカ、いや、どこの国でも掲載されたとは思えない。

米国の腐敗に関する私の分析は、いわゆる "進歩的" メディアに見られるような、悪者を強調し、物事が実際にどのように機能しているかの分

析を避ける傾向があるものよりも、はるかに体系的なものだった。気候変動の否定を 1940 年代のヨーロッパにおけるホロコーストの否定と比較し、この否定はさらに犯罪的であると主張した：『化石燃料』では、奴隷制度の犯罪性と化石燃料の犯罪性を強力に類推した。

拙稿『アメリカの精神病理学』（2019 年 2 月 2 日）は、共和党と民主党の広範な政治腐敗について述べたもので、まさにアメリカ政府が民主党の弱体化改革をある種の革命として売り込もうとしていた瞬間に掲載された。米国の他の進歩的なメディアはどこもそのような分析をしていなかった。私は正直なところ、これらの記事を可能にするために、かなりの危険を冒して私の仕事を支援した、極めて勇敢で献身的な人々が韓国にいたに違いないと信じている。

その過程で、（前述のような）低レベルの嫌がらせが再び始まった。ソースはわからないが、推測はできる。私は『朝鮮日報』に「アジアにおける米国の新たな役割」（2014 年 1 月 1 日）という記事を書いたが、その中で私は、韓国における米国の役割を根本的に変えなければならないこと、米国の安全保障の焦点が気候変動にないのであれば、米国の役割は持続可能ではないことを強く主張した。韓国の保守系新聞がこの記事を掲載したことは、韓国における私の視点への深い共感を示唆している。

しかし、出版直後から、さまざまなアメリカ人から奇妙なメールが届き、韓国人からもかなり脅迫的なコメントが届いた。そのような経過から、2000 年から 2003 年にかけて私に対して行われたのと同様のキャンペー

ンがまた行われるのではないかと思われた。2016年にトランプが政権を握り、ブッシュ政権下で活動していた極右が政権に復帰した後、嫌がらせはいくらか増えた。トランプが大統領に就任した4年間、私のトランプに対する態度は一進一退を繰り返した。ある時は非常に危険な人物に思え、ある時は反グローバリズムの批判を展開した。

### キョンヒ大学を去る

2017年11月、私とその優れた教育機関を去り、天安にあるほとんど無名の脳教育大学に参加する意向を表明したとき、慶熙大学の多くの人々にとってかなりの衝撃だった。

この未知の大学への転入は、慶熙大学内での長い疎外過程の集大成だった。

創立者の死後、慶熙大学は授業料収入、企業が選んだSSCIジャーナルへの掲載、その他の歪んだ成功の兆候にますます重点を置くようになった。冷酷な企業と化した慶熙大学は、経済学や国際関係学の授業も、真理の追求というよりは、誤ったイデオロギーの洗脳のように見えてきた。気候変動や軍国主義から富の集中、テクノロジーが社会に与える影響に至るまで、重要な問題は授業ではおろか、会議や教授同士の会話でも触れられることはなかった。

私自身は、気候変動や核戦争、そして米国や世界的なファシズム政治がもたらす危険の高まりを目の当たりにし、ますます先鋭化していった。また、そのような脅威に対して他の知識人が沈黙を守っていることに嫌悪感を募らせていた。

ある意味、私は 2004 年から 2006 年にかけて採用した、軍国主義に対するより過激な姿勢に戻りつつあった。韓国の主流派に戻った私の短い時間は終わろうとしていた。しかし、実際のところ、私が本当に主流派に戻ることはできなかった。私はそのような妥協の価値に懐疑的だったし、私の活動を制限する機密指令もあった。

私はもうキョンヒで教えることを楽しめなかったし、学科長が気候変動に関する私のコースを閉鎖しようとしたときには、もうたくさんだった。私は学部長と教授会で、気候変動、社会における知識人の役割、教授の評価方法といった重大な問題を提起した。私は、そのような問題について話し合う会合を持つべきだと提案した。学部長はそのような会議の開催を拒否し、他の教員も沈黙した。

私は 2016 年から韓国で他の教職を探し始め、研究ができる比較的無名の教育機関を狙った。しかし、何度努力しても、1 つも職を見つけることができなかった。最終的に私にポジションを提供してくれる機関は、脳教育大学しかなかった。

脳教育大学は、調停師であり精神的指導者であった李日智によって設立された。思慮深く、しかし複雑な人物であったイルチ・リーは、その発



言が韓国のキリスト教の重要な原則に反するものであったため、キリスト教徒から常に攻撃を受けていた。仏教徒にもそれほど人気があったわけではない。彼はシンクレティックなアプローチを通して社会の精神性を高めることに深くコミットし、非常に勤勉で創造的であった。

私は彼のアプローチや方法論に完全に同意したわけではなかったが、彼は私の指導や仕事において、気候変動と環境に全面的に焦点を当てる機会を与えてくれた。

李日出夫は、私と気候変動に関する私の仕事、そしてそれに対して世界中の人々を動員しようとする私の努力を支援してくれた。彼は私の著作を高く評価し、私に正教授の地位と同等の給与、そして最も重要なこととして、活動的なコミュニティにおける実際の地位を与えてくれた。私を雇いたいと思っている大学や組織が他になかっただけでなく、脳教育大学を支えるより大きな組織であるダーン・ワールドには、他ではなかなか見つけることのできない活力と良識があると私は思うようになっていた。そのチャンスは実際にあったのだが、物事はそう簡単には運ばなかった。おそらく、右翼勢力による水面下での妨害が原因だろう。

李日出主席とは 2015 年に知り合った。彼が私を国学院大学に招き、拙著『**韓国人が知らない大韓民国**』について講演してくれたのだ。彼はすぐに私に仕事を依頼した。それは韓国ではほとんどなかったことだった。私は彼が言ったことを忘れなかった。

私は結婚直前の 1997 年にダーンワールドでヨガを練習し、その時のプログラムに感銘を受けた。さらに、私の講演の後、ソウルの景福宮センターで再び練習を始めたが、そのエクササイズは私にとって非常に役立つものだった。妻も運動を再開し、しばらくは私以上に熱心に取り組んでいた。

2018 年 3 月から脳教育大学で教鞭を執るようになり、学生たちとは非常に良好な関係を築くことができました。私は大学院で教鞭をとり、初めて自分の大学院生と一緒に仕事をする機会を得た。このような学生を韓国の主流大学の教職に就かせるのは難しいだろうと自覚していましたが、市民教育プログラムの提案は数多くあり、私には大きな魅力がありました。

さまざまなトピック（特に気候変動）について執筆したり講演したりするために、学校内で幅広いサポートを受け、キョンヒにいたときよりもずっと居心地がよかった。しかし、精神的な悟りや運動、瞑想は必ずしも私の最優先事項ではなかったもので、必ずしも完璧にマッチしていたわけではなかった。私には気候変動や国際関係に関する明確な目標があり、たとえ健康を害してでも（肉体的暴力や長期にわたる嫌がらせ、劣悪な生活環境など）、それを追求すべきだと思った。

問題は、米国の過激派政権が復活したことだった。世界は急速に制御不能に陥っていた。

戦争犯罪人のハリー・ハリスが大使に任命された後) アメリカ大使館の行事に招かれなくなっただけでなく、アメリカの外交官と話すことも楽しめなくなった。

さらに、韓国の主流派と話をするのが難しくなってきた。私との協力関係を断念したさまざまな中道的な人物や団体のリストは省くが、その数はかなりのものだった。同時に、私自身の口調も鋭くなり、妥協する気持ちも薄れていった。

そのストレスは私と妻の健康に影響を与えた。経済的、政治的負担は相当なものだったが、身を挺する以外に選択肢はないように思えた。

私はその後、2017年に『大韓民国』という、テクノロジーと韓国の課題について明確に語った本を書き、成功を収めた。その直後、私は許在賢(ホ・ジェヒョン)記者と韓国の統一に関する本の執筆に取り掛かった。また、2019年2月からはYouTubeの放送番組も始めました。最後に、私は再び米国での雇用機会を調査すべきだと決心した。

## 第 7 章

## ワシントンへ、そして韓国へ

2019年8月、私は家族全員と暮らすためにアメリカに戻った。妻と子供たちは12年前からアメリカへの移住を希望しており、この移住には多少のリスクはあると思ったが、ソウルにすることが最近遭遇した問題を必ずしも改善するとは思えなかった。

私には、韓国、日本、そして米国に、アジア・パートナーズというコンサルティング会社を立ち上げるために協力してくれた友人たちがいた。2018年8月に日本語で本を出版したことで、15年以上ぶりに日本の幅広い読者を得ることができた。2019年2月にDCを訪問した際、私が受けた歓迎は非常に温かく、久しぶりに何かチャンスがあるかもしれないと確信した。

しかし、韓国では中央日報の寄稿者ではなくなり、収入源となっていたさまざまな講演も途絶えてしまった。また、私の将来は韓国だけにとどまらず、日本や中国にも仕事を広げていこうと考えるようになっていた。ここ数年の日本や中国の動向は、私をこのような解釈へと導いたが、それは結局間違いだった。

私は、韓国の人々が私に就職を斡旋し、私を助けようとしてくれたことに深く感謝している。盧武鉉の周りの進歩的な人々の努力にも感動した。しかし、2019年の群衆はまったく違っていた。文政権は（私が韓国にと

って最大の脅威だと信じていた) 気候変動に関する真剣な議論に意図的に反対し、彼らが受け入れてきた米国の政治に疑問を呈する私のような人たちを嫌っていた。さらに、日本の新世代の進歩主義者たちは、私に深い印象を与えた。そして中国は、その停滞ぶりとは裏腹に、韓国や日本を上回る規模で気候変動に取り組み、グローバル・ガバナンスに関する本格的な議論を行っていた。

気候危機は私の考えを転換させる決定的な出来事だった。2018年末、英国で気候変動に対する効果的な抗議活動を行っていたアグレッシブなNGO「Extinction Rebellion」の共同設立者の一人であるロジャー・ハラムのインタビューをインターネットで偶然目にした。

私は彼の立場に共感し、韓国の支持者の多くが私に望んでいることではなかったが、気候変動に関するある種の直接行動に参加することは私の天職だと感じた。フェイスブックで何度かメッセージを送った後、私はロジャーと連絡を取ることに成功し、幅広い視聴者に向けて放送されたロング・インタビューを行った。私は韓国で「絶滅の反乱」と緊密に協力するようになり、彼らのために光化門広場で何度か抗議行動を組織した。私は、絶滅の反乱に何か自分のキャリアが隠されているのではないかと思いはじめた。ある意味、彼らとの仕事は戦略的に賢い行動ではなかった。

私の仕事に熱中していたエクティンクション・リベリオンは、私から手を引き、文字通り何の支援もしてくれなくなった。私はもはや彼らの仲間に接触することはできなかった。あまりに頻繁に起きていたことだが、彼らは私と仕事をするのを許されなかったのだろう。

韓国だけでなく、日本、ベトナム、中国にいる多くの友人が、アメリカでチャンスを探すべきだと勧めてくれた。私は、より良いポジションでアジアに戻るには、米国で数年過ごすのがベストかもしれないと考え始めた。トランプの混乱は、私に真のチャンスを与えてくれるかもしれないと思った。

私たちは2019年8月、ワシントンDCに行けるメトロからほど近いバージニア州マクリーンに家を借りた。妻がそこを選んだ理由は学区だった。私たちはアメリカで家族として再会した。旧友たちとのミーティングを重ね、数週間のうちに可能性のある仕事の手がかりをつかんだ。しかし、それは賭けだった。人の韓国人からもらったお金や中国で出版した本の収益、そして日本からの支援もあったが、決して多くはなかった。

妻は到着直後から何度も深刻な精神崩壊に見舞われ、韓国でシャーマンと話をしていた時期もあった。シャーマンは妻を脅迫してお金を出させようと不吉な話を聞かせたようだ。彼女は1カ月間、彼らの話のせいで私たちが毒を盛られているのではないかと怯えていた。彼女はすべての食べ物を捨て、ある種類のボトル入りの水しか飲まなかった。このような隠された脅迫が彼女を苦しめ、彼女は倒れて入院しなければならなかった。その背後に誰がいたのかはわからない。

とはいえ、それはシャーマンのことではなかった。妻は、私たちが直面しているとてつもない重圧に耐えられなかっただけなのだ。

しかし、2019 年末の状況は良い方向に向かっているようだった。アジア・インスティテュートのセミナーは 3 回開催され、そのうちの 3 回目には大手シンクタンクのイベントに匹敵するほどの聴衆が集まった。

イ・スヒョク韓国大使は、私を韓国大使館で再び雇用することに興味を示してくれた。私は洪錫仁（ホン・ソクイン）外交部公使に何度も会い、2020 年 1 月から勤務することを秘書官とともに確認した。

また、別の友人がソウルからワシントンに来て、私の新しいポジションについて話し合い、私が具体的に何をするのかを記した報告書を求めてきた。私は彼に 6 ページの報告書を提出したが、それは見事に却下された。

COVID-19 の作戦が開始された 12 月末から、すべてが崩れ始めた。私が 2020 年にワシントン D.C. から放り出されたのは、まさにグローバリストのアジェンダに反対する組織作りができる人物を彼らが必要としなかったからであることは、いまや疑いない。

2019 年 12 月以降、ワシントン DC の環境が人を寄せ付けなくなっても、私は記事を書き続け、人に会い、仕事（翻訳や編集でも）を探し、東アジアにおける米国の役割について前向きなビジョンを明確にし、またワシントン DC でガバナンスをどのように回復できるかを伝えようとした。日本の軍人から米国のロビイストや政府高官まで、幅広い人々が私と一緒に仕事をしたいと思ってくれていたようだ。しかし、支払いの面では



もうほとんど何もなかった。韓国大使館や韓国経済研究院からのチャンスは完全に途絶えた。

2020年1月までに、私は文字通りまったく収入がなくなり、クレジットカードで借金をせざるを得なくなった。スンウンの情緒不安定も手伝って、彼女は私の知らないうちにさらに借金を増やした。

兄も、父も、母も、従兄弟のマニーも、私の状況を十分に理解していた。私は兄のマイケルと従兄弟のマニーと数時間話し、何が起きているのかを説明した。彼らは耳を傾けてはくれたが、意見やサポートは何もしてくれなかった。

アジア研究所の進展も少しあった。私たちは非常に成功したセミナーを開催し、注目を集めた。アンドリュー・ハイドは、韓国から重要人物を招いたいくつかのイベントの企画を手伝ってくれた。シンクタンク、アジア・ポリシー・ポイントのディレクターであるミンディ・コトラーは、私たちが彼らのオフィスを共有し、一緒にイベントを開催することを許可してくれた。

友人や家族の無知を装うことに対する私の寛容さは、2001年当時とは違っていた。私たちは今、この闘いの中で20年を歩んでおり、彼らが何が起きたのか、何が起きているのかを話し合おうとしないことが許せなかった。

2020年2月の初めには借金が山積みになり、どこにも支払い先が見つからなかった。私はソウルと東京での講演(2月18日~27日)に招かれ、

旅券を持っていた。すでに COVID-19 の検疫に関する不吉な議論がなされており、私には世界大戦の勃発を示唆するものだった。

2月12日頃、兄のマイケルにコーヒーを飲みに誘われた。彼は私に、アメリカでは働けないから韓国に帰って仕事を探すべきだと言った。彼はまた、私の子供たち、レイチェルとベンジャミンが当分の間、彼と一緒に暮らせるとも言った。

奇妙な話し合いだった。私がアメリカで仕事を見つける必要があるのではなく、すぐに出国しなければならないという前提だった。正直なアドバイスではなく、政治的な命令のように聞こえた。私は彼に、アジア旅行の間にこの件を真剣に検討すると伝えた。

もし兄がそんな意味不明なことを私に言うのなら、ワシントンの政治環境がそれほど深刻で危険なものであることを示唆している。私は彼を真剣に受け止め、非常に不愉快な状況の変化に備えなければならないと思った。

上海で予定していた講演はキャンセルになった。韓国語で新著を紹介する講演のためにソウルに到着したが、そのイベントは前日に「COVID-19」のためにキャンセルされた。数人の友人に会い、事態がどれほど深刻かを説明した。

私は東京に行き、日本の若者たちに環境政策に関する講演を問題なく行うことができた。日本はアメリカや韓国よりも少し自由な感じがした。

渋谷の安いホテルに泊まっていたとき、何人かの日本人の友人や日本の外交官に会った。

日本での就職の可能性について聞いて回ったが、前向きな返事はなかった。

2020年2月22日にワシントン D.C.に戻る予定だったが、アメリカには就職口がまったくなく、日本にも就職口がないため、そのフライトをキャンセルして、残りのお金でソウルに戻ることにした。

私には韓国の伝統文化に深い関心を寄せている友人のナ・ヨン Chol がいて、何年もの間、何度も魅力的な討論会に私を招待してくれた。その時、韓国で私を助けてくれるのは彼だけだった。彼は空港まで迎えに来てくれ、ソウルの北、平倉洞（ピョンチャンドン）の丘の上にある邸宅のガレージに併設された部屋まで車で送ってくれた。その部屋は韓国のシャーマン（男性）が所有する小さなアパートの隣にあり、必要なだけ滞在していいと約束してくれた。部屋は寒く、暖まるのに時間がかかった。バスルームは凍てつくような門をくぐって隣にあり、炊事もできず、周りに店もなかった。

しかし、この界限はとても快適で、私は駅までの30分の道を楽しむようになった。2001年に匹敵する規模になりつつある、この新たな危機について考えるために、一人の時間が必要だったのだ。

その後、子供たちや兄との会話を通して、ワシントン D.C.に戻った私の家族に起こった災害について学んだ。

私たちはクレジットカードで2万ドルの借金をし、妻は精神的に混乱し、お金を使い続けた。兄は妻が苦しむのをいいことに、(妻に精神的な助けを求めるのではなく)すぐに家を出なければ警察を呼ぶと脅した。

マイケルはレイチェルとベンジャミンを引き取ったが、自分の家で母親に会わせることは拒否した。結局、マイケルは一連の脅迫によって、彼女の意思に反して韓国に戻るよう強要した。言うまでもなく、マイケルは何が本当に起こっているのか、そしてなぜCOVID-19の始まりに突然、私が国外に放り出されたのかについて話し合おうとはしなかった。

韓国では、お金も財産もなく、一人で過ごす時間が新鮮だった。追放されたことで得た清々しさは、私にある種の明晰さと自信を与えてくれた。仕事を探しながら韓国人と何度か会話をすると、私の話はすでによく知られていることがわかった。

ナ・ヨンチョルが手配してくれたいくつかの講演でお金を稼ぐことができ、そのお金をアメリカに送金した。

しかし、それはあまり役に立たなかった。妻は家を出る前に掃除もできないほど機能不全に陥っており、彼女の行動によって私たちは3カ月分の家賃を支払うことになった。結局、妻は何でもかんでもクレジットカードに請求し、私たちは借金を増やしていった。

子供たちは、チェビーチェイスの裕福な地域にある兄の広い家にホームステイした。私はこの解決策がまったく好きではなかったが、私にはお金がなかったし、子供たちは韓国に来たがらなかった。

しかし、私としては、この状況は非常に危険だと感じたので、彼らを見守るためにも一緒にいてほしいと思った。韓国が安全だとは思っていなかったが、アメリカで起きている制度崩壊を考えれば、少なくとも韓国で安定を得るチャンスはあるだろうと思ったのだ。

妻は2021年3月にソウルに到着した。脅しと脅迫で彼女を国外に追いやろうとした私の兄によって、彼女は無理やり飛行機に乗せられたのだ。彼女は疲れ果て、体調を崩しながら韓国に到着した。仕事もなく、健康保険もなく、誰も正直に状況を話してくれる人はいなかった。

また、彼女はずいぶん変わっていて、コミュニケーションをとるのが難しいと感じた。

彼女がトラウマから立ち直るまで、祈りや瞑想ができるお寺の僧侶たちのところに滞在するのが最善の解決策だと思われた。仏教は以前にも彼女に効いたことがあった。彼女が親しくしていた僧侶は、彼女と一緒に滞在するのは難しいと言ったが、私は南部にある全羅南道の木浦（モッポ）近くにある密王寺（ミファンサ）で、彼女と私のためのスペースを確保することができた。周りのほとんどの人たちとは対照的に、住職は私たちが望む限りそこにいていいと言ってくれた。

翌日、私たちは木浦行きの列車に乗ることになっていた。スンウンに会いに行くと、彼女は行きたくないと言った。スンウンは母親の家に残ると言った。家族の助けがなければ、治療のために病院に連れて行くこともできない。どうしたらいいのかわからなかった私は、まずひとりでミ

ワンサ寺院に行き、後で彼女が合流するのを待つことにした。彼女は電話ですぐに来ると言った。それから2度ソウルに行き、彼女を説得した。しかし結局、彼女は来なかった。

私はその寺に1ヵ月以上滞在した。その間、私は大統領選挙のためのスピーチや現代問題に関する記事を書き続け、早朝と夕方のお寺のミサに出席した。また、住職と将来の仕事についての考えを話し合った。そして何よりも重要だったのは、新しい環境に合わせて自分自身を再構築することに時間を費やしたことだ。

私は何も持っていなかったから、同じようにすべての財産を放棄した僧侶たちに囲まれていることは助けになった。寺にいることは、政治的な問題を抱えた人物がしばしば寺に身を寄せるという韓国の文化とも呼応していた。この寺は、1590年代に李舜臣将軍が日本の侵略と勇敢に戦った珍島(チンド)に近かった。滞在中の珍島への短い旅は私に深いインスピレーションを与え、李舜臣についてさらに読み始めた。

何人かの友人が、ソウルに戻ればまたチャンスがあると言ってくれた。私は何年も亡命生活を送るのだろうと思っていたが、彼らはより説得力を増してきた。シャーマンでもある韓国人の友人が、4月から2週間、ソウルのアパートに滞在できるよう手配してくれた。私は戻ることを決めた。

それから1年間、私は9回引っ越した。時には数週間住まわせてもらった部屋を行き来し、時には下宿の安い部屋を行き来した。生活はかなり

不安定で不確実だったが、ある種の自由もあった。妻は私と話すことを拒んだ。子供たちは話しかけてくれたが、遠く離れていて、私にできることはほとんどなかった。私の持ち物（いくつかは兄がアメリカから送ってくれたもので、いくつかは私が脳教育大学で使っていた古いオフィスにあったものだ）はすべて倉庫にしまった。

しばらくの間、妻は母親と同居し、安定しているように見えたが、5月に入ってから、妻は友人や家族に理不尽なメッセージを送るようになり、家族にとっては非常に傷つき、面目を失うものだった。

治療のために精神病院に入院させるのは容易なことではなかった。何度かの試行錯誤の末、ようやく入院が許可され、治療のために合計6カ月をそこで過ごすことになった。

間違いなく、彼女の病状は、彼女が受けていた多大なストレスによって誘発された部分があった。彼女は回復し、退院して母親と暮らし始め、その後3ヶ月間私と暮らしたが、私たちの関係は永久に変わってしまった。

月になって、私はこのまったく不安定な世界で新たな安定を手に入れた。友人のチェ・ジェジョンが、未来都市環境研究所という研究機関に就職させてくれたのだ。この仕事は他の仕事と組み合わせて、教授と同等の給料（手当なし）を提示してくれた。

私がそのポジションに就けるよう、裏では他の多くの人たちが懸命に働きかけていたのだろう。私が望んでいたような仕事ではなかったし、仕

事内容も私の関心とはかけ離れていることが多かったが、自分の仕事もこなせるだけの時間はあったし、待遇も良かった。

ようやく収入も出てきて、クレジットカードの借金をすべて返済することができ、年末には貯金も始めた。

しかし、妻の入院費は相当なもので、家族は何もしてくれなかった。

## 大統領候補、そしてその先へ

選挙に立候補すること、さらには上院議員や大統領に立候補することは、何年もの間、私の頭の中にあった。初めて公職に立候補しようと思ったのは 1999 年のことだった。イリノイ州で最初に興味を持ったのは、外交ではなく政治だった。

2020 年 1 月に COVID-19 のファシズムとアメリカの制度の崩壊を見たとき、私はリスクがあまりにも高いので、大統領選に挑戦したほうがいいと思った。

さらに、2020 年 1 月から始まった私への明らかな政治的迫害を考えると、大統領選に出馬することが唯一の救いかもしれない--周囲から十分な注目を集めることができれば、という思いもあった。



もちろん、民主党や共和党のような犯罪シンジケートを通してアメリカの政界に進出するチャンスはなかったが、候補者として十分な注目を浴び、入念に練られたスピーチを行い、他の候補者ができないような正直な提案をすることができれば、機密扱いで活動が制限されているにもかかわらず、アメリカ、そして世界中で自分の存在をアピールできると考えた。

また、もし権力者たちが私の選挙運動を不当に妨害するようなことをすれば、彼の善意と献身以外の何ものでもない人物に対する作戦が裏目に出てしまうだろうとも思った。

この計画は部分的に成功した。

私は選挙戦のためのスピーチの草稿と朗読に何時間も費やした。私が唯一の真剣な大統領候補であることに疑いの余地はなかった。

私は 2017 年にハフィントンポストに寄稿した記事で、フェイスブックの社長候補であることを宣言していた。そのユーモラスな記事は、フェイスブックは企業ではなく民主共和国として運営されるべきであり、フェイスブックは企業の CEO のものではなく、むしろユーザーのものであることを示唆していた。

私はまだワシントンにいた 2 月初旬に、17 の綱領からなる綱領とともに最初の大統領立候補宣言を書いた。2020 年 2 月 17 日に韓国へ出発する数日前に、そのバージョンをワシントン D.C. の友人たちに送った。

その後、最初のスピーチを推敲し、韓国で Medium に立候補宣言を発表した（2020年2月23日）。

韓国での数週間後、私はようやく生活するのに十分な収入を得るための講演をいくつか行えるようになった。ナ・ヨンチョルを含む小さなグループが、私が無所属でアメリカ大統領選に出馬する可能性に大きな関心を寄せてくれた。韓国）民主党の長期的な政治家であるムン・イルソクは、人気サイト『Break News』に掲載された一連の記事やビデオを通じて、私の大統領選の綱領を英語と韓国語で韓国人に紹介するよう手配してくれた。朴大錫（パク・デソク）記者も私に長いインタビューを行った。

この取材は、私が待ち望んでいた大きな突破口となり、私は数カ月間、実際の知名度を得ることができた。

このインタビューは2020年4月7日に英語と韓国語で掲載された。この投稿は韓国で大きな反響を呼んだ。

その後2年間は、記事や本を書くこととは対照的に、スピーチを入念に練り上げ、ビデオとして発表することが私の主な活動となった。スピーチのたびに何度も原稿を書き、自分自身で声に出して読み、言葉を整えた。

私はスピーチのたびにビデオを録画し、時には何度も編集し、YouTube にアップして多くの聴衆に見てもらった。YouTube の視聴回数はスピーチ1回につき50~60回だが、これは明らかにそれ以上だ。

スピーチは、洗練され、刺激的で、現在の危機を理解しようとするアメリカの庶民にとってわかりやすいものにしたかった。

フレデリック・ダグラスやエイブラハム・リンカーン、ロバート・ケネディ、マーティン・ルーサー・キングのように語りたと思った。時間的な制約があり、他の人たちから完全に孤立していたが、ビジョン、レトリック、実際の政策への注意を効果的に組み合わせることに成功したと思う。

アメリカのメディアに取り上げてもらうことは不可能だったし、現地の団体に招かれて演説することもなかった。しかし、グーグルで検索すると、私のスピーチのほとんどが表示され、私を書いたものを読んだ人たちから多くのメモをもらった。

例えば、9.11 事件の科学的調査を私の綱領で呼びかけたことも、COVID 19 についてのインチキなシナリオを信じないことと同様に、私を他のどの候補者とも一線を画していた。もし選挙で正当な大統領が誕生しなければ（そうなるであろうが）、私は誰よりも大統領になる資格がある。

もし米国がさらに深刻な制度的崩壊状態に陥るようなことがあれば、私が立候補を表明することで、一部の人々の目には私が指導者に映るかもしれないと考えたのだ。最初にどれだけの人が私を支持してくれたかは問題ではなかった。

外交官のチャス・フリーマンが運営するディスカッションサイト『サロン』に、友人が私の出馬宣言の原文を投稿してくれた。間違いなく、多くの政府高官や D.C. の政策立案者に読まれたことだろう。

ナ・ヨンチョルは、2020 年 4 月以降の選挙運動を手伝ってくれる韓国内のさまざまな人々を紹介してくれた。5 月までにかかなりの数の支援者が集まったが、そのほとんどは 7 月以降に姿を消すことになる。

私のチームになる予定だった 8 人と夕食を共にした。言うまでもなく、それは実現しなかった。出る杭は打たれるし、ほとんどの人が逃げ出した。

しかし、そのうちの一人、イ・チュニョンは何年も忠実で、私の収入に少し貢献してくれた。

その後 1 ヶ月の間に、他のニュースソースで私について言及した記事がいくつかあった。その中で、聯合ニュースの短い記事が最も広く読まれた。

私は 6 月 8 日、ソウルのアメリカ大使館前で熱弁をふるい、いくつかのブログで紹介された。

私のソウルでの選挙戦のハイライトは、6 月 15 日にソウル外国特派員クラブで行われた正式な出馬宣言だった。立候補表明のためにあの場所を確保するのは容易なことではなく、その努力が高いレベルで支持されたことは疑いない。

李芙蓉（イ・ブヨン）前国会議長が演説の前に私を紹介してくれた。私は説得力のある、献身的な声を出すことに全力を尽くした。少し声が高いが、成功だったと思う。時間をかければ上達すると思います。

スピーチの後、私は元内務大臣を含む錚々たるパネリストとともに政策について議論した。

私たちはこのイベントのためにポスターを作り、私の後ろの壁に貼った："アメリカを再びグリーンに"、"アメリカを初めて偉大に"、"真実を追求し、自由を守る"。

これらのスピーチをもとに、私は8月に『I Shall Fear No Evil: Why we Need a Truly Independent Presidential Candidate』という本を出版した。この本は9月にオンライン出版社からPDF形式で発売された。友人の協力を得て、米国内でこの本を高く評価してくれそうな人たちに150部ほど送った。

友人が経営する小さな出版社が、私の費用負担で私の本の韓国語訳を出版することに同意した。私はその本を、私を支援してくれそうな人たちに何百部も贈った。

また、駐韓メキシコ大使の協力を得て、この本をスペイン語に翻訳し、メキシコで出版することもできた。メキシコのオブラドール大統領は3か月間、私のキャンペーンに個人的な関心を寄せてくれたようだ。

2020年7月には中国語とベトナム語への翻訳も発注した。

ベトナム人は数カ月間、私にかなりの関心を寄せてくれた。実際、私が大手新聞の取材を受けたのはベトナムだけだった。

2020年11月に英語版を出版できるだけの資金ができたとき、私はアメリカの著名な人々、つまり、この大義に関心を持ってくれるだろうと確信していた人々に80部を送った。本を受け取ったことを認めた人はほとんどいなかった。

以前、私が研究を手伝っていたフランスの大学院生、リヤドは、私のスピーチのひとつを、そしてその後すべてのスピーチを、完璧なフランス語に翻訳するボランティアをしてくれた。それ以上に彼は、私の選挙運動用の洗練されたウェブサイト（[www.emanuelprez.com](http://www.emanuelprez.com)）の開発を手伝ってくれた。さらに、そのサイトに追加するデザインをする人や、私の演説を他の言語に翻訳してくれる人まで探してくれた。

私は、今や世界的な広がりを見せるこのキャンペーンが私を左右するだろうと考え、なけなしの資金を払ってドイツ語、トルコ語、ヘブライ語、ペルシャ語、ルーマニア語、ポーランド語、韓国語、日本語、ベトナム語、フランス語に翻訳してもらった。最終的には、特定の国の懸念に対処するためにカスタマイズした序文を38カ国語に翻訳してもらった。

他に類を見ないキャンペーンだった。どれだけの人が私のスピーチを読んだかは分からないが、相当な数だったことは間違いない。

韓国在住中の私の米国大統領選挙運動は、2021年7月から韓国の国内政治に巻き込まれることになった。ワクチン、5G、軍国主義に抗議する韓国人のグループに偶然出会い、私はすぐに彼らの活動に参加した。

私は韓国でこのようなグループを見たことがなかったので、韓国人はこのような分析ができないほどナイーブではないと思っていた。しかし、後にパンデミック調査委員会と呼ばれるこのグループには、聡明な思想家たちがいた。

そのうちの一人である "真実の音楽家" ゼノ・シンが、COVID-19 作戦について私にインタビューし、私は起こっているシフトの背後にある地政学的要因について短いプレゼンテーションを行った。

シンはこのビデオを細心の注意を払って編集し、すぐにユーチューブで拡散した。すぐに削除され、再投稿され、また削除された。ビデオの一部とそのトランスクリプトは非常に多くのブログに投稿され、現在でも簡単に見つけることができる。

当時、韓国語では COVID-19 についてそのような地政学的、経済的な分析をする声はなかった。

この動画が投稿された数日後、政治家たちは私を文在寅政権に批判的な右翼オタクだと攻撃した。何人かの人があるような投稿について教えてくれたが、すぐに消えてしまい、私はそのような投稿を見ることはなかった。

はっきりしていたのは、階級問題に焦点を当てた私の批評が、保守派やキリスト教グループから最も強い支持を得たということだ。その結果、大邱で開かれた朴槿恵支持者の集まりに招かれ、ワクチンを糾弾するスピーチをするなど、思いがけない交友関係も生まれた。

アメリカの選挙は、私にとって何も決めませんでした。その直後、私は『I Love a Good Puppet Show』と題したスピーチを行い、1月に公正な選挙を行うよう呼びかけ、トランプもバイデンも大統領にふさわしくない理由を具体的に説明した。つまり、私は選挙結果を認めなかったのだ。

その演説に続き、2021年1月20日の大統領就任式でも、私は国際金融と超富裕層によるワシントンD.C.の占拠を非難し、バイデンのどちらも正当な大統領とは認めないと明言した。このような文章は、当初は無視されたが、後にトランプ支持者を含む幅広い読者を獲得した。

2021年初頭から、私の詳細な「ドナルド・トランプ擁護論」を皮切りに、私の記事の多くが、オルタナティブ・ニュースのリーダーとして名声を博していた勇敢で激しい批判的なブログ「グローバル・リサーチ」で紹介された。このブログは1年間、私の大統領選挙サイトに加えて、世界とコミュニケーションをとる主要な手段となった。

韓国でのコビッド19ワクチン体制に反対する活動家たちとの活動は、私の英語での著作と相まって、また違ったものではあったが、私に新たな読者を与えてくれた。2020年3月のキャンペーンで私を支持してくれ



た人々の多くは、COVID-19 が私のメッセージの中心になるにつれて離れていった。

ワシントン DC はおろか、韓国でも話せる友人の数は激減した。ほとんどの教授や公務員は、私の E メールや電話にさえ答えてくれなかった。2001 年に戻ったような気分だった。

私は 2020 年 12 月、パンデミック調査委員会の友人を通じて禹碧松（ウ・ビョクソン）という興味深い人物と知り合った。彼は約半年間、私と密接に協力してくれたが、その後忽然と姿を消した。彼は政治の天才ではなく、ある種の明確な限界を持っていたが、私のアメリカ大統領選挙運動を超えて、韓国で何かを軌道に乗せる手助けをしたいという真摯な思いを持っていた。

以前、韓国で政党を作ろうと友人たちと話し合ったことがあり、2020 年 10 月に「革命党」を作るというロゴまで作っていた。しかし、それは単なる構想に過ぎなかった。

しかし、禹秉松（ウ・ビョクソン）の協力を得て、私たちは COVID-19 の指令に反対する真の政党を作るためにグループを集め始めた。私は私たちがここまで到達したことに驚いた。

私たちは力強い演説や宣言文を一緒に作り、魅力的なウェブサイトをデザインした。党名は、「革命的」という言葉にアレルギーを持つ人々を喜ばせるために、「より良い党」（Deo naeun dang）に変更した。

しかし、2021年2月以降、この素晴らしいアイデアに暗雲が立ち込めた。政党登録の第一段階を突破するためには300人のサポーター登録が必要だったにもかかわらず、約60人しか集まらなかったのだ。これでは意味がない。私たちは標的にされ、貶められようとしているのだと感じた。

このような経験は初めてではなかった。しかし、組織的な進歩がないのであれば、穏健派を喜ばせるために時間を浪費したくはなかった。2021年3月、ウーが突然姿を消した。私はアメリカでの選挙活動に戻り、英語でスピーチを書いた。

しかし、私と同じような考えを持ち、会うべきだと多くの人が考えているもう一人の韓国人のことは聞いていた。COVID-19に対する土曜日の抗議行動には行ったが、2021年6月末まで彼に会うことはできなかった。

彼の名前はチェ・ソンニョンで、2018年に韓国で「カーン共産党」を立ち上げ、大きな論争を巻き起こした。実際には大きな政治的危機ではなかったが、様々な右派の政治評論家たちが彼を攻撃して大いに楽しんだ。

会ってみると、表面的な共通点はあるものの、私たちには多くの共通点があることがわかった。彼もまた、行動、真の制度構築、革命にコミットしていた。私同様、彼も自由な意見交換に前向きで、私たちは新政党立ち上げの計画を簡単に思いつくことができた。

崔は革命党という名称を受け入れたが、すでに「革命党」という言葉を採用している他の右翼団体と区別するために、「国際」を前につけることを提案した。私は快諾した。

数週間のうちに、私たちは多くのビデオやスピーチ、政策発表を制作し、かなりのファンを集めるようになった。アプローチはまったく違った。私たちは大韓民国政府の正当性をまったく認めず、いかなるものにも登録する気はなかった。これは私たちに大きな自由を与え、最も賢明な行動だったと思う。党の中核は私たち 2 人で、後に朴景浩が加わり、韓国における大規模な犯罪への真の対応にずっと取り組んでいた。

2021 年 5 月 25 日、私は韓国で私自身を大統領代行とする米国臨時政府を発足させると宣言し、米国での選挙運動は大きく展開した。この構想は、私がワシントン D.C. からソウルに向かうことを余儀なくされたときから頭の中にあったものだが、今回は一連の演説を通じて、私の明確な立場とした。

私は 6 月までに USPROVGOV.ASIA のウェブサイトを立ち上げ、そこから世界に向けて数々の政策決定を発表した。グローバル・リサーチは私の臨時政府案を公表し、USPROVGOV が公表したスピーチの情報源として引用した。

結局、私は大統領選挙よりも臨時政府の執筆に力を入れることになったが、両方を同時に続けるべきだと感じていた。米国が全体主義的な霧の中に深く入っていくにつれ、私は臨時政府が唯一の選択肢であると感じ、私を浮揚させるために十分な数の人々が共感してくれるだろうと推測した。

私は大統領選挙キャンペーンのためにスピーチを書くのではなく、USPROGGOV のためにスピーチを書き、それをサイトに掲載するようになった。私が臨時政府の大統領代行でないとは誰も言わなかったし、やめろとも言われなかった。

私としては、この USPROVGOV を真剣に受け止めたが、幅広い支持を得なければ真剣に受け止められないこともわかっていた。しかし、広範な支持とは何を意味するのかは明確ではなかった。2001年の私の活動の場合、直接的な評価を受けることはまったくなかった。

ソウルでの生活はますます困難になっていった。より抑圧的で、人々はマスクをつけ、公然とワクチン体制を受け入れていた。私は田舎に消えて、数年間、農家からの施しだけで生きていくシナリオを想像し始めた。

このシナリオは次第に鮮明となり、2021年6月から2022年1月にかけての私の戦略の基礎となった。

私は2022年5月から妻と同居を始め、比較的成功した。しかし、世界で起きていることに対する私たちの視点は、単純に橋渡しすることは不可能だった。しかし、何かを解決することは可能だと感じた。

しかし、要因は他にもあった。

2021年7月、私は何の前触れもなく研究所の仕事を解雇されたと知らされた。私は収入源がなく、この努力について話してくれる人はほとんどいなかった。翻訳の仕事の可能性を2つ提示されたが、直前になって突然キャンセルされた。

私は妻に、田舎に行き、マスクなし、ワクチンなしで生活できる場所を見つけ、必要であれば、親しくなった農家から基本的な食料を調達するつもりだと言った。

彼女は私の提案を真剣に受け止めず、結局、私が8月に田舎に行くなら、盆唐（ソウルの南）にいる母親のところに戻ろうと決めた。結局、彼女はそうした。実際、彼女の姉妹は私や私の決断に批判的で、2022年1月まで彼女は私に手紙を書いたり、話をしたりすることに抵抗を感じていた。

私はすでに、わが党の立場を概説する一連の放送を含め、チェ・ソンニョンとの緊密な活動を始めていた。私が田舎に移って独立した拠点を作るべきだと提案すると、彼は全面的に同意した。

衣服の多くを失い、わずかに残っていた書籍は一山にある李彦亨の友人の工場に保管されていたため、身軽な旅ができた。

ダーンの友人が全州で数週間の滞在先を探してくれた。

私たちは慶尚南道（キョンサンナムド）の義寧（ウィリョン）に招かれ、私の友人がよく知る老人が所有する田舎の古い家に住むことになった。

村は魅力的で、住民たちは私たちを歓迎してくれた。私たちはその日、これから住む家の掃除をした。

それは数世紀前にさかのぼる儒学者の家であり、かつてこの地域には確かな学問の伝統があったが、都市化によって破壊されてしまったことを知った。

しかし、私たちが新居の掃除を終え、夕食を食べようと落ち着いた矢先、地元の警察官が老人の息子を連れてその家を訪ねてきた。

その村に住むならマスクをしなければならない、ふさわしくないと言われた。

何を話し合ったのか、正確にはわからない。しかし、突然すべてが変わった。その老人は私たちのところに来て、キッチンは使えない、バスルームの外で洗わなければならない、常にマスクを着用しなければならないと言った。

その1時間後、隣人がやってきて、この2日間かけて掃除した家には泊まれないと告げた。

老人にとって、このショーは面目を失うものだった。翌日、私たちが去るのを見るのがどれほど苦痛だったか、私にはわかった。

次にどこに行くか、本当に迷いはなかった。

私は2021年3月に田舎への移住を考え、田舎の小さな家に2人の子供と住むチェコ共和国出身の魅力的な男性、ティボルの家に1週間滞在した。文鮮明師の旧統一教会の熱心な信者であり、COVID-19詐欺との関わりを拒否する熱烈な独立精神にあふれたティボルの勇気と献身に私は感銘

を受けていた。彼はまた、COVID-19 に反対するために彼と一緒に立ち上がる2人の子供を育てることに成功した。

ティボルは崔成均と意気投合し、彼は私たちの国際革命党には関心を示さなかったが、私たちの政策の多くを支持した。朴慶浩も何度か訪ねてきて、私たちの党に加わり、中心人物は3人になった。

ティボルの家は狭かったが、私たちはほぼ1ヵ月間そこに住み、韓国における、そして世界におけるCOVID-19体制への対応について、広範囲に及ぶ議論を交わすことができた。

私たちは1ヵ月間、住む場所を探したが、ことごとく断られた。月になって突然、私たちは旧市街の一軒家に小さな部屋を見つけた。彼女は地元教会の活動的なメンバーで、私たちをサポートしてくれるようだった。

私たちは数日かけて、かなり不潔だが安価な家を掃除した。チェ・ソンニョンが2階、私が1階を使用した。私たちは、少し広めの1階で方針や活動についてのミーティングを行った。

国際革命党と合衆国臨時政府のウェブサイトは、2021年9月以降、私が見る世界にコンタクトを取るための主要な手段となった。私はさらに多くの友人を失ったが、新たな支持者を得ることができた。

韓国政府高官、そして2021年12月以降のアメリカ政府高官が私に会うことを厭わず、私の極めて批判的な著作に肯定的なコメントまでしてくれるのだから、私には相当な支持者がいるのだとわかった。

私たちは政府の政策に対して韓国語で公式に抗議し、集会を開き、ワクチンで死亡した人々のためにろうそくを灯し、麗水に関心のある人々に IRP の洗練された新しい紹介文を 2 ページで配った。私たちの規模が小さかったため、行動は限られていたが、私たちの無一文で働き、常に働き続けるという意志のおかげもあって、私たちには聴衆がいた。

2022 年 1 月は非常に厳しいものに見えた。私たちの活動によって、食料が手に入らなくなり、ホームレスになる瞬間さえ想像した。ワクチン強制体制は不穏なまでに受け入れられ、ワクチンパスポートはソウルで一部実施され、麗水でも実施されるようになっていた。

しかし、そんな中、私はいくつかの重要なセミナーに招待され、アメリカ大使館で 10 年ぶりに本当の友人を見つけ、韓国や世界の読者にアプローチする新たな機会を見つけた。年 10 月に私の出版を中止したグローバル・リサーチ社が、2021 年 1 月に突然、私の著作に強い関心を寄せてくれた。ウラジーミル・プーチンのウクライナに関する演説に対する 2 月の私のスピーチは、特にウクライナ語の字幕付きで発表され、自決への強いコミットメントを強調したことで、幅広い聴衆に届いた。私が米独、あるいはロシアのどちらの立場にも与しないことを表明したことで、再び注目されるようになった。しかし、世界大戦のリスクの高まりとファシズムの蔓延は、57 歳近くとなった私に、20 年前よりも多くの困難が待ち受けていることを示唆していた。しかし、闘いは本質的に同じだった。



この小説の最後の 20 ページは、叙述された出来事の直後に構成されたため、十分な時間が経過しておらず、誤ったリードや誤った情報を編集する余裕がなかった。それでも、読者のために小説を現在に近づけることは重要だと思った。

## 結論

この小説の執筆と編集は困難なプロセスだった。プロの編集者を雇う経済的な余裕があれば最高だった。というのも、そのような編集作業は、物語の生々しさや、私自身の態度の矛盾を覆い隠したり、合理化したりしたかもしれないからだ。高度に組織化された組織と急進的な反乱の間を行ったり来たりすることは、私には理解できない部分もある。そのプレッシャーとその結果として生じる心理を、私が完全に理解しているとは思えない。

システムの一部となり、制度を通じて変革を成し遂げたいという願望と、同時にそのシステムのすべてに反対し、急進的なアジェンダを掲げなければならないという思いが交互に襲ってきたのは事実だ。私はこのような私の性格の矛盾を覆い隠そうとはしない。

だから、この本全体を書き直し、論調や文体の統一を図りたいという誘惑に駆られたとしても、私はそうはしなかった。私は 18 年間の経験の中で、矛盾した多くの局面を経験した。私が最初から急進的な反逆者であり、それに従って私のすべての行動を正当化し、そのような革命的なアジェンダを支持するようなものであったと言うのは良いことだろう。しかし、それは私の本性ではない。

何度も主流派に戻ろうとしたが、突き放された。特に尊敬しているわけでも、気にかけているわけでもない多くの人々と一緒に仕事をするのを厭わなかった。そうした行動のいくつかは、明らかに間違いだった。

おそらくこの小説は、私が生きた時代、特に 2001 年 11 月から 2020 年までの重要な時期の歴史を将来書くための私の貢献として残すのが最善だろう。

米国が直面する問題の起源は、ケネディ暗殺、あるいはそれ以前にまで遡ることができるが、2000 年 12 月、ブッシュ新政権がさまざまな犯罪者たちと手を組み、米国政府を機能停止に追い込んだことから、米国社会のあらゆる側面における大きな変化が始まったと私は感じた。

もし提示された資料が生々しく、編集が不十分だと思われたとしても、それは第三者が私をありのままに見ることを可能にするためでもある。

結局のところ、究極の歴史は私が書くことはできないし、書くべきでもない。

この小説に正確に何を盛り込むべきかも問題である。本書は自伝的なものではないはずだし、18年間に私がしたことすべてを記述するつもりもない。また、2000年以前に私が何をしたのかについても、この小説では比較的ほとんど触れていない。その部分は、この物語をまとめようとするときに、人によってはかなり役に立つかもしれないのに。

この小説のポイントは、2000年7月、オンライン学術協力について議論するための東アジアへの旅から帰国した後、私が何をされたのか、そしてなぜされたのかに焦点を当てることである。

この小説が本来のテーマから離れていると感じる読者もいるだろう。また、私が以前書いた4ページの要約に比べ、物語が長すぎるという不満もすでにある。何が関連するかという判断は、読者の興味によって決まるのだから、それは仕方のないことかもしれない。文脈や私の日常生活についてもっと詳しく知りたい人もいるだろうし、私が前に書いた要約で満足する人もいるだろう。友人や家族に大きな苦痛を与える詳細もあることは承知している。しかし現時点では、私には選択の余地がないと感じている。私にできることは、この小説はすべてフィクションであると主張することだけだ。

何人かの読者に言ったように、この小説には終わりが無い。結末は死後、第三者が書くべきだとも言える。それは、私が明日死ぬということを想定しているのではなく、その可能性は常にあるけれども、むしろ、物語は単純な方法では終わらないかもしれないということを示唆しているの

だ。気候変動と世界大戦が重なれば、この物語が語られることはないだろうと、私はしばしば感じてきた。

私が生きている間に、この物語全体が他の人々によって真摯な態度で扱われ、近い将来に何らかの解決、少なくとも部分的な「真実と和解」が見出される可能性はまだある。私のそのような願望は自然なものである。家族や友人、基本的にはかつて私と親しかった人たち全員と、正常な関係を築く方法を見つきたい。

エドワード・スノーデン、チェルシー・マニング、ジョン・キリアコウ、ジェフリー・スターリングらの真相はわからないが、私の話は完全にオフレコとなり、「なかったこと」ファイルに入れられていることは知っている。

何十万人もの人々が、あるレベルでは何が起こったかを知っているにもかかわらず、そうなのだ。映画『ビューティフル・マインド』の中でその物語が言及されているのは、それがなかったことにするにはあまりにも明白すぎる。

メディアで取り上げられたことも、公開討論の対象になったこともないのは、私のケースだけではないだろう。しかし、私の物語にはひどい部分がある。だからこそ、この物語を書くことが絶対に必要だった。

私が "精神病 "にかかったこと、学部長や学部長とケンカしたこと、非社会的な性格であること、CIA で働いていることなど、数多くのデマが流された。

友人や家族が、私との個人的な会話であっても、またこれだけ明らかなデマが仕掛けられている状況であっても、記録を正す必要性を感じないことにショックを受けている。どういうわけか、この話を知っている多くの人々は、私があらゆる正当な手続きを奪われ、他の状況であれば容認できないようなあらゆる種類の有害な噂にさらされるのは構わないと考えている。

### "フィクション"という言葉の選択

小説」という言葉を使い、この物語がすべてフィクションであると主張する決定には説明が必要だ。

私がこの資料を「フィクション小説」として発表することにしたのは、この方法が真実を発表する上で最も柔軟性があり、完全で検証可能な証拠を求める厳格な要求によってしばしば人為的に課される制限なしに、何が起こったのかを伝えることができると考えたからである。この "斬新さ" が、第三者が独自の調査に取り組むきっかけになれば、それは成功である。

この事件に詳しい人なら、あるいは少しでも触れられた出来事について知っている人なら、この文章がフィクションではなく、陰謀ブログでさえ触れないような米国で起こった出来事に関するものであることをすぐに理解できるだろう。

この小説をフィクションだと呼ぶのは、私が機密情報を漏らしたとして訴えられるというありえないシナリオにあらかじめ対応するためでもある。もちろん、私は一度もクリアランスを与えられたことがなく、どのような事実が機密であるのか、あるいは機密でないのか、誰も教えてくれなかったので、そのような法的な立件は難しいだろう。とはいえ、今後私がそのような嫌がらせを受ける可能性はある。だから、読者の負担のひとつは、「これは議論してはいけないことなのではないか」と心配することかもしれない。すべてはフィクションであるという立場をとることで、この問題に対処することができる。

さらに、この物語を効果的にするためには、質の異なる情報を織り交ぜる必要があった。確定的な事実と、名前も知らない第三者からの説明、推論を組み合わせて全体を構成しなければならない。

これは『ネイチャー』の査読付き論文ではないはずだ。複雑な社会的・政治的現象について、人々に少し考えてもらうためのものだ。小説はそのための最良の方法である。

古生物学者が恐竜の骨に筋肉や皮膚をつけて元の形態を復元するのと同じだ。これは創造的な行為だが、目的は完全に科学的なものだ。

もし私が、公表され、100%正確であると証明された文書だけに固執していたら、十分すぎるほど説得力のある証拠がすでに存在しているにもかかわらず、効果的な物語をまとめることはできなかつただろう。裁判所が認めるものだけに固執することは、物語を大きく歪めることになる。

さらに、米国では（2019年5月現在）、連邦政府、イリノイ州、イリノイ大学の行動に対する調査を、いかなる形であれ、私と一緒に要求しようとする者はいなかったため、私はこのプロセスの開始にあたって、私自身の行動を制限することにした。関係者がこの件に関して非倫理的で偽善的で違法な沈黙の誓いを破るまで、私は文書を要求しないと決めた。みんながその気になれば、私は次のステップに進む準備ができている。

### 真実とは何か？

元文学部教授として、フィクションと真実の関係について長々と書くこともできるだろう。それは割愛する。ここで申し上げたいのは、メディアやノンフィクション本などで見かけるいわゆる「真実」の話のほとんどは、滑稽なほどあからさまな嘘だということだ。経済成長や安全保障を計算するシステム全体も、同様に馬鹿げている。だからこそ、誰もがオープンマインドで真実に向き合うべきなのだ。

この小説を書くにあたって、私が依拠した情報源について説明しよう。

私は、容易に文書化でき、複数の目撃者がいる多くの出来事について述べてきた。大規模な違法謀議が行われたことを証明するには、公式記録から検証できることは十分すぎるほどある。必要なのはそのような要求だけである。私がした唯一のことは、そのような調査を支持してくれる第三者が現れるまで、そのような訴えを先送りすることである。

つまり、犯罪的陰謀がどのように実行されたかを記した文書（FBI や CIA の内部報告書）にアクセスできなくても、そのような作戦が実行されたに違いないこと、そしてその制限が現在もほぼ有効であることを明確に示すことができる。

私が 1 年間休職することになった精神疾患の話は、医療記録だけを見ても、まるでモンティ・パイソンのコントのように穴だらけだ。主要人物への最も初歩的な聞き取り調査でさえ、組織的な陰謀が明らかになるだろう。

私は、2001 年 2 月に突然、精神疾患であると非難され、彼らとの交流の停止を余儀なくされ、その後、医学的評価も受けずに病気休暇に入るまで、所属学部のメンバーとは良好な関係を保っていた。病気休暇中であるはずの私の授業に苦情や懸念はひとつもなかったにもかかわらずである。私が 2004 年にイリノイ州を解雇されたとき、私に仕事を斡旋してくれたのは、大学でもコミュニティ・カレッジでも派遣サービスでもなく、CIA だけだった。これらはすべて証明できる。

この小説に含まれる他の資料は文脈上のものであり、その重要性を示すには何らかの作業が必要である。さらに、ハードディスクに保存していたジョセフ・アルパーとの不利な書簡は、2 年前に謎の消滅を遂げた。ストーリーの一部を再構成するには、記憶に頼らざるを得ない。しかし、それでも私のハードディスクや他のオープンソースには、意味するところは明確だが、意味を理解するためには本格的な分析が必要な資料がたくさん残っている。



この小説は、私が目撃した出来事に言及しているが、それを記録したり確認したりできる第三者がいない。それらの出来事は、この物語において重要な意味を持つ。証拠不十分という理由でそれらを省くことは、読者と一般大衆に対する冒瀆である。

イリノイ大学や他の場所でも、奇妙な偶然の一致や奇妙な行動があり、それは私のキャリアを貶めるための組織的な努力としか説明できない。私はこの文章で、その努力が何であったと思うかを説明しようとしたが、この部分については証拠がない。とはいえ、それを省くことは、読者から批判的な材料を奪うことになる。

他の説明も可能ではあるが、事実を見れば誰もがその意図は明らかだったと結論せざるを得ないと思う。私が目撃していない部分もある。その部分は、私が信頼する他の人たちから聞いた話をもとにまとめたものだ。しかし、私は文書を見ていない。私がそれらの物語を含めたのは、それを聞いたときに納得できたからである。

また、CIA 本部の "ボブ "のように、私が完全に信用していない他の人物から聞いた話もあった。しかし、それらのコメントの内容は、陰謀の本質についてより洗練されたモデルを開発するよう私を導くのに十分な説得力があった。それらの物語は、時には寓話の形をとりながら、この小説で重要な役割を果たしている。

この物語には、私が直接知らない出来事について推測している部分がある。たとえば、2001年に私が完全に潰されなければならなかった理由の

ひとつに、遠隔教育で儲けられるかもしれないという欲があったことを、第三者が私に示唆した。そのため、私は投資銀行家たちの会合の様子を描写し、彼らが私を遠隔教育から永久に排除しなければならないという結論に達したことを示唆した。そのような会議が行われたという証拠はないし、おそらく行われなかったのだろう。アメリカの歴史における銀行家たちの同様の行動を考えると、このような会議が行われた可能性は高いと私は感じている。私は、この小説のその部分が文書化されるとは思っていない。しかし、それを省くことは読者に対する冒瀆である。

最後に、私は 2001 年から 2005 年にかけて新聞を注意深く読み、そこで読んだこと、あるいは読まなかったことから、当時アメリカで起こったことについて多くのことを推測した。私が起こったと思ったことの一部は、後に他の人たちによって私的な会話の中で真実であることが確認された。他の部分は確認されていないが、私にはそう思える。私たちは、当時の出来事を正直に調査することによって、私の話の信憑性が判断される日を心待ちにすることができる。それまでは、フィクションの小説に頼るしかない。



# 付録

## 遠隔教育の提案

イリノイ大学、東京大学、ソウル大学、北京大学

2000年6月

世界大学としてのイリノイ大学

東アジア研究におけるハイテクとリベラルアーツの融合

エマニュエル・パストリッチ

イリノイ大学、東京大学、ソウル大学、北京大学の4大学が、高度なコンピューターガイド付きビデオ会議技術とインターネット通信を利用して共同指導を行うプログラムの第一歩を踏み出した。

## 短期的な目標

今後 2 年間にわたり、イリノイ大学、東京大学、ソウル国立大学、北京大学の人文科学における重要なコースが、教育資源局が提供する高度なコンピュータ技術を利用して、参加する 4 校すべての学生と教員に公開される。イリノイ大学は、コンピュータ工学とコンピュータ・サイエンスにおける世界トップクラスのプログラムと、高度なインターネット機能を活用し、英語だけでなく、中国語、日本語、韓国語で、異なる国の 4 つの教育機関で教えられているコースを、本学の学生が利用できるプログラムを提供する世界初の教育機関となる。

このような国際的なつながりの活用は、最終的には大学全体を変容させるだろうが、このプログラムを開始するのは 主に人文科学、特に東アジア研究である。完全に英語で行われる集中的なセミナーに限定した短期間のパイロット・プログラムの後、まずは東アジア研究の大学院生を対象に、多種多様なコースを提供するフル・プログラムを立ち上げる予定である。多くのコースが提供される予定だが、これは米国内のどこを探してもないものである。

イリノイ大学がコンピューター・サイエンス分野で持つ圧倒的な優位性によって、イリノイ大学の人文科学プログラムは一変するだろう。東アジア研究のプログラムは、米国はもとより世界中の学校が羨むものとなるだろう。東アジアやその他の地域の大学の研究者が参加すること

で、リベラルアーツとサイエンスの分野で、他のどの大学にも引けを取らない研究者グループを約束することができる。

ハーバード大学のような私立大学が、東アジア研究のどの分野でも1人か2人の優秀な教員を雇うことができるのに対し、イリノイ大学は東アジアの主要な3つの教育機関のコースを受講することができ、国際的なセンターとなることができる。最終的には、コンピューター・サイエンスにおける優位性によって、イリノイ大学は世界中の人文科学研究の重要な拠点となるだろう。

さらに、イリノイ大学は、東京大学、ソウル大学、北京大学と共同で英語による授業を提供するだけでなく、イリノイ大学ではあまり需要がないような科目であっても、これら3大学間でテレビ会議を通じて共有される科目を仲介する中継地点としての役割も担うことになる。この大学は、ビデオ会議とインターネット教育のハブとして機能し、最終的には国際教育の世界標準を定義することを約束できるだろう。

## 長期目標

米国は日々、東アジアとの経済的・政治的関係を緊密にしている。すでに米国は、東アジアとの経済関係がヨーロッパよりもかなり大きい。基本的に国内経済の一部であるメキシコとカナダに次いで、主な貿易相

手国は日本、中国、ドイツ、イギリス、韓国である。現在のペースでいけば、今後5年以内に中国、日本、韓国がトップ3になる可能性は十分にある。さらに、エレクトロニクスからソフトウェア、日用消耗品に至るまで、東アジアは現在の製造業や技術に計り知れない影響を与えている。私たちの応用科学分野では、東アジアの学術機関や民間企業との協力関係がますます深まっています。東アジア出身の大学院生や教員も多い。それにもかかわらず、東アジア研究は、当キャンパスにおいて相応の注目を浴びていない。イリノイ大学の幸福のためには、本学の電気電子工学科やコンピューター・サイエンス学科と同様に高い評価を得ている強力な東アジア研究プログラムが不可欠なのです。

この国際インターネット教育プロジェクトは、イリノイ大学を東アジア研究の主要拠点にするだけでなく、東アジアでも存在感を示すことになるだろう。その結果、イリノイ大学の人文科学分野での評価は高まるだろう。東アジア文化が米国で主流となり、ハイテク分野で中国語、日本語、韓国語の能力がより重要になるにつれ、東アジア研究の優れたプログラムは大きな違いを生むだろう。すでにコンピューター業界では、マルチアジア言語のワープロが巨大な分野になりつつある。

将来、人文科学だけでなく技術分野でも、それらの言語に優れた能力を持つ専門家が必要になることは誰も疑う余地がない。東アジアの大学で原語の授業を受けられるかどうかで、その差は歴然となるだろう。

イリノイ大学が国際的な大学になるには、少なくとも人文科学分野のプログラムが科学分野と同等の評価を得られない限り、絶対的

な限界がある。このプログラムによって、私たちはコンピューター技術における優位性を利用して、人文科学プログラムをトップレベルに押し上げることができる。協力関係は応用科学分野にも広がり、科学技術の共同研究所や共同プログラムも可能になる。

東京大学、ソウル大学、北京大学と連携したこのプログラムは、イリノイ大学を東アジア研究の主要拠点として確立させるだろう。最終的には、世界各国の大学とコースを共有することになり、イリノイ大学の学生は、通常では受講できない授業を受講できるようになる。同様に、当校の教授陣も、そうでなければ十分な聴衆を見つけることができないようなコースを、さまざまな教育機関の学生のために提供することができる。

### このプログラムから得られる利益

コンピューター関連の研究、ハイテク企業との交流、卒業生の将来の市場など、その多くが東アジアに関わっている。ハーバード大学やプリンストン大学のような大学は、人文科学分野の研究に対する財政的な支援という点では大きな利点があるが、実際のところ、教授陣は数人の有名教授に限られている。イリノイ大学、東京大学、ソウル大学、北京大学の学生が利用できる、イリノイ大学が管理する格子状の教育コースを設けることで、他大学にはない幅広いコースを提供することができ



る。私たちは競争条件を公平にするだけでなく、技術的な優位性を人文科学分野のプログラムの鍵にするつもりです。

中国、日本、韓国は、経済的、技術的、文化的な結びつきによって米国と互いに引き合わされているにもかかわらず、制度的なレベルでは依然としてかなりの敏感さを保っている。このような理由から、イリノイ大学は、21世紀の経済と文化を支配するであろうアジア3カ国間の知的交流のパイプ役を務めることができるというユニークな立場にある。

東京大学の学生にとって、私たちのプログラムを通じて北京大学で授業を受けることは、日本や中国での留学にまつわる複雑な官僚主義を乗り越えるよりもはるかに簡単なことでしょう。

イリノイ大学の国際的なビデオ会議とインターネット教育プログラムは、東アジアの中で主要な機関になる可能性があり、東アジアの重要性が増すにつれて、イリノイ大学もそうなるだろう。

私たちのプログラムは科学分野にも拡大され、それによって4つの研究機関の間で、これまで想像もできなかったような複雑かつ即時性の高いレベルでの科学プロジェクトでの協力が可能になる。イリノイ大学が迅速に行動を起こせば、高等教育における必然的な革命の主導権を握ることができるだろう。

当初は東アジアを中心に指導するが、システムが整えば、フランス、ドイツ、イタリア、トルコなどの大学のコースも扱えるようになる。

これまで学生全体へのアピールが弱く、開講できなかった専門コースも開講できるようになる。学生や客員教員のビザに関する問題もなくなる。

イリノイ大学の立地の不利な点は、このプログラムによって完全に相殺されるだろう。また、このプロジェクトに取り組む大学の柔軟性は、すぐに主要なアイビーリーグ大学と肩を並べることになるだろう。それらの大学のような寄付金はないかもしれないが、提供するプログラムや海外プログラム、教授陣には匹敵するだろう。イリノイ大学は、この国際的な学術交流の新しいネットワークのパイプ役となり、それを迅速に実行すれば、学術界の最前線に躍り出るチャンスとなるだろう。

## ステップ

A) イリノイ大学、東京大学、ソウル大学、北京大学が参加する、特定のテーマに焦点を絞った一連の学術会議。中国近現代史のようなテーマの会議であれば、参加する各大学の学者も参加し、新しいメディアを使うことができるだろう。このような学術的なイベントは、この新しいアプローチの威力を関係者全員に明らかにするだろう。

B) 東京大学、ソウル大学、北京大学とビデオ会議指導プログラムの試行運営について協議すること。4 キャンパスすべてで適切な時間にビデ

オ会議設備が利用可能であること、ソフトウェアが相互に互換性があることを確認する必要がある。最初のトライアルは、2000年から2001年にかけて、すべて英語で行われるコースとする。ISDNかI.P.回線、あるいは電子可視化研究室の新しいアクセス・グリッドが採用される。授業時間は、中国時間午前8時～11時30分、ソウル・東京時間午前9時～12時30分、シャンペーン・アーバナ時間午後6時～9時30分。

C) トライアル・プログラムのための小規模な管理を設定する。

D)

各大学の授業を、4大学すべての学生が定期的にビデオ会議で受講できるようにする。これらのコースのビデオ会議とインターネットの構成要素を統一した形式にする。コースを組織化し、イリノイ大学の学生だけでなく、他の3つのキャンパスの学生も同時に受講できるようにする。例えば、イリノイ大学で日本史の講座を開けば、北京、東京、ソウルの学生も受講できる。まず、各大学で東アジア研究の人文科学の授業を英語で行い、それを4大学すべてでリアルタイムで受講できるようにする（イリノイ大学では午後6時から9時まで）。その他のコースは、4大学すべてで録画され、4キャンパスの限られた学生だけがウェブ上で視聴できる。オンラインの非同期ディスカッションは、時折行われるビデオ会議を補うものである。

まずは4回（各キャンパス1回ずつ）のセミナーをすべて英語で行うパイロット・プログラムを実施する。

最終的には、各キャンパスに、等身大の送信スクリーン、同時使用可能な電子筆談ボード、各生徒用の即時双方向パッド、英語、中国語、日本語、韓国語での対話のための完全なインターネットと電子メール機

能を完備した特別装備の部屋、あるいは一連の部屋が設置されることになる。

D) 4 大学間で開講されるコースの単位認定プログラムを設ける。

E) 参加各機関の全教員のデータベースを作成し、後で容易に調整できるようにして、同じようなテーマを扱う研究者同士が簡単に連絡を取り合えるようにする。

F) 4 大学間で単位が認定されるコースを運営する。

G) 各大学で文系科目を 1 科目ずつ開講していたのを、文系と理系の両方の科目を開講する。また、文系と理系の共同研究の一環として、7 大学間でビデオ会議を実施する。

H) このようなビデオ会議を利用して、アジア、ヨーロッパ、イリノイ大学の間に関科学分野の共同研究室を設置する。イリノイ大学を教育における明確な世界的リーダーにするために、この技術の範囲を迅速に拡大する。

### 基本的なアプローチ

1)

指定された授業の講義をビデオに録画し、他のキャンパスで視聴できるようにする。学生はその講義を視聴し、電子メール形式の回答（またはウェブページへの投稿）を作成し、講義が行われたキャンパスのティーチング・アシスタントが返信する。講義を録画したビデオテープは、永久保存が可能なものと、一度だけ上映され、その後破棄されるものの2種類に分けられる。

2)

各大学で同じような科目を学ぶ学生同士の電子メールアドレスの交換。学生たちは1学期の間、電子メールや共通のウェブページへの投稿を通じて長期的な対話を行い、おそらく一緒にプロジェクトに取り組む。1ヶ月ほど経った後、学生同士が以前に調査したトピックについてビデオ会議でディスカッションを行う。

3)

教授や研究者を対象とした、特定のテーマに関する学術的なビデオ会議の延長。同じようなテーマについて研究している研究者が集まり、ビデオ会議を通じて共通の関心事について話し合う。They would first exchange comments on set topics via postings on a common webpage (in whichever language was most appropriate: 英語、中国語、日本語、韓国語のいずれか)。学者たちは旅費を払う必要がなく、最終的には自宅のコンピューターからこのような学術会議を行うことができるようになるため、国際会議はずっとずっと簡単になるだろう。

4)

4 大学すべてで同様のコースを履修している学生を対象に、時折ビデオ会議を通じてミーティングを行う。このような単位以外の知的交流には教員も同席する。

5)

4 つのキャンパスすべての学生を含む、完全にビデオ会議で行われる選抜セミナー（テーマに適した言語で行われる）。これらのセミナーは、主に共通のウェブサイト毎日投稿され、実際のビデオ会議は週に 1 回、あるいは 2 週間に 1 回（現地のキャンパスでの学生会議と交互に）行われる。論文は採点のために E メールで送られるが、オリジナルであることを識別するための特別なコードが必要である。学生が受け取る成績は、どのような場合でも、その学生が所属する大学での成績となるため、受講したコースの単位に問題はない。

6)

コードによってのみアクセス可能な、各大学の管理者間の共同ウェブページ。このウェブページがあれば、例えば各大学の学長同士が、貴重な情報や将来の協力のためのヒントを、その情報が公開されることなく共有することができる。例えば学部長が、他の 3 つの機関で同等の地位にある人物が誰なのかを簡単に把握できるようになる。

7)

同じような分野の研究者が共有する共同ウェブページ。それによって、たとえば中国研究の教授たちは、4 つの研究機関すべてで中国を研究し

ている**研究者全員**が掲載されているウェブページに簡単にアクセスできるようになる。そして、自分たちで**学術交流を進める**ことができる。

8)

各大学でインターネットを通じて視聴できるように用意された、一定のトピックに関する 50 分のマルチメディア授業モジュール。各モジュールは、A)教授による講義、B)トピックに関連する画像、C)関連する問題を説明するテキスト、D)中国語の発音の録音、で構成される。つまり、漢詩に関する 50 分のモジュールは、教授によるテーマに関する講義の抜粋、中国の風景や伝統的な衣服の画像、原語と訳語による漢詩の抜粋、詩人による自作の朗読の録音で構成される。全モジュールを見学した後、学生は様々なトピックに回答し、自分のキャンパスや他の 3 つのキャンパスの学生と E メールでディスカッションを行う。学生はまた、ティーチングアシスタントに返答しなければならず、アシスタントはそのコメントを採点する。

9)

超並列研究室。例えばチップ製造のような専門的なテーマで研究を行っている学者たちは、ビデオ会議、洗練された共有ウェブページ、相互データベース、体系的に調整された計画などの緻密な組織で結ばれるだろう。そのため、4 大学間に超並列研究室が作られ、そこに教員や施設を集め、重複を避けるように複雑なタスクを分割して割り当てることができる。その結果、新たなレベルのスピードと洗練がもたらされるだろう。

10)

最近、韓国、日本、アメリカの政府は中国人留学生のビザ取得を難しくしている。このような政策はしばしば不公平ではあるが、移民問題は考慮すべき重大な問題である。しかし、中国人留学生や学者がインターネットやビデオ会議を通じて韓国、日本、アメリカの大学に完全に参加できれば、中国にいながらにして十分な貢献ができる。学業を終えた後、彼らは中国にいながら、このようなインターネット、共有データベース、テレビ会議技術を使いながら、国際企業で働き、世界経済に大きく貢献することができる。

## 11)非同期シンポジウム

この非同期シンポジウムは、インターネット・コミュニケーションにおける革新的なフォーマットであり、文化的な理由から通常なら接触することのないような、同じような専門分野を持つ人々の間で知的な討論ができるように設計されている。一言で言えば、基本的なチャットルームに相当する4つのウェブページが並列に存在し、参加者はそこに与えられたトピックに対する回答を投稿することができる。この最初の実験では、英語、日本語、中国語、韓国語が提案されているが、可能な言語数に制限はない。つの並列ウェブページに投稿された研究者の回答は、他の3つの言語に翻訳され、参加者が読めるように掲載される。最初の非同期シンポジウムでは、テクノロジーとグローバリゼーションという幅広い問題について議論する。ウェブページが作成され、翻訳者が見つければ、どのようなテーマでも取り上げることができる。



非同期シンポジウムは、4つの並列ウェブページを使って行われる。

非同期のシンポジウムは、4つの並行した（しかしリンクされた）ウェブページで行われる。英語、中国語、日本語、韓国語でそれぞれ1ページずつ入力できるようにする。各ウェブページの上部には、4カ国語で質問やトピックが掲載される。学者（または専門家）は、与えられたテーマに対する回答を、それぞれの言語に設定されたウェブページに投稿する。従って、中国の学者は中国語で投稿するだけである。大学院生（またはプロの翻訳者）は、12時間ごとに各ウェブページの投稿を他の3つの言語に翻訳する。したがって、4つの言語のどれかの投稿を読んだ学者は、同じような関心を持ちながらも外国語で表現できない他の人々と議論を交わすことができる。ページにログオンするには特別なコードが必要である。

このフォーマットは、そうでなければコミュニケーションを取ることのない個人間の有意義な対話をサポートする。たとえ会ったとしても、気まずく感じたり、言葉が通じなかったりする可能性が高い。このような非同期の交流によって築かれた人間関係は、さらなるプロジェクトにつながるかもしれない。さらに、このような非同期シンポジウムの成果は、雑誌や新聞に掲載される価値がある可能性が高い。

中国、日本、韓国の主要な知識人や政府関係者は、深夜に仕事に疲れてくると、この非公式な議論にログインする習慣があるかもしれない。そうでなければ得られない洞察が得られるかもしれない。

## 大学の基本理念

### I

次世代のインターネットは、はるかに信頼性が高く、ユーザーフレンドリーな情報伝達手段をもたらすだろう。その結果、インターネット接続の体系的な応用に関わる機関の間には、分厚い結合組織が発達するだろう。その意味するところは、実際にキャンパスに物理的な設備が設置されていることよりも、接続の階層構造の有効性や使い勝手の良さが、大学のステータスを決めるということである。インターネットとビデオ会議による、海外の他の規模の大学との結びつきが、大学の違いを生むのである。この真実はまだ実現していないが、やがて明らかになるだろう。

### II

大学をイメージするとき、私たちは何百もの破片に割れた鏡が床一面に転がっているのを想像するはずだ。それぞれの破片が明るく輝き、その総体が最も印象的である。重要なのは、ガラスの破片のひとつひとつをほんの少し傾げるだけで、何ができるのかということだ。それぞれの破片を実際に動かしたり、移植したりする必要はなく、ただ一方向に立てかけるだけでいい。このプロセスが達成されれば、それぞれの破片から

反射される光は一点に収束する。そして、それらの多くの破片によって反射された光は、密集した石を蒸発させるのに十分なほど強力になる。そのビームに、他の施設の破片が反射した光を加えることができたらどうなるだろうか。

### III

次のような戦略によって不動産で巨万の富を築いた人物がいる。彼らは20年から30年にわたる都市の地図を見て、ビジネスと居住の中心地がどこにあるかを割り出し、その後5年から10年の間に都市がどのように拡大し、変貌するかを推測した。近い将来、人口がどうなるかという推測を地図に描き出すと、彼らは開発が進みそうな地域の農地を購入した。農地を買ったら、また農家に貸して、しかるべき時期を待った。私たちは、まさにこのように大学の計画を立てるべきなのである。

### 点滴

ビデオ会議は、今後数年のうちに、インターネットを介した授業をはるかに合法的で説得力のあるものにするだろう。インターネット・テクノロジーは、「実際にそこにいるのと同じ」状態へと急速に移行している。まだそこまでには至っていないが、今こそ、このテクノロジーに体系的にアプローチする時なのだ。テレビ会議もまた、その時期にインターネットの中心的存在になるだろう。今この瞬間が、この分野に組織的に参入する絶好のチャンスなのだ。

## V

時差の問題もあるが、非同期学習はライブ授業と同じか、それ以上に効果的である。非同期のディスカッションをライブのビデオ会議で中断することで、必要な目標はすべて達成できるだろう。文書による回答は、教室でのコメントよりもはるかに優れたものになるだろう。テクニックを洗練させればよいのだ。

## VII

インターネット接続は、研究機関同士を結びつける結合繊維と見なすことができる。その繊維が太くなるにつれて、異なる大学の専門家同士がペアを組むことで、ユニークな国際学術コミュニティが生まれるかもしれない。

コンセプトのウェブページ：

[www.staff.uiuc.edu/~過去](http://www.staff.uiuc.edu/~過去)



